九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—10—

小郡市所在井上薬師堂遺跡の調査

1 9 8 7

福 岡 県 教 育 委 員 会

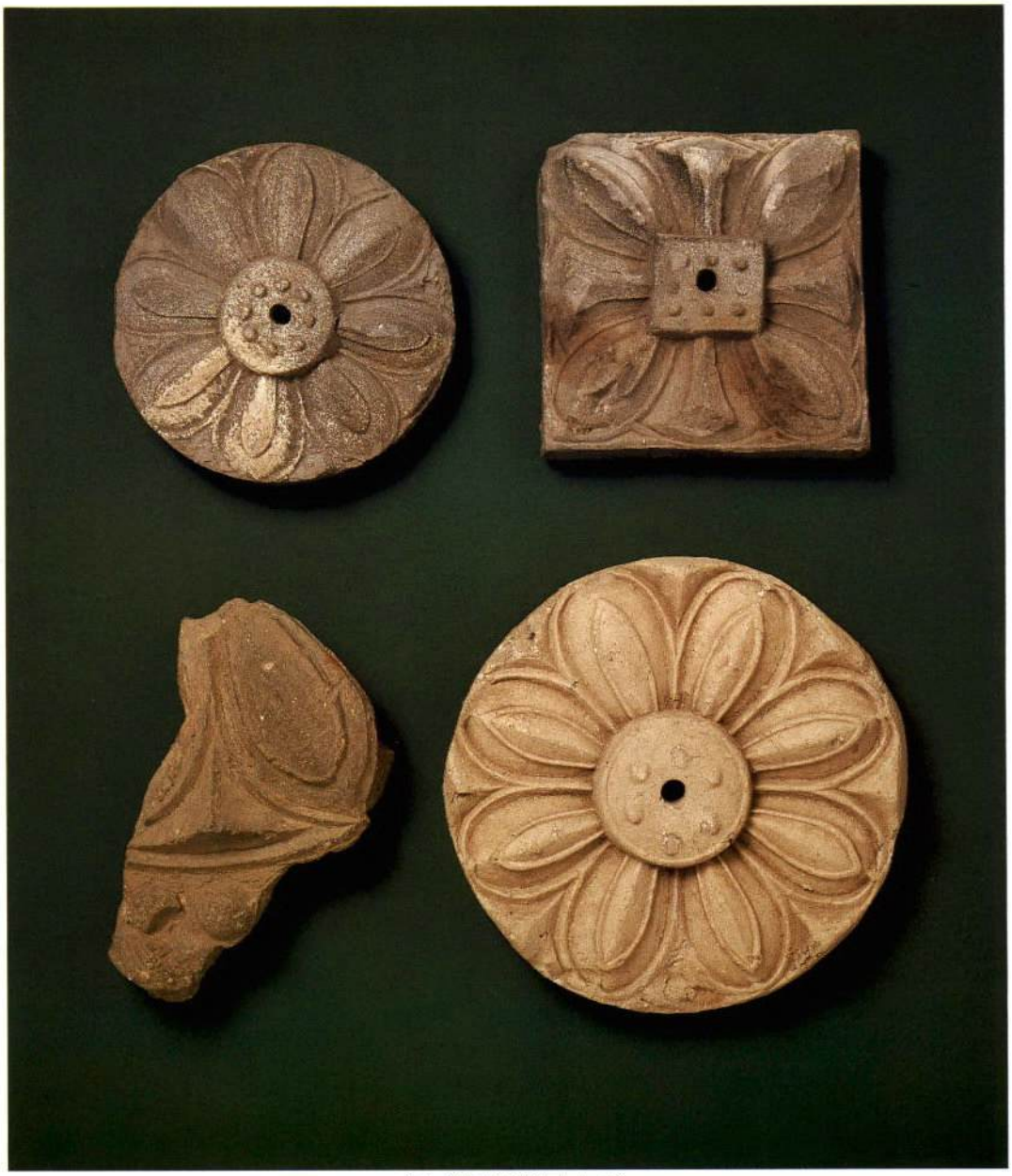
九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—10—

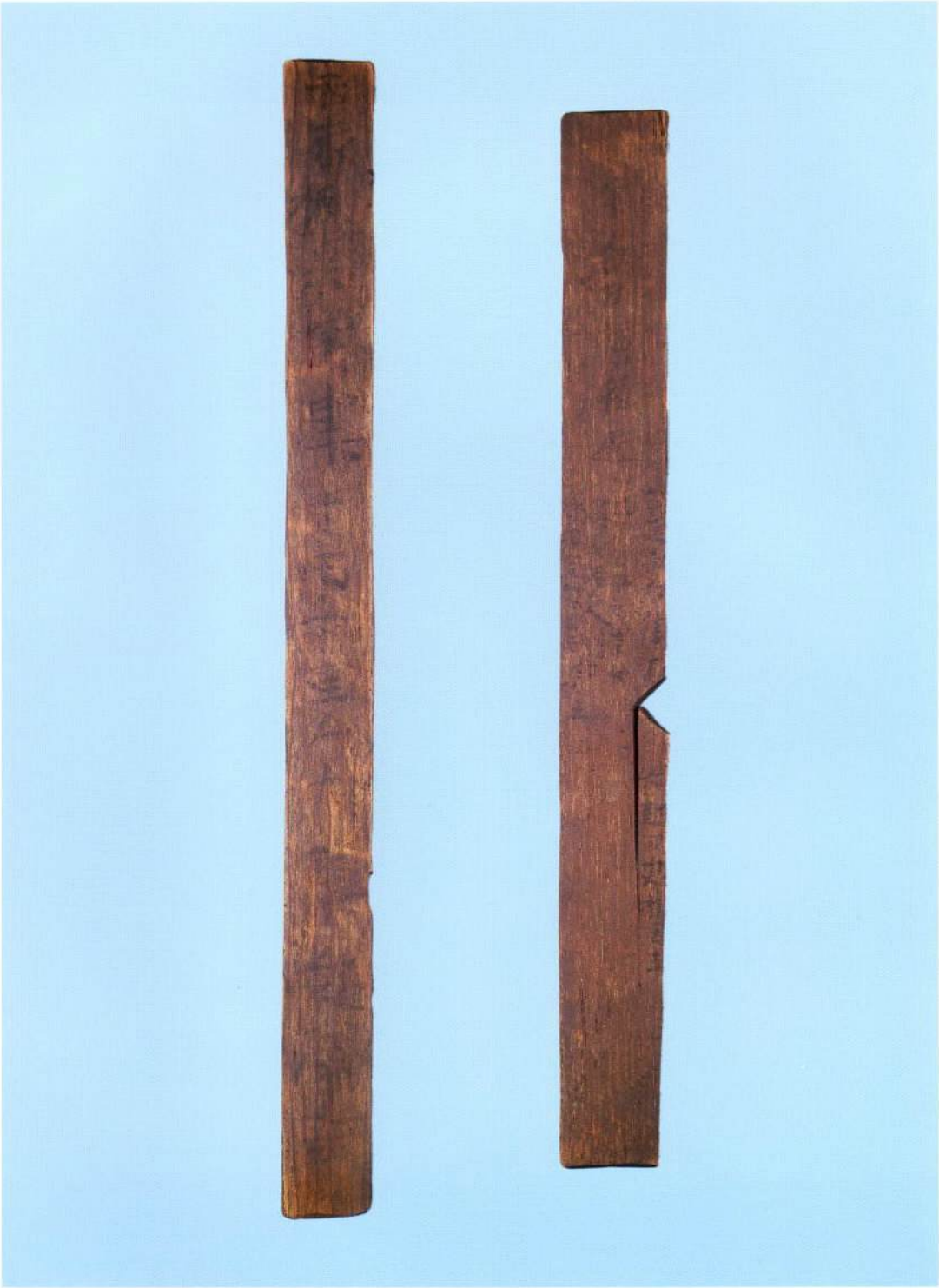
小郡市所在井上薬師堂遺跡の調査

井上薬師堂遺跡周辺の景観

井上薬師堂遺跡出土 墨書土器



井上薬師堂遺跡出土 瓦



井上薬師堂遺跡出土 木簡

序

福岡県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて、九州横断自動車道建設地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度以降実施しております。その間、昨年度末までに発掘調査の終了した鳥栖・朝倉間の一般供用が去る２月に開始されましたことは、私共にとりましても誠に慶賀の念に堪えません。

本書は、昭和59・60年度に調査を行なった小郡市井上薬師堂遺跡についての調査結果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第10集として取りまとめたものであります。

発掘調査の報告としては、満足のいくものではありませんが、本報告書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術研究の活用の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々の御協力を頂いた地元の方々をはじめ関係各位に、心から感謝申し上げます。

昭和62年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　友野　隆

例　言

1．　本書は、昭和59年度と、昭和60年度に、福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて、九州横断自動車道建設のために破壊される埋蔵文化財を発掘調査した井上薬師堂遺跡の報告書であり、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第10冊目にあたる。

2．　本書の執筆分担は次の通りである。

第１章第１節……井上裕弘・緒方　泉
　　第２節……緒方　泉
第２章第１節……緒方　泉
　　第２節 1,3 ……緒方　泉
　　2a……木村幾多郎
　　2b……児玉真一
　　2c……緒方　泉
　　2d……児玉真一
　　2e……倉住靖彦
　　2f……木村幾多郎
第３章……畑中健一・野井英明
第４章……林　弘也
第５章……緒方　泉・児玉真一・倉住靖彦

3．遺構の実測図は、木下　修、児玉真一、伊崎俊秋、木村幾多郎、緒方　泉、宮田弘之、高田一弘、森下英治、藤平　寧、高橋　潔、時元省二、古賀　勇、野田　徹、目　修二、深江義幸が、遺物の整理・図面の作成には担当者の児玉・木村・緒方の外に、岩瀬正信、豊福弥生、太田育子が従事した。

4．掲載写真のうち、遺構を木村、緒方が撮影したが、遺物撮影は九州歴史資料館の石丸　洋・藤美代子両氏の協力があった。

5．出土木簡・墨書土器・ヘラ書土器の釈文等では、九州歴史資料館の倉住靖彦氏の協力を得た。

6．出土木器の樹種同定については、琉球大学の林弘也氏の協力を得た。
7．花粉分析、植物遺体の同定については、北九州大学の畑中健一氏、九州大学大学院生の野井英明氏の協力を得た。
8．本書の編集は、児玉、木村の指導のもと、緒方が担当した。

本　文　目　次

井上薬師堂遺跡の調査

第１章　はじめに …… 1

第１節　調査組織と調査の経過 …… 1

１．昭和61年度の調査経過 …… 1

２．井上薬師堂遺跡の調査経過 …… 6

第２節　遺跡の位置と環境 …… 9

１．遺跡の位置 …… 9

２．周辺の遺跡 …… 9

第２章　遺構と遺物 …… 31

第１節　はじめに …… 31

第２節　遺構と遺物 …… 31

１．遺構 …… 31

ａ大溝 …… 31

ｂその他の遺構 …… 38

２．遺物 …… 38

ａ土器 …… 38

ｂヘラ書・墨書・硯転用土器 …… 50

ｃ木器 …… 59

ｄ瓦 …… 99

ｅ木簡 …… 103

ｆ刻骨 …… 107

３．小結 …… 113

第３章　井上薬師堂遺跡の花粉分析 …… 115

第４章　出土木製遺物の樹種 …… 119

第５章　おわりに …… 123

図　版　目　次

巻頭図版 1　　井上薬師堂遺跡周辺の景観
巻頭図版 2　　大溝内出土墨書土器
巻頭図版 3　　大溝内出土瓦
巻頭図版 4　　大溝内出土木簡

本文対照頁

図　版　1　　井上薬師堂遺跡周辺航空写真……9
図　版　2　　井上薬師堂遺跡周辺航空写真……9
図　版　3　(1)　井上薬師堂遺跡全景気球写真……9
　　(2)　井上薬師堂遺跡発掘作業状況……9
図　版　4　(1)　各グリッド発掘調査状況……9
　　(2)　第２セクション発掘調査状況……31
図　版　5　(1)　大溝北側発掘作業状況……34
　　(2)　大溝Ｂトレンチ北壁堆積状況……34
図　版　6　(1)　大溝Ｂトレンチ北壁堆積状況……34
　　(2)　Ｂトレンチ北壁北側木製品出土状況……34
図　版　7　(1)　大溝全景……31
　　(2)　大溝全景……31
図　版　8　(1)　大溝滞水状況……31
　　(2)　大溝発掘終了後の状況……31
図　版　9　(1)　大溝南側土器溜り出土状況……40
　　(2)　大溝南側土器溜り出土状況……40
図　版　10　(1)　大溝木製品集中区出土状況……59
　　(2)　大溝木製品集中区出土状況……59
図　版　11　(1)　木製品出土状況……91
　　(2)　木製品出土状況……59
図　版　12　(1)　木製品出土状況……76
　　(2)　木製品出土状況……59
図　版　13　(1)　木製品出土状況……59
　　(2)　ねずみ返し出土状況……59
図　版　14　(1)　木製品出土状況……93

(2) 木製品出土状況…… 93
図 版 15 (1) 木製品出土状況…… 59
(2) 木製品出土状況…… 59
図 版 16 (1) 木製品瓦出土状況…… 78
(2) 木製品瓦出土状況…… 80
図 版 17 (1) 木製品出土状況…… 59
(2) 木製品出土状況…… 62
図 版 18 (1) 木製品出土状況…… 62
(2) 木製品出土状況…… 66
図 版 19 (1) 木製品出土状況…… 60
(2) 木製品出土状況…… 88
図 版 20 (1) 木製品出土状況…… 78
(2) 木製品出土状況…… 75
図 版 21 (1) 長柄鋤出土状況…… 59
(2) 長柄鋤出土状況…… 59
図 版 22 (1) 下駄出土状況…… 78
(2) 田下駄出土状況…… 66
図 版 23 (1) スコップ形木製品出土状況…… 59
(2) えぶり出土状況…… 66
図 版 24 (1) スコップ柄出土状況…… 68
(2) さじ形木製品出土状況…… 72
図 版 25 (1) 台座出土状況…… 93
(2) 俎出土状況…… 76
図 版 26 (1) 部材出土状況…… 95
(2) 俎出土状況…… 72
図 版 27 (1) 槽出土状況…… 68
(2) 槽出土状況…… 68
図 版 28 (1) 槽出土状況…… 68
(2) 槽出土状況…… 68
図 版 29 (1) 刳物容器出土状況…… 70
(2) 槽出土状況…… 70
図 版 30 (1) 曲物出土状況…… 83
(2) 曲物出土状況…… 83

図　版　31　(1)　建築部材出土状況…… 93
(2)　ねずみ返し出土状況…… 93
図　版　32　(1)　下駄、部材出土状況…… 80
(2)　用途不明品出土状況…… 95
図　版　33　(1)　用途不明品出土状況…… 95
(2)　用途不明品出土状況…… 95
図　版　34　(1)　火鑽板出土状況…… 92
(2)　木簡出土状況…… 103
図　版　35　(1)　刀形木製品出土状況…… 91
(2)　円形棰先瓦出土状況…… 100
図　版　36　(1)　刻骨出土状況…… 107
(2)　櫛出土状況…… 82
図　版　37　(1)　大溝西岸付近土器出土状況…… 38
(2)　大溝出土土器出土状況…… 38
図　版　38　大溝西岸付近出土土器…… 38
図　版　39　大溝堆積層及び土器溜り出土土器…… 40
図　版　40　大溝堆積層及び土器溜り出土土器…… 40
図　版　41　大溝堆積層及び土器溜り出土土器…… 41
図　版　42　大溝堆積層及び土器溜り出土土器…… 42
図　版　43　大溝堆積層及び土器溜り出土土器…… 43
図　版　44　大溝堆積層及び土器溜り出土土器…… 47
図　版　45　土器溜り出土土器…… 49
図　版　46　大溝内出土ヘラ書・墨書土器…… 50
図　版　47　大溝内出土ヘラ書・墨書土器…… 52
図　版　48　大溝内出土墨書土器…… 52
図　版　49　大溝内出土墨書土器…… 54
図　版　50　大溝内出土木製品（鎌柄）…… 60
図　版　51　大溝内出土木製品（横槌）…… 60
図　版　52　大溝内出土木製品（横槌、５を除く）…… 61
図　版　53　大溝内出土木製品（木錘）…… 62
図　版　54　大溝内出土木製品（ナスビ形鍬）…… 64
図　版　55　大溝内出土木製品（ナスビ形鍬、えぶり）…… 66
図　版　56　大溝内出土木製品（田下駄）…… 66

図　版　57　大溝内出土木製品（田下駄）…… 66
図　版　58　大溝内出土木製品（田下駄）…… 68
図　版　59　大溝内出土木製品（スコップ形木製品、樋）…… 68
図　版　60　大溝内出土木製品（樋）…… 70
図　版　61　大溝内出土木製品（樋）…… 70
図　版　62　大溝内出土木製品（樋、杓子形・さじ形木製品）…… 72
図　版　63　大溝内出土木製品（俎）…… 72
図　版　64　大溝内出土木製品（俎）…… 75
図　版　65　大溝内出土木製品（俎）…… 76
図　版　66　大溝内出土木製品（俎、下駄）…… 76
図　版　67　大溝内出土木製品（下駄）…… 78
図　版　68　大溝内出土木製品（下駄）…… 78
図　版　69　大溝内出土木製品（下駄）…… 80
図　版　70　大溝内出土木製品（下駄、曲物など）…… 80
図　版　71　大溝内出土木製品（櫛、櫛ケース）…… 82
図　版　72　大溝内出土木製品（曲物）…… 83
図　版　73　大溝内出土木製品（曲物）…… 83
図　版　74　大溝内出土木製品（曲物）…… 88
図　版　75　大溝内出土木製品（曲物）…… 88
図　版　76　大溝内出土木製品（曲物）…… 88
図　版　77　大溝内出土木製品（曲物）…… 88
図　版　78　大溝内出土木製品（手鏡状木製品、皿）…… 89
図　版　79　大溝内出土木製品（祭祀具各種）…… 91
図　版　80　大溝内出土木製品（祭祀具各種）…… 91
図　版　81　大溝内出土木製品（はしご等）…… 93
図　版　82　大溝内出土木製品（部材各種）…… 93
図　版　83　大溝内出土木製品（部材各種）…… 93
図　版　84　大溝内出土木製品（台座、紡錘車、火鑽板等）…… 92
図　版　85　大溝内出土木製品（用途不明品）…… 95
図　版　86　大溝内出土木製品（用途不明品）…… 99
図　版　87　大溝内出土木製品（用途不明品）…… 99
図　版　88　大溝内出土木製品（用途不明品）…… 99
図　版　89　大溝内出土木製品（用途不明品）…… 99

図 版 90　大溝内出土瓦…… 100
図 版 91　大溝内出土瓦…… 101
図 版 92　大溝内出土瓦…… 102
図 版 93　瓦関連資料①…… 127
図 版 94　瓦関連資料②…… 127
図 版 95　大溝内出土木簡…… 103
図 版 96　大溝内出土刻骨…… 107
図 版 97　花粉分析資料採取状況…… 115
図 版 98　木材顕微鏡写真①…… 119
図 版 99　木材顕微鏡写真②…… 119
図 版 100　木材顕微鏡写真③…… 119
図 版 101　木材顕微鏡写真④…… 119
図 版 102　木材顕微鏡写真⑤…… 119
図 版 103　木材顕微鏡写真⑥…… 119
図 版 104　木材顕微鏡写真⑦…… 119
図 版 105　木材顕微鏡写真⑧…… 119
図 版 106　木材顕微鏡写真⑨…… 119

挿 図 目 次

第 1 図　九州横断自動車道路線図…… 3
第 2 図　井上薬師堂遺跡とその周辺遺跡分布図…… 28
第 3 図　井上薬師堂遺跡とその周辺の地形図…… 29
第 4 図　グリット配置図（グリッドの縦線は真北を示す）…… 32
第 5 図　井上薬師堂遺跡遺構配置図…… 33
第 6 図　木製品集中区実測図……折込み
第 7 図　Aトレンチ北壁土層断面図実測図……折込み
第 8 図　第2セクション北壁土層断面図実測図……折込み
第 9 図　Bトレンチ北壁土層断面図実測図……折込み
第 10 図　第1セクション北壁土層断面図実測図……折込み
第 11 図　大溝西岸土器群出土土器実測図…… 39
第 12 図　大溝堆積層出土土器実測図①…… 41

第 13 図　大溝堆積層出土土器実測図②…… 43
第 14 図　大溝堆積層出土土器実測図③…… 44
第 15 図　大溝東岸土器溜出土土器実測図①…… 45
第 16 図　大溝東岸土器溜出土土器実測図②…… 46
第 17 図　大溝東岸土器溜出土土器実測図③…… 48
第 18 図　大溝東岸土器溜出土土器実測図④…… 49
第 19 図　大溝東岸土器溜出土土器実測図⑤…… 51
第 20 図　ヘラ書土器実測図…… 53
第 21 図　Aトレンチ出土墨書土器実測図…… 55
第 22 図　Bトレンチ・その他出土墨書土器実測図…… 55
第 23 図　土器溜出土墨書土器実測図…… 56
第 24 図　その他出土墨書土器実測図①…… 57
第 25 図　その他出土墨書土器実測図②…… 58
第 26 図　硯転用土器実測図…… 57
第 27 図　鎌柄実測図…… 60
第 28 図　横槌各種実測図…… 61
第 29 図　木錘各種実測図…… 63
第 30 図　ナスビ形鍬、えぶり実測図…… 65
第 31 図　田下駄各種実測図…… 67
第 32 図　槽各種実測図…… 69
第 33 図　スコップ形木製品、刳物容器実測図…… 71
第 34 図　鉢、杓子形・さじ形木製品実測図…… 73
第 35 図　俎各種実測図①…… 74
第 36 図　俎各種実測図②…… 75
第 37 図　下駄各種実測図①…… 77
第 38 図　下駄各種実測図②…… 79
第 39 図　下駄各種実測図③…… 81
第 40 図　櫛各種、櫛ケース実測図…… 82
第 41 図　円形曲物各種実測図…… 84
第 42 図　長楕円形曲物各種実測図…… 86
第 43 図　下駄・曲物実測図…… 87
第 44 図　祭祀具実測図…… 90
第 45 図　紡錘車実測図…… 92

第 46 図　火鑽板実測図…… 92
第 47 図　部材実測図…… 94
第 48 図　台座実測図…… 95
第 49 図　用途不明品実測図①…… 96
第 50 図　用途不明品実測図②…… 97
第 51 図　用途不明品実測図③…… 98
第 52 図　棰先瓦実測図①…… 100
第 53 図　棰先瓦実測図②…… 101
第 54 図　軒先瓦実測図…… 102
第 55 図　平瓦実測図…… 103
第 56 図　刻骨実測図…… 108
第 57 図　花粉分析資料採取地点図…… 117
第 58 図　井上薬師堂遺跡第 2 セクション北壁の花粉分析ダイアグラム…… 118
第 59 図　木製品集中区及び出土遺物水平分布図…… 124
第 60 図　棰先瓦実測図 — 関連資料 ①…… 127
第 61 図　軒丸瓦実測図 — 関連資料 ②…… 127
第 62 図　軒平瓦実測図 — 関連資料 ③…… 131
第 63 図　鬼板瓦実測図 — 関連資料 ④…… 135
第 64 図　平瓦実測図 — 関連資料 ⑤…… 135

表　目　次

表　1　九州横断自動車道関係遺跡一覧表 …… 折込み
表　2　井上薬師堂遺跡周辺の旧石器～弥生時代遺跡一覧表 …… 12
表　3　井上薬師堂遺跡周辺の弥生時代遺跡一覧表 …… 14
表　4　井上薬師堂遺跡周辺の弥生時代遺跡一覧表 …… 16
表　5　井上薬師堂遺跡周辺の古墳時代遺跡一覧表 …… 18
表　6　井上薬師堂遺跡周辺の古墳時代遺跡一覧表 …… 20
表　7　井上薬師堂遺跡周辺の歴史時代遺跡一覧表 …… 22
表　8　井上薬師堂遺跡周辺の歴史時代遺跡一覧表 …… 24
表　9　出土動物遺存骨 …… 110
表　10　刻骨形態分類表 …… 111
表　11　刻骨出土遺跡年代表 …… 111
表　12　刻骨出土地名表 …… 112
表　13　樹種一覧表 …… 120

第１章　はじめに

第１節　調査組織と調査の経過

１．昭和61年度の調査経過（第１図、第１表）

61年度の発掘調査は、昨年度が小郡～朝倉間62年３月供用開始というタイムリミットの中で、工事に追われた調査だったのに対し、落ち着きをとりもどした調査であった。しかし、工事発注前ということもあって工事用道路もなく、調査地点への進入路の確保に苦慮した。また、梅雨時の泥水の流出や流出土、道路の崩壊など事後処理に苦労した一年であった。

調査は４～５班体制で年間を通して従事し、杷木町内13地点の本調査と杷木・朝倉両町17箇所の試掘調査を行なった。調査面積は80.340㎡となった。また、小郡市教育委員会には第３・４地点の報告書作成にむけての遺物整理作業をしていただいた。

調査は志波地区の４地点から開始した。杷木宮原遺跡（第39－Ａ地点）の調査は４月下旬から７月上旬にかけて実施した。弥生時代中期前葉の甕棺・土壙墓など27基からなる墓地群、初頭～前葉にわたる住居址９軒、古墳時代後期のカマドを有する住居址４軒をはじめ、奈良時代頃のものと思われる掘り方の大きい２間×６間の大形掘立柱建物３棟が検出された。特に、２間×６間という大形建物については類例も少なく今後、その性格等の問題で注目されよう。

中町裏遺跡（第39－Ｂ・Ｃ地点）の調査では、弥生時代の円形住居址、中期中葉の甕棺墓７基が並列して検出された。この地域では珍しい成人棺の発見である。他に陶質の壺・鉄鏃・玉類が副葬された５世紀後半の石棺墓、13世紀後半の玉石積みをした大規模な溝１条が検出された。調査は台地部を４月下旬～６月中旬にかけて、谷部は梅雨明け後の８月～９月中旬の間で実施した。

志波岡本遺跡（第41地点）の調査は、対象面積18,000㎡と広大であったが、柿畑造成時の削平もあって遺構・遺物の残りは極めて悪く、４月下旬～６月下旬の短期間で終了した。遺構としては縄文時代晩期の住居址状の竪穴遺構や土壙・ピット群が発見された。他に、縄文土器・石器多数が出土した。また、奈良期のものと思われる２間×６間、２間×９間以上の大形建物が検出され、杷木宮原遺跡で検出された建物と主軸方位が同一であり、さらに桑ノ本遺跡（第40地点）でも同様の建物群が発見され一層注目されることとなった。

江栗遺跡（第42地点）の調査は、若干遅れた５月下旬から開始し８月中旬で終了した。２間×３間の礎石建物１棟とそれより古い総柱の３間×３間の掘立柱建物１棟、さらにその周辺からは火葬墓５基が検出された。また、北側の丘陵の南側斜面からは平安時代の製鉄工房跡を思わ

せる遺構・遺物が発見された。現在江栗集落の西端にある石祠が、かってはこの場所にあったと伝えられている。また、筑前続風土記拾遺の附録に「地蔵大権現社」がエグリにあったと記されている。このことは礎石付近から出土した近世陶磁器や瓦とも符号し興味深い。さらにその下層から検出された掘立柱建物は鎌倉時代のもので、礎石建物との関係が今後重要な問題であろう。

志波桑ノ本遺跡（第40地点）は志波地区では最も濃密な複合遺跡であった。従って、調査も6月下旬～11月までの長期間の調査となった。検出された遺構は古墳時代の住居址群、円墳8基、奈良時代のものと思われる大形の掘立柱建物群、井戸、中世の25基からなる火葬墓群、地下式横穴墓、池状遺構など多数の遺構・遺物が発見された。他に、遺構は検出されなかったものの縄文時代早期・後期・晩期の土器・石器が多数と、古いタイプの円筒埴輪片多数が出土した。周辺に首長墓クラスの古墳が存在した可能性があろう。

畑田遺跡（第48地点）も残りの良い大複合遺跡で、平安～室町時代にわたる建物群や土坑群が重複し、その下層からは縄文時代晩期～弥生時代前期にわたる総数84軒にも及ぶ住居址群、この地域では極めて珍しい支石墓4基、石棺墓2基などが発見された。特に、稲作農耕開始期の大集落の発見は、内陸部という地理的位置もさることながら、今後、重要な遺跡として注目されよう。東側を流れる白木谷川の氾濫や丘陵部の土砂の流出・崩壊により1～3mという深く埋没していたことが遺跡の保存を良好にしていたといえる。しかし、調査は重層的に重複していたため難行し、5ケ月を越す調査となり8月中旬から1月下旬にわたった。

上池田遺跡（第47地点）の調査は12月から3月にかけて実施した。畑田遺跡と同様、縄文晩期から弥生前期にわたる住居址群、貯蔵穴・土坑群が、また、中世の竪穴遺構や土坑墓も発見された。

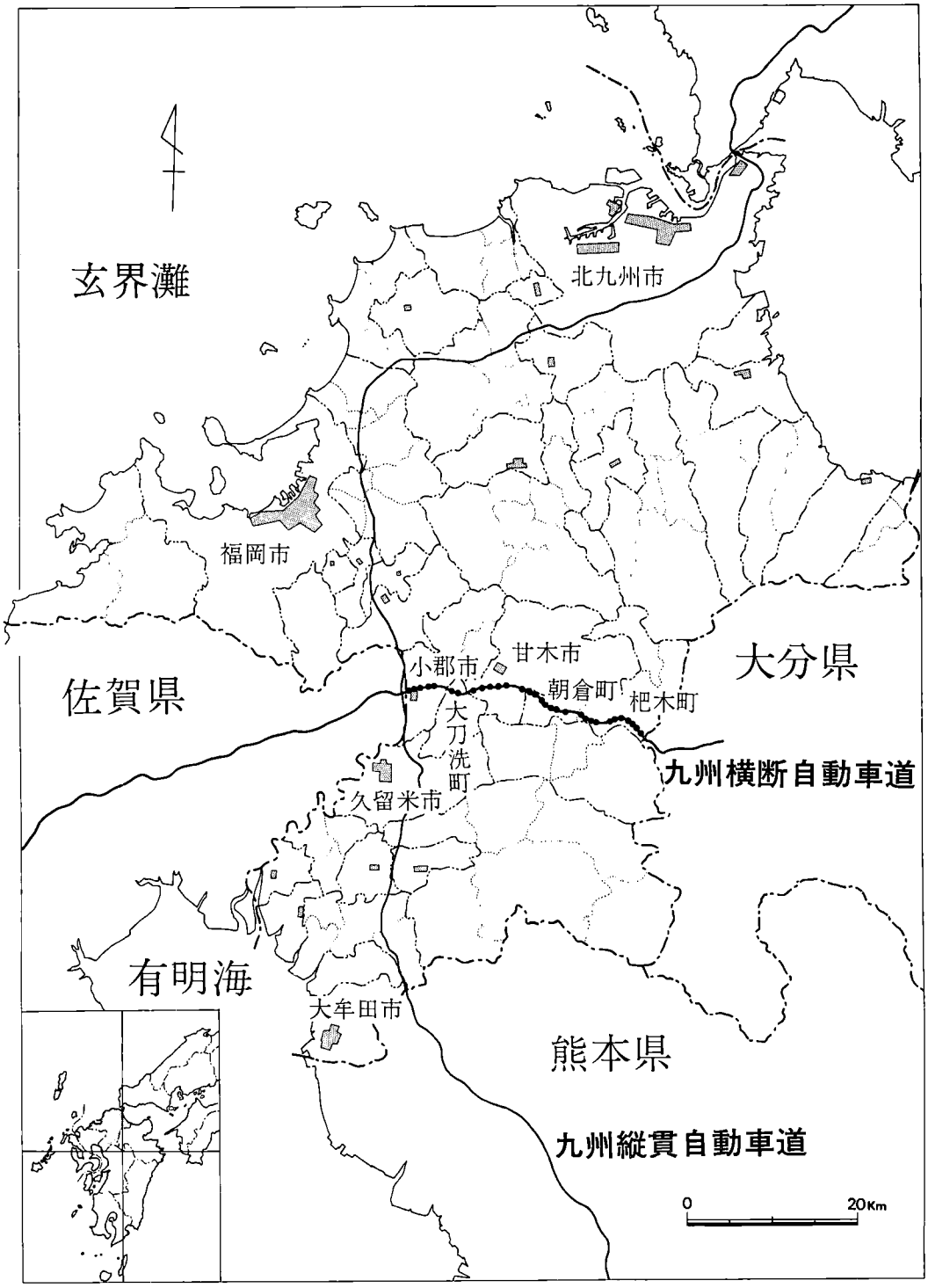
杷木インターの進入路にあたる鞍掛遺跡（A地点）と前田遺跡（B地点）の調査は6月末～8月下旬、10月～11月の2回に分けて実施した。鞍掛遺跡からは6世紀末～7世紀初めの住居址17軒、前田遺跡からは弥生時代後期後半の住居址4軒と土坑・溝などが検出された。しかし広大なインターチェンジ内部の調査については、未買収地が多く、62年度に見送ることとなった。

楠田遺跡（第51地点）の調査は、12月～3月にかけて実施した。縄文時代早期・前期・晩期にわたる多くの土器・石器をはじめ、住居址・土坑墓、竪穴遺構・土坑など多数が検出された。地質的に難しく遺構検出に困難を極めた調査であった。

陣内遺跡（第53地点）と上野原遺跡（第54地点）は狭い谷を挟んで隣接した遺跡で、いづれも内容的に希薄な遺跡であったが、陣内遺跡から中世の炭窯1基と掘立柱建物4棟、上野原遺跡からは中世の火葬墓が発見された。とりわけ、中世の炭窯は類例の極めて少ない資料であり貴重な発見であった。

表 1　九州横断自動車道関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	分布面積	調査地区と面積								備考	報告書
					54年度	55	56	57	58	59	60	61		
1	小郡正尻遺跡	小郡市大字小郡	弥生集落・歴史溝	11,200					5,000		560		完了	7集
2	前伏遺跡	〃　〃	弥生・古墳散布地	10,400						330	6,000		完了	
3	大板井遺跡	〃　大板井	弥生・古墳	5,400							3,000		小郡市委託完了	
4	〃	〃　〃	大板井城跡	9,200						3,500	5,000		小郡市委託完了	
5	井上薬師堂遺跡	〃　井上	弥生・中世集落	8,800						4,500	3,700		完了	10集
6	薬師堂東遺跡	〃　薬師町	弥生・古墳散布地（首切塚）	32,000					500	7,300	10,100		完了	
7		〃　今隈	弥生散布地	7,200					200		100		完了	
8	宮巡遺跡	大刀洗町大字山隈	中世散布地	4,000					3,600				完了	
9	春園遺跡	〃　〃	先土器・弥生・古墳・近世墓	10,800					100	6,700			完了	
10		〃　中条本郷		34,400			700	13,500	300				遺構なし完了	
11	立野・宮原遺跡	甘木市大字下浦	弥生末～平安集落・方形周溝墓円墳・土壙墓等	33,800			13,860		10,000	3,000			完了	2・5・8集
12	小石原川西条里	〃　上浦	中世	48,000			810						遺構なし完了	
13	〃　東条里	〃　上浦馬田	〃	56,000	200	7,600							完了	1集
14	上々浦遺跡	〃　上浦	弥生・古墳集落	18,400	200								完了	1集
15	西原・下原遺跡	〃　一ッ木・屋永	〃　〃	54,800	A・B地点 3,850		下原 4,200	C地点 1,400					完了	1・2・3集
16	高原遺跡	〃　屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400	5,400			完了	
17		〃　牛鶴		100						100			完了	
18		〃　〃	散布地	2,550					300				遺構なし完了	
19－A	塔の上遺跡	〃　〃	古墳集落	30,000					700	8,200			完了	9集
19－B	大環端遺跡	朝倉町大字石成	〃　・奈良墓地	20,000							8,400		完了	
19－C/D	石成久保遺跡	〃　〃	古墳集落	20,000							6,100		完了	
20	中道遺跡	〃　大庭	縄文・弥生・奈良集落	15,400					300		11,400		完了	
21－A	西法寺遺跡	〃　〃	奈良集落・中世	46,900				800	600		8,400		完了	
21－B		〃　〃	散布地								2,300		完了	
21－C	大庭久保遺跡	〃　〃	弥生墓地・奈良集落								9,650		完了	
21－D	上の原遺跡	〃　〃	弥生集落・墓地・古墳集落								12,300		完了	
22－A/B	治部ノ上遺跡	〃　入地	縄文・弥生・古墳集落	5,400					300	4,800			完了	
22－C	狐塚南遺跡	〃　〃	弥生・中世集落・墓地	5,000							3,420		完了	
23	座禅寺遺跡	〃　〃	弥生集落・古墳	2,600						2,600			完了	
24	才田遺跡	〃　〃	中世散布地・歳田廃寺	5,400						1,050	6,650		完了	
25	東才田遺跡	〃　〃	〃　・　〃	4,000						1,300	4,400		完了	
26		〃　須川	散布地	1,600				70					遺構なし完了	
27	長島遺跡	〃　〃	縄文・弥生・古墳奈良集落	16,000				C地点 5,000	C地点 6,640			500		
28	中妙見遺跡	〃　〃	縄文・歴史集落	2,400				200	458				完了	
29	原の東遺跡	〃　菱野	縄文・弥生集落・墓地	16,800					600					
30		〃　菱野・山田	箱式石棺	4,000										
31		〃　山田	箱式石棺	2,000										
32		〃　〃		2,400				300					遺構なし完了	
33		〃　〃	古墳	2,000										
34		〃　〃	散布地	3,600										
35		〃　〃	弥生・散布地	2,600										
36		〃　〃	古墳散布地	2,000										
37		〃　〃	〃	2,400										
38		〃　〃	弥生・中世・箱式石棺	125										
39－A	杷木宮原遺跡	杷木町大字志波	弥生・古墳・中世散布地	22,000							320	3,400	完了	
39－B/C	中町裏遺跡	〃　〃	〃　〃　〃									11,000	完了	
40	志波桑ノ本遺跡	〃　〃	中世・散布地	2,500							300	7,700	完了	
41	志波岡本遺跡	〃　〃	〃　〃	18,000							300	9,400	完了	
42	江栗遺跡	〃　〃	中世一字一石経	8,000							300	9,700	完了	
43		〃　若市	古墳群	12,000								500		
44		〃　久喜宮	古墳4～5基	1,800										
45		〃　〃	散布地	2,400								400		
46		〃　古賀	〃	1,800								300		
47	上池田遺跡	〃　池田	弥生・古墳・中世散布地	4,000								3,200	完了	
48	畑田遺跡	〃　〃	散布地	1,800								6,800	完了	
49		〃　林田	〃	3,200								150	遺構なし完了	
50		〃　〃	〃	2,400								200	遺構なし完了	
51	楠田遺跡	〃　〃	〃	5,200								6,500	完了	
52		〃　〃	〃	2,000								1,000		
53	陣内遺跡	〃　穂坂	〃	3,500								5,700	完了	
54	上野原遺跡	〃　〃	〃	1,800								2,700	完了	
55		〃　〃	古墳	1,600								100	遺構なし完了	
56		〃　〃	散布地	2,400								800	遺構なし完了	
57	柿原古墳群	甘木市大字柿原	古墳群・縄文・弥生集落	200,000		測量 14,700	900	8,300	15,000	18,500	4,400		土取場完了	4・6集
58	山田古墳群	朝倉町大字山田	〃	40,000	測量 4,435				2,500	2,500	8,710		土取場完了	
杷木インターA	鞍掛遺跡	杷木町大字寒水	弥生・古墳集落	100,000								6,450	完了	
杷木インターB	前田遺跡	〃　〃	散布地									2,600	完了	
杷木インターC		〃　〃	〃									1,240		
			計		8,685	22,300	20,470	29,570	48,498	69,780	115,810	80,340		



第 1 図　九州横断自動車道路線図

第52地点の調査は3月から実施したもので、来年度に継続する調査である。

他に、杷木町内18地点の試掘調査を前年度から継続して4月～6月、10月～11月の2回に分けて実施した。その結果、第49・50・55・56地点については遺構・遺物が存在しないことが判明した。

また、3月になって62年度調査予定の杷木インターチェンジ用地をはじめ、杷木町4箇所と朝倉町1箇所の試掘調査を実施した。

一方、杷木町寿大学の現地見学会や小・中学生を対象にした社会科見学、町民を対象にした町教育委員会主催の文化講演会にも職員を派遣し、文化財保護思想の普及につとめ、いずれも好評を得た。

整理作業は調査と併行して甘木事務所と九州歴史資料館で行なった。調査報告書は立野遺跡（8集）・塔の上遺跡（9集）・井上薬師堂遺跡（10集）の3冊を刊行した。

また、かねてからの懸案事項であった甘木事務所の新築工事が道路公団の御協力により竣工でき、年度末には全ての移転作業が完了し、新しい事務所で仕事ができることになった。

なお、発掘調査にあたっては杷木町総務課をはじめ、建設課、教育委員会には多大な御援助・御協力を得た。ならびに作業員として参加していただいた地元の方々、第3・4地点の整理・報告書作成作業を受託された小郡市教育委員会に対し、心より感謝いたします。

昭和61年度の調査関係者は下記のとおりである。

（井上裕弘）

日本道路公団福岡建設局

局長	今村　浩三（前任）	杉田　美昭
次長	菱刈　庄二	
総務部長	安元　富次	
管理課長	森　宏之	
管理課長代理	佐伯　豊	

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　長	乗松　紀三（前任）	風間　徹
副所長	西田　功	
副所長（技術担当）	中村　義治	
庶務課長	徳永　登	
用地課長	岩下　剛（前任）	松尾　伸男
工務課長	後藤二郎彦	
小郡工事区工事長	友田　義則	

甘木工事区工事長　猪狩　宗雄
朝倉工事区工事長　小手川良和（前任）　上野　満
杷木工事区工事長　山中　茂（前任）　小沢　公共

小郡市教育委員会

教育長　福田　大助
教育次長　安永　茂歳
社会教育課長　平山　稔
社会教育係長　永田　真二
庶務　米倉百合子
技師　速水　信也　柏原　孝俊
調査補助員　山田あや子

福岡県教育委員会

総　括　教育長　友野　隆
教育次長　竹井　宏
指導第二部長　渕上　雄幸
文化課長　窪田　康徳
文化課長補佐　平　聖峰
文化課長技術補佐　宮小路賀宏
文化課参事補佐　栗原　和彦
文化課参事補佐　柳田　康雄
庶　務　文化課主任主事　川村喜一郎
調　査　文化課調査班総括　柳田　康雄（兼任）
同　技術主査　井上　裕弘
同　主任技師　高橋　章
同　主任技師　中間　研志
同　主任技師　佐々木隆彦
同　主任技師　小池　史哲
同　主任技師　伊崎　俊秋
同　技師　小田　和利
同　文化財専門員　木村幾多郎
同　臨時職員　日高　正幸
調査補助員　高田　一弘　武田　光正　佐土原逸男
平嶋　文博　向田　雅彦　田中　康信

2．井上薬師堂遺跡の調査経過

井上薬師堂遺跡の調査範囲は、当初、今回報告する谷部分西側の台地部分4500㎡だけが、弥生・中世集落の調査対象地として挙げられ、小郡第5地点と仮称されていた。

調査は、昭和59年8月後半から始まり、弥生時代から奈良時代にかけての複合集落址であることが確認された。また、谷部分を挟んで隣接する小郡第6地点では7世紀を中心とした集落址が調査された（図版3(1)）。

さて、12月に入り、公団側から第5地点西側ボックス工事に伴なう資材搬入路確保のため台地南側部分の明け渡しが要請された。そのため、同部分の調査を優先させ、12月10日に幅10mの搬入路を明け渡した。さらに、この搬入路を利用して、谷部分にも同様なボックス工事を開始する旨の連絡を受けた。しかし、調査が進行する中で、多数の弥生時代から奈良時代にかけての住居址が、重層的に立地する東、西両台地に挟まれた開析谷には両遺跡を有機的に結びつける何らかの施設や谷水田の存在が予測された。また井上集落の人々は、この開析谷が南北に伸び、集落を独立させたようにしていることから、この谷を古くより「長者堀」と呼んでいたため、井上廃寺との関連から外地域を画する大溝があるとも想定できた。そうして、重機による試掘調査を実施した。その結果、トレンチ内より奈良時代の土師器、須恵器瓦片そして木製品が多量に出土した。そこで、当県教委は、当初、調査予定地外であった谷部分を急拠、公団側に対象地に組みこむことを要請し、両者の再三の協議の結果、工事工程の関係から昭和60年1月から2月下旬までという期限設定のもとでの調査が開始されるに至った。従って、調査日程は、工事日程と常に背中合わせの状態で組まれていくことになった。

谷部分の調査は、明けて昭和60年1月7日から開始した。調査区は、南北に走る農業排水路を分断する形をとったため、雨の日には北側の排水が一括して流れ込んで、冠水状態になるのが常であった。それに、当所は湧水も激しく、前日作業終了後に溜った水のくみ上げを5台の排水ポンプのフル回転により、朝からの調査に臨むのが日課となった（図版3(2)）。

作業は、当初、井上・山隈地区の人々37人で開始させたが、雨、雪等による作業の遅れを取り戻すことから、1月20日より、小郡市教育委員会の協力を得て、干潟・立石・吹上地区の人々16人と大学生22人を加え、総勢75人という大所帯で、調査の迅速化を図った。従って、調査担当者は、毎日を作業員への指示徹底に追われ、精査が及ばなかった所が多々ある。

こうして、排水ポンプ5台とベルトコンベアー15台フル回転による轟音の中での喧騒とした発掘調査も、3月15日に、予定より約半月遅れて一応終了する運びとなった。

この1月から3月までの調査では、南北に流れる溝状遺構の東側肩部と西側肩部の一部を検出するに至った。しかし、さらに西南側にのびる遺構範囲については、今後の追加調査の必要性が説かれた。幸いにも、公団側のボックス工事が、未発掘区まで及ばないことが確認できた

ため、年度を改めて実施することにした。

一方、本遺跡では、筑後地方初の木簡や山田寺系重弁蓮華文棰先瓦、墨書・ヘラ書土器、大量の木製品の出土を見たため、その公表を2月20日に行った。また、現地説明会も2月24日に開催し、約100人の参加者を得、盛況の中に終えることができた。

さて、第二次の調査は　西側台地部分調査終了を待って、7月5日からの10日間で行われたが、梅雨末期の局地的豪雨で作業は思うように運ばず、重機による西側肩部の検出と南側壁面土層観察をするにとどまった。

昭和59年度から60年度に及ぶ調査関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

	局　長	今村　浩三	
	総務部長	菱刈　庄二	安元　富次
	管理課長	森　宏之	
	管理課長代理	野口　利夫（前任）	佐伯　豊

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

	所　長	乗松　紀三	
	副所長	西田　功	
	副所長（技術担当）	中村　義治	
	庶務課長	松下　幸男（前任）	徳永　登
	用地課長	岩下　剛	
	工務課長	山口　宗雄（前任）	後藤二郎彦
	小郡工事区工事長	友田　義則	
	甘木工事区工事長	猪狩　宗雄	
	朝倉工事区工事長	平沢　正（前任）	小手川良和
	杷木工事区工事長	前田　雄一（前任）	山中　茂

福岡県教育委員会

総　括	教育長	友野　隆	
	教育次長	安部　徹	
	管理部長	伊藤　博之（前任）	大鶴　英雄
	文化課長	前田　栄一	
	文化課長補佐	中村　一世（前任）	平　聖峰
	文化課長技術補佐	宮小路賀宏	
	文化課参事補佐	栗原　和彦	
庶　務	文化課庶務係長	松尾　満（前任）	平　聖峰（兼任）

	文化課事務主査	長谷川伸弘	
調　査	文化課調査第2係長	栗原　和彦（前任）	宮小路賀宏（兼任）
	同　技術主査	井上　裕弘	
	同　主任技師	木下　　修（現京築教育事務所技術主査）	
	同　主任技師	高橋　　章	
	同　主任技師	児玉　真一（現北筑後教育事務所技術主査）	
	同　主任技師	新原　正典（現筑豊教育事務所技術主査）	
	同　主任技師	中間　研志	
	同　主任技師	佐々木隆彦	
	同　主任技師	小池　史哲	
	同　技師	伊崎　俊秋	
	同　技師	小田　和利	
	同　技師	緒方　　泉（前臨時職員）	
	同　文化財専門員	木村幾多郎	
	同　臨時職員	日高　正幸	
	同　臨時職員	森山　栄一（現筑紫野市教育委員会）	
	同　臨時職員	宮田　浩之（現小郡市教育委員会）	
	調査補助員	髙田　一弘　　武田　光正　　佐土原逸男	
		平嶋　文博　　向田　雅彦　　田中　康信	

調査補助　森下英治（関西大学）、藤平寧（関西大学）、高橋潔（立命館大学）、時元省二（別府大学）、沢山孝一（関西大学）、中村健二（関西大学）、古賀勇（福岡大学）野田徹（佐賀大学）、目修二（久留米大学）、深江義幸（久留米大学）、高山浩一、宇野克実

整理補助　豊福弥生、太田育子、原かよ子、有馬信子、植山洋子、鬼木美知子、森山シズ子、若山和子

発掘調査にあたっては、以下の人々の協力を得た。

臼井サツキ、倉成ツルヨ、倉成トシエ、草垣幸子、古賀アキエ、古賀アキコ、古賀スマコ、古賀友子、古賀文代、古賀芳子、権藤喜代子、嶋田美智子、清水サチ子、西岡久美子、西岡文子、西岡和子、野田スミ子、野田照子、野田トメノ、野田政子、野田マスミ、野田美根子、野田ヨシ子、花田豊子、花田直恵、藤静子（以上井上）、内山ミノブ、田中タツ子、永利ユキエ、福永瑞子、福永チエ子、美山絹子、美山シゲミ、美山須恵子、美山敏子、美山エツ子、福永サダエ、永利クニ子、重松敏子、重松まさ子、重松道子、大石芳香（以上干潟・立石・吹上）、高木キトシ、棚町その、棚町昌子、中島トシ子、中島マサ子、人見シヅカ、堀内マサヲ、堀江美

千栄、矢ヶ部スマ子、安丸シノブ、安丸豊（以上山隈）。

上林秀史、清武修一、久保山栄一、黒岩保幸、高津義徳、野田和明、畑井俊哉、堀内宏行、矢野哲也、安丸敏美。

発掘調査・整理作業では、赤川正秀、石松好雄、小田富士雄、片岡宏二、久保寿一郎、倉住靖彦、定森秀夫、下條信行、高倉洋彰、武末純一、千田剛道、野井英明、畑中健一、林弘也、南博史、森浩一、森貞次郎、森岡秀人、森田勉、横田賢次郎、横田義章、渡辺正気の各先生に御指導、助言を得た。記して感謝の意を表したい。

また、調査期間中、休日返上で来援していただいた木下修、伊崎俊秋、日高正幸、宮田浩之の諸氏、そして、第6地点の中間研志、森山栄一両氏にも記して感謝の意を表したい。

報告書作成にあたっては、柳田康雄、井上裕弘、川村喜一郎、豊福弥生の諸氏には格別の御配慮をいただいた。記して感謝の意を表したい。

第2節　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置（第2図）

井上薬師堂遺跡は、福岡県小郡市井上に所在する。小郡市は、筑後平野を東西に貫流する筑後川の北岸に位置し、ほぼ県中央部にあたる。西を佐賀県と境を接している。また、市中央部を南北に流れる筑後川支流の宝満川の東・西両岸では、その地勢が大きく異なる。(註1)

宝満川西岸は、西へ宝満川扇状低地、筑紫丘陵、基山・天拝低山地と続き、山地と平野との変移部には、かつての山麓面が開析された丘陵地が分布する。これが、現在、中九州ニュータウン建設に伴なう発掘調査で、「遺跡の宝庫」の実態を現わしている三沢丘陵である。

さて、本遺跡が所在する宝満川東岸は、東へ宝満川扇状低地、朝倉扇状台地群、城山丘陵と続いている。特に、扇状地は、形成の歴史が古いため、砂礫台地の様相を呈する。そして、本遺跡は、朝倉扇状台地群、つまり、砂・礫・泥からなる洪積世の低位段丘層及び、これを開析してできた谷合に立地している。そして、井上集落は、この開析谷により、隣接集落とは、一線を画するようになるため、井上の人々は、この谷合を「長者堀」と通称している。

2．周辺の遺跡（第2図、第2～8表）

さて、本遺跡周辺では、宝満川西岸の三沢丘陵やそこから東に広がる沖積平野には、旧石器時代から連綿と多数の遺跡が存在する。特に大規模調査の走りとなった津古内畑遺跡（22）や横隈山遺跡（33）、九州縦貫自動車道建設に伴なう発掘調査で明らかになった北牟田遺跡（34）、

ハサコの宮遺跡（29）等、さらに近年の中九州ニュータウン建設に伴なう発掘調査では、最古期の前方後円墳に属する津古生掛古墳（25）、朝鮮系無文土器を出土した横隈鍋倉遺跡（59）、二重口縁壺が3段築成の周囲をめぐらす4世紀後半の三国の鼻1号墳（27）等、そして九州横断自動車道建設工事に伴なう発掘調査では、小郡正尻遺跡（56）、前伏遺跡（55）等が衆目に曝されるところとなった。その他には、筑後国御原郡の郡衙に比定される小郡遺跡(52)がある。

次に、宝満川東岸の台地上には、本遺跡東側の薬師堂東遺跡（小郡第6地点）、北側の井上北内原遺跡(3)、そして、山田寺系重弁八弁蓮華文椎先瓦を出土した井上廃寺(2)等がある。さらに東の城山山麓には、発掘調査は実施していないが初期須恵器窯跡の存在を窺わせる多数の土器の採集をみる小隈窯跡（15）等がある。

また、南側、筑後川へ向かって広がる低地帯には、標高7m前後に立地する八坂石塚遺跡(58)があり、その遺跡の広がりは全市域を席巻している。

ところで、本項では、井上薬師堂遺跡と時期を同じくする井上廃寺、小郡遺跡を具体的に説明し、その他のものについては、発掘調査等で確認し得た遺構・遺物の状況を表化することとした。

井上廃寺（第2図2）

井上廃寺については、江戸時代の国学者矢野一貞による『筑後将士軍談』下巻「御原郡千潟村古墳」の条に詳しい。

『井上村ニ観音堂アリ、井上福田寺ノ古跡ト云、方一間計ノ礎石アリ、柱穴一尺一寸計、余ハ皆稲吉村ノ樞ニ用タリト云、福田氏ニ由アル寺ニハ非ルカ、

此礎石筑前観世音寺ノ礎石ト其制大小全同シ、其二ツノ間相去ル事十五間、其地ヲ石ノ跡ト云、文化十年十月、此両石ヲ猿田彦トシテ、村中ヨリコレ祭ル、又卯方ニ門前ト号スル地アリ、此ニモ礎石アリ、今樋口氏の宅内也、又福田寺奥院ト号スルモ宅内ニアリ、石地蔵アリ、寺跡ヨリ古瓦出ツ、往古ハ大寺大寺ナリツト見タリ、』

とある。すでに江戸時代後半期は、崩落していたと考えられる。

昭和34年、井上集落内で山田寺系重弁文椎木先瓦が発見され、その後、小田富士雄氏らによる付近の踏査や測量調査から、大体方二町の寺域が推定されるに至った。

小田氏によると、付近では、円形・方形椎先瓦、鬼板瓦破片を始め、数種の軒先瓦も出土しているという。本遺跡からも、円形（大・小）・方形椎先瓦、軒先瓦、軒平瓦が出土した。

創建時期について、小田氏は、8世紀初より下らないと推定している。（註2）

本遺跡からは、木簡や墨書・ヘラ書土器等の文字資料が検出されており、近隣に有力知識層が居住していたことを窺わせる。このことは、当然、本遺跡と井上廃寺（その具体的な性格については不詳だが）との密接な関係を物語ってこよう。

小郡遺跡（第2図52）

南面の緩斜面に位置し、東に浅い谷をひかえる。弥生時代の住居跡と共に40棟の掘立柱建物、掘立柱柵列や溝が検出された。

これら建物群は、軸線を異にすることから３期に区分できるという。

第１期は３棟の建物（３×４間）と北にある溝。第２期は東南のコ字状に配した建物群と西の建物群と柵より北の倉庫群からなる。北の建物からは焼米が出土し、正倉の一部と考えられる。第３期は東南の４棟の大きな建物とその裏に続く建物、西方に点在する建物と、北にＬ字形に検出された区画からなる。

第２、３期については、①計画的な設計のもとに造営されていること②律令制の税穂を「郡」単位で貯蔵する「正倉」とみられる建物も数棟あること③出土遺物に陶硯があることなどから、「郡衙」の存在が十分に推定されるようになった。また、その時期は、出土土器から７世紀末から８世紀にわたると考えられるという。(註３)

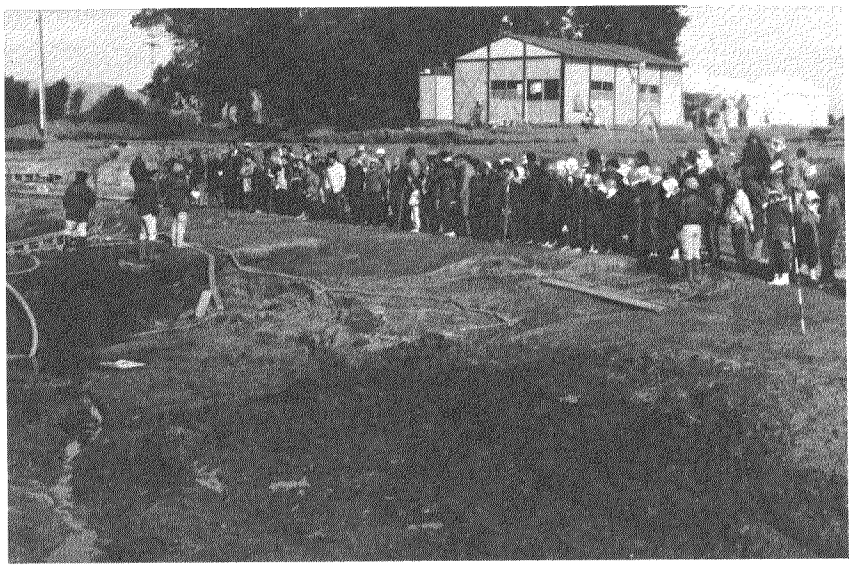
現在は、国指定史跡となり、公園化して、保存されている。

註

1．福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸＩ」、1979年

2．小田富士雄「九州に於ける山田寺棰先瓦・発見」歴史考古6、1961年

3．福岡県教育委員会「福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報」『福岡県文化財調査報告書第39集』、1968年



現地説明会寸描（昭和60年２月24日）

表 2-① 井上薬師堂遺跡周辺の旧石器・縄文時代遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時期	立地	出土遺構
8	小隈				表採
16	干潟	小郡市干潟	縄文早期	25 m	Ⅰ－1区小穴
22	津古内畑第2次・第4次	小郡市津古内畑	旧石器～縄文	40 m	5号甕棺墓壙混入 201・172・196・206号袋状竪穴混入
33	横隈山	小郡市大字三沢字道メキ他	旧石器～縄文	30～45cm	
36	栗原	小郡市三沢字栗原	旧石器～縄文	丘陵上 30 ～ 40 m	包含層
41	三国小学校内	小郡市力武	旧石器	20 m	包含層
51	西島	小郡市三沢字花聳他	旧石器～縄文	標高 37 m 丘陵	包含層
54	向築地	小郡市大字大板井字向築地他	縄文早期	微高地 15 m	包含層

表 2-② 井上薬師堂遺跡周辺の弥生時代遺跡一覧表

3	井上北内原	小郡市井上北内原	中期前半～終末 （古墳初頭）	丘陵端 17～19m	住居址31・土壙11・周溝状遺構2 甕棺墓43・土壙墓・石蓋土壙墓4
5	吹上・北畠	小郡市吹上北畠	中期初頭～後期	20m	土壙3
17	乙隈	小郡市大字乙隈字東畑			
18	七坂F区	朝倉郡夜須町大字東小田字七板	中期～後期	24m	住居址32・掘立柱建物1・土壙17 環濠1・甕棺墓2
19	塔ノ本	朝倉郡夜須町大字東小田字塔ノ本	後期～終末	26m	住居址11・建物跡1・土壙4 溝6
20	峯	朝倉郡夜須町大字東小田字峯	前期～後期初頭	微高地南西端 22m	住居址1・祭祀遺構1・甕棺墓29 貯蔵穴11・溝状遺構
21	中原前	朝倉郡夜須町大字東小田字中原前			
22	津古内畑第1次	小郡市津古内畑	前末～中初	40m	土壙墓・木棺墓13・甕棺墓11・貯蔵穴43
22	津古内畑第2次	小郡市津古内畑	前末～中前	40m	住居址4・土壙2・貯蔵穴64・溝

出　土　遺　物
押型文土器
ナイフ形石器・浅鉢
押型文土器・条痕文土器・国府型ナイフ形石器
ナイフ形石器・打製石器
尖頭器
舟底状石器・ナイフ形石器・打製石鏃
押型文土器・叩き石

土器・石斧・石鏃・石剣・石庖丁・砥石・紡錘車・投弾
土器
中広銅戈２（S．29年出土）
土器・石剣・蛤形石斧・砥石・不明石器・石ノミ・鉋・鎌・鉄鏃・鋳造鉄斧
土器・手づくね椀・砥石・石包丁・石鏃・ 鉋
土器・石包丁・石斧・石鏃・砥石
中広形銅戈鎔笵、（S．30年出土）
土器・石器（磨石・敲石・砥石・石皿・石鏃・石鎗・石弾・石錐・掻器 石庖丁・石剣・石斧・石匙）・紡錘車・土製円板・碧玉製管玉
土器・石庖丁・石斧・石鏃・掻器・砥石 磨石・紡錘車・木製高杯・投弾・石匕

表 3　井上薬師堂遺跡周辺の弥生時代遺跡一覧表

22	津古内畑 第3次	小郡市津古内畑	前末～中初	40m	住居址1・土壙墓・木棺墓11 貯蔵穴61・甕棺墓5
22	津古内畑 第4次	小郡市津古内畑	前後～中初	40m	住居址2・甕棺墓1・土壙墓1 貯蔵穴39・小溝
22	津古内畑 第5次	小郡市津古内畑	前後～中初	40m	住居址7・貯蔵穴51
23	津古東宮原	小郡市津古内畑	中期	32m	甕棺墓12・土壙21
28	三沢種畜場跡	小郡市津古内畑	前期～中期	丘陵 35～60m	住居址12・袋状竪穴16・小竪穴110
29	ハサコの宮 （第1次）	小郡市津古内畑	弥・前末～中初	丘陵　49m	甕棺墓2・土壙墓25・溝2
29	ハサコの宮 （第2～3次）	小郡市字ハサコ の宮の口	弥・前末～中初	丘陵　60m	住居址1・貯蔵穴7・甕棺墓23 土壙墓・木棺墓21
30	三沢蓬ケ浦 B地区	小郡市三沢	弥・前～中	丘陵　40m	住居址15・貯蔵穴110　・甕棺1 土壙墓・木棺墓10・石棺墓2
30	三沢蓬ケ浦 C地区	小郡市三沢	弥・前～中	丘陵　44m	住居址6・貯蔵穴66・甕棺2
30	三沢蓬ケ浦 E地区	小郡市三沢	弥・前～中	丘陵　40m	住居址4・貯蔵穴10
30	三沢蓬ケ浦 G地区	小郡市三沢	弥・前～中	丘陵　40m	住居址1・貯蔵穴19
33	横　隈　山	小郡市大字三沢 字道メキ他	弥・前末～中初 後後	丘陵 30～42m	環濠・袋状竪穴
34	北　牟　田	小郡市大字三沢 字北牟田	弥・前末～中後	丘陵　32m	住居址37・貯蔵穴122　・甕棺墓28 土壙墓・木棺墓47
35	松　尾　口	小郡市大字三沢	弥・前末～中初	丘陵　60m	住居址1・貯蔵穴4
36	栗　　原	小郡市字栗原	弥・前末～中初	丘陸上 30～40m	住居址1・貯蔵穴・柱穴・小形甕棺墓1
37	三沢栗原Ⅰ区	小郡市三沢字栗原	中期末	40m	住居址2・貯蔵穴12
37	三沢栗原Ⅱ区	小郡市三沢字栗原	前期後葉～ 中期初	40m	住居址2・貯蔵穴4・土壙8
37	三沢栗原Ⅲ区	小郡市三沢字栗原	前期初頭～終末	30～40m	住居址20・掘立柱建物・貯蔵穴23・竪穴
37	三沢栗原Ⅳ区	小郡市三沢字栗原	前～終末	30～40m	住居址21・貯蔵穴4

土器・石器（石庖丁・石斧・砥石・石鏃・石弾・石ノミ・スクレイパー 石錐・磨石・石匕）・土製円盤・紡錘車・投弾
土器・石鏃・石斧・敲石・石庖丁・石弾・石剣・砥石・スリ石・勾玉 石ノミ・投弾・紡錘車・土製円盤・木製椀
土器・石鏃・砥石・石斧・石ノミ・石剣 石庖丁・紡錘車・投弾・土製円盤
土器
土器・石包丁・石斧・砥石・磨石・環状石斧・石鏃・蛤刃石斧 片刃石斧・碧玉製管玉
土器・石器（石鍬・石鎗）
土器・石器（石斧・石鏃・石錐・石剣）
土器・朝鮮系無文土器・石斧・石鏃・砥石・掻器・ 石庖丁・勾玉・紡錘車・磨石・石錐・石鎗
土器・石斧・石庖丁・石剣・紡錘車・磨石・石錐・砥石・掻器
土器・石鏃・石斧・勾玉・投弾・砥石
土器・石斧・紡錘車・石鎗・掻器
土器・石鏃・石匙・石剣・石斧・紡錘車・石庖丁・石弾・鉄斧・砥石 炭化米・内行花文鏡片・石鎗・石錐・削器
土器・打製石器（石鏃・石鎗・石錐・掻器・石核）・磨製石器（石鏃・石剣 石庖丁・石鎌・石斧・砥石・磨石・紡錘車・円盤・石ノミ）・土製品（紡錘 車・投弾・円盤）・鉄製品（刀子）・木製品（鋤）
土器・石庖丁片
土器・打製・磨製石器
土器・石庖丁・石剣・石錐・石匕・石鏃・掻器・砥石・石斧 磨石・台石・紡錘車
土器・石剣・石庖丁・石斧・石鏃・石匕・掻器・砥石・敲石・磨石・紡錘車
土器・石庖丁・石斧・石ノミ・勾玉・石鏃・掻器・砥石・磨石・鉋・鉄斧 鉄鎌・手鎌・鉄鍬先・刀子・鉄鏃
土器・砥石・石斧・石ノミ・石鏃・石錐・磨石・手鎌・鋤先

表 4　井上薬師堂遺跡周辺の弥生時代遺跡一覧表

39	牟田々（A・B地点）	小郡市大字三国字牟田々	前末～中初	標高31～32m 台地	貯蔵穴20・円形住居址2・土壙2・溝3
40	三沢・古賀	小郡市大字三沢	前末～中前	25m	土壙墓・溝・袋状土壙
41	三国小学校	小郡市力武	前期～後期	20m	住居址3・円形周溝状遺構1 掘立柱建物1・貯蔵穴2
42	みくに保育所内	小郡市三沢	前期～後期	25m	住居址4・土壙4・貯蔵穴4
43	北内畑	小郡市大字三沢字北内畑	前～中初	30m	貯蔵穴9・土壙4
44	宮裏	小郡市字北内畑	前末～中期	丘陵　標高30～32m	住居址3・貯蔵穴18
45	三沢ゴルフ場第3地点	小郡市三沢	前期～中期	丘陵上 30～38m	甕棺墓多数
46	西中隈	小郡市三沢	前期（板付II式）	丘陵 標高29m	長方形竪穴5
47	正原	小郡市三沢 正原1910	中期前半	丘陵 標高39m	甕棺墓6
49	花聳	小郡市三沢字花聳	中期	45m	住居址2・甕棺墓
51	西島	小郡市三沢字花聳他	前期～中期	標高37m 丘陵	住居址8・土壙墓12・甕棺墓15・土壙42 箱式石棺墓1・方形周溝墓1・貯蔵穴2
53	大板井I区	小郡市大板井 391-1 他	中期前半～中期中葉	標高37m 丘陵	甕棺墓30・土壙墓4・住居址10 祭祀土壙18・溝1
53	大板井II区	小郡市大板井字野畑他	中期中葉～後期後半	標高37m 丘陵	住居址26・祭祀土壙14 方形周溝状遺構1
53	大板井III区	小郡市大板井	中期中葉	微高地12m	住居址4・祭祀土壙15
56	小郡正尻	小郡市小郡字正尻他	前期～終末期	微高地16m	住居址2・大溝・貯蔵穴
57	大崎小園	小郡市大崎字小園	中期末	微高地 11～12m	溝
58	八坂石塚I・II区上層	小郡市八坂1367他	中期末～終末	微高地7m	住居址2・土壙2
58	八坂石塚I・II区下層	小郡市八坂1367他	前期後葉～中期後葉	微高地7m	住居址4・土壙14
58	八坂石塚III区	小郡市八坂	後期初頭	微高地7m	土壙1

土器・石器（石庖丁・石鍬・磨石・砥石・スクレイパー・石斧・磨製石鏃）・紡錘車
土器
土器
土器・石鏃・石斧・方格規矩鏡片
土器・石鍬・掻器・石庖丁・石斧・紡錘車・投弾
土器・石器（石鏃・尖頭器・スクレイパー・石核・石庖丁・砥石・抉入石器・磨石）
土器
土器・石器（磨製石鍬・石斧・紡錘車）
土器
土器
土器・打製石器・磨製石器・鉄器
土器・石庖丁・磨製石剣・石斧・砥石・鉄鎌・筒形器台
土器・刀子・鉋・鉄鎌・投弾・鉄鏃・砥石・石庖丁・石剣・石斧・石鎌・石ノミ
土器・敲石・砥石・石斧・投弾・釣針
土器・石器・木製品
土器
土器
土器・砥石・石錘・石庖丁
土器

59	横隈鍋倉（よこくまなべくら）	小郡市横隈字鍋倉	前期後半～後期	40m	住居址42・竪穴1・貯蔵穴43

表 5　井上薬師堂遺跡周辺の古墳時代遺跡一覧表

3	井上北内原	小郡市井上北内原	6～7 c	丘陵端 17～19m	住居址9・掘立柱建物1・土壙1
4	下鶴古墳	小郡市干潟字下鶴		台　　地	円墳（竪穴式石室）
6	大師堂古墳	小郡市山隈花 立字東内畑		微　高　地	円墳
7	西下野古墳	小郡市山隈花 立字西下野		微　高　地	円墳
8	山隈遺跡	朝倉郡三輪町 大字山隈		台　　地	散布地
9	穴観音古墳	小郡市干潟字 城山		山　　麓	円墳（複室横穴式石室）
10	山隈窯跡	朝倉郡三輪町大字 山隈字城山		谷最奥部の 南斜面	初期須恵器窯跡 （2基以上の存在可能性大）
11	焼ノ峠古墳（やきのとおげ）	朝倉郡夜須町大字 四三島字 松尾～焼の山		尾　根　上	前方後方墳
12	焼野窯跡				散布地
13	松尾古墳群	朝倉郡夜須町大字 四三島字金葺原		尾　根　上	円形・方形周溝墓
14	小隈古墳	朝倉郡夜須町大字 下高場字小隈		丘　陵　上	円墳
15	小隈窯跡	朝倉郡夜須町大字 下高場字小隈		城山丘陵東側の谷最奥部の斜面	初期須恵器窯跡（4～5基現存）
18	七板F区	朝倉郡夜須町大字 東小田字七板	古墳後期	微　高　地	住居址7・溝4
22	津古内畑第1次	小郡市津古内畑	古墳後～終末	40m	住居址1・土壙墓8・小形石棺墓8
22	津古内畑第2次	小郡市津古内畑	古墳中～後	40m	住居址1・小形石棺墓3・溝2
22	津古内畑第3次	小郡市津古内畑	古　墳　後	40m	小形石棺墓3
22	津古内畑第4次	小郡市津古内畑	6C中～7C	40m	円墳・小形石棺墓2

土器・朝鮮系無文土器・朝鮮系磨製石剣・石鏃・砥石・ 掻器・石庖丁・磨石・石錐・石斧・石匕

土師器・須恵器・土玉・すり石・砥石
伝鉄刀
伝鉄刀
土師器・須恵器・土製模造鏡・鉇・鎌
土師器・鉄鏃
土師器・砥石
土師器・須恵器・金環・鉄片

表 6　井上薬師堂遺跡周辺の古墳時代遺跡一覧表

22	津古内畑第５次	小郡市津古内畑	６Ｃ後～７Ｃ	40m	円墳・土壙墓・小形石棺墓
24	津古内畑１号墳	小郡市津古内畑	６Ｃ後半	40m	円墳
24	津古内畑２号墳	小郡市津古内畑	６Ｃ後半	41m	円墳
25	津古生掛古墳	小　郡　市	古墳出現期	丘陵上 最高所51m	前方後円墳
27	三国の鼻１号墳	小　郡　市	４Ｃ後半	45m	前方後円墳
29	ハサコの宮古 墳群	小郡市三沢	６Ｃ中～後半	50m	古墳４＋α
31	横隈山２号墳	小郡市三沢		丘陵上47m	円墳
32	横隈狐塚Ｉ区	小郡市横隈字 狐塚365-１他	６Ｃ前後	独立丘陵上 35m	木棺墓
34	北牟田１号墳	小郡市三沢	古墳後期	30m	古墳
35	松尾口古墳群	小郡市三沢	６Ｃ後	60m	古墳７・横穴１
36	栗　　原	小郡市三沢字栗原	５Ｃ後半	丘陵上 30～40m	住居址２・円墳６・柱穴
37	三沢栗原Ｉ区	小郡市三沢字栗原	古墳前期	40m	住居址３
37	三沢栗原Ⅲ区	小郡市三沢字栗原	古墳初頭～ ６Ｃ後半	30～40m	住居址４
37	三沢栗原Ⅳ区	小郡市三沢字栗原	古墳初頭～ ６Ｃ後半	30～40m	住居址10
38	上　棚　田	小郡市三沢	古墳前期	丘陵標高30m	住居址２
43	北　内　畑	小郡市三沢 字北内畑	古墳前期	30m	住居址２
44	宮　　裏	小郡市三沢	古墳後期	丘陵　標高 27～30m	住居址10・竪穴１
45	三沢ゴルフ場 第３地点	小郡市三沢	５Ｃ後半～６Ｃ	丘陵上 30～38m	古墳
46	西　中　隈	小郡市三沢	６Ｃ前半～ ６Ｃ後半	丘陵　標高 30～32m	住居址４・溝２

土師器・須恵器・耳環
土師器・鉄刀・鉄鏃・鉄釘・耳環・勾玉・小玉
土師器・須恵器・鉄鏃・耳環
土師器（二重口縁壺・甕・器台・鉢・高杯）・鶏形土製品 方格規矩鏡・ガラス小五・鉄剣片・鉄鏃
二重口縁壺・鉄鏃・鉄剣・管玉・珠文鏡
土師器・須恵器・陶質土器・ガラス小玉
須恵器・鉄刀・鉄鏃・鉄轡・金銅製品
土師器・子持勾玉・臼玉・鉄鋤先
須恵器
土師器・須恵器・鉄製品（直刀・剣）・金製耳飾
土師器・須恵器・鉄斧・鉄刀子・滑石製紡錘車・臼玉
土師器・土製模造鏡・滑石製剣形品・手づくね土器
土師器・砥石・紡錘車・刀子・鉄鎌・鉄鏃
土師器・須恵器・陶質土器・石ノミ・石鏃・内行花文鏡片・鉄斧
土師器・須恵器・石器（石斧・石庖丁）
土師器
土師器・須恵器
須恵器
土師器・須恵器・手づくね土器

48	三沢(みつさわ)ゴルフ場 第7地点	小郡市三沢 ゴルフ場内	6C	丘陵上 30～40m	土壙墓1
49	花聳(はなそげ)1号墳	小郡市三沢字花聳			古墳
50	花聳(はなそげ)2号墳	小郡市三沢字花聳	5C	43m	円墳
54	向　築　地	小郡市大板井 字向築地 他	古墳終末	微高地15m	住居址4・溝・柱穴
57	大崎小園	小郡市大字大崎 字小園	古墳前～6C中	微高地 11～12m	住居址12・竪穴4・土壙16・溝4
58	八坂石塚Ⅰ・ Ⅱ区上層	小郡市八坂1367他	古墳前期～ 6C後葉	微高地7m	住居址4・土壙1・祭祀遺構
59	横隈鍋倉	小郡市横隈字鍋倉	6C中	40m	住居址14・掘立柱建物2

表 7　井上薬師堂遺跡周辺の歴史時代遺跡一覧表

2	井上(いのうえ)廃寺(はいじ)	小郡市井上			本　文　参　照
5	吹上(ふきあげ)・北畠(きたはた)	小郡市吹上北畠	奈良～平安	微　高　地	土壙2
16	干(ひ)　潟(がた)	小郡市干潟	7C中～8C	25m	住居址43・掘立柱建物23・土壙19
18	七板　F区	朝倉郡夜須町大字 東小田字七板	奈良～平安	24m	住居址2・土壙墓1・土壙1
20	峯	朝倉郡夜須町大字 東小田字峯	奈良終り～ 平安初	微高地南西 端22m	住居址1
22	津古内畑第1次	小郡市津古		40m	
22	津古内畑第2次	小郡市津古内畑	平安末～鎌倉	40m	溝
22	津古内畑第3次	小郡市津古内畑	平安末	40m	土壙墓・溝
22	津古内畑第5次	小郡市津古内畑	中　　世	40m	溝
23	津古東宮原	小郡市大字津古 字東宮原	8C中～後半	32m	住居址1
26	津古中剪(なかそげ)	小郡市津古	6C末～7C後 8C後～9C前	丘陵上 30～45m	火葬墓4・住居址・竪穴状遺構

須恵器・鉄刀
鉄鏃16・鉄刀子７・鋤先３・斧頭１
土師器・須恵器
土師器・須恵器・砥石
土師器・須恵器・石棒・すり石・砥石
土師器・須恵器・鉄鏃・刀子・石突状鉄製品・石斧
土師器・須恵器
土師器
土師器
土師器・青磁・白磁
土師器・鋳銅製鈴・瑞花双鳳稜鏡
土師器・青磁・白磁
土師器
土師器・須恵器・鉄器（鉈・鎌）・鏡片

表 8　井上薬師堂遺跡周辺の歴史時代遺跡一覧表

32	横隈狐塚Ⅰ区	小郡市横隈字狐塚	7 C中葉 8 C前半	独立丘陵上 標高35m	住居址 2 ・竪穴状遺構 2
32	横隈狐塚Ⅲ区	小郡市横隈字狐塚	7 C前半～ 9 C前半	独立丘陵上 標高35 m	住居址・竪穴状遺構・火葬墓
34	北　牟　田	小郡市三沢	15C	45～46m	古墳 5 基
36	栗　　原	小郡市三沢字栗原	奈良時代	丘陵上標高 30～40m	溝・包含層
37	三沢栗原Ⅲ区	小郡市三沢字栗原	奈良時代	30～40m	住居址 2
40	三沢古賀	小郡市三沢	14C	丘陵上 標高25m	土壙墓・竪穴状遺構
44	宮　　裏	小郡市三沢		丘陵30～32m	竪穴状遺構
45	三沢ゴルフ場 第 3 地点	小郡市三沢	平安時代	丘陵上標高 30～38m	包含層
51	西　　島	小郡市三沢字 花鎣他	中世		包含層
52	小郡官衙（かんが）	小郡市			本文参照
53	大板井Ⅰ区	小郡市大板井 391-1 他	奈良時代	微高地14m	住居址 6
53	大板井Ⅱ区	小郡市大板井 335-2 他	7 C前半～ 8 C前半	微高地13m	住居址15・土壙墓 1 （中世）
53	大板井Ⅲ区	小郡市大板井 339-1 他	8 C前半	微高地12m	住居址 3
53	大板井Ⅳ区	小郡市大板井字 後田386-1 他	12C前半	微高地14m	竪穴 1
54	向　築　地	小郡市大字大板井 字向築地他	7 C初～ 8 C初	微高地15m	住居址 1 ・掘立柱建物 5 ・柱穴群 溝 1 ・土壙16
55	前　　伏（まえ　ぶせ）	小郡市	奈良時代	微高地	住居址
56	小郡正尻	小郡市小郡字正尻	11C前半～中葉	微高地16m	井戸 2
59	横隈鍋倉	小郡市横隈字鍋倉	7 C終～ 8 C初	30～40m	住居址10

土師器（ヘラ書土器）・須恵器
青磁・宋～明銭
瓦片（軒平瓦・熨斗瓦・丸瓦・平瓦）
土師器・須恵器
土師器・青磁片
土師器・須恵器・瓦片
瓦片
須恵器・青磁片
土器
土師器・須恵器・すり石・砥石・鉄鏃・鉄斧
土師器・須恵器
土師器
土師器・須恵器
土師器・須恵器
土師器
土師器・須恵器・鉄刀子・鉄滓・不明鉄製品

表２～８ 文献一覧（番号は遺跡番号と対応する。）

3．小郡市教育委員会「井上北内原遺跡」小郡市文化財調査報告書第20集、1984年

4．福岡県教育委員会「福岡県遺跡等分布地図」(久留米市・小郡市・三井群編) 200117、1979年、文献27・151～152頁

5．小郡市教育委員会「みくに保育所内遺跡、吹上・北畠遺跡」小郡市文化財調査報告書第８集、1981年

6．文献４・200113

7．文献４・200114

8．福岡県教育委員会「福岡県遺跡等分布地図」(甘木市・朝倉郡編) 560391、1980年

9．文献４・200033

10．甘木市史編纂委員会「甘木市史資料考古編」1984年

11．夜須町教育委員会「福岡県城山遺跡群、昭和46年度（図版編)」昭和47年

13．文献11

14．文献８・530094～95

15．文献10

16．福岡県教育委員会「干潟遺跡Ｉ」福岡県文化財調査報告59集、1980年　第２次調査は、昭和53年12月上旬～翌年２月中旬迄実施。

17．井上俊男他「福岡県三井郡小郡町大字乙隈発見の二口の銅戈」九州考古学14、1962年

18．福岡県教育委員会「東小田遺跡群」福岡県文化財調査報告書第70集、1985年

19．夜須町教育委員会「夜須地区遺跡群Ｉ」夜須町文化財調査報告書第６集、1984年

20．中山平次郎「クリス形鉄剣及前漢鏡の新資料」考古学雑誌第17巻第７号、1927年、文献18

21．松本憲明「福岡県夜須町出土の銅矛鎔笵」考古学雑誌第52巻第２号、1966年

22．福岡県教育委員会「津古内畑遺跡第１、２、３、４次」1970～1973年

23．小郡市教育委員会「津古・東宮原遺跡」小郡市文化財調査報告書第18集、1983年

24．小郡町教育委員会「津古内畑遺跡第２次」1971年

25．福岡県教育委員会「津古内畑遺跡第３次（遺構編)」1972年

25．現地説明会資料による。1986年８月実施。

26．小郡市教育委員会「津古中剪遺跡」1986年

27．小郡市教育委員会「三国の鼻遺跡Ｉ」小郡市文化財調査報告書第25集、1985年

28．福岡県教育委員会「福岡県三沢所在遺跡調査概報」1971年

29．福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＩ」上巻、1979年

30．福岡県教育委員会「三沢蓬ケ浦遺跡」福岡県文化財調査報告書第66集、1984年

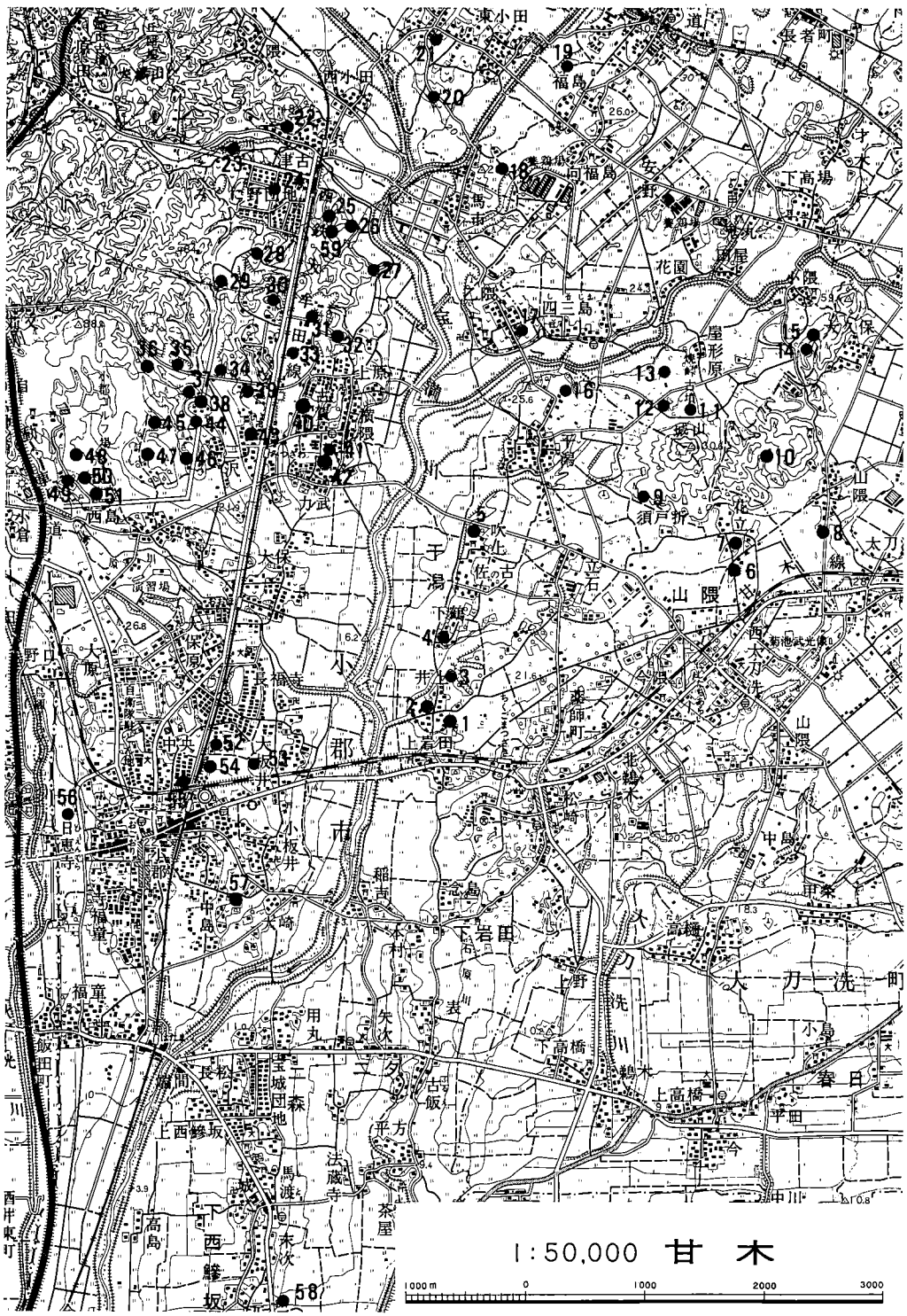
31．小郡市教育委員会「向築地遺跡」小郡市文化財調査報告書第５集、1978年

32．小郡市教育委員会「横隈狐塚遺跡」小郡市文化財調査報告書第17集、1983年

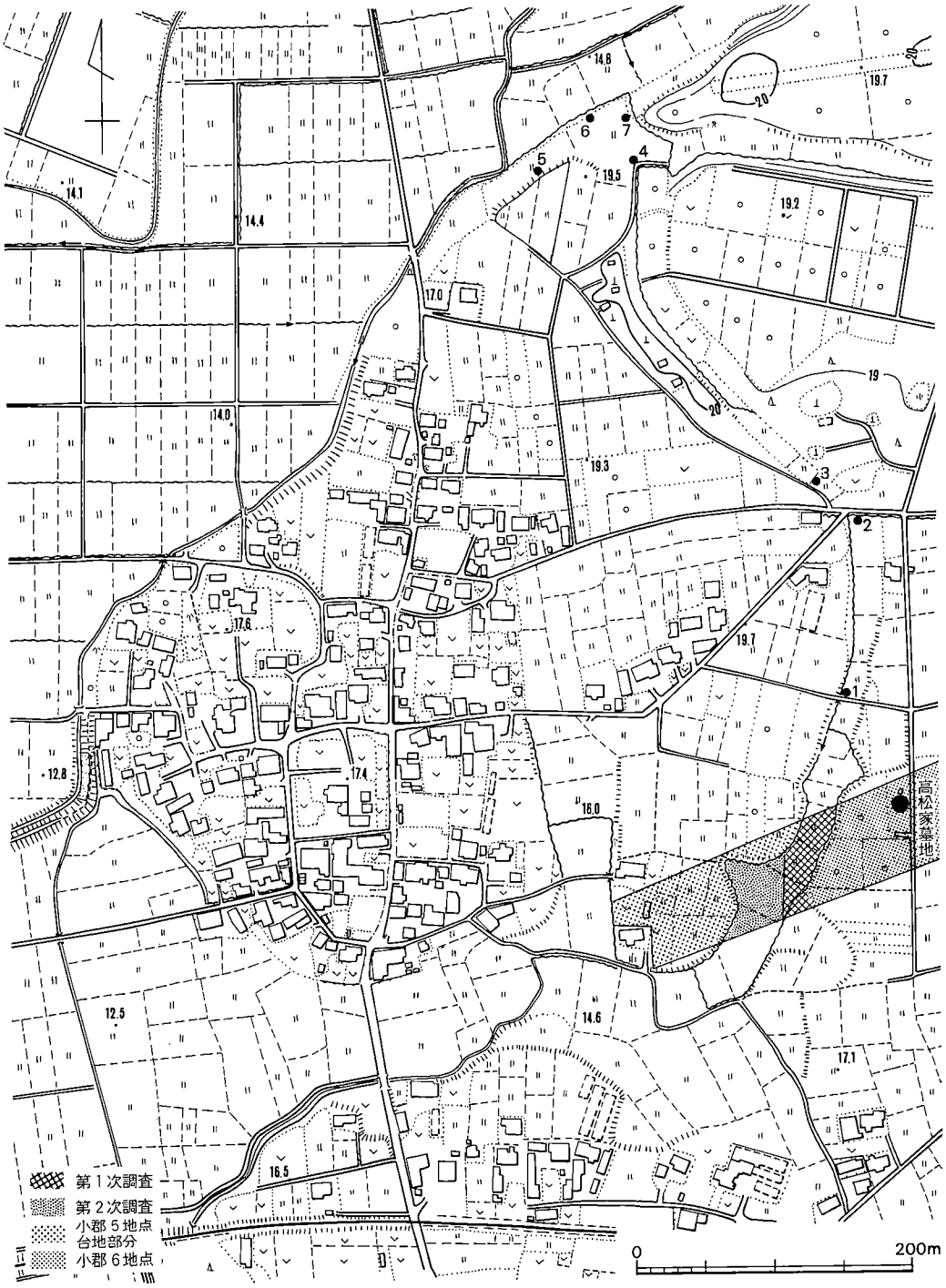
33．小郡市教育委員会「横隈山遺跡」1974年

34．文献29

35. 文献29
36. 文献31
37. 小郡市教育委員会「三沢栗原遺跡Ⅰ・Ⅱ」小郡市文化財調査報告第15集、1983年、同「三沢栗原遺跡Ⅲ・Ⅳ」小郡市文化財調査報告書第23集、1985年
38. 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ」1974年
39. 小郡市教育委員会「牟田々遺跡」1977年
40. 小郡市教育委員会「三沢・古賀遺跡」小郡市文化財調査報告書第12集、1982年
41. 小郡市教育委員会「三国小学校遺跡」小郡市文化財調査報告書第10集、1981年
42. 文献 5
43. 小郡市教育委員会「北内畑遺跡」小郡市文化財調査報告書第7集、1981年
44. 文献38
45. 文献31
46. 文献38
47. 文献29、中巻
48. 文献31
49. 文献31
50. 文献31
51. 文献31
52. 福岡県教育委員会「福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報1967・68・70」福岡県文化財調査報告書第49集、1971年
53. 小郡市教育委員会「大板井遺跡Ⅰ」小郡市文化財調査報告書第11集、1981年
    小郡市教育委員会「大板井遺跡Ⅱ」小郡市文化財調査報告書第14集、1982年
    小郡市教育委員会「大板井遺跡Ⅲ」小郡市文化財調査報告書第13集、1982年
    小郡市教育委員会「大板井遺跡Ⅳ」小郡市文化財調査報告書第22集、1984年
54. 文献31
55. 昭和60年2月　福岡県教育委員会が九州横断自動車道建設に伴って調査。
56. 福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告7」1986年、第2次調査を昭和59年5月14日～6月1日まで実施。
57. 小郡市教育委員会「大崎小園遺跡」小郡市文化財調査報告書第24集、1985年
58. 小郡市教育委員会「八坂石塚遺跡Ⅰ・Ⅱ」小郡市文化財調査報告書第19集、1983年、小郡市教育委員会「八坂石塚遺跡Ⅲ」小郡市文化財調査報告書第21集、1984年
59. 小郡市教育委員会「横隈鍋倉遺跡」小郡市文化財調査報告書第26集、1985年



第 2 図　井上薬師堂遺跡とその周辺遺跡分布図(縮尺 1/50,000)



第 3 図　井上薬師堂遺跡とその周辺の地形図（縮尺 1/5000）（●印ボーリング調査地点）

第２章　遺構と遺物

第１節　はじめに

大溝調査前、北東から南西に走る開析谷は、水田として利用されていた。字名では、谷が広がる南側地域を「蓮輪」と呼び、非常に水はけの悪い所であったようである。(これは、水田耕作土除去の際、一区画の水田周囲に、水はけを良くするために設けられた竹組みの存在からも看取できる。)

さて、現状の開析谷の規模は、調査区北側の幅約25m、南側の幅約20m、南北長約56mを測り、南側に広がる扇状を呈する（第３図)。

大溝の調査区は、真北にのる地区割り（10m×10m）をさらに細かい区割り５m×５mのグリッド（以後、Ｇと略称する）に設定した。その呼称方法は、西北角から南に向かって、１～69のアラビア数字で示した。(第４図）従って、遺物の取り上げもこの呼称方法を基本としている。(ここで明記せねばならないのは、各グリッドの遺物取上げ方法についてである。調査前半は、出土遺物のグリッド、土層が把握できていたが、後半になり、調査日程の切迫と、掘削進行に従っての湧水の増加で、作業が泥沼状態で進行するにつれ、遺物の出土位置が正確にとらえられなくなった点が挙げられる。これは、ひとえに調査担当者の力量不足によるもので、深く反省している。)（図版４）

その他の遺構としては、調査区南側、大溝東肩部付近で検出された土器溜りがある。また、遺構ではないが、大溝内には木製品集中区（図版９、第６図）がみられた。

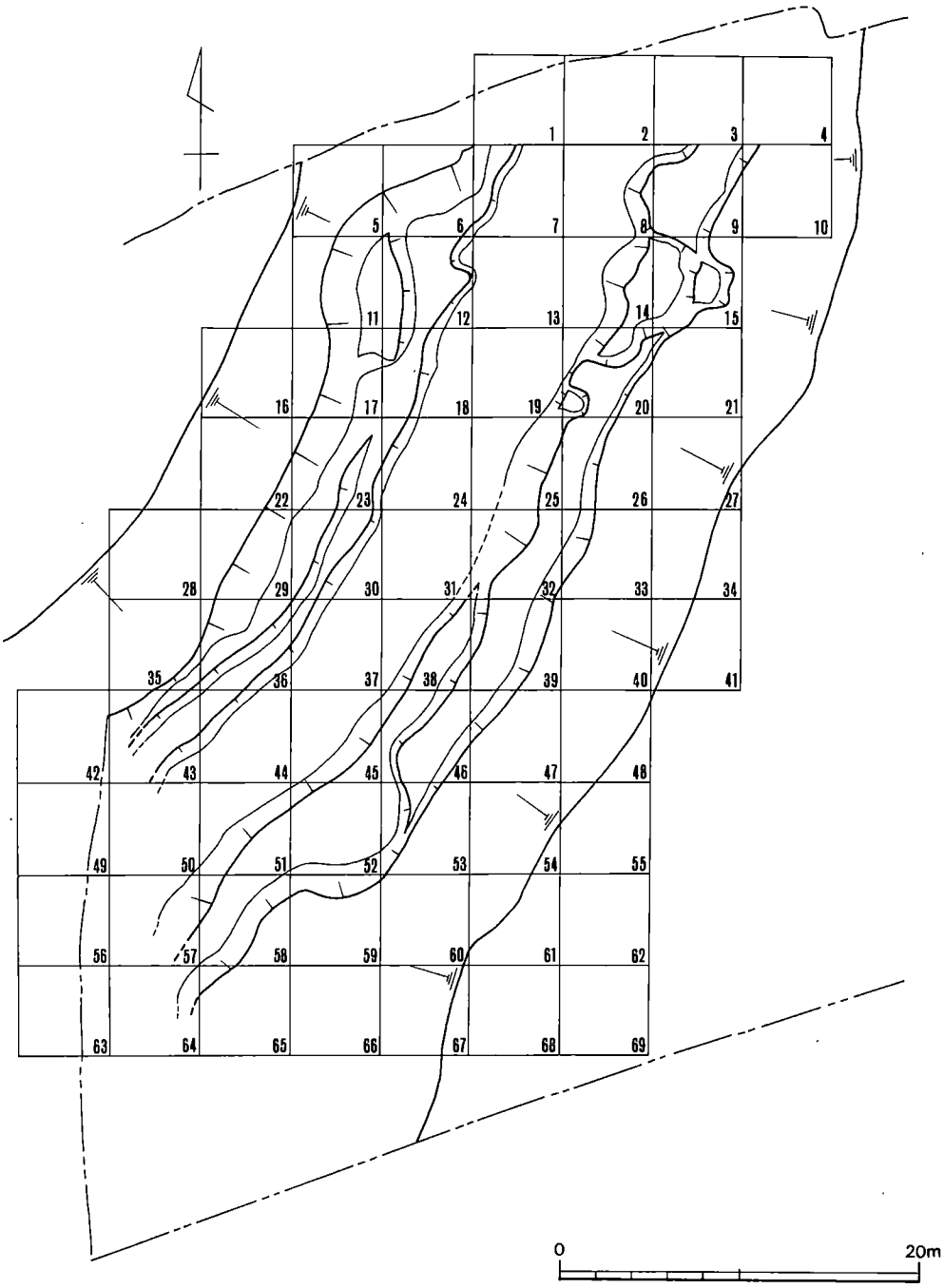
第２節　遺構と遺物

１．遺　構（第５図）

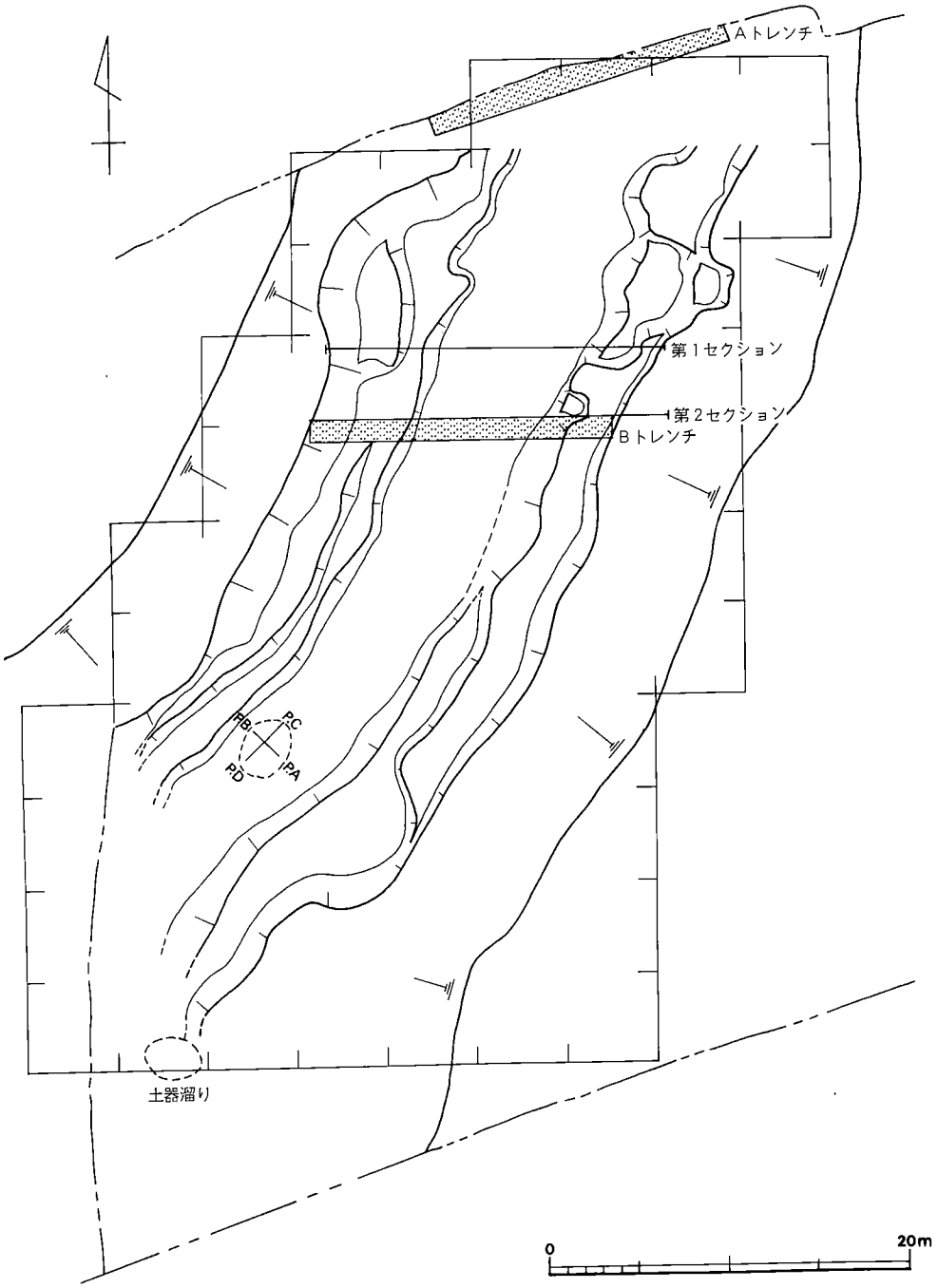
ａ．大溝（図版７・８、第５図）

弥生時代後期から奈良時代にかけての大量の土器、木製品、そして、瓦（山田寺系重弁八弁蓮華文棰先瓦、軒丸瓦、軒平瓦)、木簡、墨書・ヘラ書土器、刻骨などを包含する大溝で、東西の台地に挟まれた開析谷を北東から南西へ若干の入り込みをもちながらも、ほぼ直線的にのびている（Ｎ－24°－Ｅ)。

調査は、発掘区北側にＡトレンチ、中央にＢトレンチを設け、流路位置と堆積層の確認から



第 4 図　グリッド配置図（縮尺 1/400，グリッドの縦線は真北を示す。）



第 5 図　井上薬師堂遺跡遺構配置図（縮尺 1/400）

入った。

その結果、この谷は扇状台地裾部に立地するため、地下水位が高く、木器、動・植物遺存体が良好な保存状態にある大溝であったと判断された。しかし、内部の堆積状況は、小溝の氾濫と穏やかな水流、そして滞水を頻繁に繰り返し、複雑な状態にあることが認められた。

また、現水田面から1m程を重機で除去して大溝の東西肩部を検出すると、現在の東西台地から斜めに下って（比高差1.1～2m）、幅5m程の平坦面を作ってから、大溝肩部に達することがわかった。

そして、大溝の最終掘削時の測定値を調査区北側、中央、南側で計ってみると以下のようになった。

1．大溝検出上面の幅　16m（北側）、18.4m（中央）、21m（南側）

2．大溝溝底の幅　7m（北側）、6m（中央）、5.2m（南側）

3．大溝溝底の深さ　13.655m（北側）、13.636m（中央）、13.50m（南側）

なお、溝の下降度は、北側を0とした場合、南側で－1.55mであり、1°弱南側へ傾斜していることが認められる。

土層観察は先述したAトレンチ、Bトレンチ北壁での観察の他に、各グリッドでも行なっている。大溝の下部層が砂質土で、湧水のため崩落をおこし、Aトレンチ、第2セクションでは最下層までの土層図完成をみなかった。そこで、以下、まず、最下層まで図示し得たBトレンチ北壁の土層を挙げ、大溝内堆積の状況を説明し、次に、Aトレンチ、第2セクションの土層図と対照してみたい。さらに、第1セクション（G12、13北壁）の土層図を示し、大溝における人為的な開削の過程を説明していく。

Bトレンチ北壁（図版5～6、第9図）

Bトレンチ北壁は、現水田の耕作土、床土を除去した状態から観察を進めた。

第2セクション南側、約4mにある。

大溝が埋没していく過程で、計8条の小溝の存在をみた。それぞれを溝1、溝2として説明する。堆積状況を上からみていくと、

1層耕作土（明灰黒色粘質土、あまり粘質がない。20～35cm。）、2層床土（明灰褐色粘質土、40cm。鉄分、マンガンの含有の仕方で二層に分層可能。）の下に、大溝の機能を終息させた三層がある。

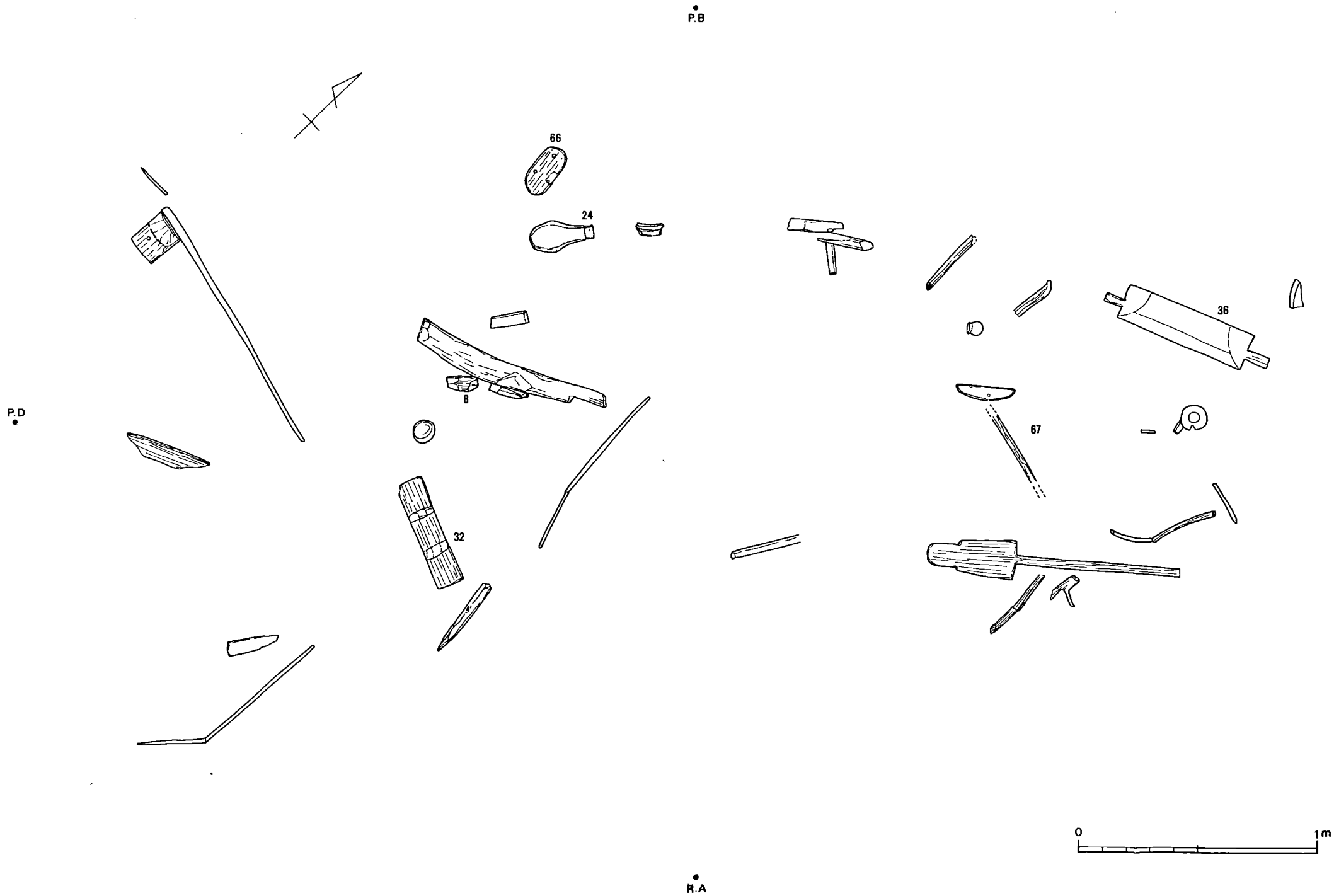
3層灰茶色粘質土　鉄分、マンガンを多く含み、赤味が強い。砂粒を含む。

4層灰黒色粘質土　鉄分、マンガンが縞状に入る。粘性は強く、1～2mm程の砂粒を含む。

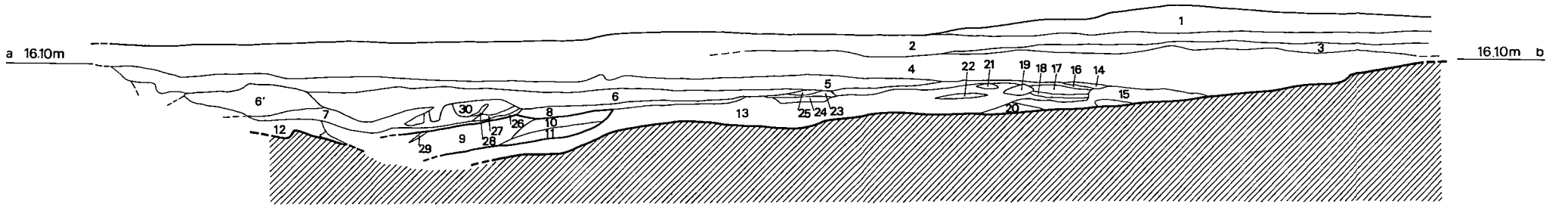
5層茶黒色粘質土　鉄分、マンガンを含む。粘性が強く、植物遺存体を含む。

そして、この下に、8条の溝がみられる。

溝1

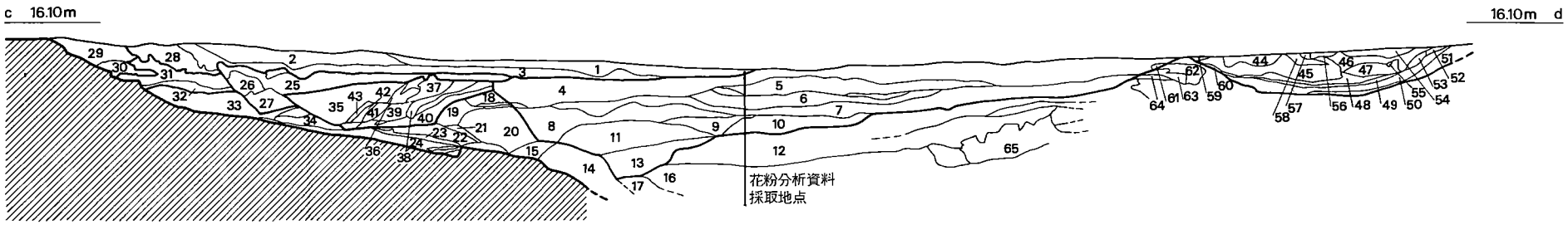


第 6 図　木製品集中区実測図（縮尺 1/20）



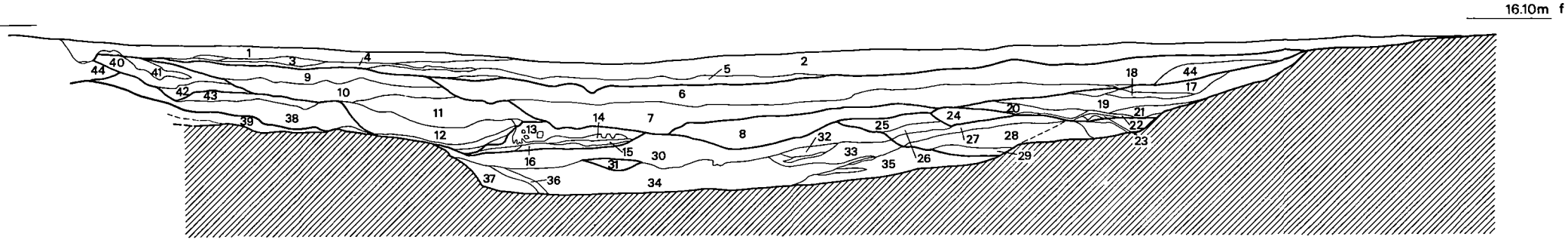
1．明灰黒色粘質土　粘性弱，水田耕作土。
2．明灰褐色粘質土　マンガン・鉄分が目立つ。粘性弱く，サラサラとする。床土。
3．明茶褐色粘質土　2層より粘性強。マンガン・鉄分の含有が多い。1～2mm程の砂粒を含む。床土。
4．灰茶色粘質土　赤味が強い。マンガン・鉄分が目立つ。粘性弱。3～4mm程の砂粒を含む。Bトレンチ1層，第1セクション1層，第2セクション2層と同一層。
5．灰黒色粘質土　粘性強。1～2mm程の砂粒を含む。マンガン，鉄分が縞状に入る。土器片を含む。Bトレンチ2層，第1セクション2層，第2セクション1層と同一層。
6．茶黒色粘質土　粘性強。2～3mm程の砂粒を含む。マンガン・鉄分を含む。植物遺体，土器片が目立つ。Bトレンチ5層，第1セクション4層，第2セクション3層と同一層。
6′．6層よりやや明るく　砂分が多い。
7．青灰色粘質土　粘性強。
8．淡灰黒色粘質土　植物遺体を多量に含む。6層より暗い。
9．暗茶黒色粘質土。
10．淡黒灰色粘質土。
11．淡黒色粘質土。
12．茶褐色砂質土。
13．暗灰黒色砂質土。
14．灰黒色砂質土　やや粘性がある。
15．灰茶褐色砂質土。
16．淡灰黒色砂質土　砂分多。
17．暗灰黒色粘質土　炭化物を含む。
18．灰色砂層　マンガン・鉄分がみられる。
19．灰茶褐色砂質土　マンガン・鉄分が層の周囲を膜状におおう。
20．暗灰色砂層
21．19層と同一層。
22．19層と同一層
23．黄灰色砂質土　粗砂を含む。マンガン・鉄分がみられる。
24．灰黒色砂質土。
25．淡茶黒色粘質土。
26．青灰色砂質土　砂分多。
27．淡灰色粘質土。
28．灰黄色砂層。
29．青灰色粘質土。
30．暗灰黒色粘質土。

第 7 図　Aトレンチ北壁土層断面実測図（縮尺 1/80）



1．灰黒色粘質土　Aトレンチ5層，Bトレンチ2層，第1セクション2層と同一層。
2．灰茶色粘質土　マンガン，鉄が斑文状に入る。2mm程の砂粒を含む。Aトレンチ4層，Bトレンチ1層，第1セクション1層と同一層。
3．茶黒色粘質土　粘性強，植物遺体を多量に含む。Aトレンチ6層，Bトレンチ5層，第1セクション4層と同一層。
4．暗灰黒色粘質土①　砂分が多い。Aトレンチ9層，Bトレンチ6層，第1セクション5層と同一層。
5．暗灰黒色砂質土①　やや砂粒が大きい。
6．暗灰黒色粘質土②　砂粒が細かい。
7．暗灰黒色砂礫層　部分的に砂礫の大きさが異なるが，径3cm程の礫もみられる。
8．暗灰黒色粘質土③　10層に比べ砂分が多い。
9．暗灰黒色粘質土④　10層とほぼ似るが，やや砂分が多い。
10．暗灰黒色粘質土⑤　砂分が多い。
11．暗灰黒色砂質土②　2～3cmの砂礫を含む。
12．暗灰黒色粘質土⑥　粘性強。下層に木製品が集中する。
13．暗灰黒色砂質土③　11層に比べ暗い。
14．暗灰黒色砂質土④　11，13，17層に比べ砂分が多い。
15．暗黒色粘質土。
16．暗灰黒色粘質土　粘性強。
17．暗灰黒色砂質土⑤　やや粘性をおびる。
18．4層とほぼ似る。
19．暗灰色砂層　38層に比べ暗い。斑文状に黒色粘質土がみられる。
20．暗灰黒色粘質土⑦　砂分がとても多い。
21．19層とほぼ似る。
22．19層で似るがやや暗い。
23．黒褐色粘質土　極めて粘性強。
24．灰色砂層。
25．明灰色砂質土　マンガン，鉄分の含有が多い。1～2cmの砂礫を含む。
26．明灰色砂質土　マンガン，鉄分が斑文状に入る。2mm程の砂粒を含む。
27．26層にほぼ似るが，やや粘性がある。
28．暗灰色砂質土。
29．暗茶灰色粘質土　3～4cmの礫を含む。炭，土器片を含む。
30．暗灰色粘質土。
31．茶褐色粘質土　Bトレンチ40，42層，第1セクション3，8層と同一層。
32．暗茶褐色粘質土　Bトレンチ38，43層，第1セクション9，11，12層と同一層。
33．暗灰黒色粘土　粘性強。
34．黒色粘土。
35．暗灰色粘質土　粘性強だが，下に行くに従い破分が多くなる。
36．灰青色粘質土　西に行くに従い暗くなる。
37．黒色粘質土　粘性強。植物遺体を含む。
38．灰色砂層　1～2cmの細礫を含む。
39．37層とほぼ似るが，やや暗い。
40．淡灰色砂層　38層よりやや明るい。
41．明灰黄色砂層　部分的に黄色粘質土ブロックが入る。
42．黒色砂質土　やや粘性がある。
43．暗灰黒色砂質土　1mm程の砂粒を含む。
44．茶灰色粘質土　部分的に赤茶色粘質土を含む。粘性強。
45．黒色粘質土　細礫，土器片を含む。部分的に赤茶色粘質土を含む。
46．暗灰褐色粘質土
47．45層とほぼ似る。
48．青灰色粘質土　粘性強。
49．燈色粘質土　粘性強。
50．44層とほぼ似る。
51．茶灰色砂質土　粗砂を含む。
52．暗茶褐色粘質土　やや粘性あり。
53．茶褐色砂質土　2～3mmの細礫を含む。
54．灰色砂質土　粗砂を含む。
55．灰褐色砂質土　3～5mmの細礫を含む。
56．55層と同一層。
57．暗灰色粘質土　粘性弱
58．44層と同一層
59．44層と同一層。
60．灰色粘質土　粘性弱
61．44層とほぼ似る。
62．茶褐色砂質土　粗砂を含む。
63．暗灰色粘質土　粘性弱。62層と一部混在する。
64．62層とほぼ似る。
65．青灰色粘質土　小ブロックを多数含む。

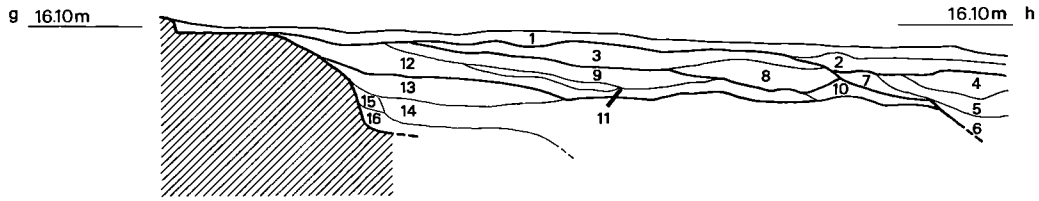
第 8 図　第2セクション北壁土層断面実測図（縮尺 1/80）



1．灰茶色粘質土　マンガン・鉄分を多く含み，赤味が強い。砂分多。Aトレンチ4層，第1セクション1層，第2セクション2層と同一層。
2．灰黒色粘質土　Aトレンチ5層，第1セクション2層，第2セクション1層と同一層。
3．1層と似るが，やや砂粒が多い。
4．黒茶色粘質土　粘性強。植物遺体を多量に含む。
5．茶黒色粘質土　Aトレンチ6層，第1セクション4層，第2セクション3層と同一層。
6．暗灰黒色粘質土①　Aトレンチ9層，第1セクション5層，第2セクション4層と同一層。砂分多。
7．暗灰黒色砂質土①
8．暗灰黒色粘質土②　粘性強。砂分少。
9．暗灰茶色粘質土①　粘性強。
10．暗灰茶色粘質土②　9層より粘性強。西に行くに従い，粘性が弱くなる。
11．暗灰黒色砂質土②　7層より砂粒が目立ち，1～2㎝の細礫が多い。
12．暗灰黒色砂質土③　砂分多，2～3㎝の細礫を含む。
13．12層にほぼ似る。
14．暗灰色粘土。
15．淡黒色粘質土①砂分多。
16．15層より明るく，青灰色粘土ブロックを含む。
17．淡黒灰色砂質土　灰青色粘質土のブロックは含まない。
18．茶黒色砂質土　植物遺体が目立つ。
19．暗灰色砂質土　砂分多，部分的に青灰色粘質土ブロックを含む。
20．暗灰青色粘質土　部分的に灰黒色粘質土が入る。
21．青灰色粘質土。
22．明黄色砂質土。
23．灰黒色粘土。
24．暗灰色砂層。粗砂を含み，部分的には1㎝程の細礫を含む。
25．19層と似るが，砂分少なく，粘性強。
26．19層と似るが，砂分少なく，粘性強。25層よりは粘性弱。
27．19層に似るが，やや暗い。
28．19層に似る。東に行くに従い暗くなる。植物遺体が目立つ。
29．灰黒色砂層　灰黒色粘質土をブロック状に含む。
30．暗灰黒色粘質土③　粘性強。木製品が集中してみられる。
31．灰色砂層
32．灰色砂層
33．暗灰黒色砂質土④　植物遺体を多量に含む。
34．暗黒茶色粘土　非常にきめ細かい。
35．暗黒灰色粘質土　やや砂分を含み，植物遺体や炭化物がみられる。
36．暗灰黒色砂質土⑤　1～2㎝の細礫を含む。
37．暗灰黒色砂質土⑥　砂分少。炭化物を含む。
38．暗黒色粘質土　粘性強。第1セクション9，11，12層，第2セクション32層と同一層。
39．38層に似るが，やや明るく，砂粒を多く含む。
40．暗灰褐色粘質土　地山の黄褐色砂質土が多く含まれ，土器片が目立つ。炭化物もみられる。第1セクション3層，第2セクション31層と同一層。
41．淡灰茶色粘質土　土器片を含む。
42．淡灰褐色粘質土　40層より明るく，灰色が強い。地山の黄褐色砂質土の砂粒を含む。炭化物がみられる。第1セクション8層，第2セクション31層と同一層。
43．暗黒灰色粘質土　炭化物多量に含む。粘性強。土器片を多量に含む。第1セクション9，11，12層，第2セクション32層と同一層。
44．灰褐色砂質土　ヘラ書土器「黒豆女」出土層。
45．淡黒茶色粘質土　マンガン・鉄分が縞状に入る。土器片の含有はない。

0　5m

第 9 図　Bトレンチ北壁土層断面実測図（縮尺 1/80）



1．灰茶色粘質土　白色砂粒を多く含む。Aトレンチ4層，Bトレンチ1層，第2セクション2層と同一層。
2．灰黒色粘質土　砂分多。Aトレンチ5層，Bトレンチ2層，第2セクション1層と同一層。
3．茶褐色粘質土　細砂多。マンガンを含む。土器片を含む。Bトレンチ40層，第2セクション31層と同一層。
4．茶黒色粘質土　粗砂多。Aトレンチ6層，Bトレンチ5層，第2セクション3層と同一層
5．暗灰黒色砂質土①　細砂を含む。Aトレンチ9層，Bトレンチ6層，第2セクション4層と同一層。
6．暗灰黒色砂質土②　5よりさらに細かい砂粒を含む。
7．淡灰黒色砂土　粗砂，1㎝大の小礫を部分的に含む。
8．暗茶褐色粘質土①　3層より細砂多。マンガンの沈澱顕著。
9．暗茶褐色粘質土②　きめ細かい砂粒を含む。暗灰黒色砂（炭混じり）を大量に含む。土器片有。
10．暗茶褐色粘質土③　きめ細かい砂粒を含む。土器片を含む。
11．暗茶褐色粘質土④　9層と似るが，暗灰黒色砂が混じらない。粘性強。土器片を少量含む。
12．暗灰黒色粘質土①　砂分多。マンガンを含む。
13．暗灰黒色粘質土②　12層より砂分少。きめ細かい砂粒を含む。マンガンを含む。
14．濃黒灰色粘土　混じり気が少ない。
15．暗黄色粘土　地山層崩落土。黒色粘土をブロックで含む。
16．明青灰色砂質土　きめが細かい。

0　5m

第 10 図　第1セクション北壁土層断面実測図（縮尺 1/80）

幅6.2m、深さ0.42mを測り、断面はレンズ状を呈する。切込み面は、溝2の9層暗灰茶色粘質土①と溝5の暗灰色砂質土である。

埋土は、三層ある。上から6層暗灰黒色粘質土、7層暗灰黒色砂質土①、8層暗灰黒色粘質土②(①よりも粘性弱)で、暗灰黒色砂質土①の下面には、木製品が集中していた(この層が南北に伸びていて、南・北側で検出できた木製品集中区にあたる。14.342～14.890mに位置する)。ほとんど流水はなく滞水状態でゆっくりと埋没していったようである。

溝2

東肩は溝1により切られる。残存幅1.98m、深さ0.44mを測り、断面は2段掘りの逆台形を呈する。切込み面は、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器包含層である。

埋土は、9層暗灰茶色粘質土②、10層暗灰茶色粘質土③（②より粘性強)、11層灰黒色砂質土②、12層暗灰黒色砂質土③(②より砂分多、2～3㎜の砂粒を含む)である。この溝も流水はなく澱みの状態を呈していたと思われる。

溝3

溝1、2に切られる。残存幅1.45m、深さ0.17mを測り、断面レンズ状のようである。切込み面は不明であるが、溝8を切っていることは確かである。

堆積状態はかなり乱れていて、澱みの中にブロック状の粘土が入りこんだことがわかる。

埋土は、上から13層暗灰黒色砂質土、14層暗灰色粘土、15層淡黒色粘質土①、16層淡黒色粘質土②（①より明るく、青灰色粘土ブロックを含む）である。

溝4

溝1に切られる。残存幅2.5m、深0.34mを測り、断面レンズ状を呈する。切込み面は、溝5の24層暗灰色砂層と大溝の東肩部である。

埋土は、上から17層淡黒灰色砂質土、18層茶黒色砂質土（植物遺存体を含む)、19層暗灰色砂質土（部分的に青灰色粘土ブロックを含む)、20層暗灰青色粘質土（部分的に灰黒色粘質土が入る)、21層青灰色粘質土、22層明黄色砂質土、23層灰黒色粘土である。

溝4も、水流を認めることができず、澱みの状態であったと思われる。

溝5

溝1、4に切られる。残存幅0.6m、深0.14mを測り、断面鈍角なV字状を呈する。切込み面は、溝6の25層暗灰色砂質土である。

埋土は24層暗灰色砂層（木炭片含む）の一層で、一時期の流れで埋没している。

溝6

溝1、4、5に切られる。残存幅2.22m、深0.37mを測り、二段掘りの逆台形を呈する。切込み面は、西側で溝8の30層暗灰黒色粘質土③、東側では不明となる。

埋土は、上から、25層暗灰色砂質土①、26層暗灰色砂質土②（①のほうが粘性強)、27層暗灰

色砂質土③（③のほうが砂分多）、28層暗灰色砂質土④（③より暗い）、29層灰黒色砂層である。

溝6は、一時期の水流が認められる29層の堆積があるが、それ以後は、滞水状態で、水平堆積を連続したと思われる。

溝7

溝8堆積時の一時期に流れ、埋没した溝である。幅0.42m、深さ0.15mを測り、断面レンズ状を呈する。

埋土は、31層灰色砂層のみである。

溝8

大溝埋没開始時の溝である。残存幅4m、深さ0.41mを測り、二段掘の逆台形を呈する。

埋土は、上から30層暗灰黒色粘質土③、33層暗灰黒色砂質土④（③より粘性強、木炭片を含む）、32灰色砂層、34層暗黒茶色粘土、35層暗黒灰色粘質土（やや砂分を有し、植物遺存体を含む）、36層暗灰黒色砂質土⑤、37層暗灰黒色砂質土⑥（⑤より砂粒多）である。溝8の37層下面は、平坦面をなす。

さて、30層の下面には木製品が集中し、レベルからみて、南北側の木製品集中区下層にあたると思われる。（下層の木製品は、13.803m～14.290mに位置する。）

溝8は、一時期溝7の水流をもつが、ほとんど滞水状態のまま澱んで、水平堆積を重ねていったようである。

こうしてみてくると、大溝の埋没過程は、溝8条の存在が示すように、変化に富みつつも滞水状態で進行したことが看取できる。しかし、これらの溝に関しては、杭列や樋等の施設が調査時に確認できなかったので、大溝に関しては、人為的開削作業はなかったと思われる。

ところで、大溝の人為的開削問題とは、直接結びつかないが、西岸肩部下辺の土器包含層の存在は注目に値する。というのは、この包含層の土器は、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのものであり、西側台地にある住居址の土器と同時期になる。しかも、溝8の30層と等しい39層の上にのり、かつ大溝埋没時の3～5層の下にある。このことは、ある時期に土器が西側台地から大溝へ転落したことも考えられるが、この包含層の広がりが南北の大溝西肩部に伸びていることから、他の要因も考えねはならないと思われる。このことについては、第1セクションの土層観察を含めて検討してみたい。

Aトレンチ（第7図）

Aトレンチは、調査区北端に設定され、北壁の土壁の土層を観察した。北側からの湧水が多量で、土砂の崩落をまねき、現水田面から1.5m程しか実測できなかった。

Bトレンチ北壁と対照してみていくと、

①Aトレンチ5層－Bトレンチ2層

②Aトレンチ6層－Bトレンチ5層

③Aトレンチ8～11層形成の溝－Bトレンチ溝1
となる。

第2セクション（第8図）

第2セクションも湧水や大雨のための冠水等で崩落を生じ、最下層までの実測が出来なかった。

堆積状況はかなり複雑であるが、Bトレンチと対照してみると、

①第2セクション4～11層－Bトレンチ溝1
②第2セクション35～43層－Bトレンチ溝2
③第2セクション31層－Bトレンチ40～42層
④第2セクション32層－Bトレンチ38、43層となる。

また、第2セクション44～60層は、溝にはならず、落ち込みの澱みである。

尚、第2セクションでは、垂直方向に17ヵ所で、花粉分析用の土壌採取を行なった。（図版97、第57図、その結果については、第3章参照の事）

第1セクション（図版、第10図）

まず、Bトレンチと対照してみると、

①第1セクション1層－Bトレンチ1層
②第1セクション2層－Bトレンチ2層
③第1セクション3層－Bトレンチ40層
④第1セクション9、11、12層－Bトレンチ43層
⑤第1セクション4～7層－Bトレンチ溝1
⑥第1セクション13層－Bトレンチ39層となる。

さて、先述した弥生時代後期～古墳時代初頭の土器包含層は、第1セクションでも、Bトレンチ溝8の30層と等しい13層上にのり、大溝埋没時の灰茶色粘質土で覆われる。これは、第2セクションでも見られた。また、この包含層には、地山層の花崗岩バイラン土を多量に含む。

大溝内から出土する土器は、6世紀中頃から8世紀後半代までのもので、その中心は7世紀後半から8世紀前半に属する。この事実から土器包含層の形成は、西側台地にある同時期の住居址に居住していた人々が投棄して堆積したのではなく、6世紀中頃以降の大溝埋没過程の中で、人為的な開削工事や自然の洪水等による両側台地の崩壊によって堆積したものと考えるのが穏当と言える。さらに、大溝内の堆積を再度検討する時、洪水等による急激な水流は全く認められず、ゆっくりとした流れと滞水状態を繰り返していたことから、この土器包含層の形成は、台地部分の人為的開削工事によると考えるのが、より蓋然性が高いことがわかる。

そうした場合、この人為的開削工事は、大溝東、西肩から5m程の幅であるテラス状の広がりと関係をもつと思われる。今回の調査では、水田址を示す井樞、畦畔や足跡痕の存在は認め

られなかったものの、典型的な湿田形態をもつ水田の存在は十分に考えられる。従って、これは、あくまでも推測の域を出ないが、大溝埋没過程の最終段階（8世紀後半）以前に大規模な土木工事を実施し、水田面積の拡大を図った折、西側台地に存在した弥生時代後期から古墳時代初頭の住居址が破壊され、大溝内にそれらの土器が堆積したとも考えられる。

b．その他の遺構（第5図）

土器溜りがある。調査地南側G64南に位置し、大溝西肩部上方から東側台地下のテラスに、南北長2.4m、東西幅3mの範囲で多量の土師器、須恵器が出土した。土壙状の掘りこみはない。大溝内に含まれないために、その堆積過程については不明である。しかし、東側台地開削時の一括投棄又は流れ込みと考えられる。墨書土器等文字資料が多いなど祭祀的様相も窺える。

2．遺　物

大溝からは、土師器、須恵器の土器類、墨書・ヘラ描土器、木製品、瓦、木簡、刻骨、動物遺存体などが検出された。また、土器溜りでは、土師器、須恵器の土器類が検出された。

以下、土器類から説明していく。

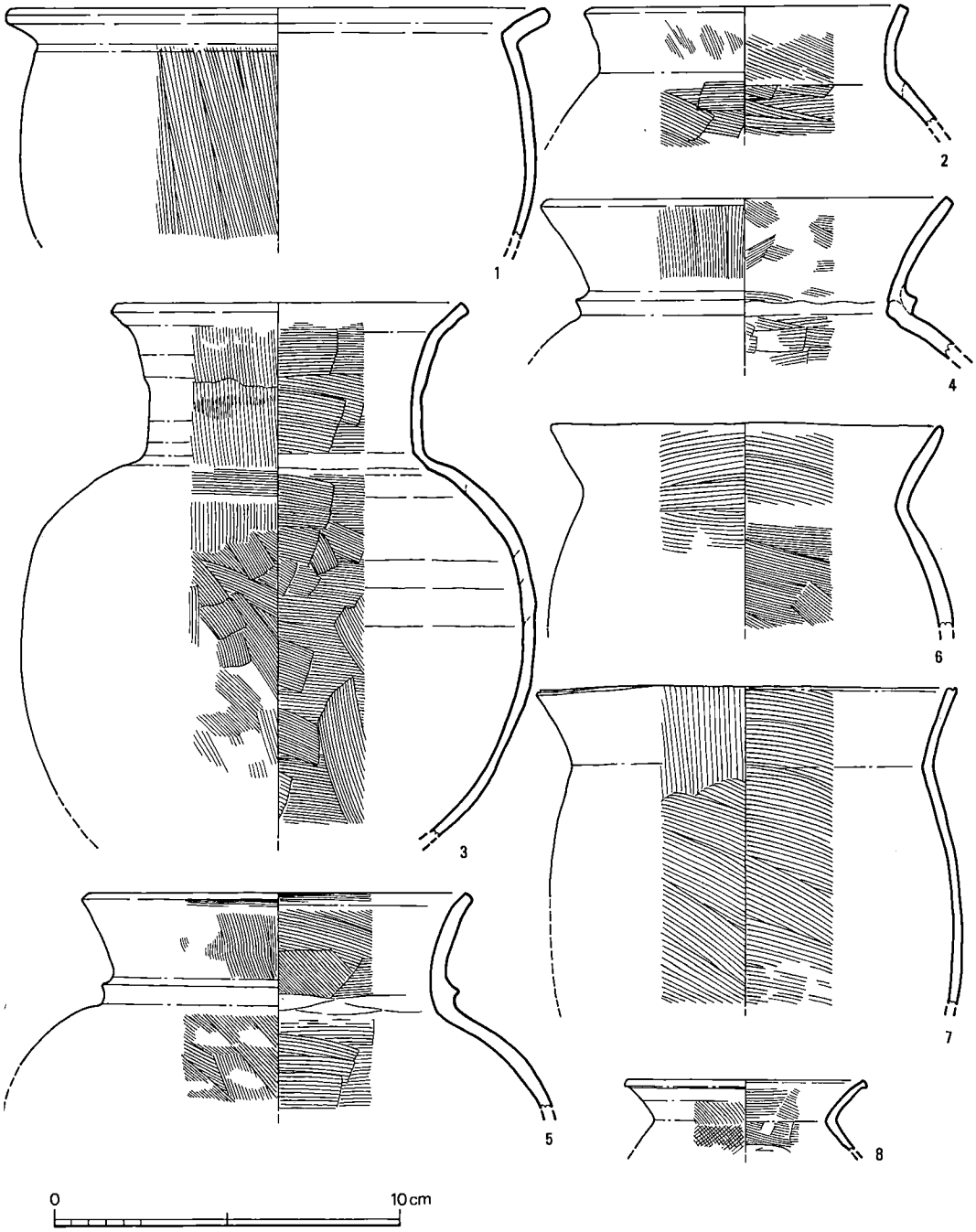
a．土器（図版38～45、第11～19図）

大溝から多数の木製品とともに大量の土器が出土しているが、今回はその一部を、大溝西岸に一括して廃棄された土器群、大溝堆積層出土土器、大溝東岸に一括して廃棄された土器群に分けて報告する。

大溝西岸土器群（図版38、第11図）

これら土器群は、井上薬師堂遺跡（第5地点）東台地際に堆積していた土器群で、層位的に大溝内堆積層上位より出土し、大溝がある程度埋没した時点に、東台地を削平し大溝を拡げた時に出土した土器を大溝に廃棄したものと思われる。したがって大溝の埋没過程を示すものではないが、東台地に存在したであろう遺構の年代を知る資料となる。

甕（1、6～8）　1の口縁はくの字に外反し、胴部に比べ肥厚する。内面屈曲部に稜がみられ、外面頸部上凹線・沈線を引き、胴部に縦位のハケ目調整を施す。口径30.5cm。6の口縁は緩やかに外反し、端部は丸くおさまる。外面は口唇下より頸部下まで横位ハケ目が残り、以下はナデ消される。内面は口縁部に横位、頸部以下に斜位ハケ目が施される。口径22.0cm。7の



第 11 図　大溝西岸土器群出土土器実測図（縮尺 1/4）

口縁は直線的にやや外反し、胴部は長目にのびる。外面口縁から頸部下まで縦位、さらにそれ重ねるように斜位のハケ目を全面に残す。内面は口縁から胴部まで斜位のハケ目を施す。口径23.4cm、残存高18cm。8の口縁はくの字状に外反する。外面は頸部以下に平行叩きを施し、それと交叉するようにハケ目を施す。頸部から上位にも斜位のハケ目が残る。口縁内面は横位ハケ目を施し頸部以下をヘラ削りによって器壁を薄くする。外面に煤の付着が著しい。口径13.3cm。

壺（3～5）　3の口縁は頸部より直口気味に立ち上りながら外反する。口唇端部は平坦面をなす。胴部は丸く脹む。口縁外面は縦位、頸部に横位、胴部は斜位各方向にハケ目を施す。内面に横位ハケ目が施されるが頸部はナデ消される。口径19.8cm・残存高30.0cm。4、5は口縁はくの字に外反し、口縁端は平坦をなす。頸部に断面三角形の突帯を持つ。口縁部外面に縦位のハケ目が残るが頸部以下はナデ消され、内面もハケ目調整がされるが部分的ナデ消される。4口径21.6cm、残存高9.5cm。5口径21.6cm、残存高12.5cm。

以上各土器はG23・24暗灰褐色土粘質土から1、2、3、G17南壁茶褐色粘質土より4、5、6、7、G12、18東西ベルト茶褐色粘質土より8が出土している。8は庄内式甕の特徴を持ち、1は弥生後期後半、2～5、6、7、は終末期の土器である。層位的には、年代的に新しい谷部堆積層出土土器により、挟まれてに出土していることになる。

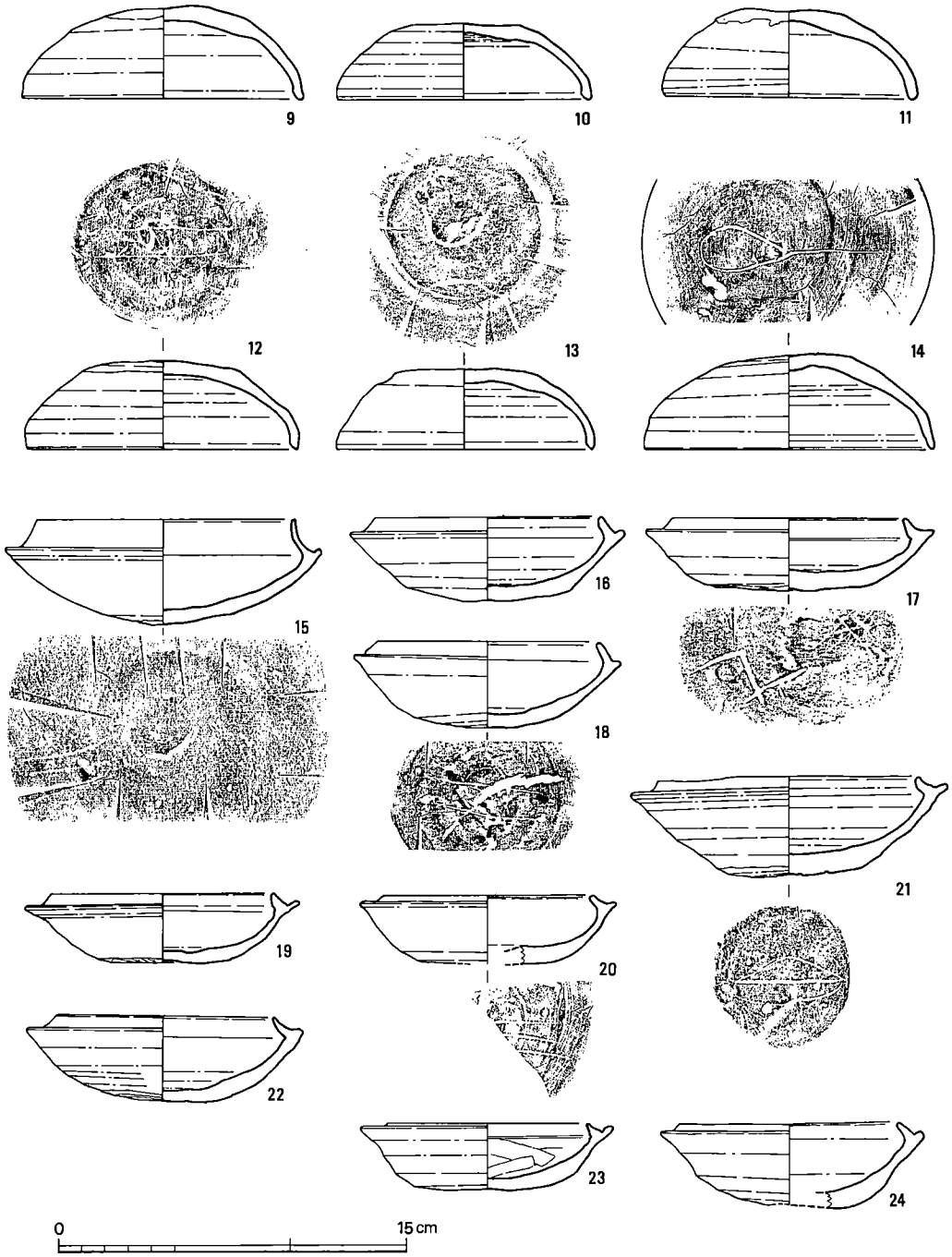
大溝堆積層出土土器（図版39～44、第12～14図）

大溝が周囲の台地上の住人によって意識され、機能をしていた頃に、他の木製品、骨製品などとともに水のたたえられていた大溝に投げ入れられた土器である。層位的には、暗灰黒砂質土層よりの出土遺物が殆どである。

須恵器（第12～13図）

杯蓋（9～14・25）　9～14は口径10.3～12.2cm、器高3.3～4.1cmで、天井部は丸味を持ち口縁端は丸くおさまる。天井外面に回転ヘラ削りを施し、内外面とも回転ナデがみられる。12、13 14天井外面にヘラ記号が認められる。25は身受けのかえりを持つが、人為的に打欠かれている。天井部はやや平坦で、ヘラ切り離しの後、回転ヘラ削りで整形する。

杯身（15～24・26）　15口径11.0cm、器高4.5cmで、立ち上りはやや内傾しながら薄く1.4cmのびる。身受けはやや斜め上方にのびる。外底部に2条と3条の平行沈線によるヘラ記号がある。16～24のうち21が口径11.0cm、器高4.2cmとやや大きめであるが、他は口径8.5～9.5cm、器高2.9～3.6cmとまとまる。立ち上りは低く強く内傾し、立ち上り基部に沈線の入るものがある（16、21、23、24）。身受けは短くやや斜め上方にのびる。いずれも回転ヘラ削りで整形するが、外底に丸味を持つもの（16～18）と、やや平坦になるもの（19－24）がある。26は、25とセットをなすものと思われるが、蓋受け部がなく椀形をなす。平底で口縁はやや斜めに立ち上る。底部は平坦にヘラ削りの後ナデ、身の部は回転ヘラ削りの後ナデている。口径9.3cm、器高3.4cm。木製



第 12 図　大溝堆積層出土土器実測図①（縮尺 1/3）

品集中区より出土している。

高台付杯（28）　口径14.4cm、器高6.0cm。口縁は胴部でわずかに屈曲し、直線的にのびる。高台は外開きで、端部が跳ね上る。杯部外底面はヘラ切り離しで、全体にヨコナデを施す。

小壺（27）　口径6.2cm、器高7.3cm。回転ヘラ削りの後ナデる。平底で横位に器面調整の擦過痕が残る。胴部は丸くふくらみ頸部で窄まり、口縁はやや外反する。底部に一本の沈線によるヘラ記号がある。木製品集中区より出土している。

高杯（29～34）　殆どが脚部のみの破片である。34は脚柱がやや細く長目にのび、シボリによるシワが残る。外面は風化のため調整不明であるが、内面には丁寧なヨコナデが施される。29～32は、脚部のみの破片で、31は杯部との接合部で剝離している。杯部接合部より緩やかに下外方にのび脚端部が跳ね上る。内外面にシボリによるシワが残るが、外面及び内面下半部はヨコナデにより殆ど消されている。脚端部径9.6～10.5cm、脚高5.6～6.3cm。

土師器（第14図）

高杯（35～41）　35・36は脚部を欠く。杯部は丸味をおび椀状となる。外面下半部は不定方向のヘラ削りが施され、上半部及び内面はナデが施される。口径12.9、14.1cm、杯部高4.5、3.9cm。38、40は杯部底面が直線的にのび、中ほどで屈曲し、やや外反してのびる。脚部は緩やかに開き、裾部で屈曲して下外方にのびる。杯部は内面ヘラ磨き、外面ヨコナデを施し、脚柱部は外面縦位ヘラ削り、裾部はヨコナデを施し、内面はヘラによって抉ぐる。38器高10.3cm、杯口径12.5cm。37、39、41は、38と同形の高杯の脚部の破片である。

椀（42～49）　丸底で弯曲しながら外開きになるもの（42～44）、同じく丸底で弯曲しながら立ち上るものがある（45～49）。前者は口径が9.9～11.1cm、器高3.1～3.6cmでやや小形、後者のうち45－47は口径10.3～10.8cm、器高3.9～4.5cmと深く、48、49は口径11.3cm、器高6.0cmと大形となる。いずれも外面はヘラ削りによって整形されるが、上半部にヨコナデ、内面に丁寧なナデがみられる。

大溝東岸土器溜り（図版39～45、第15～19図）

大溝南部東岸に集中して堆積していた土器群である。大溝が意識され、機能していた時に、おそらく薬師堂東遺跡（第６地点）側より、溝内に廃棄されたものと思われ、溝部斜面にそって溝低位まで他の木材とともに堆積している。おそらく継続的に何度かにわたって廃棄された遺物群と思われるが、堆積状態からそれを確認できない。

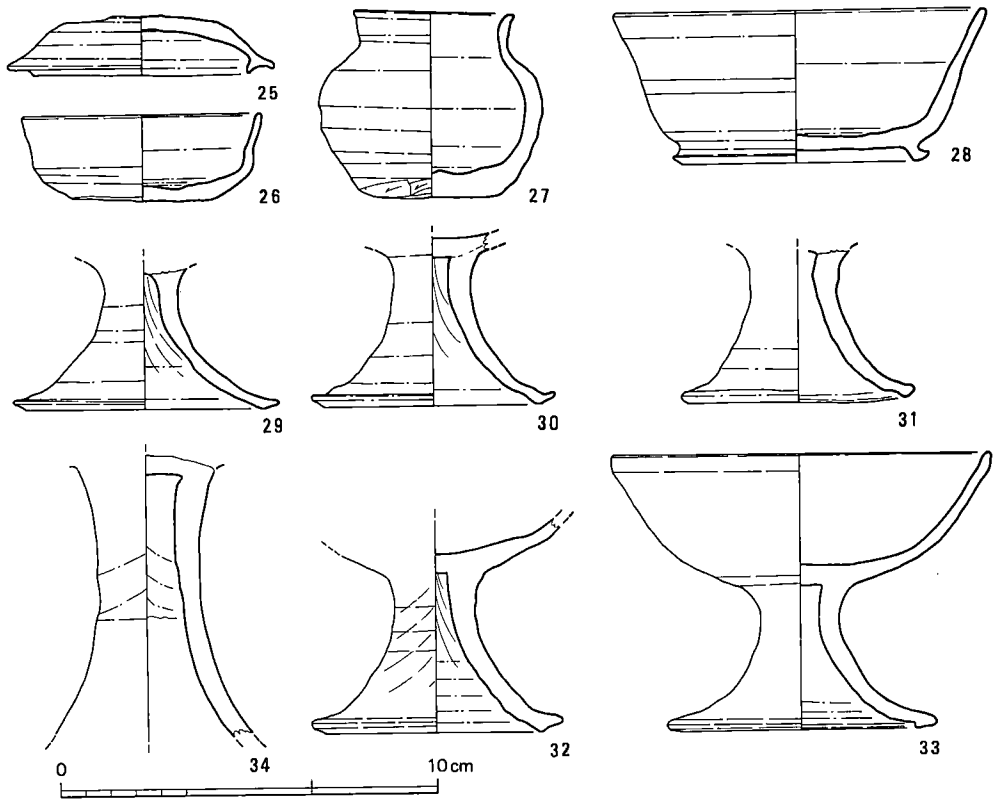
須恵器（第15～16図、第18図）

杯蓋（50～63・104）　いずれも、ツマミを持つものであるが、短めの身受けのかえりを持つもの（50、51）と、かえりのつかないものがある（51～63）。前者のうち50は、天井部外面に回転ヘラ削りをし、小さい擬宝珠形ツマミをつける。口径8.0cm、器高2.6cm。51は、50に比較して

天井部が平坦で扁平となり、擬宝珠形ツマミをやや扁平化する。口径11.9cm、器高3.0cm。3本沈線によるヘラ記号がある。後者のうち52は器高が4cmと高く、ツマミの擬宝珠がまだその形態をとどめ口縁端がそのままのびる。口径14.0cm。53、54、55、58は器高・ツマミとも扁平化するが、口縁端は若干屈曲するだけで完全には鳥嘴状にはなっていない。口径14.6～17.5cm、高2.4～3.0cm。56、57、59～63は口縁端が鳥嘴状となるもので、扁平度・ゆがみとも59～63が著しい。いずれも天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデが施される。

104は、須恵器と同じ製作法が認められるが、灰黄白色を呈し土師質のものである。扁平なツマミをもち天井部から緩やかにカーブを描きながら口縁にいたり端部は丸味をおびる。天井部を回転ヘラ削りによって整形する。口径17.7cm、器高3.5cm。

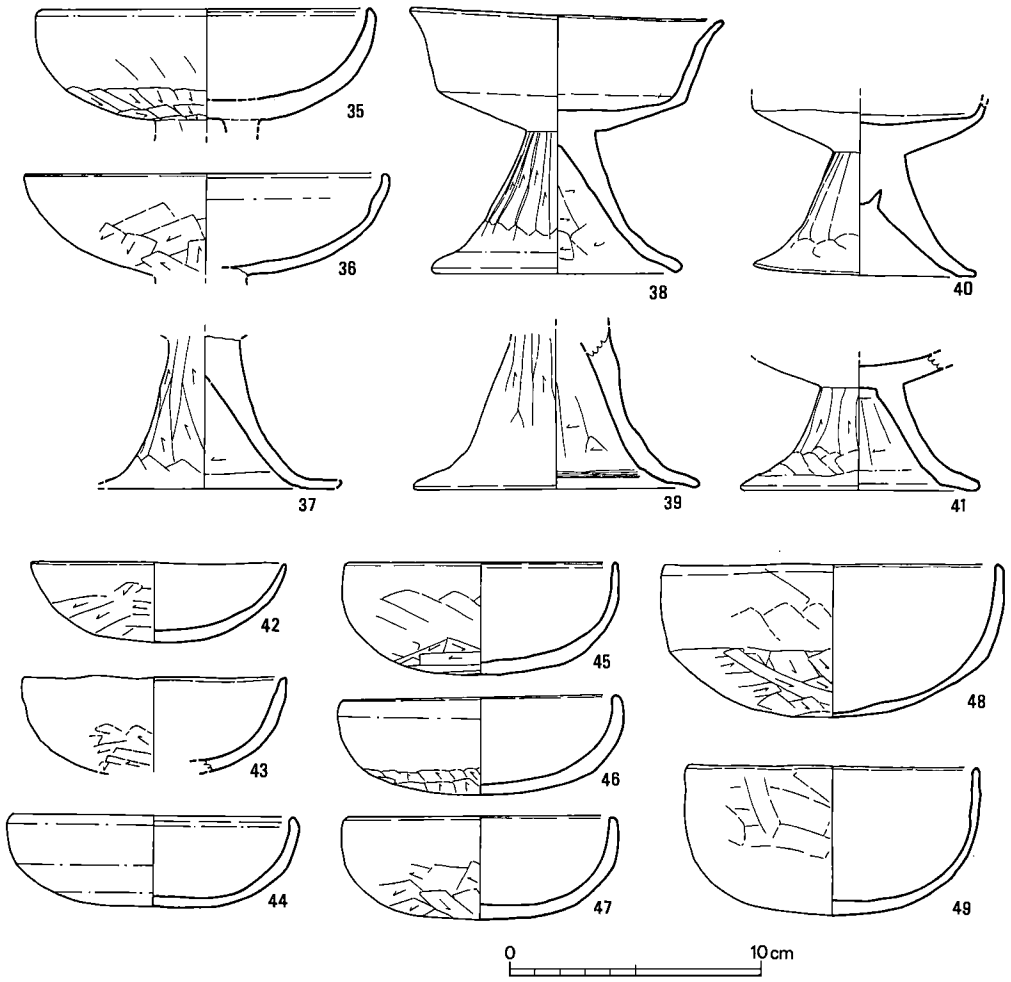
杯身（68～71・105～117）　蓋受部に立ち上りを持つものと（68）、平底で、直線的にやや開きながら、口縁が立ち上るもの（69～71・105～117）がある。68の底部は丸味を持った平底で、丸味を持って受け部へつづき、受け部は横方向に短く張り出し、立ち上りは、やや内傾しながらのびる。口径8.9cm、器高3.4cm。69～71は、受け部のつかないもので、回転ヘラ削りによっ



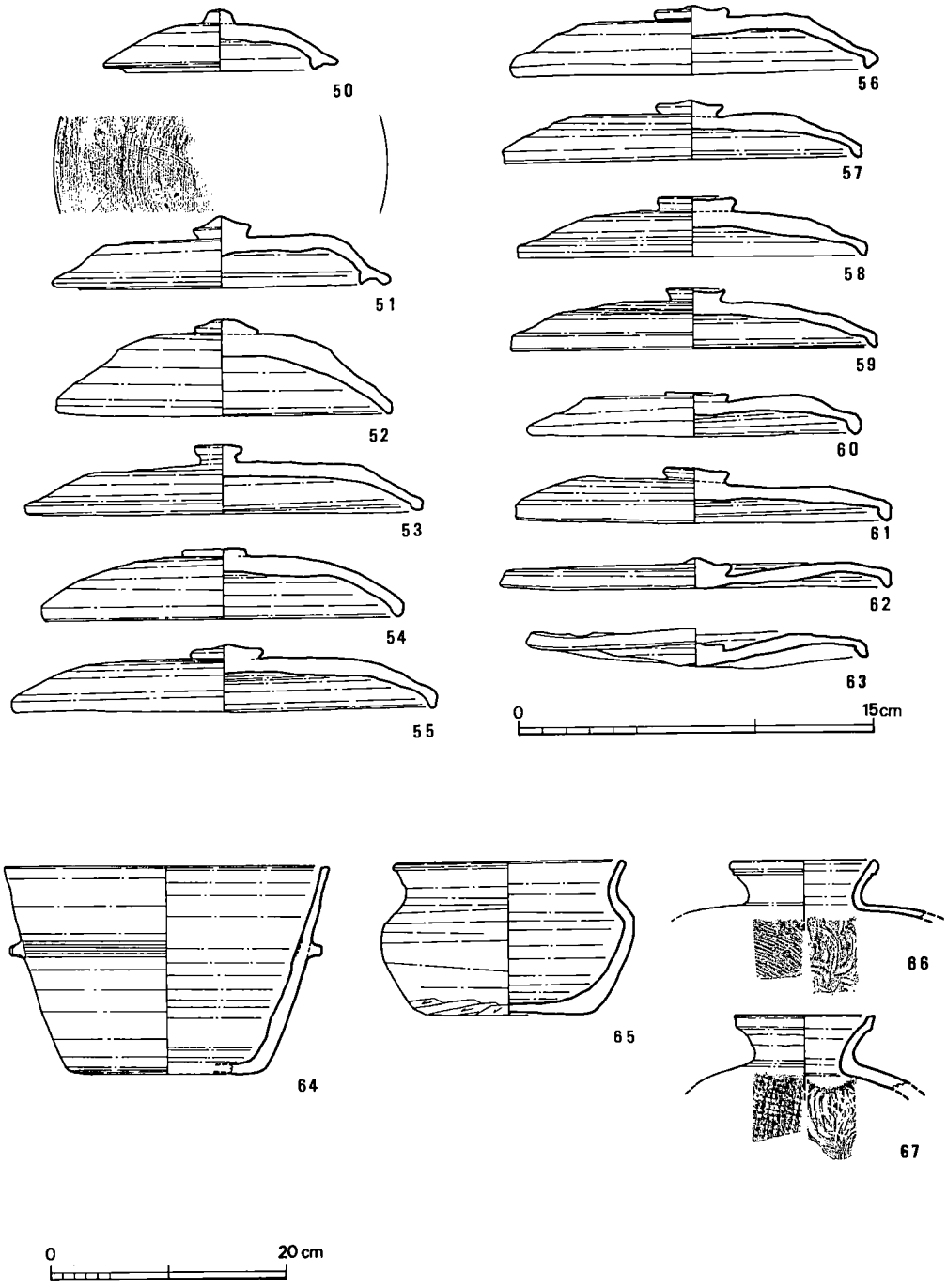
第 13 図　大溝堆積層出土土器実測図②（縮尺 1/3）

て平坦な底部をつくる。内外面ともヨコナデが施される。口径11.7～13.7cm、器高3.1～3.7cm。105～110、112～117は土師質の土器であるが、いずれも回転ヘラ切り離しであり、外面に回転ヘラ削り痕が残るが大半はヨコナデが施され、内面にはすべてナデが認められる。口径に比較して大き目の平底から110°程の角度で立ち上るもの（105～110・112）と、口径に比較して小さ目の平底から130°前後の角度で立ち上るもの（113～117）がある。後者は、回転により凹線丈の凹凸が認められる。口径は前者が13.0～17.0cm、後者が12.7～13.8cm。

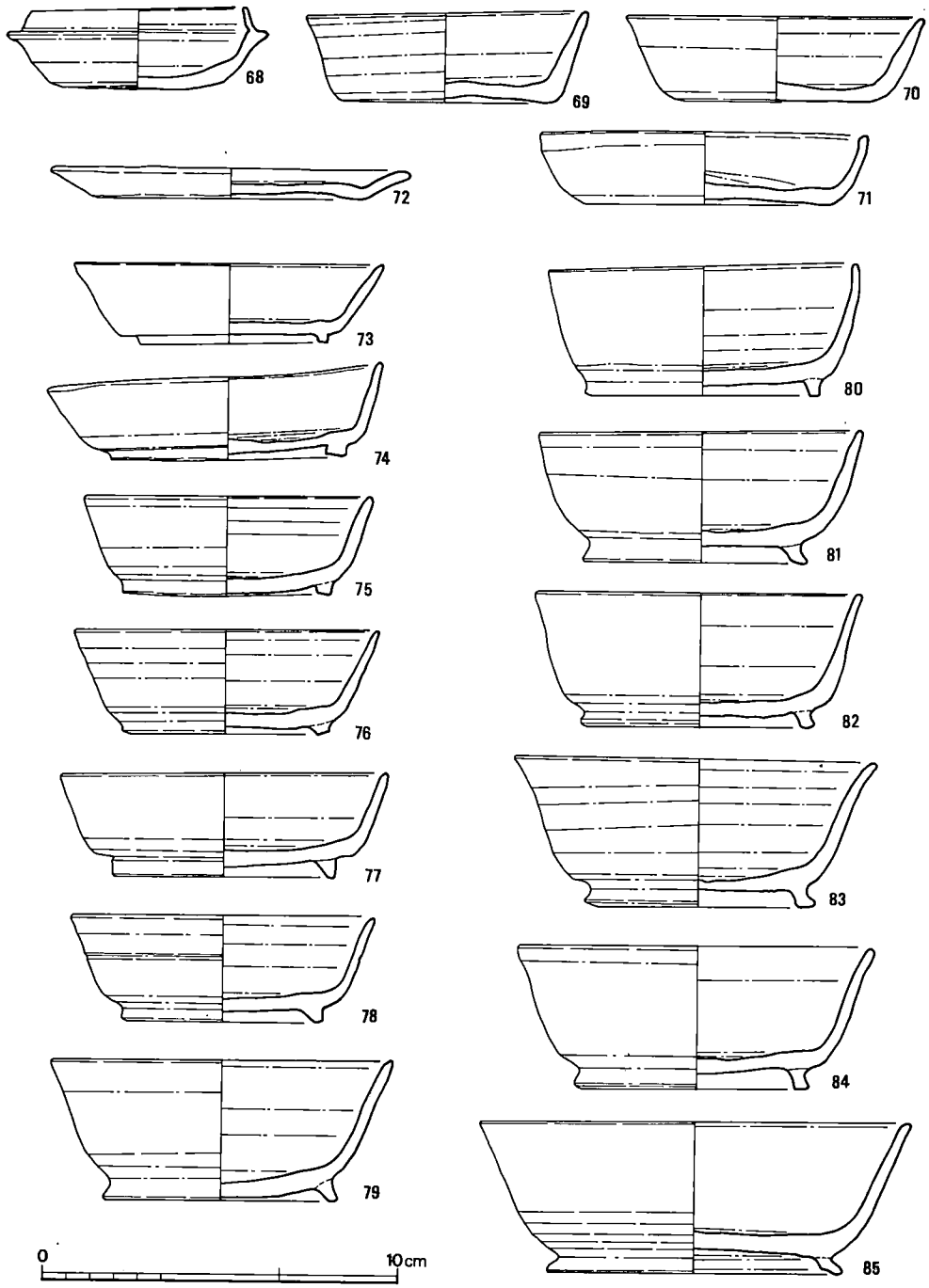
皿（72・111）　72の外底部は、ヘラ切りの後ナデる。底部はゆがんで上底気味になり、口縁は短く外反する。全体に丁寧なヨコナデを施す。口径14.8cm、器高1.3cm。111は、底部はヘラ切り離しの後ナデる。平坦な底部から120°の角度で短く口縁がのびる。土師質である。



第 14 図　大溝堆積層出土土器実測図③（縮尺 1/3）



第 15 図　大溝東岸土器溜出土土器実測図①（縮尺 1/6）



第 16 図　大溝東岸土器溜出土土器実測図②（縮尺 1/3）

高台付杯（73～85）　高台がほぼ垂直につき端部が平坦をなすもの（73～78・80）とやや外方に開き先端が跳ね上り気味のもの（79・81～85）がある。前者の口径が12.6～13.9cmで、後者は13.5～18.0cmとやや大き目である。いずれも、底部は回転ヘラ切り離しで、回転ヘラ削りを加え体部及び内面にヨコナデを施す。

把手付鉢（64）　口径27.3cm、器高17.6cmで、底部ヘラ切り離しで、平底をなし、口縁はやや外開きに直線的にのびる。全体にヨコナデを施し、胴部中央に3本の沈線を入れ、その部分に長さ4.1cm、幅1.5cm、高さ1.2cmの横位の把手を、おそらく対称に2ヶ所つけている。

坩（65）　口径18.9cm、器高9.9cm。底部はヘラ切り離しの後ナデを施し、平坦である。胴部上部に最大径があり、口縁はやや外反する。内外面全体にヘラ削りの後、ヨコナデを施す。内面にススが付着する。

甕（66・67）　口径11.7cmで胴部外面に66は平行叩き、67は格子目叩き、内面に同心円あて具の痕跡が残る。灰黒色を呈し、焼成は堅緻である。口唇部は66は屈曲して立ち上り、67は外に折り返りふくらむ。

土師器（第17・19図）

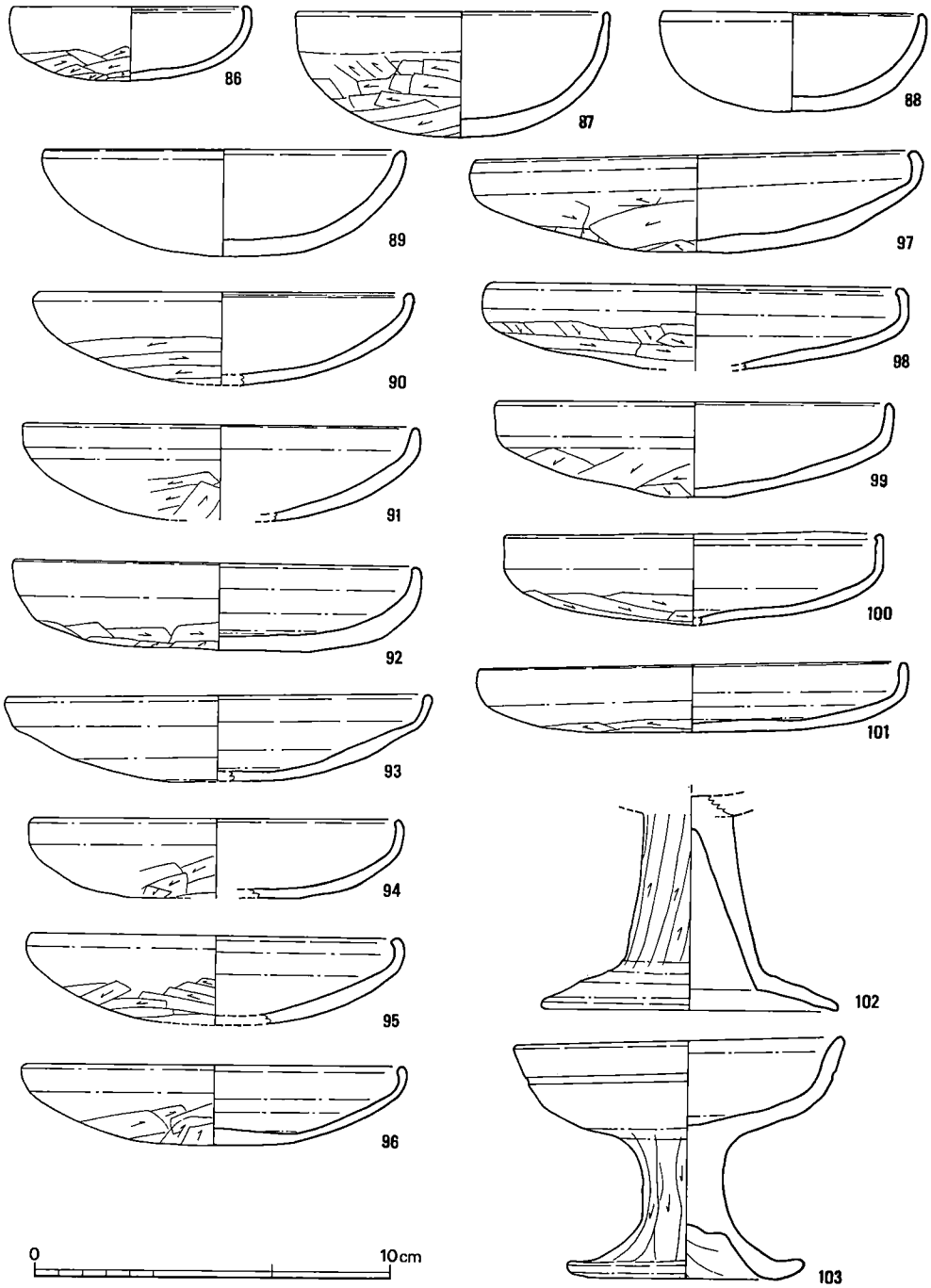
椀（86～88）　口径9.8～13.0cm、高さ3.1～5.2cmで、底部から口縁へ丸味を持って立ち上る。外底面はヨコ方向のヘラ削り痕が残り、外面上半及び内面には丁寧なナデ(研磨に近い)がある。

皿（89～101）　口径15.0～16.4cmで、底部から丸味を持ってのびるもの（89～91)、口径15.1～17.0cmで、底部から丸味を持ってのび口縁で若干内側へ丸まるもの(92～96)、口径15.5～18.4cmで底部は平坦に近く口縁が丸味をおびながら立ち上るもの(97～101)がある。どれも器高は2.8～4.0cm。外底面にはヘラ削り痕が残り、口縁外面から内面には丁寧なナデが施される。

高杯（102・103）　102は脚部のみの破片で、直線的に下外方にのび、裾部で強く屈曲して端部にいたる。脚柱には縦位のヘラ削り痕が残るが、裾部にはナデが施される。脚柱内面はヘラにて抉られる。脚高12.0cm、裾部径8.4cm。103は完形品で、杯部は丸味をおびながら外上方にのび、口縁下1.5cmに沈線が引かれる。脚部は柱状をなし、短く、裾部は開きやや跳ね上る。杯部内外面に丁寧なナデが施される。脚柱部は縦位のヘラ削り、裾部端から内面にはナデが施され、脚柱部内面は浅く抉られている。器高9.9cm、杯口径13.5cm。

甕（118～123）　いずれも口縁部から胴上半部の破片である。胴部の張りが強く、口径は胴部最大径より小さい。ゆるやかに外湾する口縁は、先端付近でさらに屈曲する。内面頸部の稜が明瞭でないもの（118・119・120)、胴部の張りが弱いが、胴部最大径より口径が小さく、緩やかに外湾する口縁を持ち、内面頸部の稜が明瞭なもの（121～123）がある。いずれも、外面頸部以下は縦位のハケ目、口縁外面から口縁内頸部までヨコナデ、頸部以下は、下から上へのヘラ削りにより器壁の調整を行なう。口径は前者が18.7～22.5cm、後者が、22.1～24.1cmである。

把手付甕（124・125）　124球形の胴部を持ち、胴部上半に一対の把手をつける。内面頸部の稜

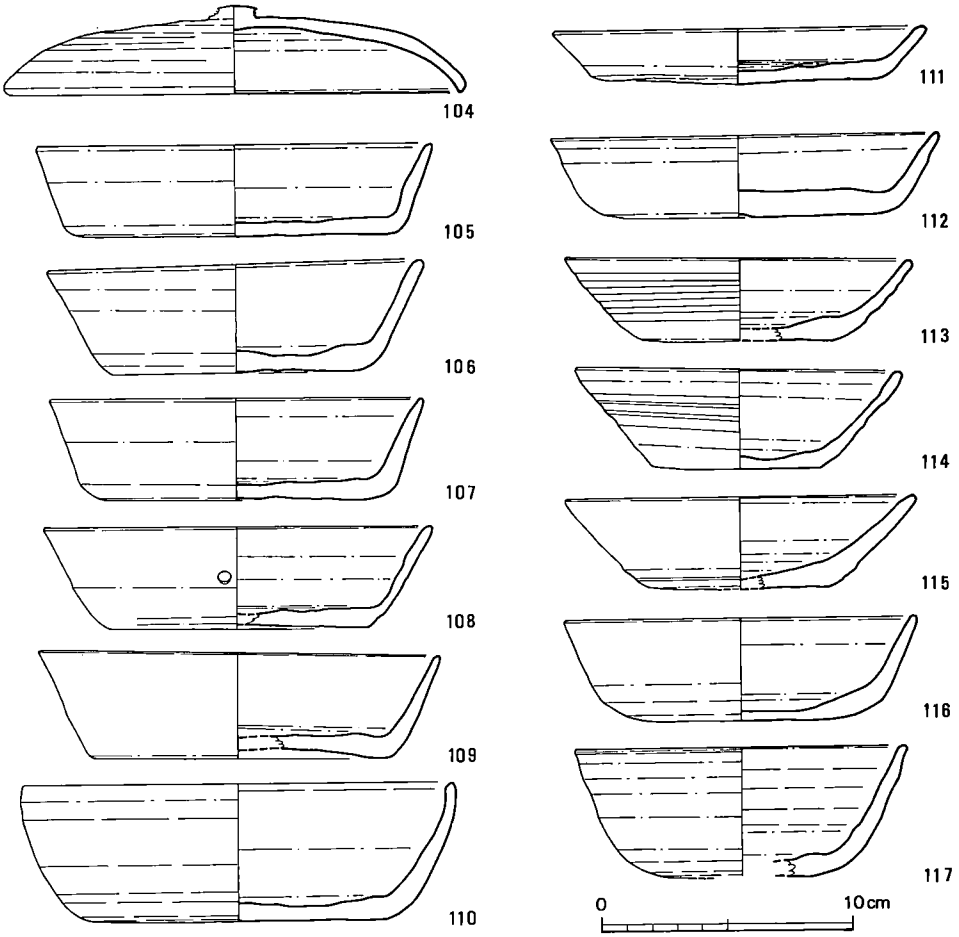


第 17 図　大溝東岸土器溜出土土器実測図③（縮尺 1/3）

は明瞭でなく、口縁は外反し、端部は若干外へ折れ曲る。外面ヘラ削り痕が不明瞭ながら残る。口径22.3cm。125胴部は大きくは張らず、長目にのびる。胴上半部に一対の把手をつけ、口縁は頸部内面に稜をつけ強く外湾する。外面は頸部下に縦位のハケ目、それに重なるようにヨコナデが内面頸部稜まで施される。内面頸部以下には縦位のヘラ削りが施される。口径25.5cm。

坩（130）　口径9.9cm、器高7.1cm。丸底でふくらんだ胴部からくの字に外反する口縁を持つ。底部から胴部にヘラ削りの痕跡が残る。口径部外面から内面にかけてヨコナデを施す。

鉢（129・131・132）　129口径18.7cmで底部を欠く。外開きの胴部が口縁で若干外反する。外面縦位のハケ目がわずかに残る。内面頸部下はヘラ削りを行なう。131平底に近い底部から、丸味を持って開き気味に立ち上り、口縁が緩やかに外反する。全体ヘラ削りの後、ヘラ磨きを内外面に施す。口径12.0cm、器高6.2cm。132平底に近い丸底から丸味を持って立ち上り、口縁が若干外反する。内外面ともヘラ削りを施し、口径下内外面はヨコナデを施す。口径12.2cm、器高6.6cm。



第 18 図　大溝東岸土器溜出土土器実測図④（縮尺 1/3）

小　結

以上大溝堆積層形成にかかわる層位（今回は遺物量の多い暗灰黒色砂質土層、大溝南部土器溜りを中心とする）より出土した土器の一部を報告したが、その年代について従来考えられている年代観にしたがって簡単にふれる。

須恵器杯蓋　杯身類は、小田編年によるⅢｂ期のもの（15）が古く、大溝堆積層形成初期を６世紀後半代とすることができる。高杯（34）もおそらくそれに伴うものであろう。杯蓋９～14、杯身16～24・68は、小田編年のⅣ期に相当すると思われるが、その多くは６世紀末から７世紀初頭におかれるものであろう。杯蓋25は、蓋、身の逆転する前後のもので、23なども逆転の可能性があり、７世紀前葉～中葉とされる。杯身26も、蓋25と同年代である。杯蓋50、51は、かえりのある蓋に擬宝珠形のツマミの取りつけられたもので、７世紀後半代におかれ、杯蓋52～54はかえりが無くなりツマミがつくもので７世紀末～８世紀前半におかれ、56～63は、口縁端が徐々に鳥嘴状化し、全体が扁平化し、８世紀前半代から中葉に位置づけられる。杯身は69～71、105～108は底部が平底化し体部が外開きに立ち上るもので、先の26より遅れ７世紀後半代におかれる。高台付杯（74～85）の高台の多くは、体部に寄って付けられており。底部と体部の境も明瞭である。82～85等は、７世紀後半代に、73～76等は８世紀前半代におくことができよう。杯類の中でおそらく一番後出的なものは113～115で８世紀後半代におかれよう。

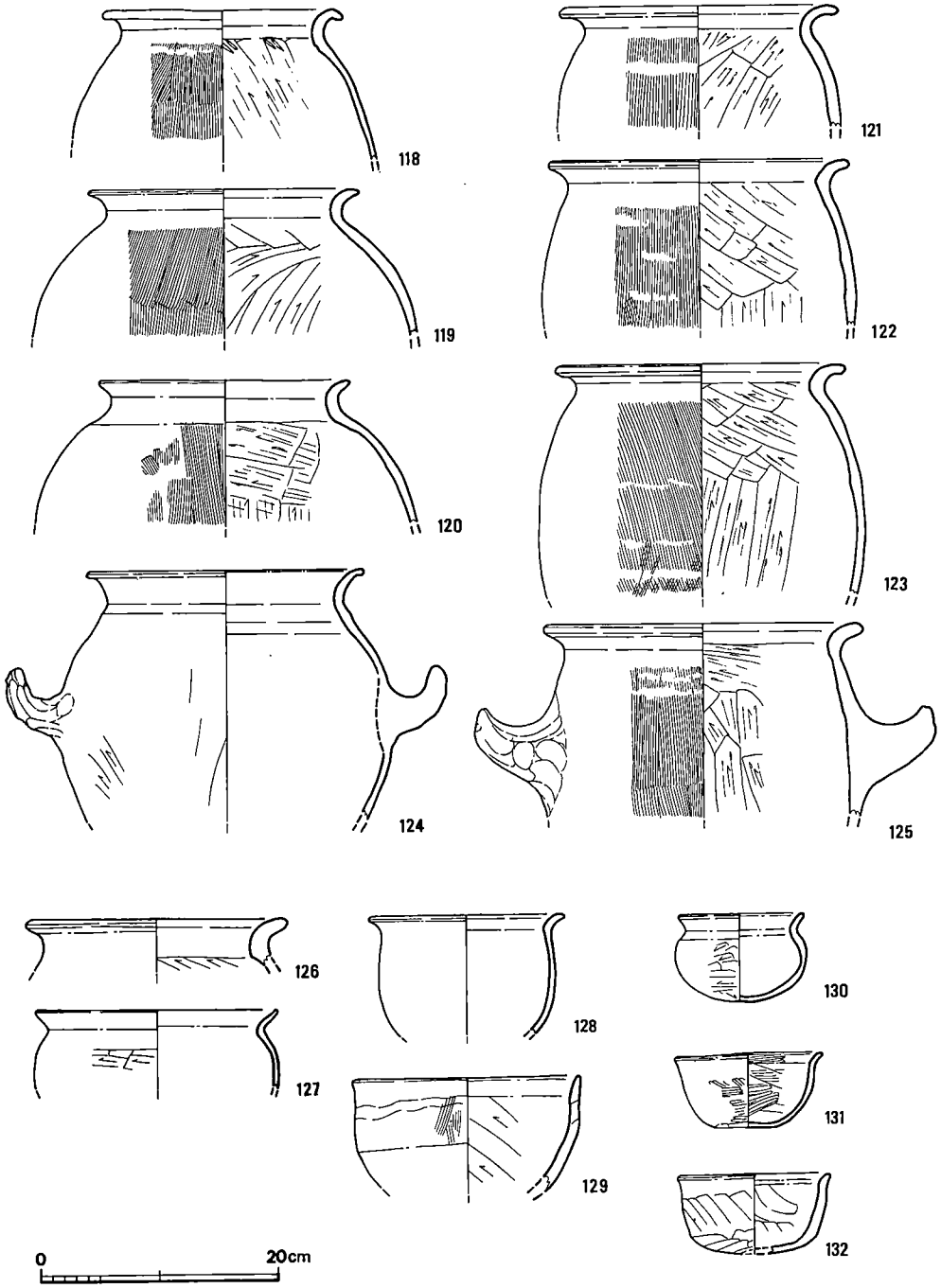
土師器は、本遺跡北方３kmの干潟遺跡で良好な資料が得られており、大略その編年観にしたがう。高杯38等は、７世紀前半代の須恵器に伴ってみられるものである。椀類45、46、47も７世紀初頭から前半代にかけての須恵器に伴うものである。皿は、89、90が干潟Ⅰ期、92がⅡ期、98、100101がⅢ期に相当するものと思われるが、厳密には判定できない。干潟遺跡では、Ⅰ期を７世紀中葉、Ⅱ期を７世紀後半、Ⅲ期を８世紀前半、Ⅳ期を８世紀中葉に比定している。甕類は119、121がⅡ期、122、123がⅢＡ期に比定され、把手付甕124はⅡ期、125はⅢ期に比定される。土師器は、大略的にみると、大溝堆積層に高杯・椀類が特徴的に見られ、大溝東岸土器溜りには、それら器種も一応含まれるものの甕・鉢・皿など日常雑器類各種が含まれているといえる。

以上の事より大溝への遺物の堆積は６世紀中頃～後半にはじまり、８世紀後半代までみられるが、その中心は７世紀後半から８世紀前半にあったとすることができる。

ｂ．ヘラ書・墨書・硯転用土器

ヘラ書土器（図版46、第20図）

すべて土師器の坏である。明確に文字が読み取れるのは、１「黒豆女」、２「川道」、３・４「殿刀（殿部）」の４点である。７～９は文字ではなく、ヘラ先で何らかなモノを意図して描かれたであろう記号的なもの、あるいは絵画に近いものと推測される。５のヘラ描きは１～４と



第 19 図　大溝東岸土器溜出土土器実測図⑤（縮尺 1/3）

異なって曲線的であり、文字でない可能性がある。6は遺存部分が主要な部分からはずれている為、詳細は不明である。1～6はヘラ切り底で、3・4の他は全くの平底である。7～9のうち8・9の底部は「手持ちヘラ削り」を施し、7のそれは磨滅して不詳ながら、前述のものと同様であろう。7～9は日常雑器と大差ないが、1～4はつくりは精製で、焼成も良好でしっかりとした土器である。それぞれの出土位置を示すと、

1　Bトレンチ北壁44層灰褐色砂質土

2　土器溜り周辺

3　G13暗灰黒色粘質土

4、6～9　土器溜り

5　Bトレンチ北壁5層茶黒色粘質土

Aトレンチ出土墨書土器（図版48、第21図）

1～4は土師器で5は須恵器である。文字は全て外面に書いている。文字として判読できるのは3の「西古」、4の「七」で、他の3点は文字の一部しか残らない。1は口縁部に平行に少なくとも2文字が書かれ、一方の「辶」は認められるが、つくりは判らない。2は文字であろうと思われるが、実体は不明である。5の筆の運びは隷書的である。しかし、文字は判読できないが、或いは4と同様に「七」の可能性もある。

Bトレンチ出土墨書土器（図版49、第22図）

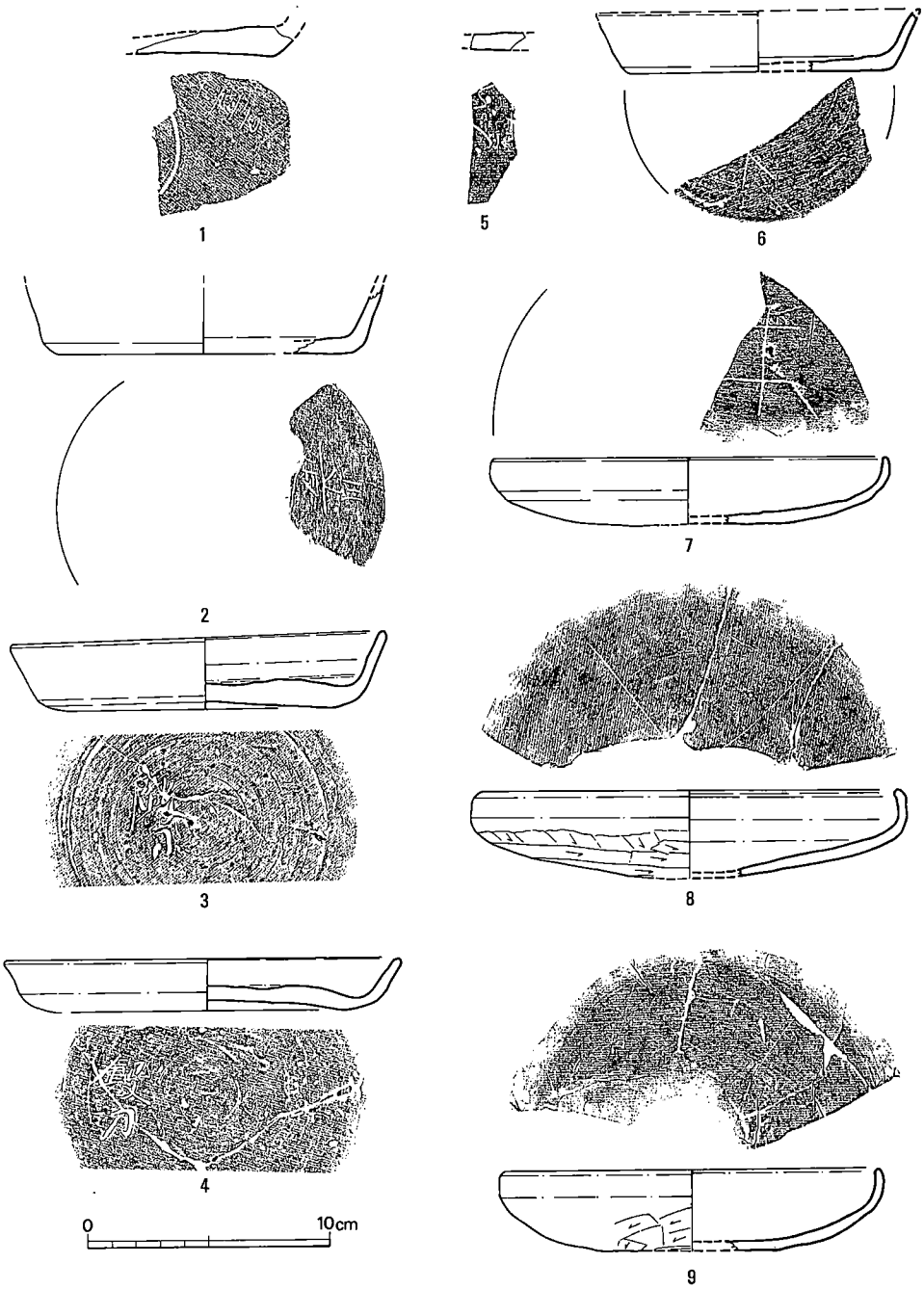
2点とも土師器で、器種は坏である。共に小片である。8は「三原」と明瞭に読める。7は文字全体は不明であるが、偏は「文」であろう。ヘラ切り底で、体部はヨコナデされ、調整等も類似する。墨書されない土器と変わるところはなく、日常雑器である。

土器溜り出土墨書土器（図版47、第23図）

計10個体図示した中、9・10・18はほぼ完形品であり他は破片資料である。器種は杯身・杯蓋・甕の三種である。また、15・16は須恵器だが、他は土師器である。本遺跡で出土した墨書土器の書体は、行書が圧倒的に多いが、9は更にくずれた書体で、17は文字であろうと思われる程度のものである。17以外は全て外面に墨書される。文字の判読できそうなのは10「長麻呂」、12「竺原」、14「□大」、15「上万」、16「宇（宰）□」、18「寺」である。11は墨痕の遺存状態は良くないが、筆の運びは文字を書いたものと思われ、“おまじない”を目的とした符号的なものではない。これらの土器の中、9・10は一般集落跡から出土する日常雑器とは異質の精製土器であるが、他は日常雑器的なものである。また、10～14はヘラ切り底である。

その他出土墨書土器（図版48～49、第22・24・25図）

図版49、第24図の器種はすべて杯で、21は土師器、他は須恵器である。文字の判読できるのは須恵器だけで、20は「三原」、22は「田」と書かれている。19は少なくとも2字が書かれているが、意味のわかる文字ではない。21は文字ではなく、一筆書きで“おまじない”の符号的な



第 20 図　ヘラ書土器実測図（縮尺 1/3）

ものと推定する。これらの土器は墨書されない他の土器と変わりなく、日常雑器である。

図版48、第22図6は土師器の杯だが、第22図8や第24図20と同様に「三原」ではないかと推測する。ヘラ切り底で、体部はヨコナデされる。

それぞれの出土位置を示すと

第24図19　G19茶黒色粘質土

第24図20　G18茶黒色粘質土

第24図21　G14茶黒色粘質土

第24図22　G37茶黒色粘質土

第22図6　G17灰黒色粘質土

となる。

以上は、出土地こそ異なるが、すべて大溝の埋没過程最終段階のものである。

図版49、第25図の23～26は須恵器、27～30は土師器である。23は口唇部全体を打ち欠いた杯身で、口径10cm弱、器高3.5cm弱を測る略完形品である。墨の遺存は良くないが、内面に「文」という文字が見える。同じく内面の他の部分に墨痕が残るが遺存状態が悪く、文字か否かは不明である。体部外面は異常に平滑でツルツルしており、底部はヘラで切り離したままで、ヘラ記号がある。24は杯底部の小片である。外底面に「秋」と墨書が見えるが、一字で完結するのか否かは不明である。25も杯底部の小片で、外底面に墨書がある。判読できないが「禾」の偏が見え、その上にも文字が書かれている。また点線で図示したが、墨痕かと思われるものも認められる。26も杯底部で明瞭に「佐原神」と読める。墨書に先行してヘラ描が認められるが、その意味は不明である。27は杯小片で内底面に墨書されるが、判読できない。2文字以上書かれていたと思われる。28は杯小片で外底面に墨書されるが、判読はできない。29は蓋で外面に墨書されるが、判読不能である。30は杯の反転図である。外底面に3文字程の墨書があるが、遺存状態が悪く判読不能である。

それぞれの出土位置を示すと

第25図23　G14・20暗灰黒色砂質土

第25図24　G13・19暗灰黒色粘質土

第25図25　土器溜り周辺暗灰色砂層上層

第25図26　出土地不明、暗灰黒色砂質土

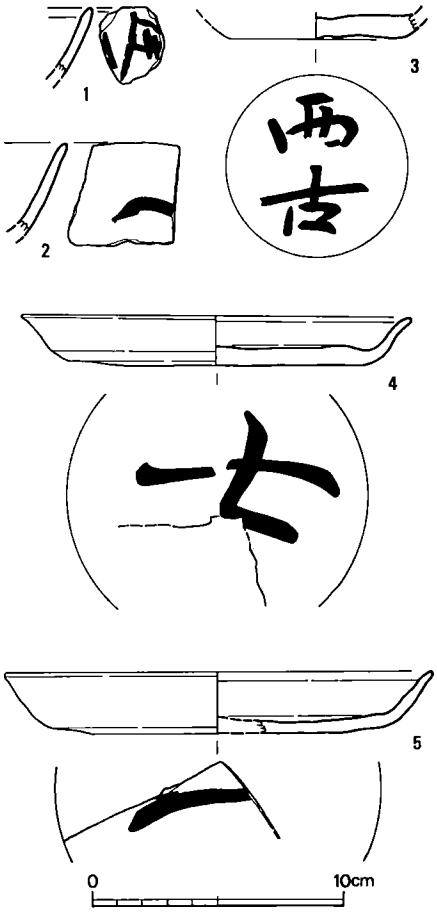
第25図27　木製品集中区下層

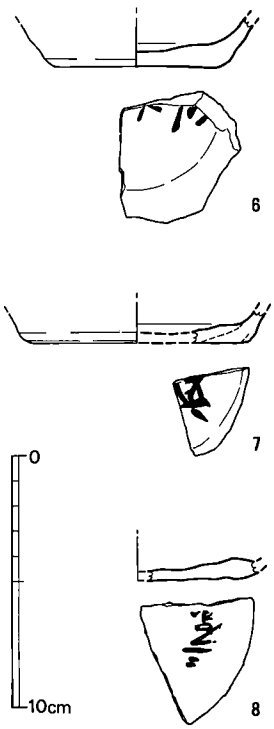
第25図28　G14暗灰黒色砂質土

第25図29　G19・20暗灰黒色砂質土

第25図30　土器溜り周辺灰色砂層

となる。





第 22 図　Bトレンチ・その他出土墨書土器実測図（縮尺 1/3）

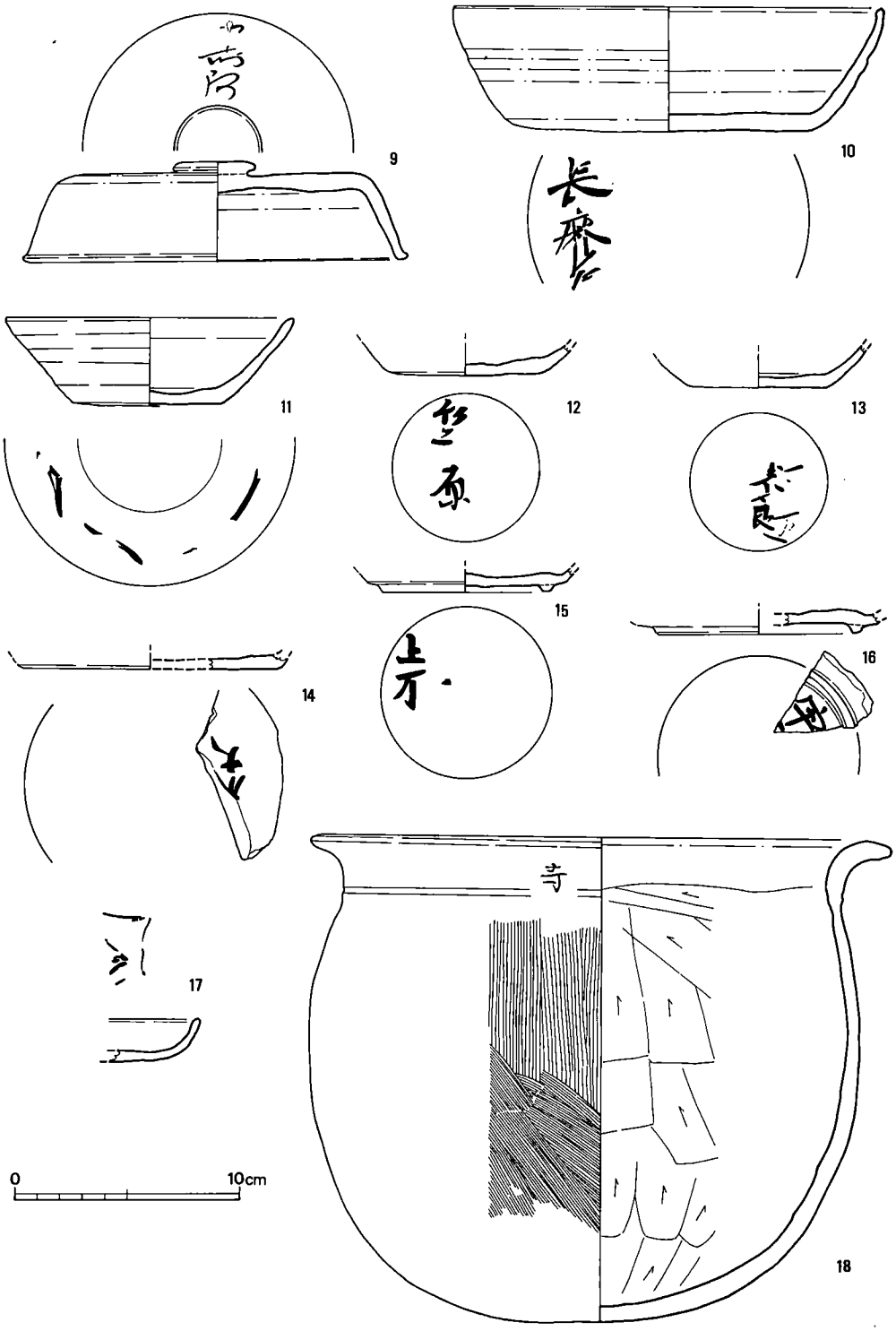
第 21 図　Aトレンチ出土墨書土器実測図（縮尺 1/3）

以上は、大溝内出土で、大きく３つに分けると、23、24、26、28、29が溝１、27が溝８、25、30が大溝東側肩部上辺となる。

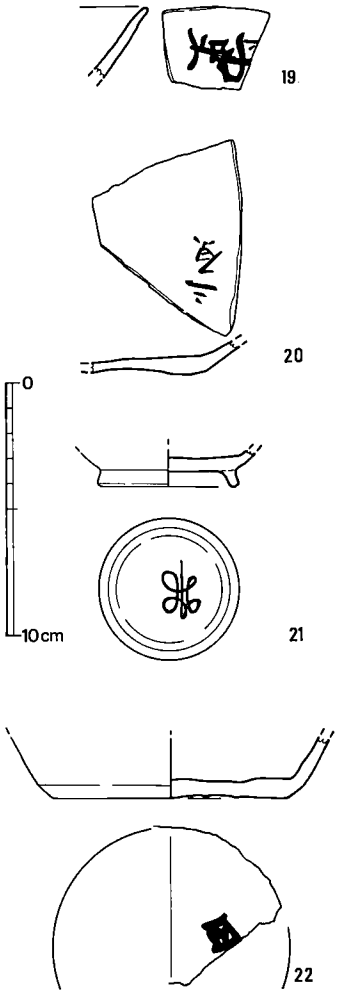
硯転用土器（第26図）

１～３の須恵器は硯として実用されたもので、４は墨壺的に使用された土師器である。

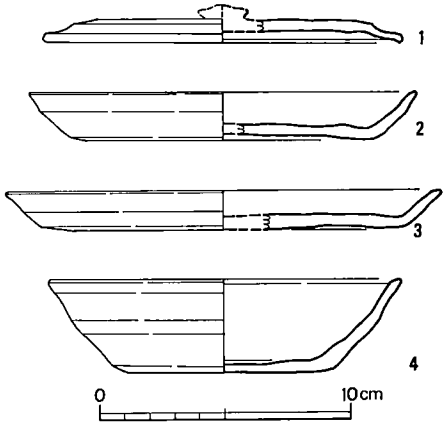
１はAトレンチから出土した杯蓋の破片資料で、天井内面は磨滅して円滑であり、墨が付着する。天井部内面を上に向けて杯に乗せ、硯としたものであろう。胎土には白色砂粒を多く含み、焼成良好にして硬質で、暗灰色を呈する。２はG13の暗灰黒色砂質土層で、３はAトレンチで検出した須恵器皿の破片で、内底面は磨滅して円滑で墨が付着する。ともに白色砂粒を多く含むが胎土は精緻で、焼成は良好である。４はG14の暗灰黒色砂質土層で検出した。体部下位から底部の内面にべっとりと墨が付着しているが、磨滅はしておらず、また、墨書土器とも全く異なっている。風字硯の海の役割を果たしたものであろう。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成良好で内面は明橙色、外面は淡茶灰色を呈する。底部はヘラ切りされ、レン状圧痕が残る。



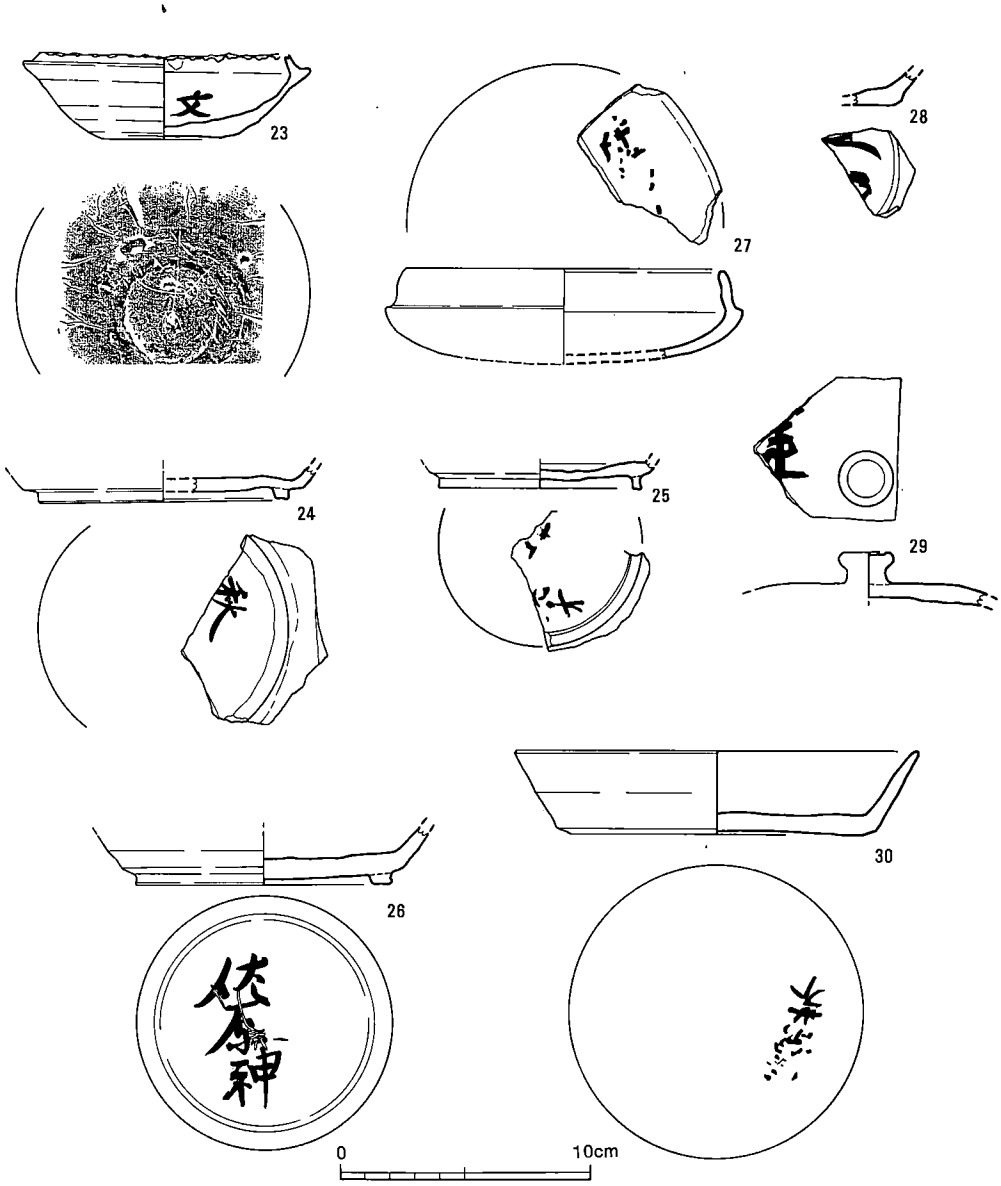
第 23 図　土器溜出土墨書土器実測図（縮尺 1/3）



第 24 図　その他出土墨書土器実測図①（縮尺 1/3）



第 26 図　硯転用土器実測図（縮尺 1/3）



第 25 図　その他出土墨書土器実測図②（縮尺 1/3）

C．木　器

木器として本稿で取り上げるのは、植物性製品、すなわち木材、樹皮等などを材質とする加工品である。

植物性製品とその破片は、400余点が採集、登録され、その他に加工痕、伐採痕をとどめる植物性遺物をコンテナケース200箱余りを採集した。しかし、担当者の木製品の処理、保存に関する勉強不足から、本報告にその全てを反映できなかったことは深く反省すべきことである。

さて、木製品は、主に溝状遺構の暗灰黒色砂質土層から出土し、大略、奈良時代のものと考えられる。しかし、層序や土器観察等で記述したように、何らかの開削等の人為的要因及び流水等の自然的要因で、必ずしも時期が特定できない憂き目がある。

従来から言われているように、木製品は、生活の多種多様な場において使用され、その分類はきわめて困難である。また、用途、機能については、尚更不確実な部分が多い。本稿では、奈良国立文化財研究所編「木器集成図録　近畿古代編」(『奈良国立文化財研究所資料第27冊』1985年)、小野久隆、奥野都「池上遺跡第４分冊１、２木器編」(財団法人大阪文化財センター、1977年)、山口譲治、松村道博「拾六町ツイジ遺跡」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集』1983年）を参考にし、機能上の分類を中心にすえ、一部形態、製作技法による分類も併用しながら遺物説明を加えていく。(尚、断面図中の線条は、木理方向を示す。)

以下、井上薬師堂遺跡出土の木製品の分類を示し、それぞれの出土点数を明記してみると、

ア、工具	鎌柄４点、横槌・叩板８点	(小計12点)
イ、農具	木錘９点、ナスビ形鍬３点、長柄鋤１点、えぶり２点、田下駄６点、スコップ形木製品１点	(小計17点)
ウ、什器類容器	刳物17点	(小計17点)
エ、什器類食事具	さじ形・杓文字形木製品４点、俎７点	(小計11点)
オ、什器類服飾具	下駄18点、櫛４点、櫛ケース１点	(小計23点)
カ、什器類曲物	円形・長楕円形・その他の曲物75点	(小計75点)
キ、祭祀具	手鏡状木器１点、有孔円板１点、柄２点、刀形１点、槍先５点、刀子形１点、陽物形木器３点	(小計14点)
ク、雑具	紡錘車２点、火鑽板２点	(小計４点)
ケ、部材	はしご、支脚、台座等	(小計45点)
コ、用途不明品	37点	(小計37点)

の総計255点になる。

尚、木製品の使用木材の樹種同定は、琉球大学農学部の林弘也先生とその研究室の方々にお願いした。本来、全ての木製品について、その樹種の同定を行い、用材の選択状況を把握した

かった。それは、用材の選択性が地域、時代によりどのように変化するのかを研究する上で貴重なデータを提出できるためでもある。しかし、予算や日数の都合上、総数255点中46点を調査するにすぎなかった。

ア、工具

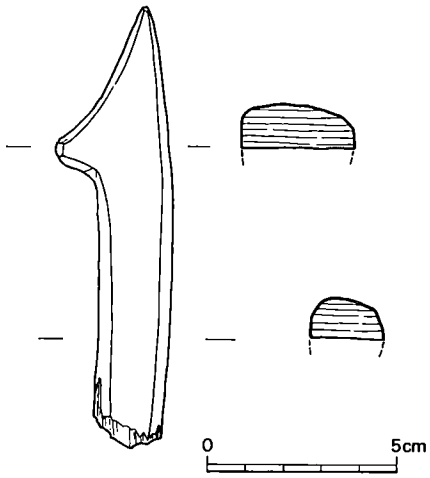
鎌柄４点、横槌・叩板８点が出土している。

鎌柄（図版50、第27図）

４は、G13暗灰黒色粘質土上より出土。柄元部分を欠き、柄は主軸線上から半折する。握りはまっすぐで、柄尻の腹面側にすべり止めの山形の突起を削り出す。稜角に面取りをほどこす。断面は、略楕円形だったようである。

本例は柄部分のみの検出だが、先端部には、木口面から切り込みを入れ、鉄製鎌を挿入し、木楔などで固定していたと考えられる。

現存長11.6cm、握り幅1.9cm。



第 27 図　鎌柄実測図（縮尺 1/2）

横槌（図版51～52、第28図）

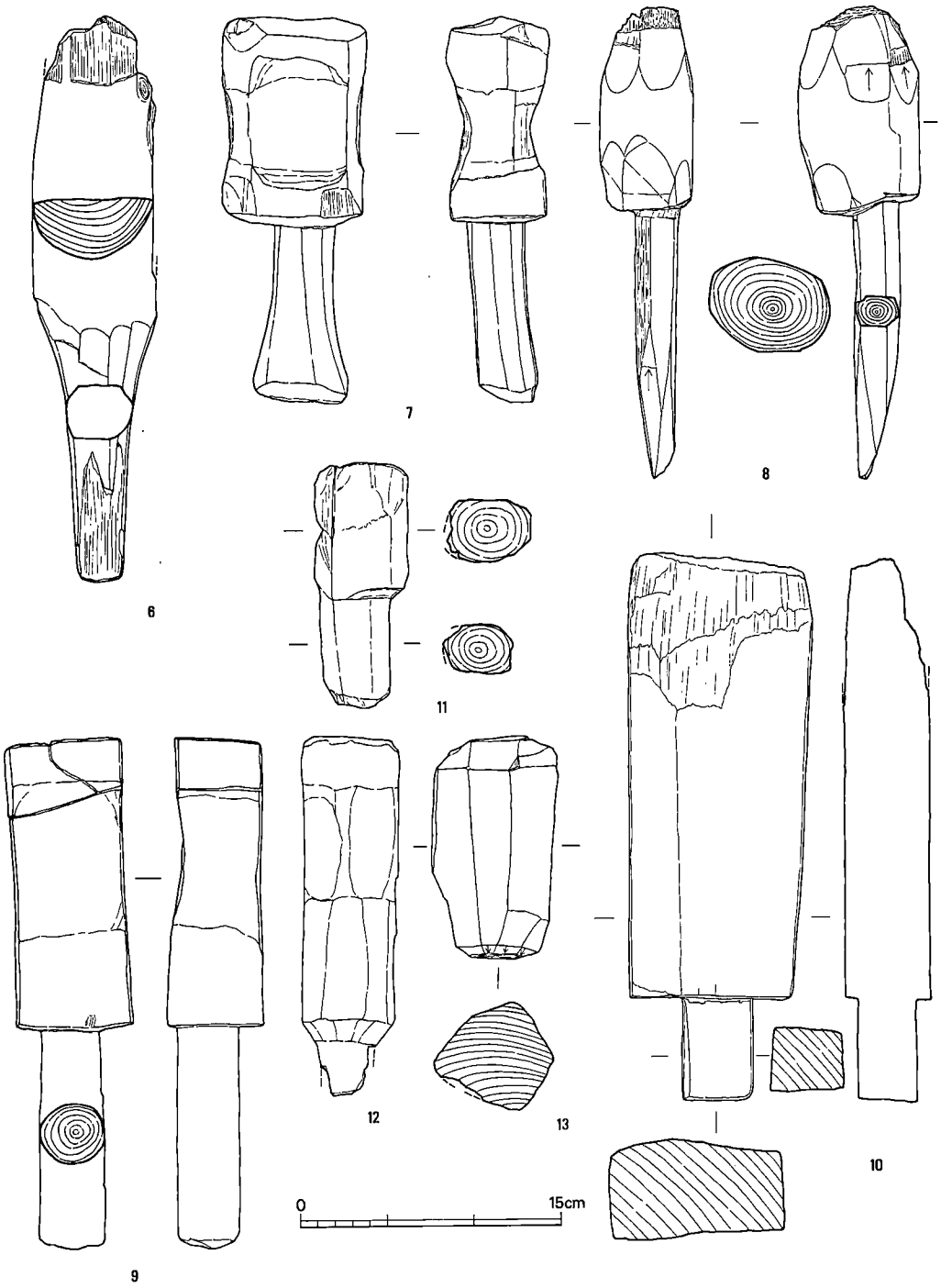
６は、Bトレンチ第２層より出土。心持ちの丸太材の削り出し柄部を作る。身部は、加工せず、樹皮を剝いで使用する。柄部は、身部との境にはつり痕を明瞭に残すが、先端部は欠損している。身部は中央部分に敲打痕を示す窪みをとどめる。先端部は欠失している。

残存長32.3cm、柄部長11cm、幅2.4～4.2cm、身部幅6.8～７cm。

７は、第２セクション北側暗灰黒色砂質土より出土。中型の横槌。柄部分は末広がりして八角形に面取りする。柄は身の中心にはつかない。身側面には、著しく敲打痕をとどめ、大きく凹む。また身先端では加工痕がみられない。藁を打つより小形杭などを打込むために使用されていたと思われる。

全長22cm、身径5.9×8.3cm、柄長10.2cm。

８は、木製品集中区より出土。心持ちの丸太材の５分の３を削り出し柄部とし、残りの身部は先端部を斜めに、はつっているが、先端部は加工痕をとどめず、切り離したままである。身中央部は一部樹皮を残し、一カ所に集中して敲打痕が認められる。柄部は、断面を不等辺六角形に面取りする。また先端部は、さらに木口方向にむけ、はつりを入れて尖らせている。全体



第 28 図　横槌各種実測図（縮尺 1/4）

的にみて、身が重たく、横槌として使用した際、柄がその負荷に耐えられるかが疑問であり他の用途も考えられる余地を残す。

樹種はモミ属である。

全長27cm、柄部長15.7cm、幅2.5～2.7cm、身幅6.9cm。

9は、木製品集中区下層より出土。心持ち丸太材の約半分を身とし、他の半分を細く削って柄をつくる。柄部分断面は略円形、身部は長方形を呈する。柄は身中心より若干偏してつく。身部分の敲打痕跡は、7より著しくない。

全長29.3cm、身径5.6×6.7cm、柄長12.8cm、柄径3.4cm。

10は、G26暗灰黒色砂質土より出土。略長方形の身に断面が方形に近い柄をつくりだす横槌の形態をとるが叩いた痕跡が認められない。身先端が欠失していることから何らかの建築部材であった可能性もある。

残存長31cm、幅9.3～10.5cm、厚4.6～5.7cm、柄部長6cm、柄部幅4.1cm、柄部厚3.2～3.7cm。

11は、第2セクション第3層より出土。小型の横槌。全体的に腐植が甚しい。身部分の片側は欠損する。面取りし、不等辺八角形になるようである。敲打痕は明瞭に残らない。

全長14.1cm、身部残存幅4.9～5.4cm、柄部長6.3cm、柄部幅3.9cm。

12は、G27暗灰黒色砂質土より出土。柄部分を欠損し、身部も半折する。身中央部分は敲打による凹みがみられる。身先端は斜めに削り出し稜角を取る。

残存長20.7cm、身部長17.6cm、身部幅5.2～5.6cm。

13は、出土地不明。中型の横槌。柄部分は欠損する。棒状の身先端部及び柄部との境も斜め方向に削り出す。身中央部は主軸方向に面取りし、不等辺五角形を呈する。身部分には敲打痕を明瞭に残さない。

残存長12.8cm、柄幅5.7～7.1cm。

イ．農具

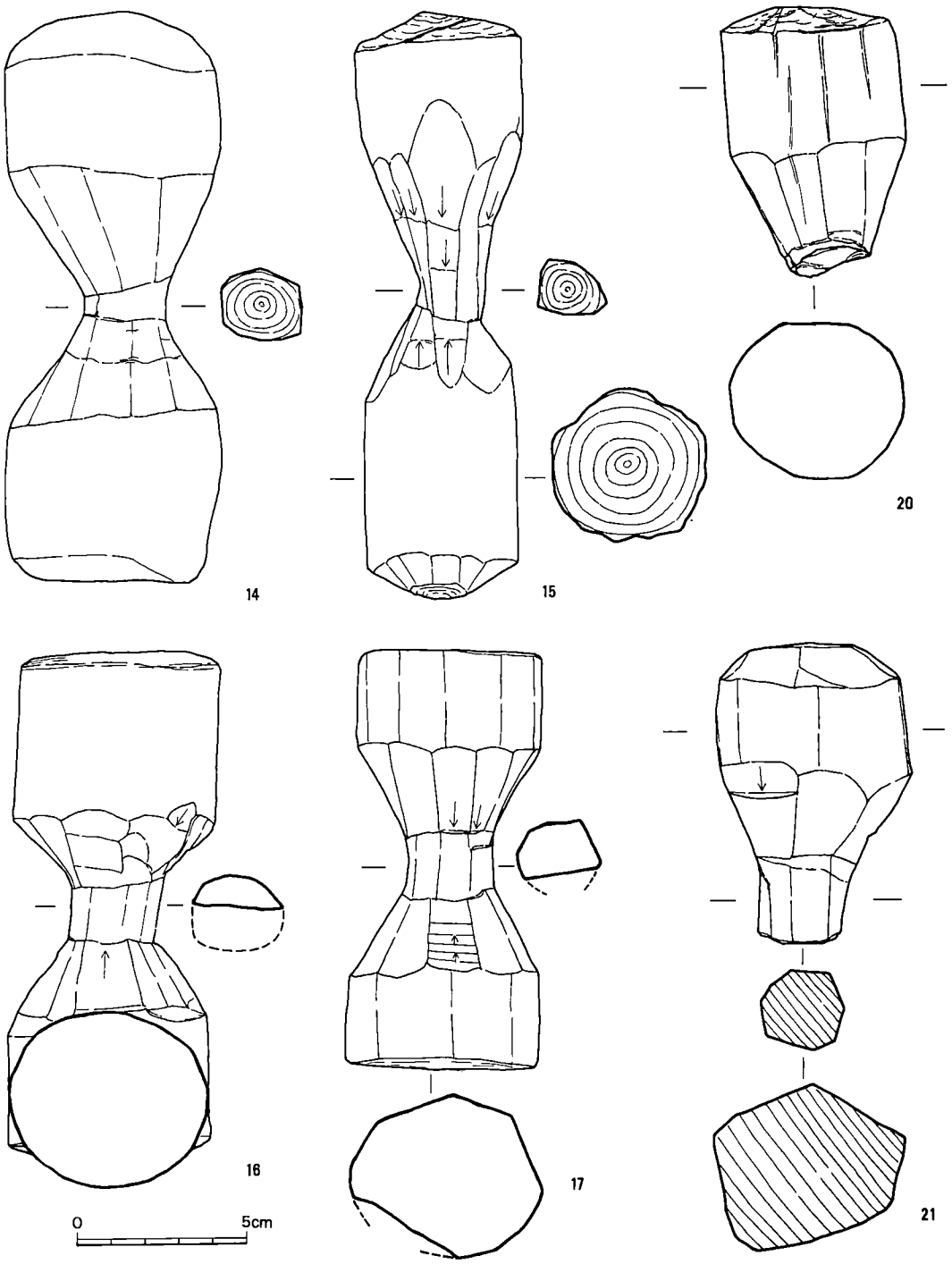
木錘9点、ナスビ形鍬3点、長柄鋤1点、えぶり2点、田下駄6点、スコップ形木製品1点が出土している。

木錘（図版53、第29図）

14は出土地不明。全体に腐植が甚しい。心持ちの丸太材を用い木口側両端を残し、中央に向かって斜め方向に削り込む。中央部は「紐ずれ」で磨滅する。先端は若干丸味をもつ。

長16.8cm、径2.4～6.3cm。

15は、Bトレンチ暗灰黒色粘質土より出土。心持ちの丸木材。柱状の丸材の両端に丸木面をのこし、中央に向かって両方から円錐形状に削込む。削り込みの面は8面ある。一方の木口面には斜め方向の削り込みがある。中央部には「紐ずれ」が明瞭でない。



第 29 図　木錘各種実測図（縮尺 1/2）

長17.2cm、径1.9～5cm。

17は第2セクション第3層より出土。柱状の材を用い両端を残し、中央に向かって斜め方向に削り込む。中央部は「紐ずれ」で磨滅する。中央部より一方が半折する。

長15.1cm、径2.5～6cm。

18は、木製品集中区下層より出土。柱状の割材を用い両端をのこし、中央に向かって両方から斜めに削り込む。中央部は「紐ずれ」で磨滅する。木口面は他のものに比べて平直である。

長12.4cm、径2.4～5.4cm。

20は、第2セクション北側より出土。中央より半折する。柱状の材を用い端をのこし、中央に向かって斜めに削り込む。

残存長7.9cm、径2.6～5.2cm。

21は、出土地不明。中央部より半折する。柱状の材を用い端をのこし、中央に向かって斜めに削り込む。中央の「紐ずれ」は著しくない。削り込み面の一部が焼け、黒変している。

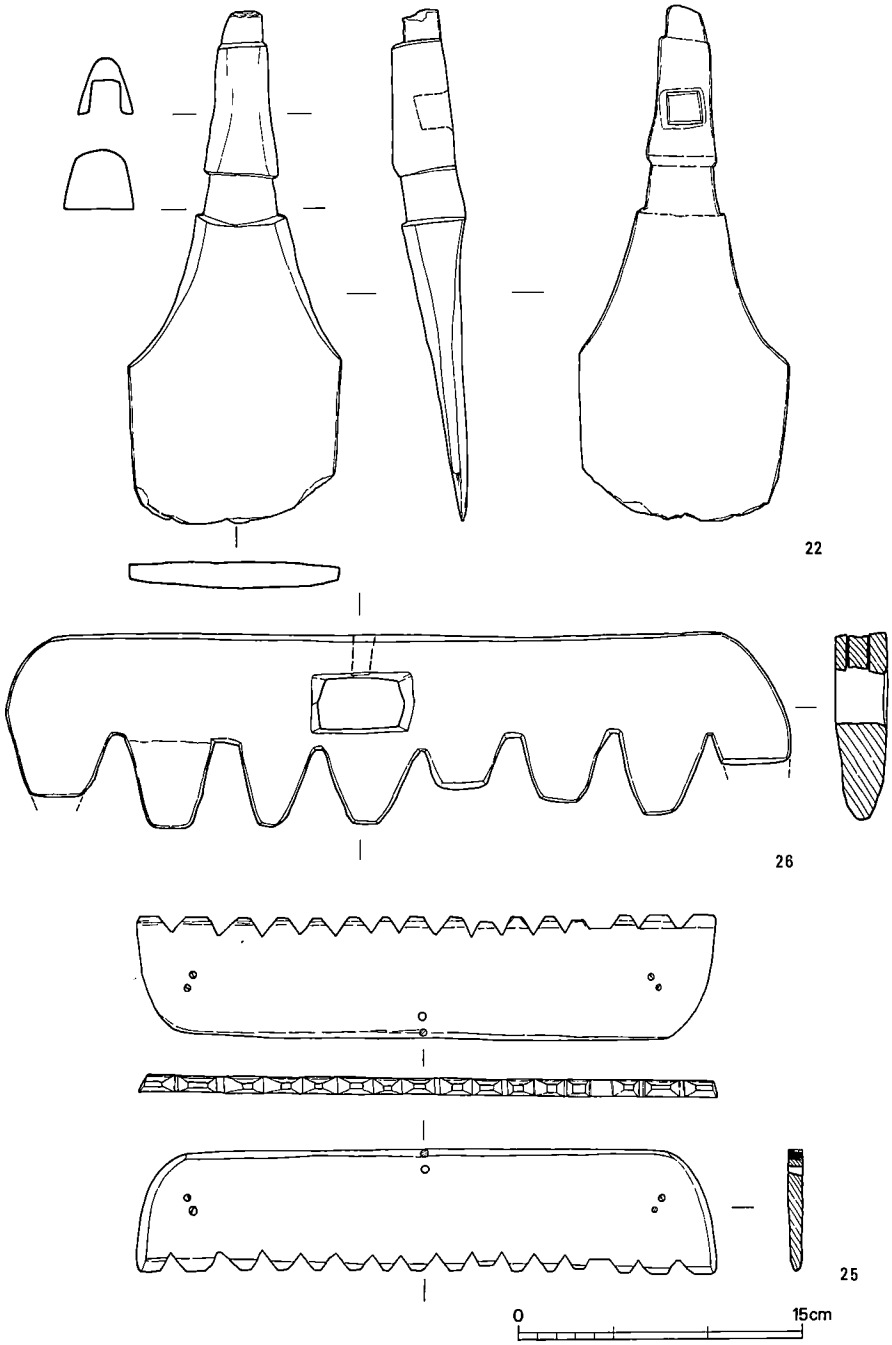
残存長8.8cm、径2.5～5.6cm。

ナスビ形鍬（図版54～55、第30図）

22は、第2セクション北側暗灰黒色砂質土から出土。従来、身の上部に棒状の柄を固定する一種の着柄鋤とする見解が強かったが、1977年、静岡県宮塚遺跡から、身の後面に斧柄のような膝柄を固定した類似の又鍬が発見されるに至り、鋤とするよりは、鍬に想定する蓋然性が高くなった。そして、本例は、柄孔を設け、確実に柄を着装したもので、きわめて貴重な発見と言える。以下その形態について記述する。

着柄軸先端部を欠失するが、ほぼ完形である。着柄軸を撥形につくり、身部は股状に作らず、外周縁に刃を作り出している。着柄軸の一面は、平坦に削り、逆面は、両端を鋭角に削って、中央部を山高にする。したがって、着柄軸の断面は、やや突出したカマボコ形になる。着柄軸は、下降するにしたがって、左右に幅を緩やかにひろげ、その伸びきったところをあまり張らない笠形につくる。そして着柄軸中央の平坦面には、1.4～1.5cmの略正方形の柄孔が穿たれる。着柄軸両端はそれぞれ溝を入れて（木口面先端部は欠失するが、溝状のひっかけがあったと思われる。）、柄着装時の補助的役割を果たす紐状のものを結びつけていたと推定できる。溝周辺はかなり摩耗をうけている。

身部は、着柄軸部の溝一端から左右に撥形にひろげて杓子状の形態を作り出す。側面からみると、漸次、基部から主軸方向刃部に向かって薄く削り出される。断面は凸レンズ状になる。本例ではU字形鉄製の刃先を装着するための切り込みが残っておらず、また外周縁が薄く削り出され、刃を作っていることから、もともとU字形鉄製の刃先を装着していなかったとも考えられる。しかし、U字形鉄製の刃先を装着していたものが、装着部から折失し、その後二次的利用で、欠損箇所を刃部にしたということも考えておく必要があろう。全体的にみて、ノミに



第 30 図　ナスビ形鍬、えぶり実測図（縮尺 1/4）

よる加工が丁寧に成されている。

残存長27cm、着柄軸部長11cm、幅2.6～3.1cm、厚さ3cm、身部最大幅11.2cm、最大厚3.4cm、柄孔1.4×1.5×1.7cm、下段溝長2.5cm、幅3.3～3.9cm、厚さ3.15cm。

23・24は、共に着柄軸部を欠損し、溝部分を残す。身部も破損し全体形をとどめないが、22と同様にU字形鉄製の刃先を装着した痕跡はみられず、ほぼ同形態を示す。

23は、残存長23.8cm、溝幅2.8cm、身部最大幅10.5cm。

24は、残存長21cm、溝幅3.7cm、身部最大幅9.55cm。

えぶり（図版55、第30図）

25は、第2セクション北側暗灰黒色砂質土より出土。26よりやや小型で歯部も短小である。一直線の下縁に山形の16本の歯を作り出し、両肩に丸味をつける。柄の装着の方法は、えぶり26と異なり、柄孔を穿たず、中央と左右に計6カ所の木釘孔がある。そして、中央と右側に各1カ所木釘が残存する。従って、中央に柄を固定して、左右からも中央の柄を補強して、先端が三叉になった柄を作っていたと思われる。歯は両面からの切り込みにより作り出す。

長30.6cm、幅6.4cm、木釘孔径0.3cm。

26は、G45付近より出土。層位不明。一直線の下縁に8本の山形の歯をつくりだし、両肩に丸味をつける。長方形の柄孔は、中央上寄りからやや偏して穿ち、前面に対して鋭角の着柄角度をもつ。歯は両面からの切り込みにより作り出す。歯先はかなり磨滅し、円味を帯びる。また、歯部と反対側の直線面には、柄孔に対して直角に孔が穿たれ、柄を固定するために打たれたくさびが残存している。

長41.4cm、幅10.2cm、厚さ2.8cm、柄孔2.6～2.9×5.1～5.4cm、くさび孔1×2cm。

田下駄（図版56～58、第31図）

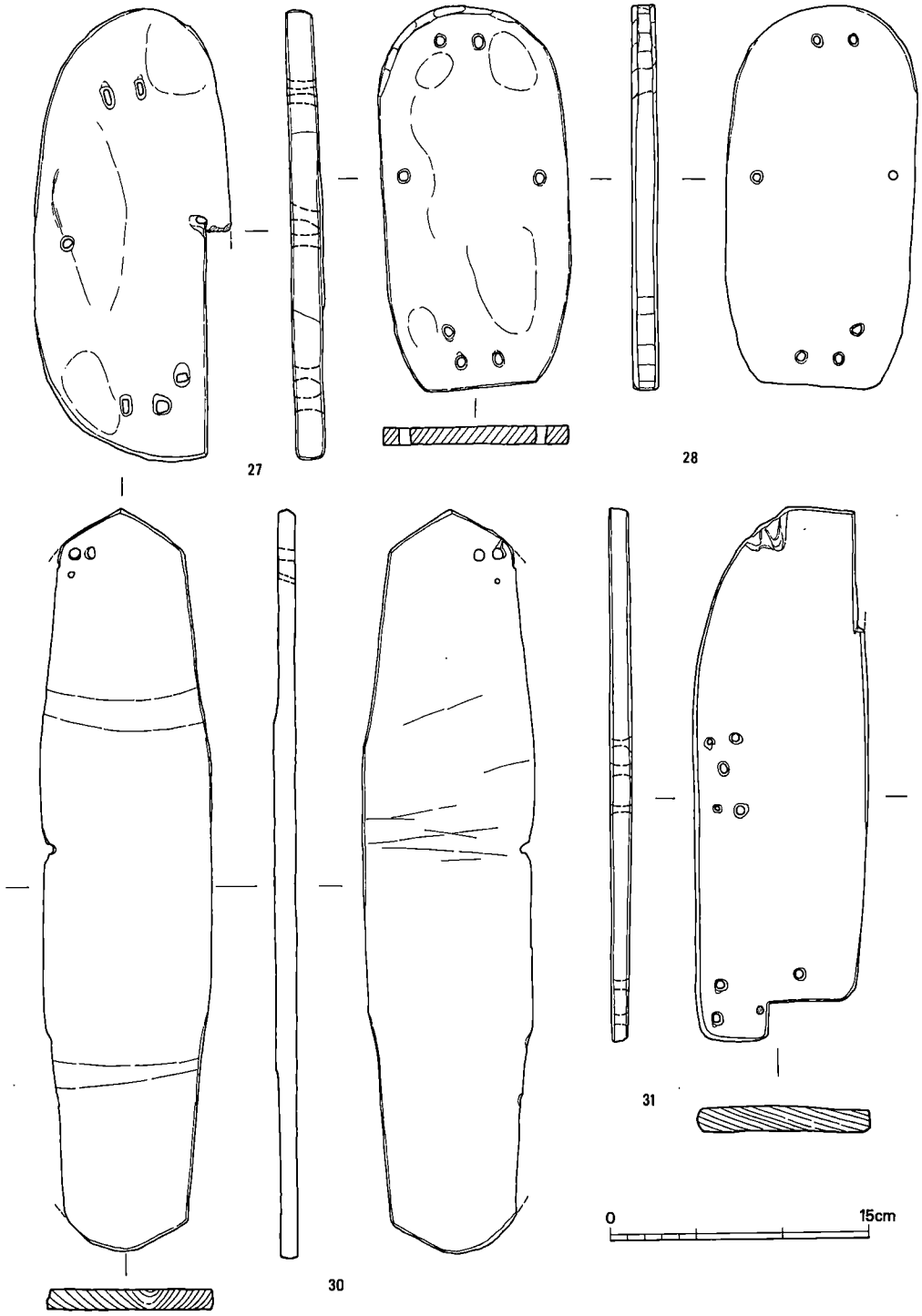
27は、木製品集中区より出土。隅丸長方形を呈する無歯の下駄型の田下駄である。台裏面中央部がやや突出しており、この前後に外枠を取りつけたと思われる。前幅が後幅より狭い。前・後縁共外側がU字形になる。鼻緒孔は全部で7孔あり、前部2孔、中央部2孔、後部3孔である。台部上には、前後鼻緒辺に親指圧痕が観察でき、左右両用だった可能性もある。

全長26cm、台部幅11.4cm、厚さ1.6～1.8cm、鼻緒孔径0.3～0.8cm。

28は、G24暗灰黒色砂質土より出土。隅丸長方形状を呈する無歯の下駄型の田下駄である。しかし、外枠を取りつけた痕跡は明瞭でない。前縁外側は弧状で、後縁は中央が平坦、両端が丸くなる。共に手斧はつりが明瞭である。鼻緒孔は全部で7孔あり、前部に2孔、中央部に2孔、後部に3孔である。こうした前後部の多孔の意味は田下駄の機能を考える上で重要である。台部上には、前後鼻緒孔辺に親指圧痕が観察でき左右両用だった可能性もある。

全長22.2cm、台部幅10.8cm、厚さ1cm、鼻緒孔径0.5cm。

30は、木製品集中区下層より出土。前後縁共三角形に作り出し、前後部側面はやや内湾気味



第 31 図　田下駄実測図（縮尺 1/4）

に削り込む枠型の田下駄である。中央部側面は平坦である。台中央部裏面は突出し、前後端に木枠が取りつけられるようになる。鼻緒孔は、前部が中央より右側に偏して3孔、中央部右側端に1孔が穿たれる。また、後部右側には、「紐ずれ」痕が2条認められる。台中央部よりやや上方に、刃物痕が走る。

全長42.9cm、台部幅9.9cm、厚さ1～1.3cm、鼻緒孔径0.3～0.7cm。

31は、G24暗灰色砂質土より出土。長方形状を呈する無歯の下駄型の田下駄である。外枠を取りつけた痕跡は明瞭でない。前縁は中央部が平坦で、左端のみ弧状に削りこむ。後縁は一方を長方形に切り取り、突出部を設ける。鼻緒孔は全部で9孔あり、中央部左側に偏して5孔、後部に4孔ある。前部には穿孔がない。また後部の1孔には木釘がつまっている。鼻緒孔の「紐ずれ」方向は、左上から斜方向へ認められる。前部左上には2条の「紐ずれ」が顕著である。台部後方左端に斜方向に刃物痕が走る。

全長28.6cm（突出部長2.3cm）、台部幅10～10.2cm、厚さ1～1.3cm、鼻緒孔径0.3～0.6cm。

征目材、成長輪6本／cm。

78は、第2セクション北側木製品集中区より出土。隅丸長方形を呈する無歯の下駄型の田下駄である。台中央部より縦方向に半折している。台中央部がやや凹み、この前後に外枠を取りつけたと思われる。前縁の外側は弧状、後縁の外側はU字形を呈する。台部表面上には不定方向に刃物痕が走る。鼻緒孔は多孔式にならない。前後鼻緒孔間の距離がやや広い。孔はほぼ方形に穿たれる。台部上の親指圧痕から右足用と思われる。

全長27.1cm、厚さ1.8～2.1cm、鼻緒孔径0.6～0.7cm。

スコップ形木製品（図版59、第33図）

33はG44付近より出土。鋤の把手部分の未製品である。把手内は、半分しか刳りぬいていないが、把手を半環状に作ろうとしている。粗い加工痕は、2カ所の面にみられるだけである。また、鋤は一木鋤にしても、組合せ鋤にしても、把手と握りは一木で柄を形成するはずだが、本例では、その連接部がカットされている。その用途については、疑問の余地が多い。

長30.7cm、幅16cm、厚3.4～3.6cm、把手握り長2.9～3.5cm、把手握り幅3.3cm、把手と握りとの連接部4.6×2.6cm。

本例は、未製品であり、井上薬師堂遺跡周辺が木製品の消費地だったばかりでなく、製作地であった可能性も示す貴重な資料となろう。

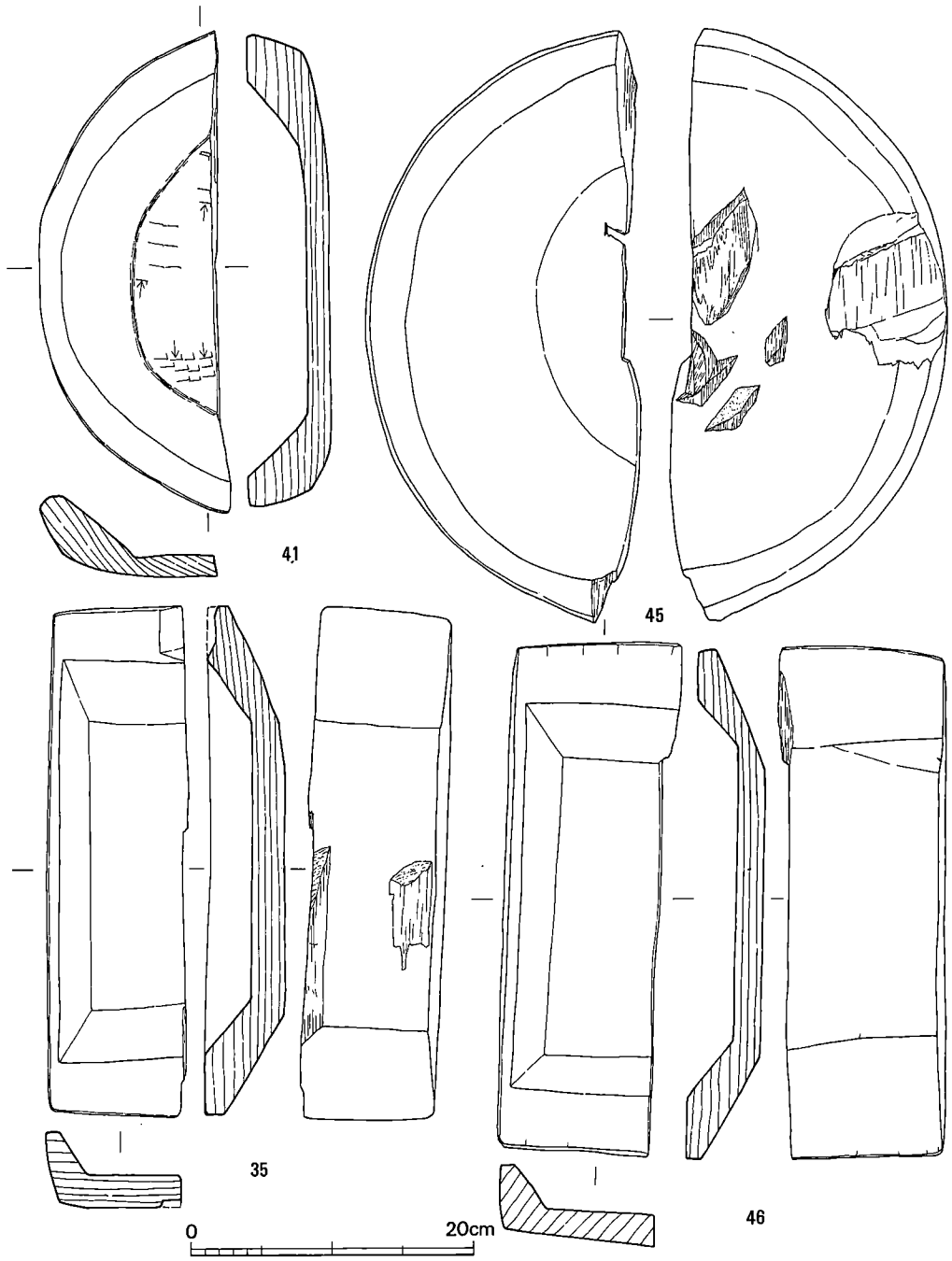
ウ．什器類容器

刳物17点が出土している。

刳物（図版59～62、第32～33図）

35は第2セクション暗灰黒色砂質土より出土。心去りの割材を刳りぬいた略長方形槽である。

主軸方向に半折する。平面形は長方形の刳りぬきを上面からいれる。内壁の四面は法をとる。両木口面及び側面下方では内方にむけ斜めに削る。下面は平滑にする。尚、木口面と内壁短辺



第 32 図　槽各種実測図（縮尺 1/5）

は平行にならない。

長35.9cm、残存幅9.8cm、高5.7cm。

36は木製品集中区より出土。主軸方向に半折する。心持ち材を4等分して、そのうちの一つを使用する。平面長方形で中軸線上から偏して断面長楕円形の把手を削り出す。木口面は半円形に加工し、内壁四面は法をとる。主軸縦断面は台形を呈する。

形態は、把手を取ると、35と大小の違いこそあるが同タイプのものになる。

全長69cm、高14cm、把手長8cm、幅4×2cm。

41は、Bトレンチ暗灰黒色粘質土より出土。心去りの割材を刳りぬいた円形槽である。主軸方向に半折している。平面形が略円形で、口縁部と底部との境がはっきりしない。口縁端部が厚く偏平で、側面は内方に向け斜めに削り出す。内面には手斧はつり痕が明瞭に残る。

長33.7cm、高5.9cm。

45はG37における重機深掘りで出土。心去りの割材を刳りぬいた円形槽である。主軸方向に半折している。41に比べ大型である。平面形が略円形で、口縁部と底部との境がはっきりしない。口縁端部が厚く、側面は内方に向け斜めに削り出す。

長41.6cm。

46は、G13～14、G19～20間の暗灰黒色砂質土より出土。横木取りした材を刳りぬいた長方形槽である。中央部から主軸方向に半折している。板材の内外とも平坦な底部から口縁部へ斜めに立ち上がる。口縁端部は長辺が薄く短辺が厚い。各面とも平滑に整える。平面形は長方形の刳りぬきを上面からいれる。

長36.2cm、幅10.9～12cm、高さ5.1cm。

47は、G13暗灰黒色砂質土より出土。心去りの割材を刳りぬいた槽である。腐植が甚しい破片で、全体を復元しえない。平面形は楕円形の刳りぬきを上面からいれる。木口側縁はやや弧状をなす。主軸線から片側に偏して柄部が削り出されるが、身部側面と平行にならない。柄部周縁は上下から面取りをする。身部裏面に焼けて黒変する箇所を残す。

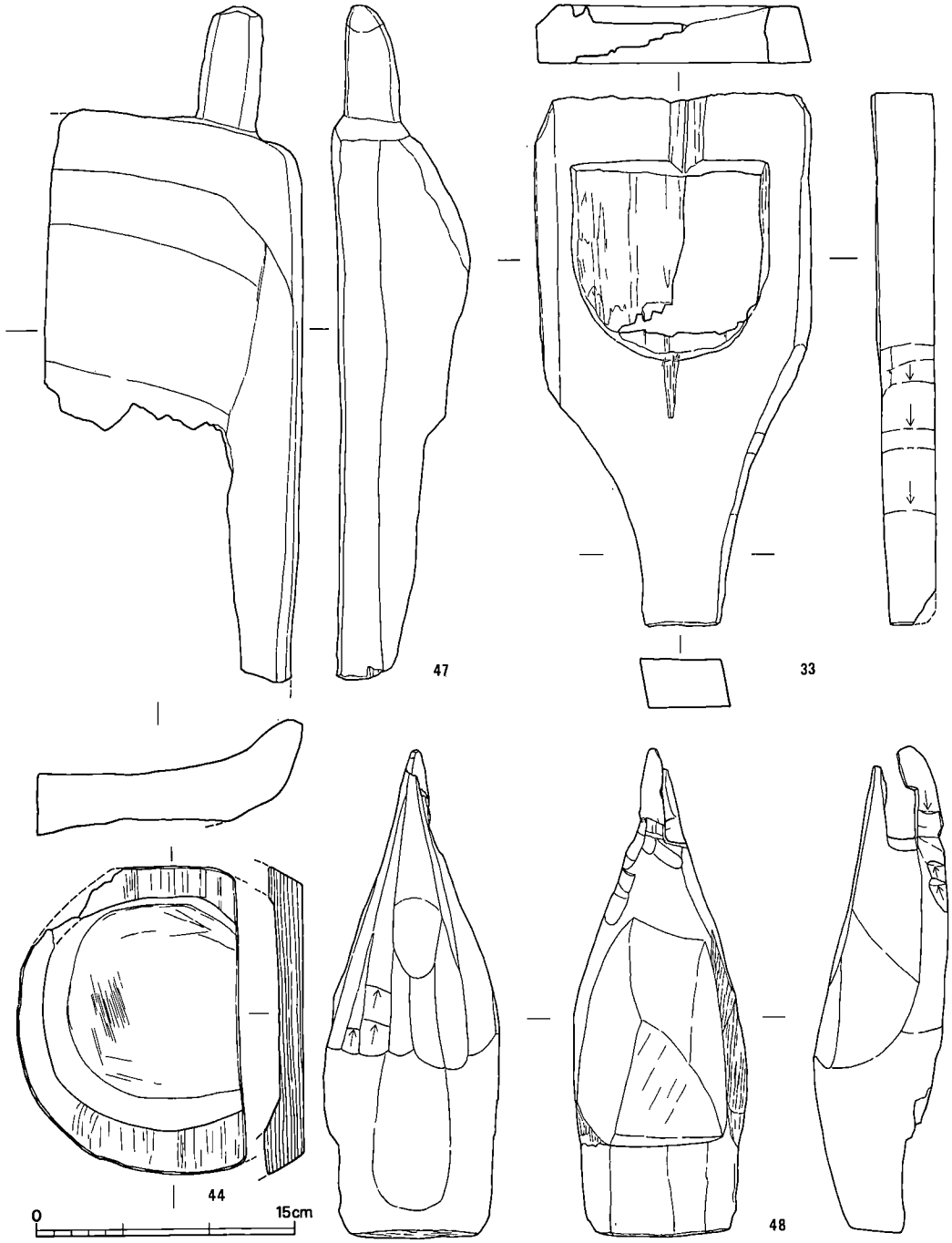
残存長39.1cm、残存幅15cm、厚7.6cm、柄部長6.5cm、柄部幅3.6cm。

48は、Bトレンチ北壁暗灰黒色粘質土（粘性強）より出土。心持ちの丸太材から作り出す杓子状の刳物である。丸太材は中央部から木口面方向にはつりを行ない斜めに削り、先端を尖らせる。先端部には左右から穿孔を入れる、但し、一部欠損している。先端から5cm程のところに抉り込みがあり磨滅痕が残る。身部は内壁に法がある。木口側は、欠損する。

このような類例は他にみないので、穿孔のあり方などその用途については疑問が残る。

長28.4cm、身部幅10cm。

49は、G24、G26間暗灰黒色砂質土より出土。横木取りした材を刳りぬいた円形鉢である。中央部より半折するが、その破目を修理した補修痕がみられる。口縁部は底部から斜め上方に



第 33 図　スコップ形木製品、刳物容器実測図（縮尺 1/4）

直線的に立ち上がる。口唇部は若干尖り上がる。また、底部はやや上げ底になる。

口径14cm、器高3.1cm。

44は、G43南付近暗灰黒色砂質土下層より出土。皿。内外共粗い削りで作り出す。底部から斜め外方に立ち上がって口縁部に達するようだが、底部内面より若干上方から欠損する。底部内外面には、不定方向の刃物痕を多数とどめる。平面は略円形になる。

径17.7cm、残存高2.3cm。

板目材で、成長輪10本／cm。

エ、什器類食事具

さじ、杓子形木製品4点、俎7点が出土している。

杓子形木製品（図版62、第34図）

50は、第2セクション第3層より出土。主軸方向に半折する。曲物からの転用を思わせる結合孔がある。身の先縁はほぼ一直線になる。また、柄先端は丸味を持つ。柄側縁と柄から身へ撥形に広がる肩部は稜角を削り取り、薄くする。一方の面には、不定方向に多数の刃物痕が残る。

長28.5cm、幅0.8cm。

52は、第2セクション北壁東側暗灰黒色粘質土より出土。身部は前方部を欠失している。頸部は撥形に削り、柄尻がやや幅広くなる。柄部は表裏共面取りがなされる。曲物からの転用材と思われ、柄部先縁が平直でなく、側面も法を設ける。

残存長12cm、身部幅3.3cm、身部厚0.7cm、柄部幅1.7～1.9cm、柄部厚0.7cm。

53は、G15暗灰黒色砂質土より出土。身部は先端部を欠失している。身部主軸上では、2カ所に曲物にみられる2個1組の結合孔があり、転用材と思われる。細長い身部から頸部を撥形に作り出し、柄尻が若干幅広くなる。柄部先縁は一直線になる。身部断面は中央が甲高になる。

残存長20.6cm、身部幅3.3cm、身部厚0.6～0.7cm、柄部幅1.8～1.9cm、柄部厚0.7～0.8cm。

さじ形木製品（第34図）

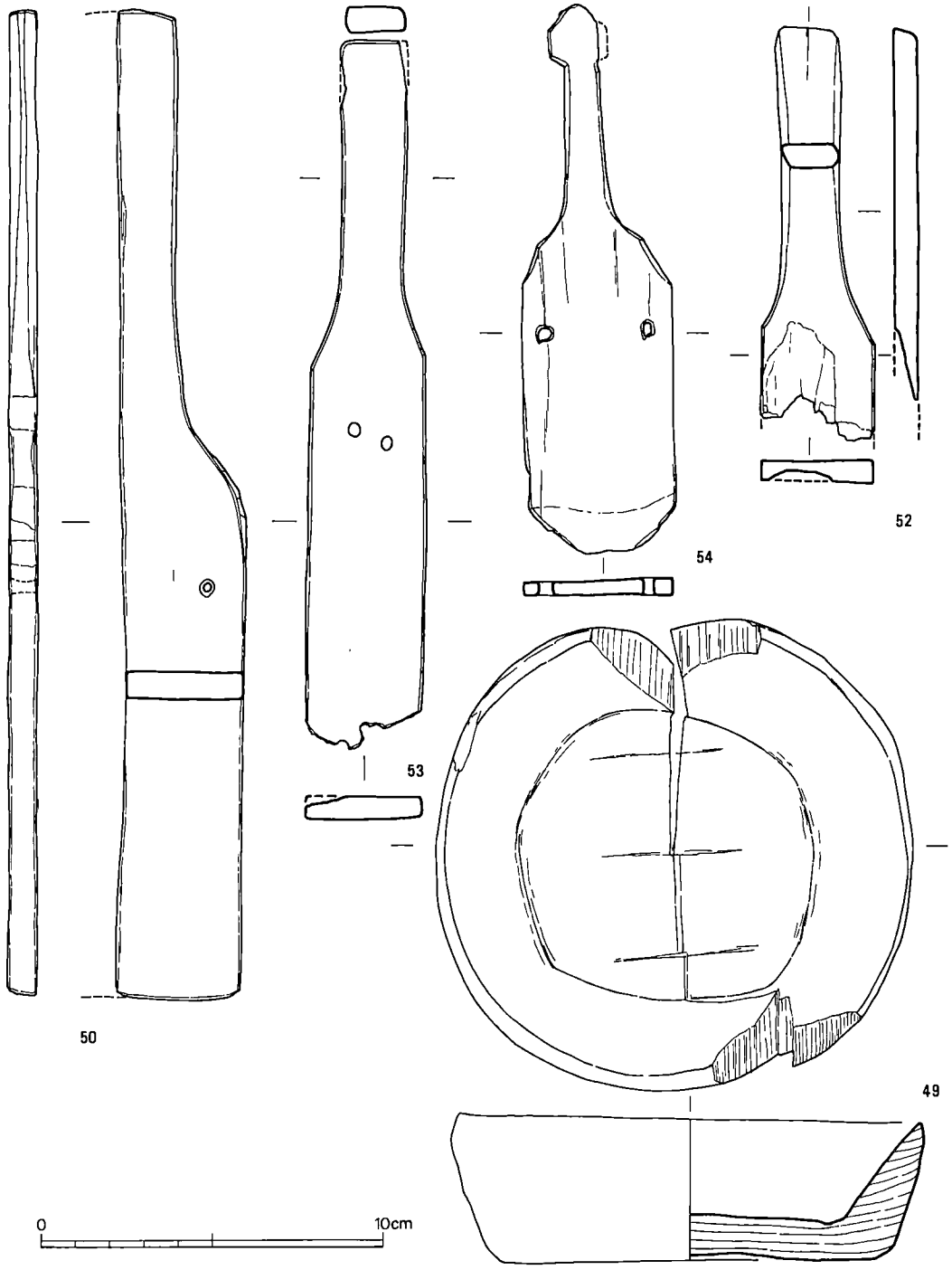
54は、G26暗灰黒色粘質土より出土。小さな細板を削って作ったさじ形の木製品である。身の先縁は両端を切り取り、台形状を成す。また、身の側縁から頸部に移る折曲点は2段の稜角をなし撥形の頸部をなす。さらに柄は真直ぐで、先端は6角形状の突出部を設ける。表面は平滑に仕上げる。

身上方左右には2カ所に穿孔がみられ、曲物などからの転用品とも考えられる。

長15.9cm、身幅4.4cm。

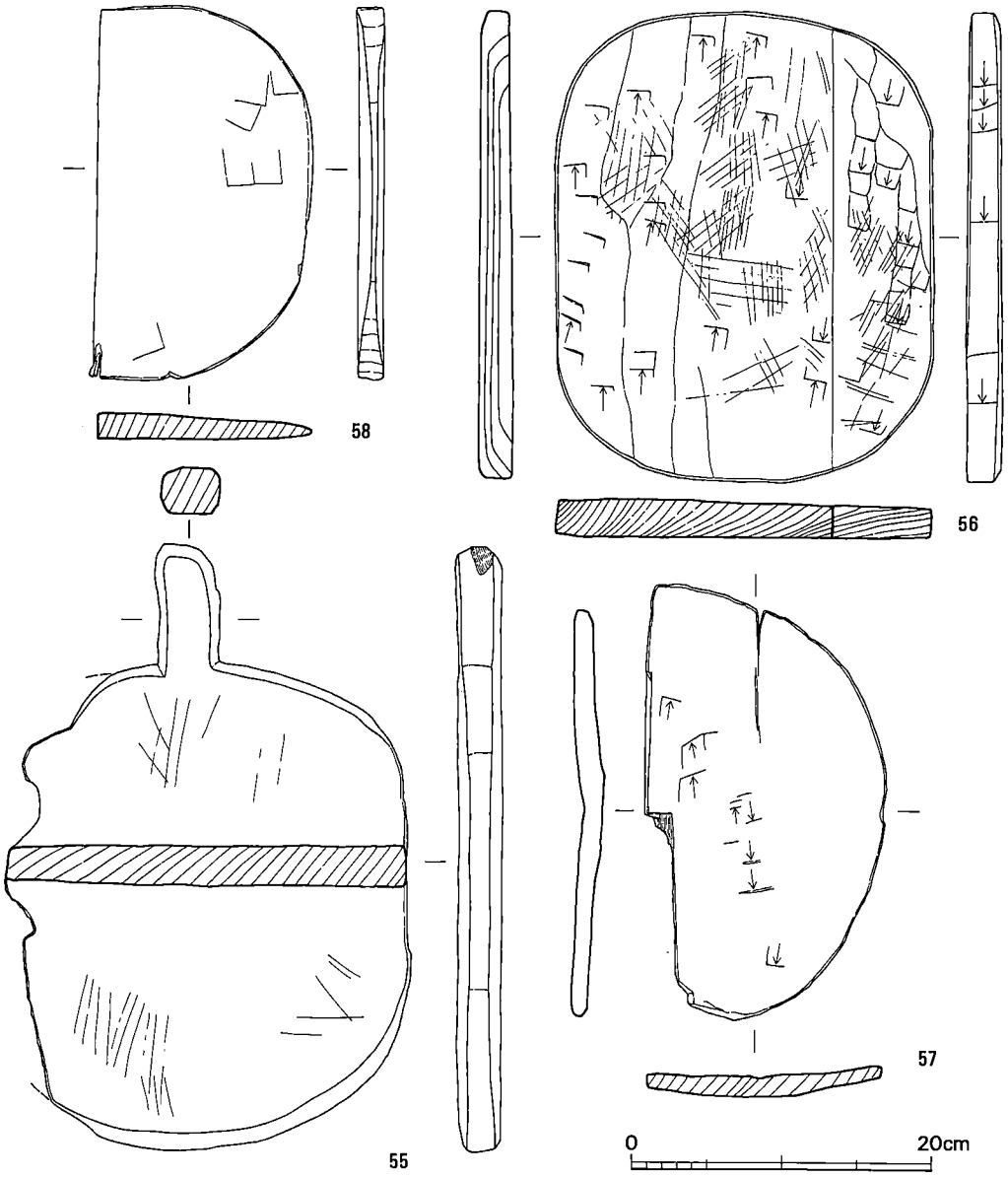
俎（図版63～66、第35～36図）

55は、木製品集中区下層より出土。長方形の盤材から、台部と柄部を作り出す。柄付俎であ



第 34 図　鉢、杓子形・さじ形木製品実測図（縮尺 1/2）

る。台部は木口先縁を弧状になし、周縁は上下から面取りする。両側縁を平直にする。一側面は欠損している。欠損面には焼けて黒変した箇所をとどめる。柄部は短く作り出し、周縁は上下から面取りする。台部上面には、不定方向に刃物痕を残す。



第 35 図　俎各種実測図①（縮尺 1/5）

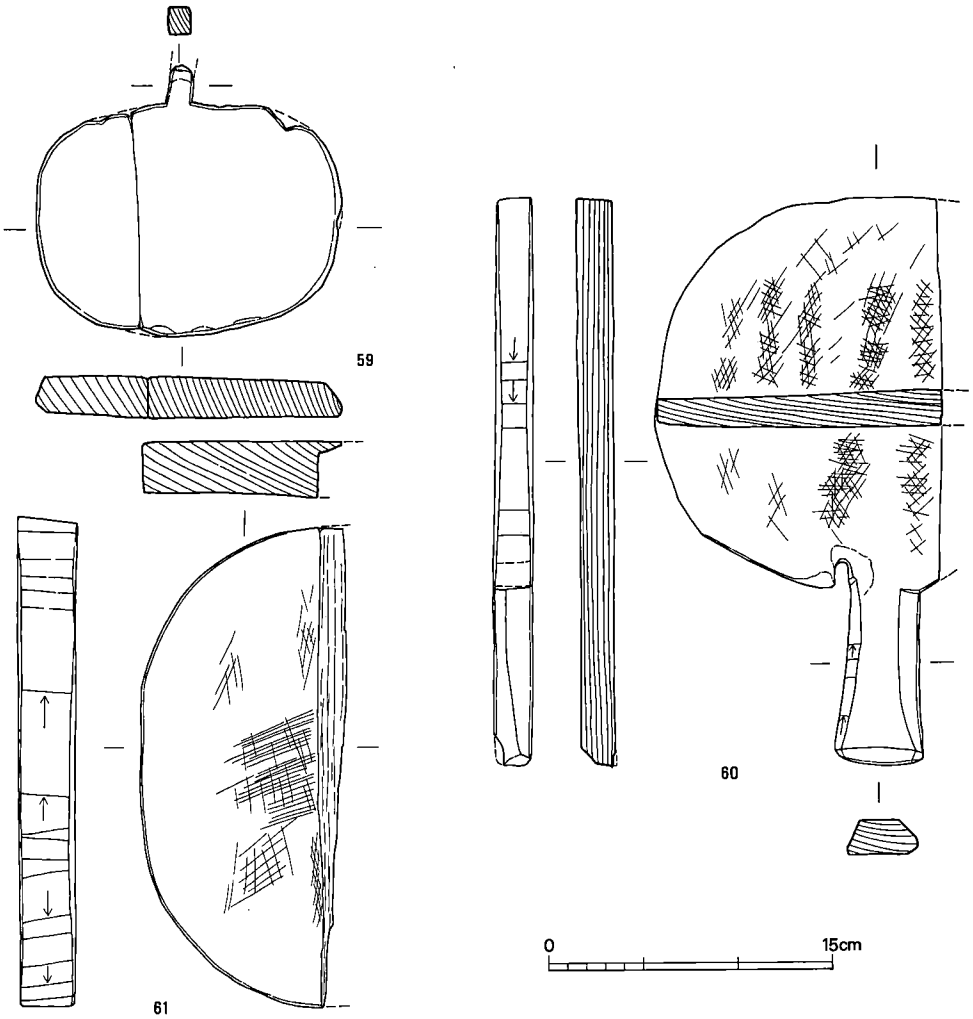
長40.2cm、台部残存幅26.8cm、台部厚2.2～2.8cm、柄部長８cm、柄部幅4.1cm、柄部厚3cm。

56は、Ｂトレンチ北壁暗灰色砂質土より出土。隅丸長方形を呈する盤状のもので、表裏、側面共、主軸方向への手斧はつり痕（刃幅1.6cm）を明瞭にとどめる。盤上には不定方向に多数の刃物痕を残す。盤中央がやや甲高になる。また盤裏面の周縁は、斜め方向に削り出し面取りする。

長31.1cm、幅25.2cm、厚２～2.6cm。

征目材。

57は、Ｇ37～38暗灰黒色砂質土より出土。心持ちの征目材で、円盤状を呈する。一部欠損する。上面は中心から左右への手斧はつり痕が明瞭にみられる、断面は琴柱形をなす。盤上の刃



第 36 図　俎各種実測図②（縮尺 1/4）

物痕がはっきりしないので、蓋板に用いられたかもしれない。表面は焼け黒変する箇所がある。

残存長29cm、厚0.9～1.4cm。

58は、G23～29東西ベルト暗灰黒色粘質土より出土。隅丸方形状を呈するものだが、一部欠損する。上面に手斧はつり痕がみられる。中心から左右側縁に向い、漸次細くなり、端部は丸く収まる。盤上の刃物痕がはっきりしないので、蓋板に用いられたかもしれない。

残存長24.5cm、厚1.7cm。

59は、G18暗灰黒色粘質土より出土。板目取りの盤材を削り、長楕円形の身とツマミ状の突起をつくる。身部分表裏共に刃物痕などによる刻線がみられない。俎以外の用途も考えられる。ツマミ部分先端は欠損しており、本来もう少し長かったと思われる。

残存長14.3cm、身部長12.2cm、身部幅16.2cm、ツマミ部幅1.3cm。

60は、木製品集中区より出土。長方形の盤材から、台部と柄部を作り出す柄付俎である。台部は略円形を呈し、周縁は上下から面取りする。側面には手斧はつり痕をとどめる。横断面から中央部が甲高になることがわかる。台部と柄部との境付近に1カ所穿孔がある。柄部は、柄尻に向け末広がりし、周縁に上方から斜めに方向に面取りがなされ、横断面は略台形を呈する。台部上には、不定方向に多数の刃物痕をみるが、大きく5カ所にまとまりがある。裏面にもまとまりをもった刃物痕が残る。

長30cm、残存幅15.2cm、厚1.2～2cm、柄部長9.4cm、柄部幅3.6～4.7cm、柄部厚1.8cm。

板目材、成長輪4本／cm。

61は、G24、G26暗灰黒色砂質土より出土。半分欠損しているが、本来は円形だったと思われる。両面共に不定方向に多数の刃物痕がみられる。側面は手斧はつり痕が明瞭に残る。

長25.6cm、幅10.8cm、厚さ3cm。

オ．什器類服飾具

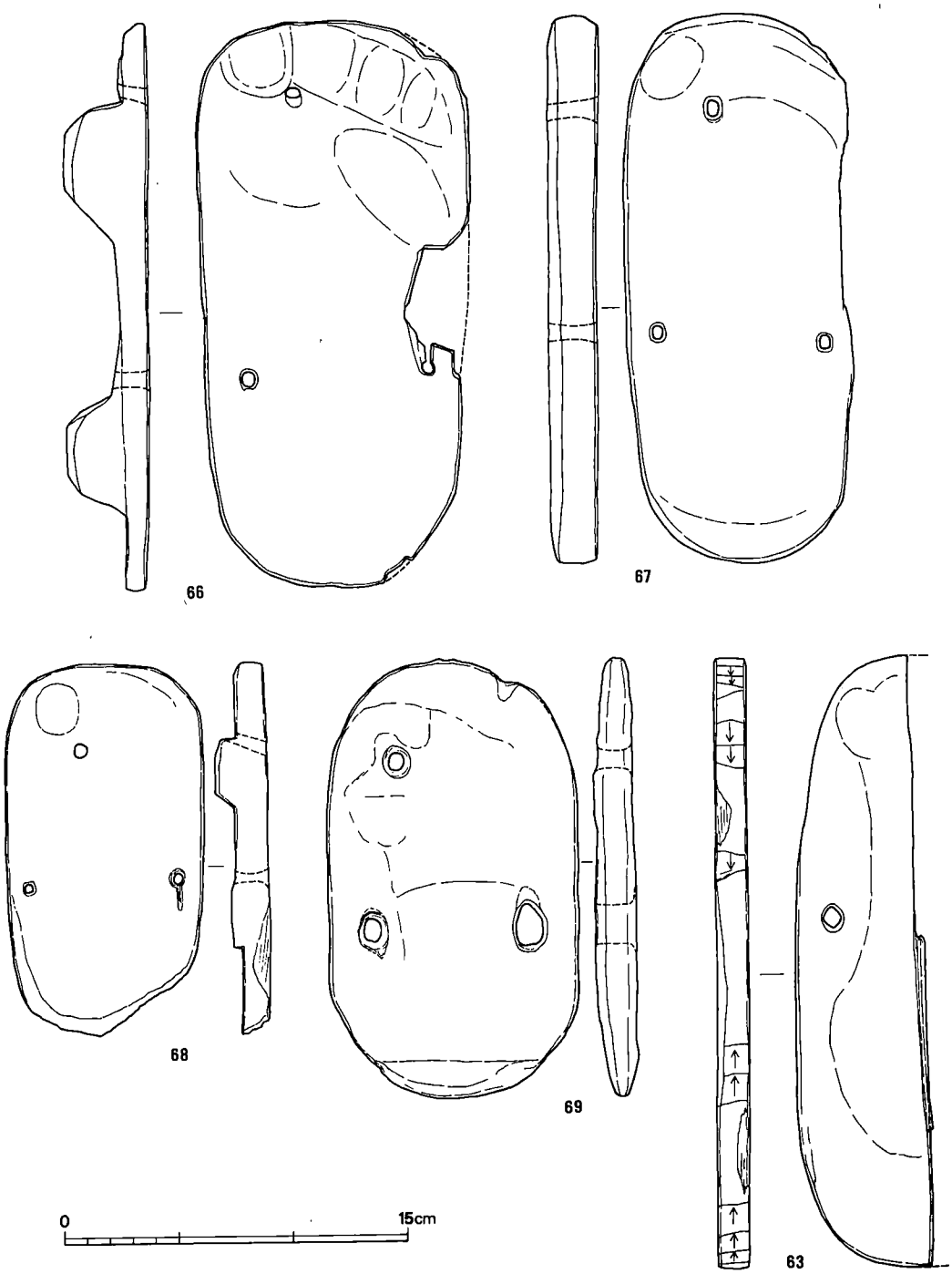
下駄18点、櫛4点、櫛ケース1点が出土している。

下駄（図版66～70、第37～39図、第43図）

63は第2セクション層より出土。主軸方向に半折している。隅丸長方形を呈する無歯の下駄型の田下駄になり、台裏面中央部が削り込まれ、外枠を取りつけていたとも思われる。台側面は、前・後縁より中央部方向へ手斧はつり痕を明瞭にとどめる。台部には「足ずれ」の親指圧痕が残り、右足用だったことが推測できる。後鼻緒孔は前方にやや偏して穿たれる。

残存長26.5cm、厚さ0.9～1.4cm、鼻緒孔径0.8cm。

67は、第2セクションより出土。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄で、前幅と後幅はほぼ同じである。前・後縁外側はやや丸味をもつ。右足用で、前方左端に親指による「足ずれ」がある。歯部は前後共、台部より左右に広がるようであるが、歯の痕跡を留めない。これは、



第 37 図　下駄各種実測図①（縮尺 1/3）

磨滅によるものとも考えられるが、田下駄という可能性も残す。前鼻緒孔は、中央よりやや左に偏し、外方に向け穿たれる。

全長23.7cm、台幅9.4～9.8cm、高さ2.2cm、鼻緒孔径0.4～0.5cm、後鼻緒孔間距離7.3cm。

66は、木製品集中区より出土。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄で、前幅が後幅よりやや大きい。前縁は両端が丸味をもち、後縁は外側がU字形になる。右足用で、「足ずれ」が顕著で、特に足指の痕跡が目立つ。歯部は、磨滅により、両側端が丸くなる。前鼻緒孔は中央より左に偏し、外方に向け穿たれる。

全長25cm、幅11.1～11.9cm、高さ3.5～3.7cm、鼻緒孔径0.5～0.6cm。後鼻緒孔間距離7.8cm。征目材である。

68は、G53付近暗灰黒色砂質土より出土。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄で、子供用になる。前幅が後幅より大きい。前縁は両端を丸くする。後縁は欠失する。右足用で、親指圧痕が明瞭に残る。歯部は磨滅により著しく減り、後歯はほとんどない。前鼻緒孔は中央より左に偏し、外方に向け穿孔する。

全長16.2cm、台幅8.6cm、高さ1.6～2.3cm、鼻緒孔径0.4cm。後鼻緒孔間距離6.5cm。

69は、G13暗灰黒色砂質土下層より出土。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄で、前幅と後幅はほぼ同じである。前・後縁外側は弧状をなす。前鼻緒孔はやや左に偏し、前方左端に親指による「足ずれ」があるため、右足用と思われる。前・後鼻緒共、「紐ずれ」が著しい。歯部は磨滅によりほとんど残らない。大きさから小児用と考えられる。

全長19.1cm、台幅10.8cm、高さ1.8cm、鼻緒孔径0.7～1.8cm、後鼻緒孔間距離6.8cm。

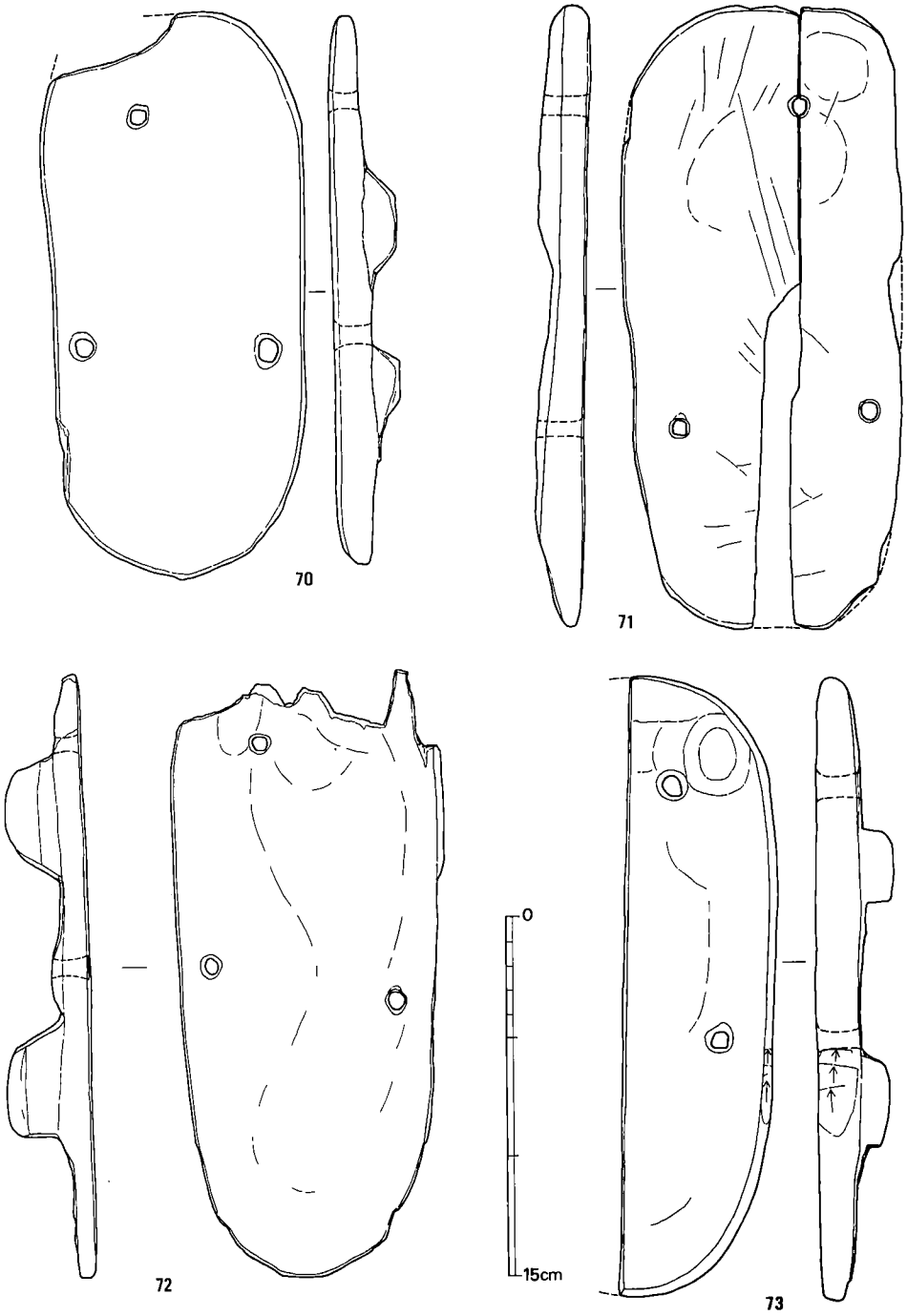
70は、G24暗灰黒色砂質土より出土。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄で、前幅が後幅より広い。前縁は左側が欠失するが、中央が平坦で、両端が丸くなるようである。後縁は外側が弧状になる。右足用で、「足ずれ」があまり見られない。歯部は、磨滅をうけ両側端が丸味を帯びる。また、歯部が台部の内側に入りこむことは、他に例をみない。前鼻緒孔は、中央よりやや左側に偏して穿たれる。「紐ずれ」が顕著である。

全長23.3cm、台幅10.4～11cm、高さ2.7cm、鼻緒孔径0.7cm、後鼻緒孔間距離7.8cm。

71は、G45暗灰黒色砂質土下層より出土。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄で、前幅が後幅より広い。前・後両縁共、中央部が平坦で両端が丸くなる。左足用で、前鼻緒中央で折れる。「足ずれ」がみられる。歯部はその痕跡を留めず、あるいは田下駄の可能性もある。台表面には、不定方向の刃物痕が走る。前鼻緒孔は、中央より右に偏して穿たれる。

全長25.7cm、台幅11.1cm、歯幅11.6cm、高さ1.4～2cm、鼻緒孔径0.6cm、後鼻緒間距離7.9cm。

72は、第2セクション北側暗灰黒色粘質土（砂混入）より出土。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄で、前幅が後幅より大きい。前縁は欠失するが、後縁外側はU字形になる。右足用で、前鼻緒孔付近に親指による「足ずれ」がある他、台全体も「足ずれ」で凹む。歯部は前後



第 38 図　下駄各種実測図②（縮尺 1/3）

共、台より若干広がり、前歯が後歯より長い。磨滅により歯は丸くなるが、歯の遺存度は良好である。前鼻緒孔は、中央よりやや左に偏して穿たれる。また、後鼻緒孔は、左側の方が前に出る。

残存長25.1cm、台幅10.5～10.9cm、歯幅10.2～11.4cm、高さ3.2～3.5cm、鼻緒孔径0.4cm、後鼻緒孔間距離7.9cm。

73は、木製品集中区下層より出土。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄で、主軸方向に半折している。左足用で前方右端、前鼻緒付近に親指の「足ずれ」がみられる。歯部は前後共に磨滅し、両側端が丸くなる。鼻緒孔は「紐ずれ」が著しい。

残存長25.7cm、高3～3.3cm、鼻緒孔径0.7～0.8cm。

板目材、成長輪3本／cm。

75は、G13～14、19～20間暗灰黒色砂質土より出土。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄であるが、縦方向に半分欠失する。前縁は外側が弧状になる。後縁は中央部がフラットになり、両端が丸くなる。「足ずれ」が明瞭でなく、左右を決し難い。歯部は磨滅をうけ、両側端が丸味を帯びる。

全長27.4cm、高さ2.2cm、鼻緒孔径0.5cm。板目材である。

76は、第2セクション暗灰黒色砂質土より出土。一応下駄の項に入れるが、隅丸長方形を呈する無歯の下駄型の田下駄とも考えられる。台中央部で縦方向に半折している。但し、田下駄にしては外枠を取りつけた痕跡が明瞭でない。前・後縁共外側がU字形になる。鼻緒孔は、前部で3孔だったと思われ、多孔式にならない。台部上の親指圧痕から右足用と考えられる。鼻緒孔は「紐ずれ」が内方に認められる。

全長26.6cm、厚さ1.4～1.6cm、鼻緒孔0.6～0.8cm。

77は、木製品集中区下層より出土。半分に欠失する。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄である。台上前後に「足ずれ」がみられる。歯部は磨滅をうけ、両側端がすり減る。前歯長が後歯長より短い。鼻緒孔には「紐ずれ」が認められる。

残存長25.5cm、高さ2.9cm、鼻緒孔径0.8cm。

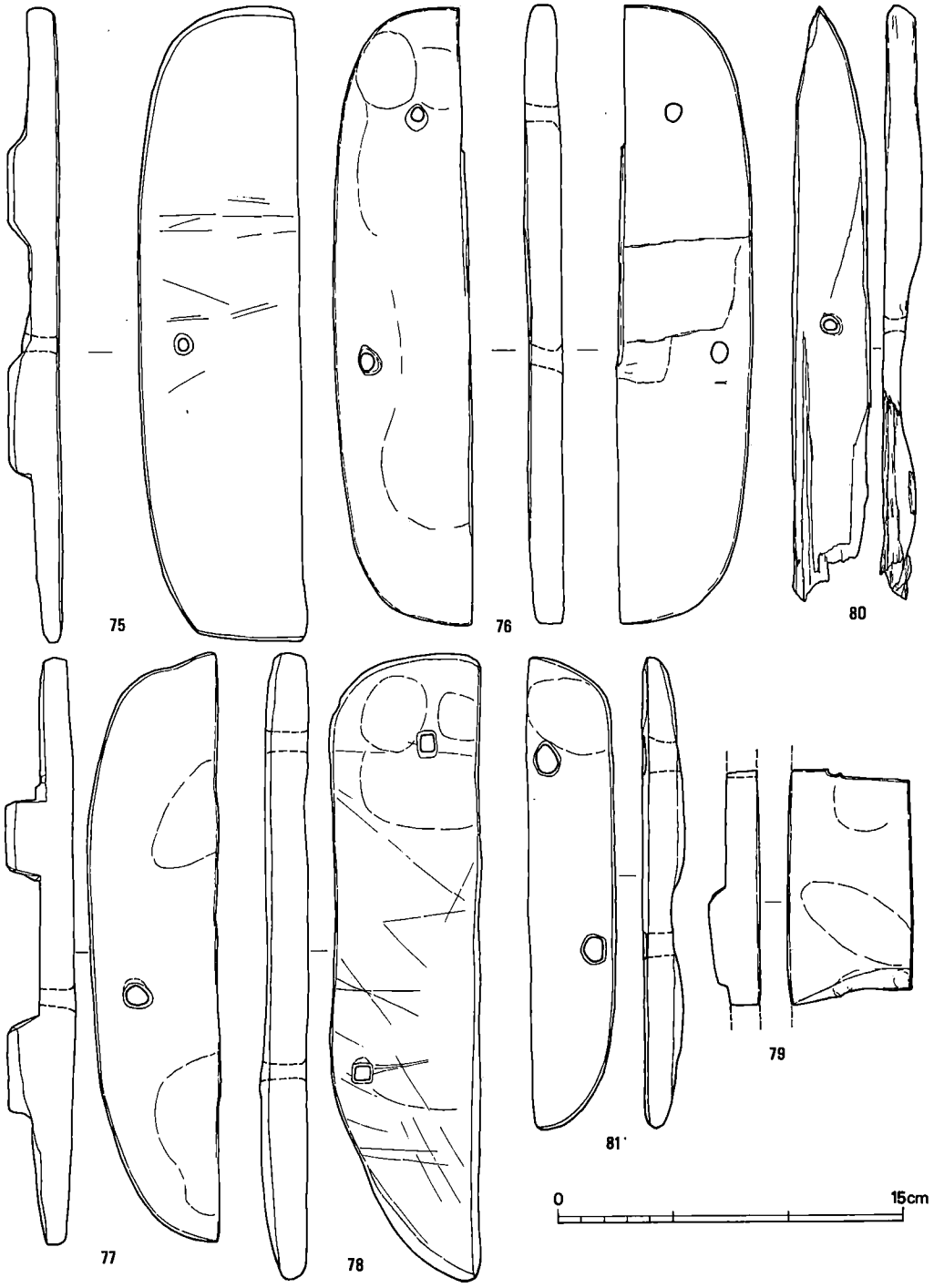
79は、出土地不明。鼻緒孔を1カ所のみ残す連歯下駄の破片である。前歯は前方より後方がすり減る。

残存長10.3cm、幅5.3cm、高さ2.2cm。

80は、G53付近暗灰黒色砂質土より出土。主軸方向に欠損し、3分の1程しか残存しない。2枚歯の連歯下駄である。歯部はほとんど磨滅して残らない。前・後歯部間がややあき、後鼻緒孔はその中間に穿たれる。

残存長25.7cm、高さ1.4～1.6cm。

81は、G27暗灰黒色砂質土より出土。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄である。主軸線



第 39 図　下駄各種実測図③（縮尺 1/3 ）

上に半折する。左足用である。前鼻緒孔は中央より右に偏する。歯部は両歯共磨滅が著しく、ほとんど残らない。

長20.5cm、高さ1.7～1.8cm、鼻緒孔径1.2～1.8cm。

135は、木製品集中区南より出土。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄で、前幅が後幅より広い。前縁は中央が平坦で、両端が丸くなる後縁外側がU字形になる。歯部は、台部より左右に広がる。歯の磨滅が著しく、両側端が大きくすり減る。「紐ずれ」もまた顕著で、他のものに比べ一段と紐孔が大きくなる。前鼻緒孔は、中央より右に偏し、外方に向け穿たれる。

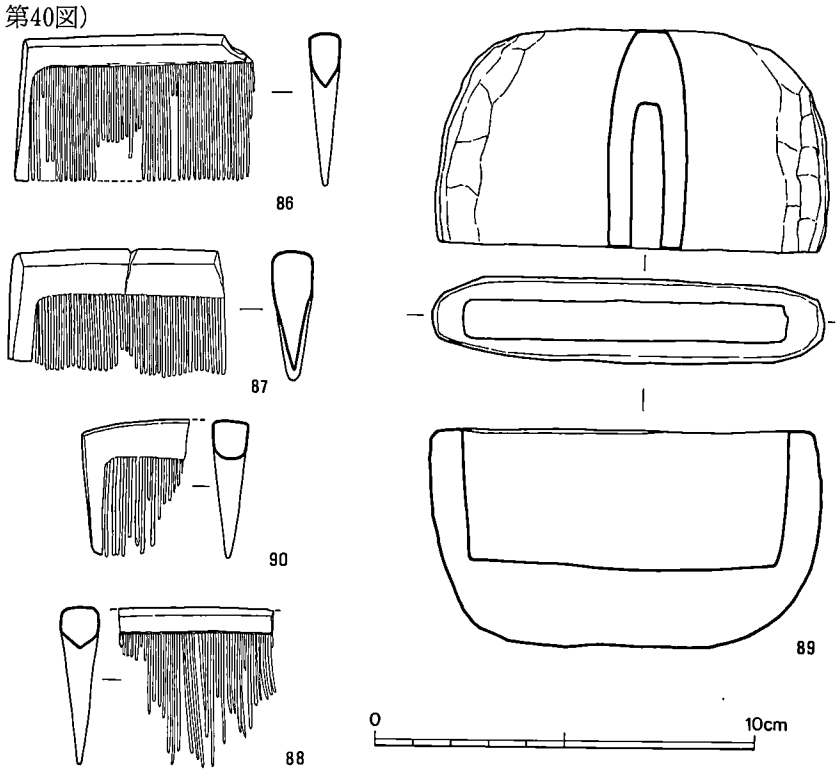
全長28cm、台幅10.2cm、歯幅10.8～11.2cm、高さ3.3～3.6cm、鼻緒孔径0.9～1.4cm、鼻緒孔間距離7.9cm。

136は木製品集中区より出土。主軸方向に半折している。隅丸長方形を呈する2枚歯の連歯下駄で、前幅は後幅より狭くなるようである。歯部は、台部より左右に広がる。歯は磨滅をうけ、両側端が丸味をもつ。鼻緒孔は方形に穿たれる。右足用で「足ずれ」を明瞭にとどめる。

残存長28.5cm、高さ3～3.1cm、鼻緒孔0.8～0.9cm。

櫛（図版71、第40図）

86は、G14暗灰黒色砂質土より出土。長方形で、肩部がほぼ直角に角張る横櫛である。歯のひき出し位置を決める切通し線は、背の上縁に平行して曲線を描く。歯は両側からひき出し3cmあたり28本ある。



第40図　櫛各種、櫛ケース実測図（縮尺 1/2）

現存幅6.2cm、高さ3.8cm、厚0.8cm。

87は、G27暗灰黒色砂質土より出土。長方形のもので、肩部に丸味をもたす横櫛である。歯

のひき出し位置を決める切通し線は、背の上縁に平行して曲線を描く。歯は3cmあたり23本ある。歯は両側からひき出すようだが、本例ではひき出しが浅く未製品であると思われる。

現存幅5.8cm、高さ3.5cm、厚1.1cm。

88は、G38茶黒色粘質土より出土。破片で全容がつかめないが横櫛になる。歯のひき出し位置を決める切通し線は、背の上縁に平行している。歯は両側からひき出し、3cmあたり20本である。

現存幅4.1cm、高さ4.1cm、厚さ1cm。

90は、第2セクション暗灰黒色砂質土より出土。破片だが長方形状の横櫛を思われ、肩部はやや鋭角に角張る。背部は、弧状を描くようである。歯は両側からひき出し、2cmあたり14本である。

現存幅2.5cm、高さ3.6cm、厚0.8cm。

櫛ケース（図版71、第40図）

89は、G24、26間暗灰黒色砂質土より出土。長方形薄い割材を平滑に仕上げ、長辺側縁から平面形長方形の刳り込みを入れ、櫛ケースのようになる。両木口面は丁寧に削り出し、刳り込み面反対の側縁両隅は丸くなる。

長10.4cm、幅2.2cm、高5.6cm、刳り込み部長8.6cm、刳り込み部幅1cm、刳り込み部深さ3.7cm。

カ．什器類曲物

円形・長楕円形・その他の曲物75点が出土している。

曲物は、底板に側板を立て、樺皮で結びつけて、桶等の容器になるものを言うが、本遺跡では、すべて破片での検出で、その全容を知ることができない。そこで、まず平面から大きく円形、長楕円形、その他に分類し、さらに「木器集成図録　近畿古代編」に基づいて、

①樺皮結合曲物A　底板の周縁に低い段をめぐらして、側板を結合したもの

②樺皮結合曲物B　底板の周縁に低い段をめぐらさないもの

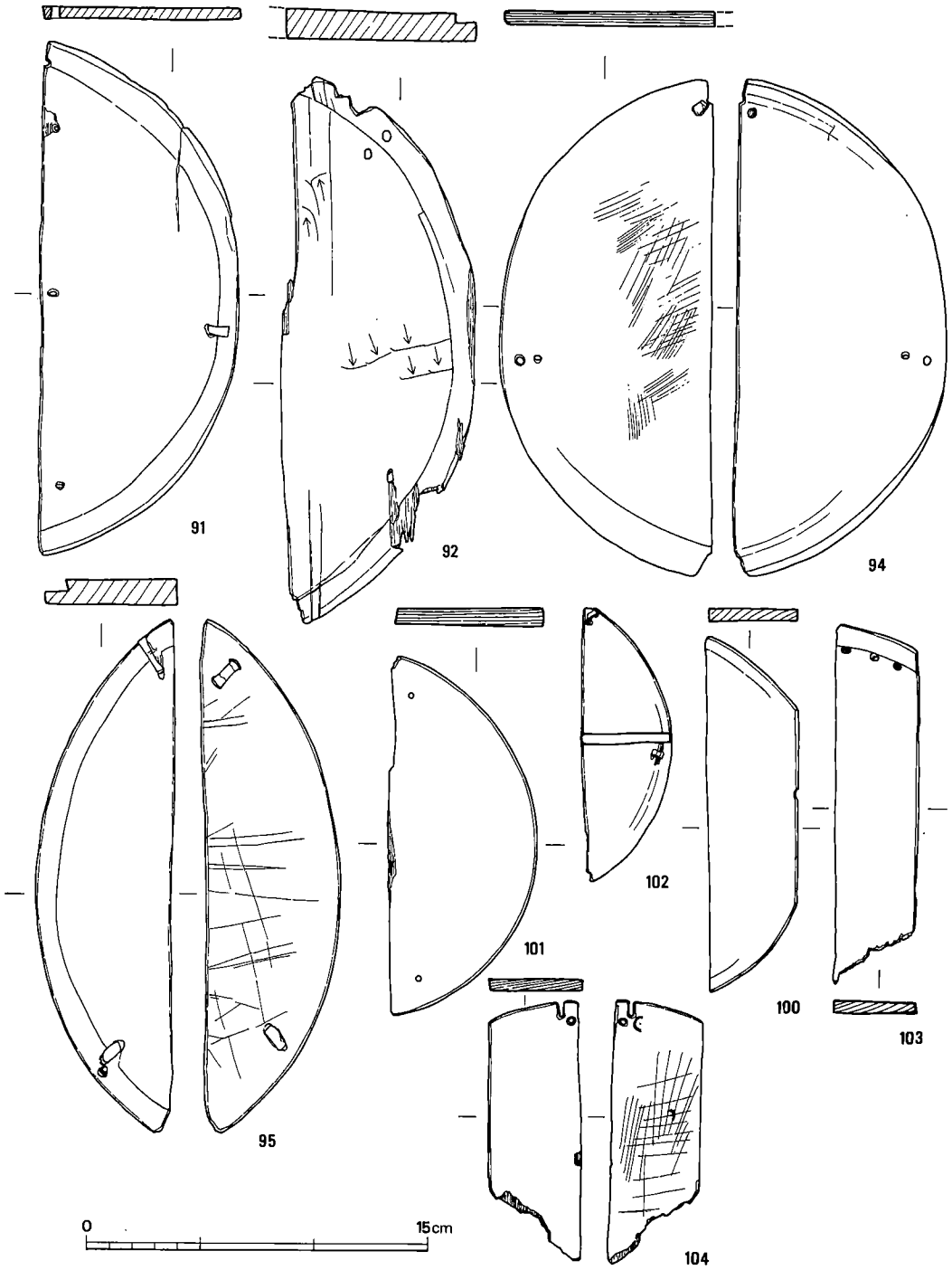
に細別して説明する。

円形曲物（図版72～73、第41図）

91は、第2セクション暗灰黒色粘質土より出土。破片。円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。2カ所に結合孔があり、1カ所に樺皮をとどめる。表面は焼け、黒変する箇所がある。内面には、結合位置を決めた刻線がある。本例は、使用途中に割れたらしく、3箇所に補修孔がある。

残存長22.3cm、残存幅8.7cm、厚0.5cm。

92は、出土地不明。破片。円形板の周縁に低い段をめぐらして、側板を結合した樺皮結合曲物Aである。2カ所に結合孔があるが、樺皮をとどめない。表面に不定方向の刃物痕が残る。



第 41 図　円形曲物各種実測図（縮尺 1/3）

内面は手斧はつり痕が明瞭にみられる。本例で注目すべきは、側板を一周させた時に重複する箇所を予め想定して、周縁に低い段をめぐらす際、内方に切り込みを入れている。他のものに比べ、やや厚い。

残存長23.8cm、残存幅8.5cm、厚1.2～1.3cm。

94は、木製品集中区より出土。破片。円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。2カ所に結合孔があり、1カ所に樺皮をとどめる。表面に不定方向の刃物痕がある。結合位置を決める刻線がある。また側板の圧痕が若干残り、側板の厚さが0.3cmぐらいであったことがわかる。表面には不定方向に多数の刃物痕がある。

長21.7cm、幅9.2cm、厚さ0.7cm。

95は、Bトレンチ北側より出土。破片。円形板の周縁に低い段をめぐらして、側板を結合した樺皮結合曲物Aである。2カ所に結合孔があり樺皮をとどめる。表面に不定方向の刃物痕がある。

長22.5cm、幅5.9cm、厚さ1.1cm。

100は、第2セクション暗灰黒色砂質土より出土。破片。円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。結合孔はない。但し、結合位置を決める刻線がある。周縁には焼けて黒変している箇所がある。

長15.6cm、幅4.1cm、厚さ0.5～0.6cm。

101は、出土地不明。破片。円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。2カ所に結合孔があるが、結合孔は二個一組にならず、一個単独である。このことから、本例は側板を立てない蓋板とも考えられ、2カ所の穿孔は紐ないし棒材を固定するためのものかもしれない。

長15.7cm、幅6.5cm、厚さ0.7～0.8cm。

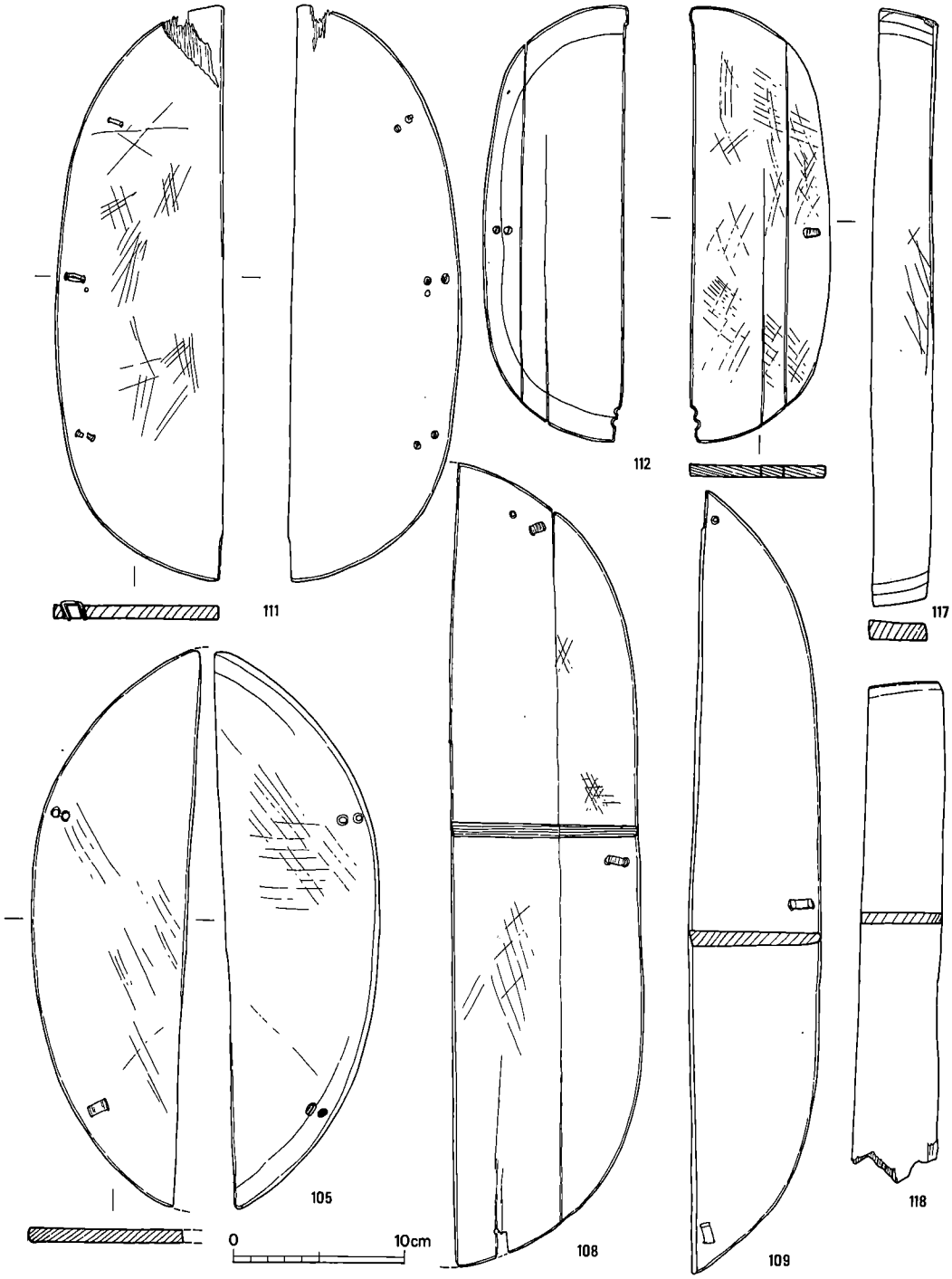
102は、G53南側付近暗灰色砂層より出土。円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。3カ所に結合孔があり、2カ所に樺皮をとどめる。側板押圧痕がのこり、厚さが、0.3cmぐらいある。

長12cm、幅5cm、厚さ0.5cm。

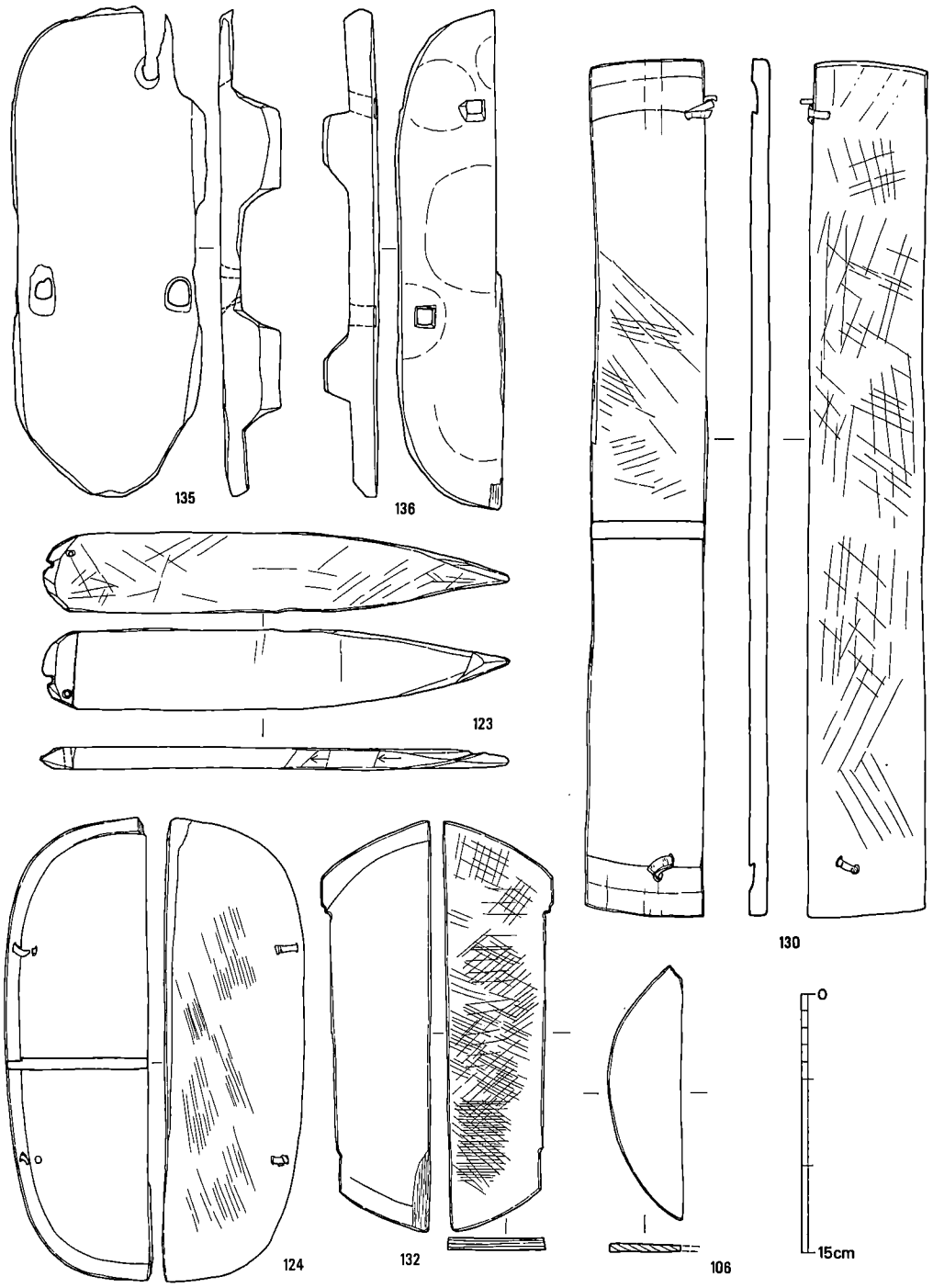
103は、第2セクション暗灰黒色砂質土より出土。破片。円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。結合位置を決める刻線がある。刻線内側に沿って、3カ所に結合孔がみられるが、どれも貫通していない。

残存長15.7cm、幅3.6cm、厚さ0.5cm。

104は、第2セクション暗灰黒色砂質土より出土。破片。円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。1カ所に結合孔がある。表面には不定方向に多数の刃物痕がのこると共に、結合孔付近に穿孔位置を示す「⊙」の錐状の痕跡がみられる。



第 42 図　長惰円形曲物各種実測図（縮尺 1/4）



第 43 図　下駄・曲物実測図（縮尺 1/4）

残存長11.3cm、幅4.1cm、厚さ0.5cm。

106は、G45付近層位不明。破片。円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bの形態をなすが、結合孔がないため、蓋板とも考えられる。断面は内側に行くに従い薄くなる。

長14.6cm、幅4.2cm、厚さ0.3～0.5cm。

130は、Bトレンチ暗灰黒色砂質土より出土。破片。円形板の周縁よりやや内に低い段をめぐらして、側板を結合した樺皮結合曲物Aである。2カ所に結合孔があり、樺皮をとどめる。表裏面に不定方向に多数の刃物痕がある。

長49.1cm、幅6.5cm、厚さ1.1cm。

132は、第2セクション暗灰黒色砂質土より出土。破片。円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。2カ所に結合孔がある。樺皮をとどめない。結合位置を決める刻線がある。表面には不定方向に多数の刃物痕をみる。

長23.7cm、幅6.3cm、厚さ0.7cm。

板目材で、成長輪20本／cmである。

長楕円形・その他の曲物（図版75～76、第42～43図）

105は、G26～27暗灰黒色砂質土より出土。破片。長楕円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。2カ所に結合孔があり、1カ所に樺皮をとどめる。結合位置を決めた刻線がある。

長32.5cm、幅9cm、厚さ0.9cm。

108は、G20より出土、層位不明。破片。長楕円形の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。2カ所に結合孔があり樺皮をとどめる。表面に不定方向に多数の刃物痕が残る。裏面では側板の圧痕が認められる。

長46.7cm、幅11cm、厚さ0.7cm～0.8cm。

板目材で、成長輪10本／cmである。

109は、第2セクション北側より出土。破片。長楕円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。3カ所に結合孔があり、そのうち2カ所に樺皮をとどめる。

長45.5cm、幅7.7cm、厚さ0.6～0.9cm。

111は、木製品集中区下層より出土。破片。長楕円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。3カ所に結合孔があり樺皮をとどめる。表面には、不定方向に多数の刃物痕がある。

長28.3cm、幅9.8cm、厚さ0.8cm。

112は、G27暗灰黒色砂質土より出土。破片。長楕円形板の周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bである。2カ所に結合孔があり、そのうち1カ所に樺皮をとどめる。結合位置を決める刻線がある。表面には不定方向に多数の刃物痕を残す。

長25.2cm、幅8.1cm、厚さ0.7cm。

117は、木製品集中区より出土。破片。欠失した板状の曲物で、周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bになる。内外面に不定方向に走る刃物痕を残す。内面には結合位置を決めた刻線がある。

残存長34.5cm、残存幅3.2～3.6cm、厚1～1.1cm。

118は、G37～38暗灰黒色砂質土より出土。一端が破損し、結合孔もない。但し、他端に側板の圧痕が残るため、形態は不明だが、周縁に低い段をめぐらさない樺皮結合曲物Bであると思われる。

残存長28.9cm、幅4.7cm、厚さ0.5cm。

123は、G13～14、G19間暗灰黒色粘質土より出土。曲物を二次加工している。本来の形態は不明だが、周縁に低い段をめぐらす樺皮結合曲物Aであると思われる。1カ所に結合孔が残るが樺皮をとどめない。一端を鋭く三角形に、他端は、弧状に削り出す。側面に手斧はつり痕が認められる。また、表面には、不定方向に多数の刃物痕が残る。

長25.8cm、幅4.7cm、厚さ1.3cm。

124は、木製品集中区下層より出土。破片。長楕円形板の周縁に低い段をめぐらす樺皮結合曲物Aである。2カ所に結合孔があり樺皮をとどめる。表面には、斜め方向に多数の刃物痕が認められる。

長26.6cm、幅8.1cm、厚さ0.5cm。

キ．祭祀具

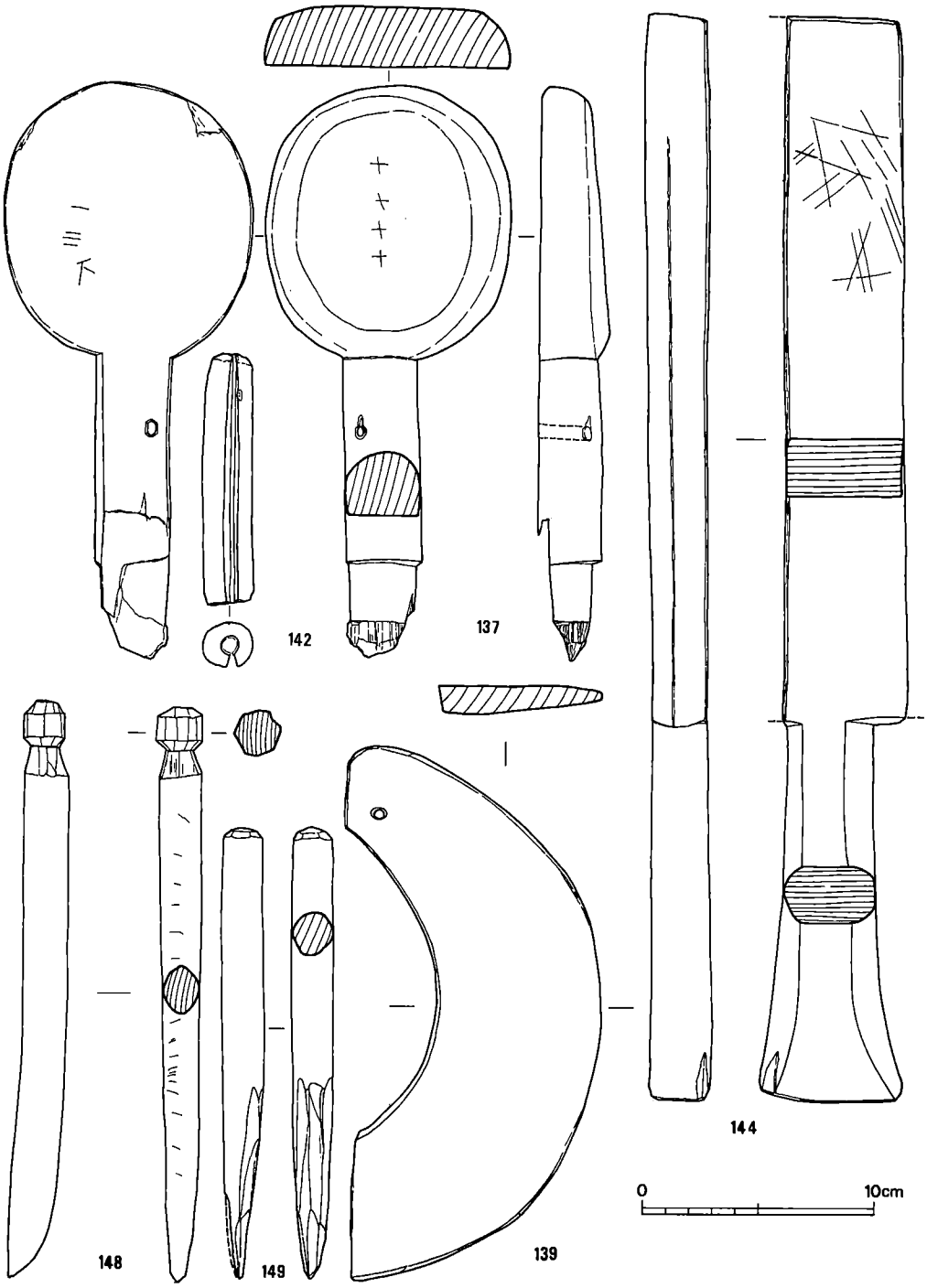
手鏡状木器1点、有孔円板1点、柄2点、刀形1点、槍先5点、刀子形1点、陽物形木器3点が出土している。

手鏡状木器（図版78、第44図）

137は、Bトレンチ北側木製品集中区より出土。柄・身共に加工痕を残さず平滑に仕上げられる手鏡状木製品である。身平面は楕円形を呈し、表面は周縁を面取りし弧状を呈する。裏面は平坦になる。表面縦断面をみると柄部との境からやや立ち上がって先端に向け、緩やかに傾斜する。柄部の表面は弧状を呈し、裏面は平坦になる。裏面は身部裏面と一直線になる。また主軸線よりやや左に偏して、裏面から表面へ向けた1つの穿孔がある。さらに、柄部では、その先端部が一段低く削り取られ、他の柄と接合できるようになる出柄らしきものがある。それは、最先端部が他の柄と接合しやすいように尖らせていることからも理解できる。

全長24.8cm、身部長11.7cm、身部幅10.8cm、柄部長13cm柄部幅3.3cm、接合部長3.2cm。

この木製品では、線刻文字が表裏面に認められる。表面では、「一三大」の3文字、裏面では、主軸線上に「十十十十」の4文字が刻まれる。



第 44 図　祭祀具実測図（縮尺 1/3）

有孔円板（図版80、第44図）

139は、第２セクション北側暗灰黒色砂質土より出土。半分を欠失する。中央に円孔を穿つが、一端は間をあける抉状耳飾り状の有孔円板である。断面は中央から外方にむけ薄くなる。抉状部辺に１つの穿孔がある。

復原径26cm、幅３～7.2cm、厚さ1.3cm。

柄（図版80、第44図）

142は、表採品。丸棒状の木柄に錐身を挿入するものである。心持丸棒の柄の一木口から茎挿入孔をあけたものだが、縦方向に裂け目が入る。また他の一木口は折損している。

残存長10.8cm、径1.9～2.2cm。

刀形（図版79、第44図）

144は、第２セクション北側、139に近接して出土。刀をかたどった形式で細板を削ってつくる刀形である。現代の包丁の形に似て、従来の①柄と刀身を表現するもの②柄を表現せず、刀身と茎のみをかたどるものと異なる。刀身の背は一直線で、茎の片側とそろえる。刀身の切先は平坦である。茎はその先端にむけ、末広がりし柄尻に至る。また上下端は弧状を呈する。刀先端付近両面には、不定方向に多数の刃物痕が残る。

全長46cm、刀幅5.1cm、刀厚2.4～2.8cm、茎長16.5cm、茎幅3.7～6.2cm、茎厚2.4～2.6cm。

槍先形（図版79、第44図）

145は、茎部から関部へ強く張り出し、関部断面８角形を呈する。

149は、G53付近暗灰黒色砂土より出土。棒状丸材の後端を斜めに削り込む。前端は中央より先端に偏する所から半面だけ削り出し槍先形を作る。槍先先端部下辺が一部欠損する。

全長19.4cm、幅1.8cm。

刀子形（図版79、第44図）

148は、G24暗灰黒色砂質土より出土。棒状の割材の片側を削って刀身と柄をあらわすものだが、明瞭な刃部をつけない。柄頭部は左右から削り出し、鋲頭状の突起をつくる。柄先端部も斜め方向に削り取る。但し、若干長すぎるが服飾具の笄になる可能性もある。

全長24.9cm、幅1.8cm、厚さ２cm。

陽物形木器（図版80）

140は、出土地不明。下端部以下が欠失し、陰のう部が存在しているが、先端部に向かって、序々に細く削り、先端から９cmばかりのところをふくらませ亀頭を作り出す。亀頭には主軸方向に小溝が走る。先端部は二段になる。

残存長15cm、亀頭部長９cm、幅7.6cm、厚７cm、基部幅６cm、厚3.6～５cm。

141は、亀頭部があまり発達していない。

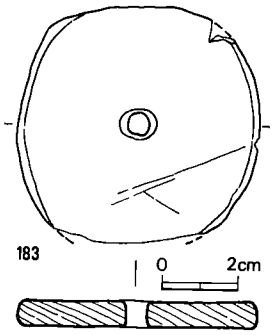
ク．雑具

紡錘車２点、火鑽板２点が出土している。

紡錘車（図版84、第45図）

183は、第２セクション暗灰黒色砂質土より出土。円板の中心に糸巻棒を通す紡錘車である。平面形は不定楕円形を呈する。表面に３条の刃物痕をとどめる。軸孔は、両面とも「軸ずれ」が認められる。全体的に粗く整形する。

径6.3～6.7cm、厚さ0.7cm、軸孔径0.6cm。



第 45 図　紡錘車実測図（縮尺 1/2）

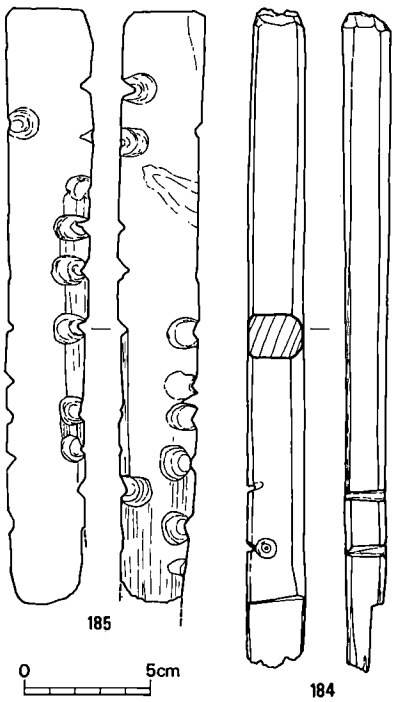
火鑽板（図版84、第46図）

184は、表採品。断面は不定８角形を呈する角材の２カ所に切欠きをいれるが、火鑽杵を回転させた火鑽臼は１カ所残すのみである。角材は、木口一端を欠失するが、他端に出枘を設けていることから、転用材かもしれない。

長26cm、幅2.8cm、厚1.6～２cm。

185は、Ａトレンチより出土。断面長方形の角材に不定間隔17カ所の切欠きをいれ、すべて火鑽杵を回転させ、火鑽臼を残す。両側左右をかなりの頻度で使用している。一木口は折損する。

長23.3cm、幅3.3cm、厚２cm。



第 46 図　火鑽板実測図（縮尺 1/3）

ケ．部材

はしご、天板、台座、出枘・枘穴付部材が出土している。

はしご等（図版81～83、第47図）

150（図版81、第47図）は、Bトレンチ北壁32層より出土。先端部より一段目まで残存する。足かけ部上面は平坦であり、身に対して鋭角をなす。板部は先端に向け末広がりし、横断面はやや内弯する。また板部裏面は、足かけ部に向け弧状をなす。足かけ部は左右端から欠損する。

残存長22cm、板部幅11～14.2cm、板部厚3cm、足かけ部残存幅11.2cm、足かけ部厚2cm。

板目材、成長輪11本／cm。

151（図版81、第47図）は、Bトレンチ北壁31層より出土。はしごの破片と思われる。先端部のみ残存し、足かけ部以下が欠損する。また、先端部側面も欠損する。板部は先端部に向けて末広がりになる。

残存長16.8cm、板部幅14.8cm、板部厚3.5cm～5.5cm。

四方征目板、成長輪3～4本／cm。

152（図版82、第47図）は、Bトレンチ北側暗灰黒色粘質土より出土。主軸方向と直角に折損している。長方形盤材周縁は上下共面取りする。裏面の木口近くに2つの突出部を設け、その間を台形状に削りこむ。また、その内には、長4cm、幅18cm、深さ2.6cmで溝をつくりこむ。上面は、やや凸レンズ状になる。刃物痕などは残さず、平滑にする。破損面には、焼けて黒変する箇所がある。

残存長22.7cm、幅18cm、厚さ5.6cm。

153（図版82）は、G14、15暗灰色砂質土より出土。腐植が甚しい。一木口を欠損するが、他一木口には、出枘を削り出す。身部には円形、長方形の枘孔を6カ所穿つ。

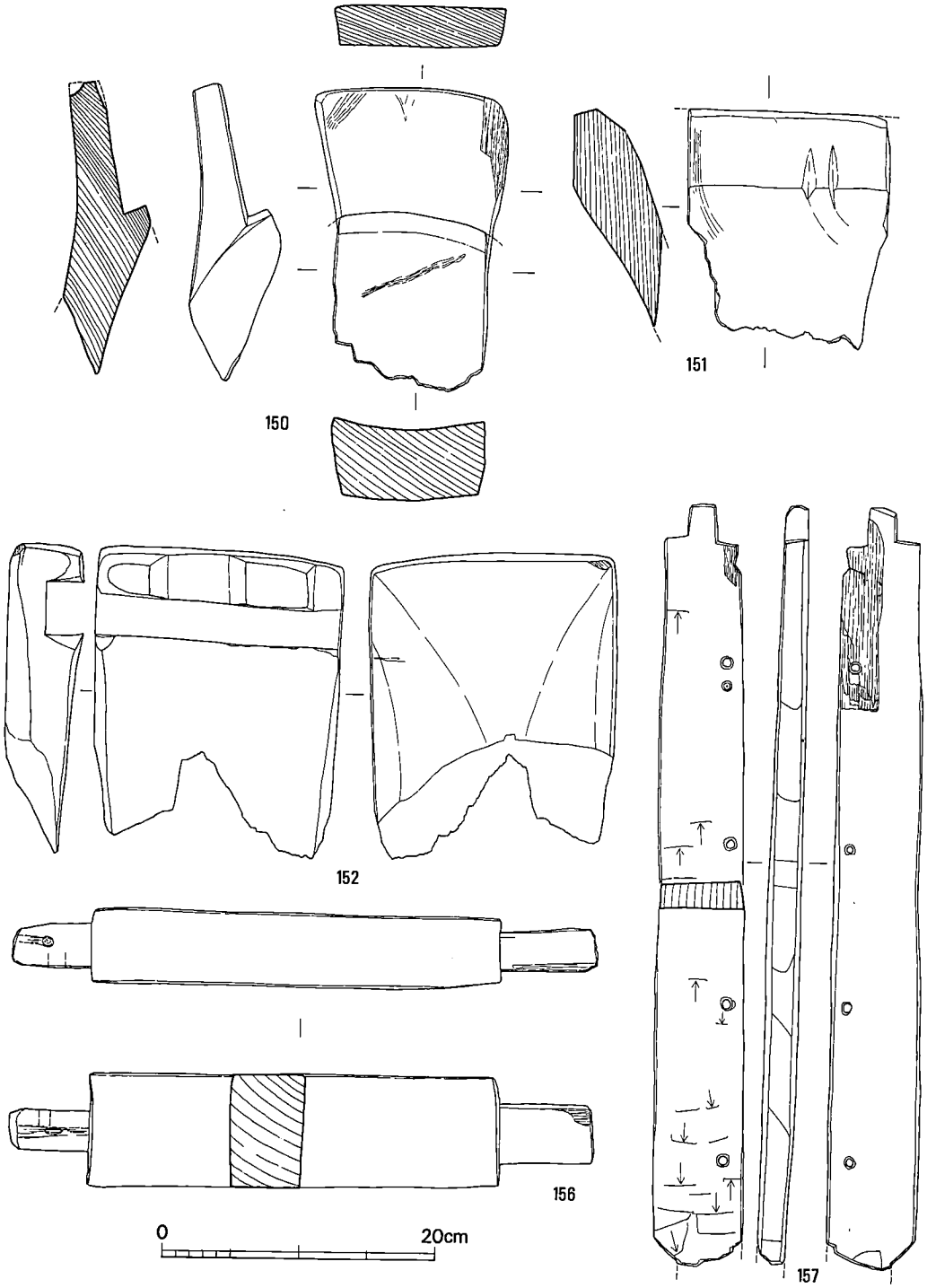
残存長39cm、幅5～8cm、厚5.5cm、出枘長4cm。

156（図版83、第47図）は、木製品集中区下層より出土。長方体の割材の木口両端から出枘を削り出す。両者は大きさが異なる。一方の出枘は、木釘穴と楔穴状のものが、縦・横から穿たれる。また他方の出枘側面は基部に向けやや細くなる。

全長42.7cm、幅8.1～8.3cm、厚さ4.7～5.4cm、出枘長（木釘穴有）5.8cm、幅2.9cm、厚2.7～3.2cm、出枘長（木釘穴無）7cm、幅4.3cm、厚2.8～3.1cm。

征目材、成長輪3本／cm。

157（第47図）は、G24暗灰黒色砂質土より出土。長方形の角材の木口に出枘をつくる。他方の木口は欠損している。表裏、側面共に手斧はつり痕を明瞭にとどめる。側面は斜め方向に法を設ける。台上片側一直線上に4カ所穿孔がある。約11.3cm間隔で穿たれるが、出枘に近い穿孔はその間隔を広げ13.2cmを測る。但し、この穿孔の横には「⊙」の穿孔位置を決める錐状の刃物痕がみ



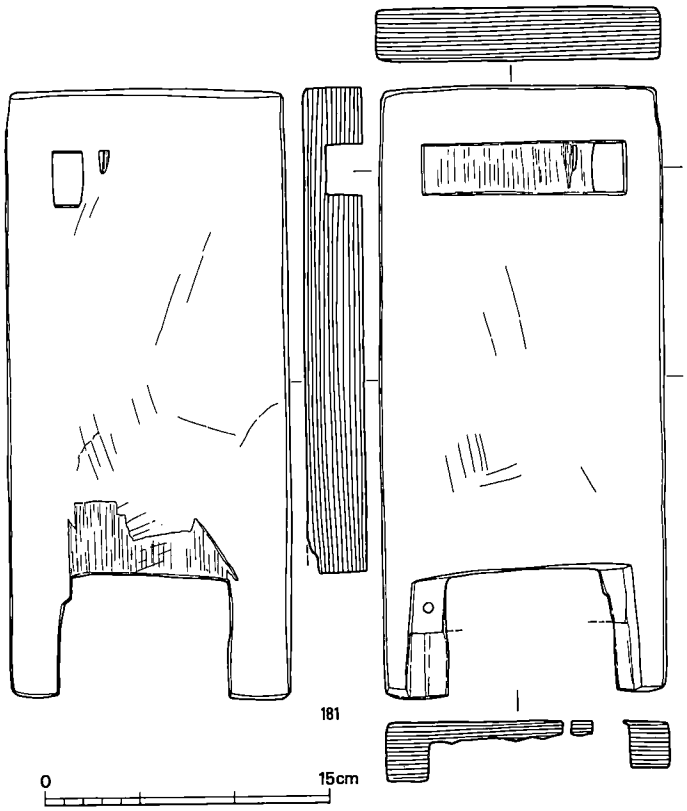
第 47 図　部材実測図（縮尺 1/5）

え、間隔は11.3cmを保つ。本来は、この位置に穿孔が行なわれるはずだったと思われる。

残存長55.6cm、幅5.3～6.5cm、厚1.7～2.5cm、出枘長2.7cm、出枘幅2.1cm、出枘厚2.1～2.2cm。

征目材、成長輪3本／cm。

181（図版84、第48図）は、木製品集中区下層より出土。長方形の厚板の両端に脚をとりつけるための枘穴をあける天板である。一方の枘穴は欠失している。欠失した枘穴の方には一カ所



第 48 図　台座実測図（縮尺 1/4）

木釘が裏側から垂直に打ち込まれた状態で残っている。このことから天板の脚は、あまり長くなかったと思われる。天板上には、不定方向に刃物痕がみられる。

長36.5cm、幅15cm、厚3.1cm、枘穴長10.8cm、枘穴幅2.6～2.8cm、枘穴深2cm。

板目材である。

コ．用途不明品

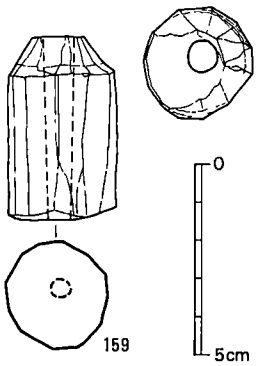
159（図版85、第49図）は、G24茶黒色粘質土より出土。心持ち丸材を不等辺12角形に面取りする。木口の両端は平坦にカットし、一端では斜めの方向に削り出す。中心よりやや偏して穿孔がある。

全長4.8cm、幅2.8cm、穿孔径0.5～0.8cm。

160（図版85、第50図）は、G43南付近暗灰黒色砂質土下層より出土。一木口端が欠失するが、中央部に抉りをもつ棒状の木製品である。先端部は若干突出気味になる。表面は乱れながらも弧状を呈し、裏面は平坦である。

現存長31.6cm、幅2.7cm、厚1.3cm。

161（図版85、第50図）は、G18暗灰黒色砂質土より出土。棒状の材は、両木口に陽物形木器にみられる亀頭状の突出部を設ける。裏面は平坦で、断面はカマボコ形を呈する。



第 49 図　用途不明品①実測図
（縮尺 1/2）

長45.5cm、幅3.2cm、厚0.9～1.1cm。

162（図版85、第50図）は、G20より出土。一木口が欠失するが、他端に出枘をもつ棒状の木製品である。断面８角形を呈する。欠失部方向に若干末広がりになる。

残存長44.3cm、幅2.4～2.7cm、厚1.9～2.4cm、出納長1.6cm、出枘幅1.7cm、出枘厚0.8～0.9cm。

165（図版85、第50図）は、Bトレンチ北側木製品集中区より出土。板状の割材の一木口は欠損する。各面とも手斧はつり痕が明瞭に残る。上面主軸上に稜をもつ。

残存長22.2cm、幅4.1cm、厚１～1.4cm。

166（第50図）は、G13暗灰黒色砂質土より出土。破片。紡織具の糸巻の枠木とも考えられるが、少し大型すぎる。結合部から両端に向かって斜めに削込み、主軸線断面は山形を示す。枘孔は長方形を呈する。結合部そして結合部以外の断面はそれぞれ長方形、８角形になる。また、一端には枘孔があるが、この部分より半折している。

残存長36.4cm、幅1.8～2.2cm、結合部厚3.1cm、枘孔1.1×２cm。

167（第50図）は、G43南付近暗灰黒色砂質土下層より出土。破片。円形を呈する板状のものとなろう。側面に手斧はつり痕が明瞭に残る。

残存長14.6cm、幅4.7cm、厚さ1.2cm。

168（第50図）は、Bトレンチ北壁31層より出土。板状の割材の表裏側面を平坦にしたもの。但し、木口の一端は欠損し、他端は鋸状のもので切り落した痕が残る。一側面も欠損している。

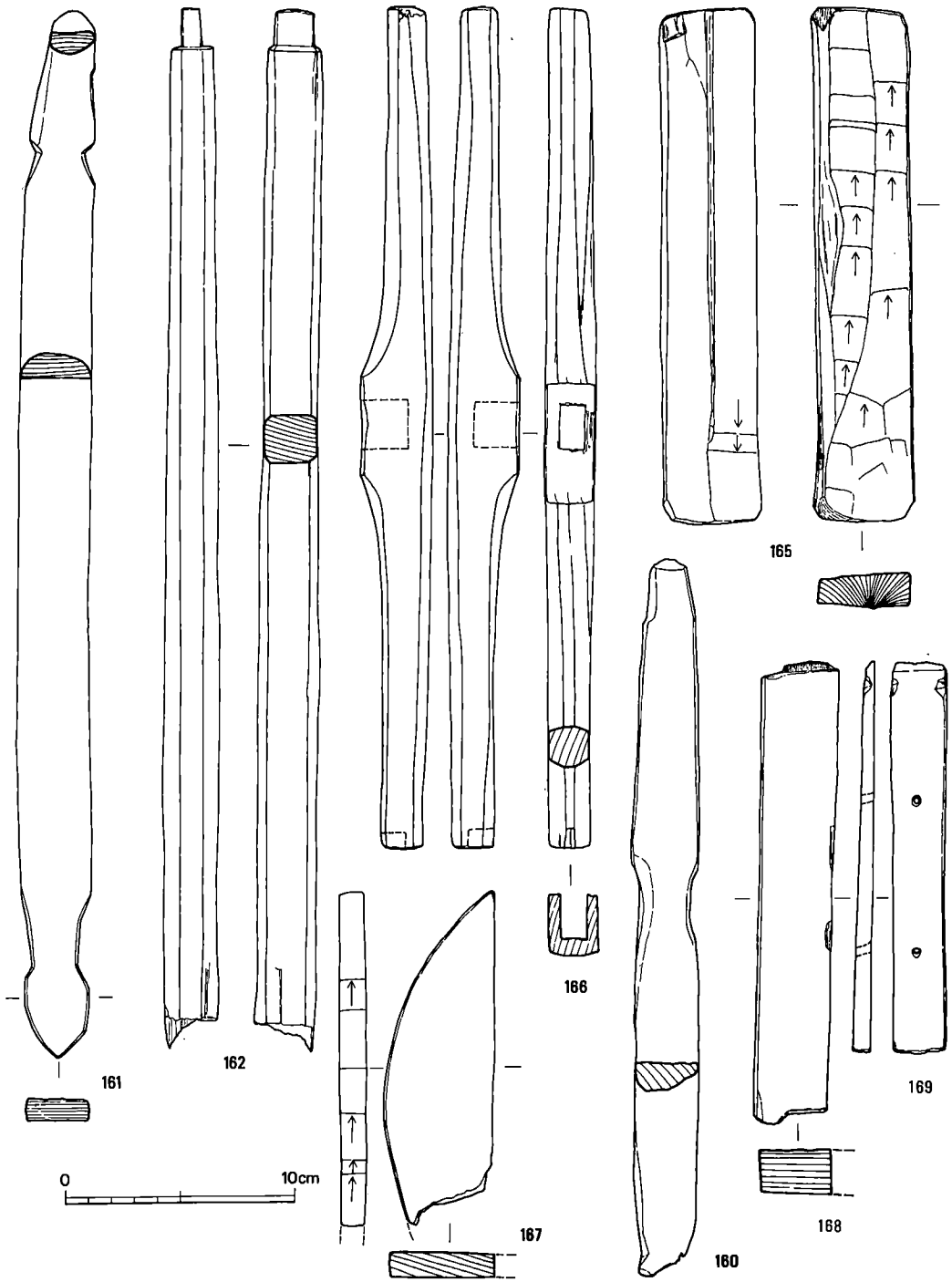
残存長20.1cm、残存幅3.2～3.4cm、厚1.9cm。

169（第50図）は、出土地不明。破片。長方形を呈する板状のもの。２カ所に穿孔がある。一木口端は両側から抉りが入り、先端部は斜めに削り出す。各面とも平滑に整える。

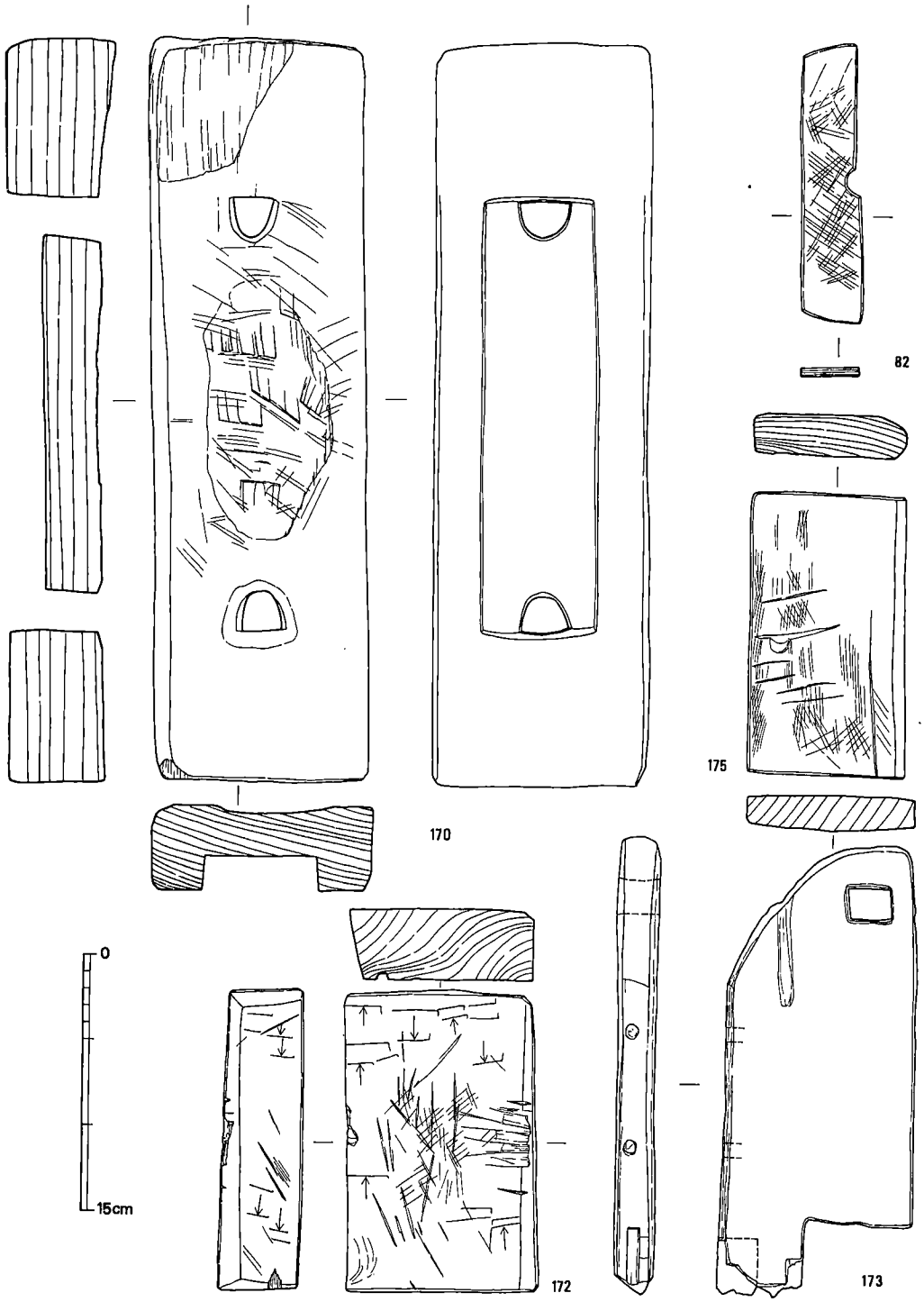
残存長16.9cm、幅2.2cm、厚さ0.3～0.8cm。

82（図版70、第51図）は、G43付近暗灰黒色砂質土下層より出土。円板の中心に孔をあけるもの。蒸器のサナにあてる説もある。両面共、不定方向に無数の刃物痕が残る。

長16.3cm、幅3.2～3.7cm、厚さ0.5cm。



第 50 図　用途不明品実測図②（縮尺 1/3）



第 51 図　用途不明品実測図③（縮尺 1/4）

170（第51図）は、G37深掘りより出土。長方形厚板の一面に長方形の刳形を入れる。左右端には、半円形孔が貫通する。脚をさしこんでいた枘穴であろう。上面中央には長楕円形状の窪みがあり、ノミ痕、刃物痕が多数残る。製作台であった可能性が高い。

長43.1cm、幅12.5～12.7cm、厚5.4～6.4cm、刳形長25.6cm、幅6.5～6.9cm、深2.1cm、枘穴最大幅2.9cm。

172（図版86、第51図）は、G14、G20間暗灰黒色砂質土より出土。厚い長方形の板に不定方向に刃物痕を残す。また、厚板には、整形する段階での手斧はつり（刃幅1.5cmくらい）もみられる。厚板は、俎とも考えられる。

長17.5cm、幅4.3cm、厚さ4.3cm。

板目材で、成長輪８本／cmである。

173（図版87、第51図）は、土器溜り周辺より出土。長方形厚板の一木口は斜めに削り出し弧状を呈する。側端には長方形枘穴がある。また他方の木口は欠損するが、段状の切込みを入れ細板となす。側面には木釘穴が穿たれ、木釘がつまる。弧状をなす一木口には長方形の枘穴が穿たれる。

残存長26.6cm、幅11.1cm、厚2.2cm。

175（図版87、第51図）は、G13～14、G19～20間暗灰黒色粘質土より出土。厚い長方形の板に不定方向に多数の刃物痕がつく。中には、深く刻まれる所もある。側面は一方が平坦で、他方が丸味を帯びる。作業台とも考えられる。

長16.5cm、幅9.1cm、厚さ2.6cm。

征目材で、成長輪９本／cmである。

d．瓦

棰先瓦、軒平・軒丸瓦、平瓦が出土している。特に、棰先瓦は円形（大・小）、方形の３種がある。それぞれ、円形が井上廃寺、北薬師堂遺跡で、方形が井上廃寺、北薬師堂遺跡、干潟遺跡で検出されていた。しかし、発掘調査で検出されたのは、干潟遺跡10号住居址からの１例にすぎなかった。従って、本遺跡の３種一括、総計７点の出土は意義深いことである。

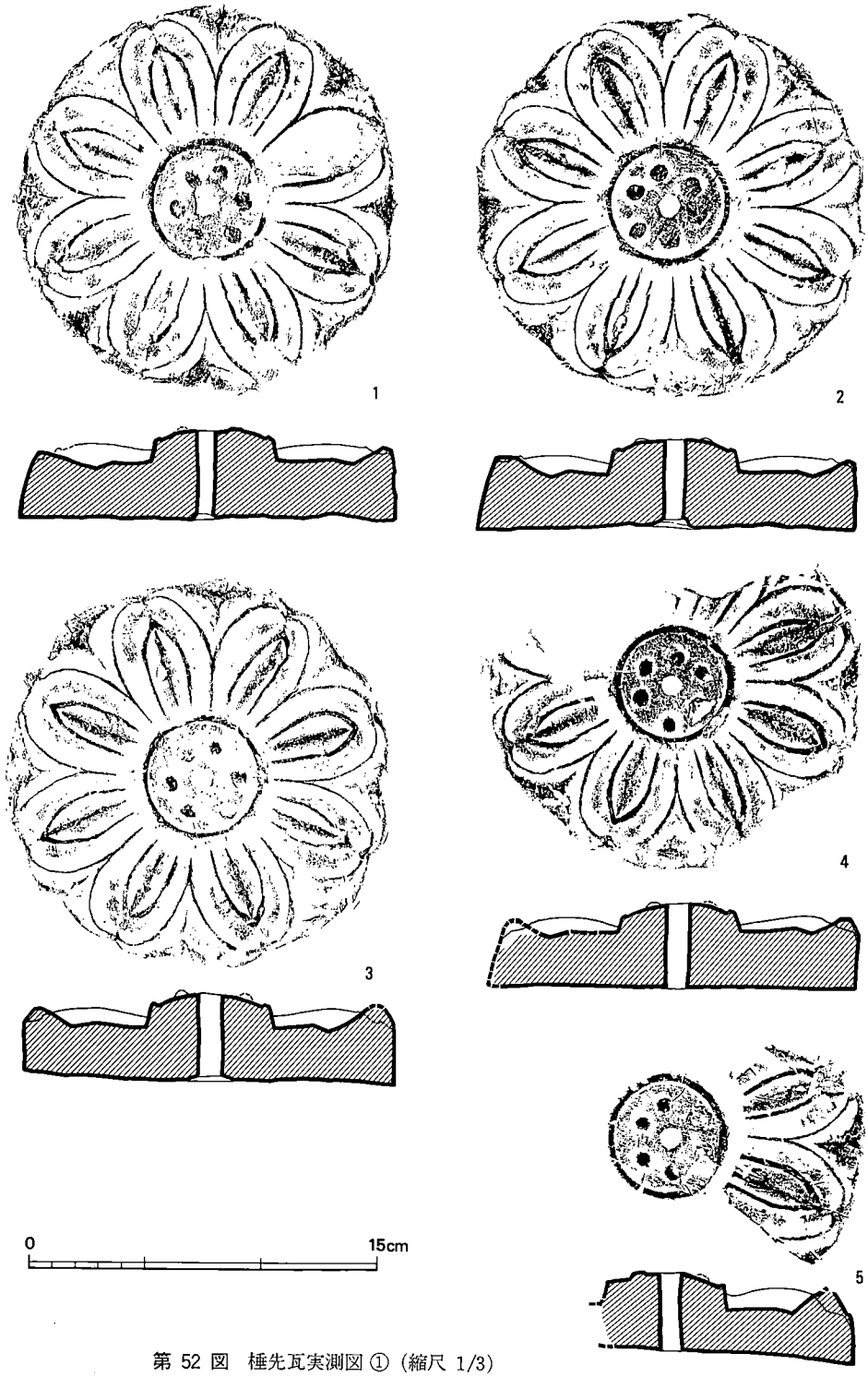
以下、棰先瓦から順に説明を加えていく。

棰先瓦（図版90～92、第52・53図）

円形と方形の２種類が出土し、円形の棰先瓦は、更に大小の２種に細別できる。瓦当の文様は、奈良県山田寺系の彫りの深い優品である。

第52図の５点は、すべて円形棰先瓦の大形品である。まず、出土地点を示すと、

１は、G37暗灰黒色砂質土。



第 52 図　棰先瓦実測図 ①（縮尺 1/3）

2は、第2セクション北側暗灰黒色砂質土（木製品が集中する。）。

3は、G57付近、重機深掘り中。

4は、第2セクション崩落中。

5は、G24茶黒色砂質土とG12・18間灰茶色粘質土より出土した2点が接合。

になる。

完形品1～3の瓦当面の径は15.5cm前後である。拓本で表現できなかったが、1～4は、花弁の同一箇所に傷があり（図版90～91）、同笵であることがわかる。（このことについては、九州歴史資料館調査課長・石松好雄氏の御教示を得た）。5は、小片で遺存部分に同様の傷は認められないが、同笵品の可能性も残す。いずれも重弁八弁形式で、中房は一段高く中心に釘孔を穿ち、6個の蓮子を配する。これらは全て胎土に1～3㎜の白色砂粒を多く含み、裏面・側面はヘラケズリによる砂粒の移動が著しく目につく。焼成は、4が硬質であるが、他はやや軟質で、稜が磨滅している。

第53図は、小形と方形の棰先瓦である。

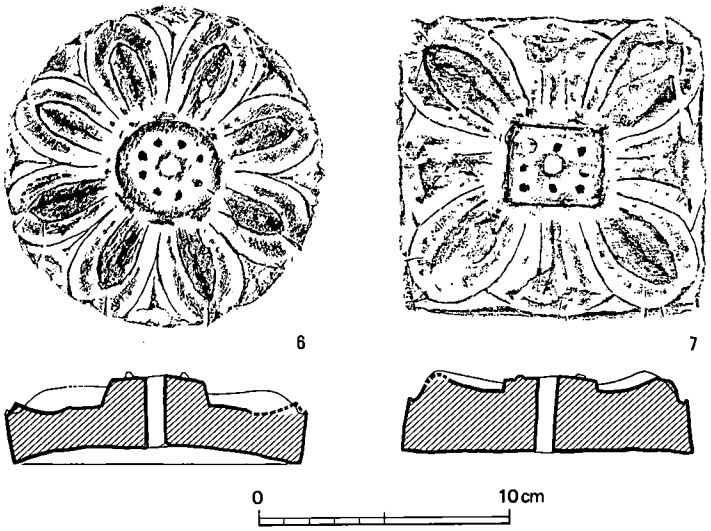
6は、G19茶黒色粘質土より出土。

7は、土器溜り東、大溝東側肩、茶黒色粘質土より出土。

6は、円形棰先瓦の小形品である。調査で出土したのは一点だけで、瓦当面の径は11.5cmである。

文様構成やつくりには大形品とほぼ同様であるが、中房の釘孔のまわりに配する蓮子は8個で、大形品より2個多い。本品の弁には一部に笵木の年輪が認められる。また、焼成良好にして硬質で磨滅が少ないためか、弁中央の鎬は鋭く残る。本資料も大形品と同様に1～3㎜の白色砂粒を多量に含み、裏面・側面はヘラケズリのため砂粒の移動がはげしい。焼成良好でネズミ色を呈し、瓦当面には一部に灰を被る。

7は方形棰先瓦である。瓦当面で一辺11.2cmを測る正方形で、その対角線上に4弁の重



第53図　棰先瓦実測図②（縮尺 1/3）

弁蓮華文を、その間には楔形の間弁を配する。短辺3.3cm、長辺3.7cmの長方形の中房の中心に釘孔を穿ち、そのまわりに8個の蓮子を配する。本資料は硬質に焼き上がって磨滅がないため、弁の鎬の鋭い通り方は円形椎先瓦以上である。胎土に砂粒を多量に含み、裏面・側面をヘラケズリする手法は円形椎先瓦と同様である。色調は、裏面暗灰色、側面・瓦当面はくすんだ青灰色を呈し、一部に灰を被っている。

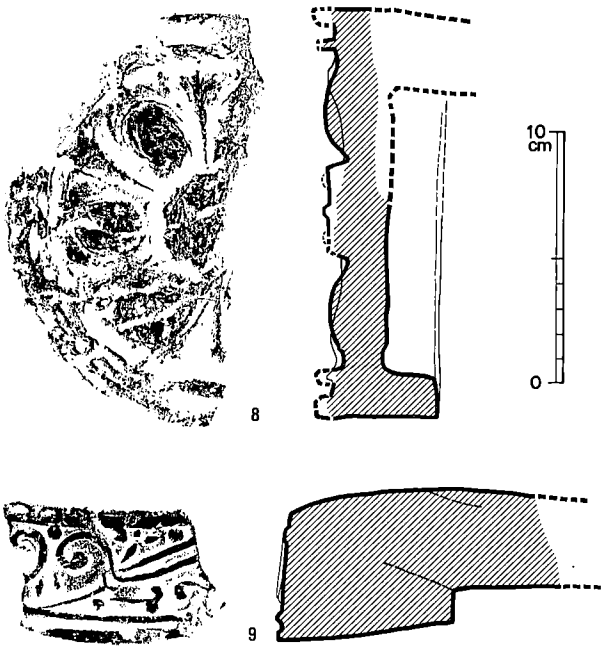
軒先瓦（図版90、第54図）

表採の1点とBトレンチ南灰黒色粘質土上面出土の1点の計2点がある。

8は、表採した軒丸瓦で瓦当面の半分を欠失する。内区は単弁六弁蓮花文で、また一段高い中房は磨滅が著しく、蓮子の数は正確を期しがたいが、1＋6であろうと思われる。蓮弁は丸味を帯び端整である。外区は内区と高さは変らない。瓦当裏面は強いナデ調整をし、同下半部は周縁に沿って2cm程高くなり、端部はヘラケズリにより平坦面となし、外面はヨコナデ調整である。火災にあい全面真黒である。

9は軒平瓦で、彫りの浅い瓦当面には扁行する忍冬唐草文を表現する。厚手で顎はしっかりとしている。表面は瓦当と平行に、裏面は直行方向にヘラケズリを行なっている。胎土に小砂粒を多く含み、焼成はやや甘く、濁灰色を呈する。

尚、福岡県教育委員会が九州横断自動車道関係で調査した小郡第6地点（井上薬師堂遺跡の東側台地の薬師堂東遺跡）では、住居址から老司系の扁行唐草文軒平瓦が出土している。



第 54 図　軒先瓦実測図（縮尺 1/3）

平瓦（図版92、第55図）

5点の破片が出土している。全て破片資料のため、軒先瓦の破片か否かは不明である。5点共、裏面は肉太の正格子タタキ目が斜めに認められ、表面は布目と桶の板痕が残り、桶作りであることがわかる。出土地をまず示すと、

10は、表採品。

11は、G37・38暗灰黒色砂質土。

12は、Bトレンチ南灰黒色粘質土上面。

13は、G2灰黒色粘質土。

14は、Aトレンチ。

になる。

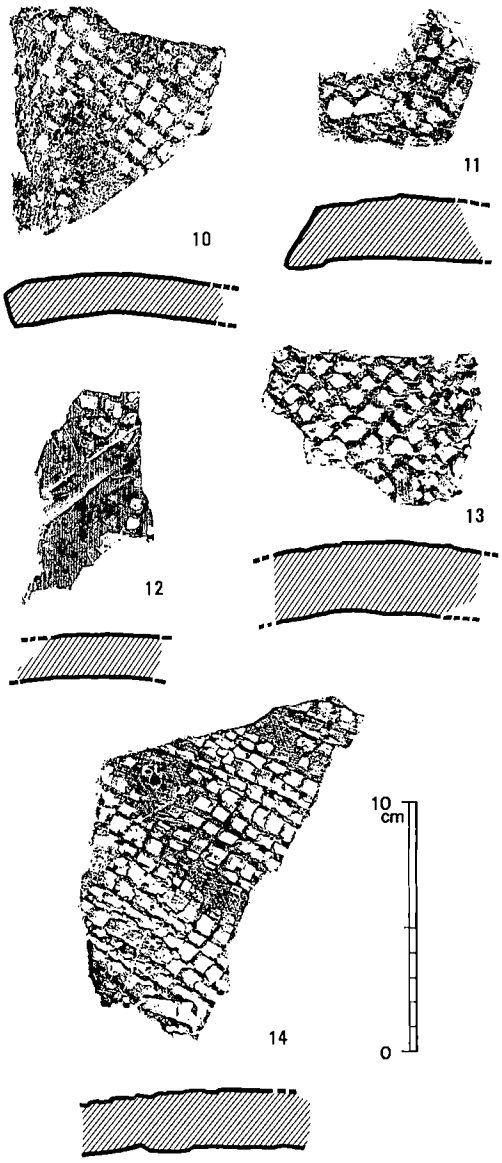
10は白色砂粒を多く含み、焼成は不良で、淡茶灰色を呈する。端面はヘラケズリされる。

11は、白色微砂粒を含み緻密で、くすんだ灰白色を呈し、焼成は軟質である。裏面は一部黒灰色を呈する。肥厚である。

12は、胎土が緻密で、焼成は良好であるが、須恵質まで硬く焼き上がっていない。表面は黒色で、割れた断面や裏面は灰白色を呈する。

13は、厚手である。白色砂粒が目につくが、胎土は良好である。焼成は硬質で内外面共淡青灰色を呈する。

14は、白色砂粒を多量に含み、焼成は普通程度でくすんだ灰色を呈する。



第 55 図　平瓦実測図（縮尺 1/3）

e．木簡（図版95）

木簡は、大溝からの3点など、合計6点が出土した。このほか、薄い板状の木片が数点みられ、本来は木簡の一部ではなかったかとも考えられるが、いずれも形状的には小断片であり、また墨痕も全く認められないので、ここではそれらについての報告を割愛する。

まず、これら6点を形態的に分類すると、いわゆる短冊型を呈するもの（011型式、以下の型式分類は木簡学会のそれに準拠する）が2点あり、長方形の材の一端近くの左右両辺に特有の

切り込みをいれたもの（032型式）と用途未詳の木製品に墨書がみられるもの（065型式）がそれぞれ1点、そして折損などによって原形の判明しないもの（081型式）が2点みられる。ただ、あくまでも推測にすぎないが、081型式に分類した2点は、後述のようなその記載内容からみて、本来の011型式のものであった可能性も考えられる。

次に墨書された文字についてみてみると、032型式の1点には墨痕すら認められないが、他の5点にはそれぞれかなりの字数の文字がみられる。ただし、印象的な判断ではあるが、いずれをみても、その筆致は拙劣であり、記載内容などとともに、このことはこれらの木簡が作られた背景ないしその特性などについて考える上での一つの参考になるだろう。

以下では個々の木簡について概要を報告し、あわせて若干の所見を述べることにする。なお、釈文の表示については木簡学会の表示法にもとづいたが、若干を付言しておこう。表裏に記載がみられる場合、そのいずれを表裏とみなすかの判断は必ずしも容易でないが、ここでは文字数あるいは文意などによって便宜的に決め、冒頭の黒点によってその記載面の別を示した。また「　」は木簡の形状とはかかわりなく、文頭あるいは文末が本来のままとみなされること、□は判読できない文字、を示す。

(1)　・「丙家搗米宅津十丙ア里人大津夜津評一」

　　・「丙□人家」

大溝のG13から出土した。011型式。柾目に近い板目材。右辺下半部および裏面に若干の損傷はみられるが、ほぼ完形とみなしてよいだろう。全体的に丁寧に作られており、その法量は、長さ44.8cm、幅3.6cm、厚さ0.8cmである。文字は全面を用いて大きく書かれ、とくに幅一杯に書かれている点は特徴的である。表面の墨は比較的よく遺存しているが、裏面のそれはほとんど消失し、肉眼による判別は困難で、赤外線テレビによっても、表面を参考にして、かろうじて判読できる程度であった。また、これ以下では墨痕も認められない。

各文字をみると、第2字のようにかなり省筆されているものがある反面、第5・6字のように画数が増えているものがみられる。なお、第6字と第13・15字は同じ文字であるが、画数は異なっている。省筆という点からみれば、第1、8字は「兩」字かとも考えられるが、その場合は第5・6画以下が完全に省略されたことになり、ありえないことではないにしても、それでは省筆が過ぎるというべきではないだろうか。字形的には若干不自然なようでもあるが、「丙」字とみなした方が穏当と思われる。第3字は他にかかる字形の文字がみられないので、このように判断したが、それの旁は「島」に作るべきであるにもかかわらず、これでは「鳥」に作っている。また、第10字は古代に例の多い「部」字の略字であろう。

このように、各文字を個々にみれば、それぞれに若干の問題があるが、大勢的にはこの釈文のように解してほぼ大過ないと考えられる。とすれば、次にその文意が問題になる。「搗米」あるいは「大津」などのように、部分的に取り上げれば、それらはあたかも意味のある語句のよ

うにもみえるが、全体的にみれば、その文意が通じがたいのである。そのため、これはいわゆる習書の一種で、全体的には連関しない語句ないし文字を書き連ねたにすぎない可能性が考えられるが、丁寧に整形しているだけでなく、このように大きく書くことは習書として効率が悪いように思われるなど、習書とみなすにはいまだ疑問が残る。結局のところ、この木簡は文意が明らかでないので、その性格を特定しがたく、ここでは結論を保留せざるをえない。

(2)

「□白日□稲□　人　里人赤加倍十　竹野□□□本五
山マ田母之本廾
□□□之倍十
木田□□□之本五」

南側土器溜の近くから出土した。011型式。柾目に近い板目材。下半部に割れ目がはいり、裏面には腐蝕による若干の損傷がみられるが、全体的にはほぼ完形とみなしてよいだろう。右辺には上端から約25cmの位置に比較的大きな三角形の切り込みがみられるが、左辺にはなく、これがいかなる意味をもつものかは明らかでない。墨書との先後関係も判断しがたいが、文字にかかっていないことからすれば、あるいはこれが先行し、またきれいに切り込んでいることからすれば、意図的なものとみなしてよいだろう。作り方は丁寧で、その法量は、長さ44.6cm、幅4.5（上端）～4.1（下端）cm、厚さ0.7cmである。

上端部を除いて、墨の遺存状態は必ずしも悪くないが、何分にもその筆致が拙劣であるので、文字の判読は容易でない。そのため、字形的に近似する文字はある程度まで想定できるにしても、断定するには躊躇せざるをえないが、それらについて若干述べておこう。

まず、上段の第4字は木偏の文字で、「椋」字の可能性も考えられる。同じく第6字は辵部の文字で、「遺」字のようでもあるが、画数に問題が残る。次に、中段の3行目の第1・3字はそれぞれ「興」・「呉」字の異体字のようにもみえるが、第2字を比定しがたいこともあって、断定はできない。4行目の第3字と下段の第4字は同じ文字で、「史」ないし「支」に近似し、その下の第4字と下段の第3字も同じ文字で、「寅」字の異体字である「刀」字かとも考えられるが、両者では順序が反対になっているなど、断定するには疑問が残る。中段4行目の第5字は日偏、下段の第5字は木偏の文字であるが、ともに旁が明らかでない。

このように、文字の判読そのものにいまだ多くの問題を起こしているので、文意が通じがたく、内容について断定的に述べることはできない。ただ、上段の最下位が「人」字であり、いわゆる割注部には人名らしいものがみえること、さらにその各行が「倍十」や「本五」などの表現で終っていることなどからすれば、上段では「稲」字もみえるように、私出挙に関係する可能性も考えられる。あくまでも推測の域を出ないが、ここではこの点を指摘するにとどめ、詳細については後考をまつことにしたい。

(3)　　三石　加太里白米一石□(米カ)

米一石　□□□

白米半　反俵廿一石米　　」

Bトレンチから出土した。081型式。板目材。左右両辺は原形とみられるが、上端は折れ、下端は両面から刻み目をつけて折っている。中央部に比して、上下両端部は若干薄くなっている。現存法量は、長さ24.6cm、幅4.6cm、厚さ0.6cm（中央部）である。

3行にわたって記されているが、本来は各行とも上方欠損部から続いていたと考えられる。墨書は中央部付近までで、それ以下では墨痕も認められないので、記載はこれで完了するのであろう。また、第2行下半部の現状はわずかな墨痕はみられるものの、墨の大半はすでに消失しているので、文字はいうまでもなく、その字数さえも推定できない。

内容的にはある種の米の出納に関するものであろうし、米ないし稲という点では木簡(2)や(4)などと共通する側面もみられるが、これ以上の具体的なことは明らかでない。それはともかく、「加太里」という語句も注目されるので、ここでこれについて一言しておこう。

すなわち、これだけでただちに断定することはできないが、素直にみれば、地名の可能性が考えられ、その場合には『和名抄』にみえる筑後国御井郡賀駄郷の存在が想定される。延喜5年（905）の『観世音寺資財帳』によれば、それは加駄野と記され、大宝3年（703）10月に大宰府から観世音寺に施入されている。したがって、加太里を賀駄郷の古称とすれば、これは国郡里制下における表記とみなすことができ、この木簡はいわゆる郷里制が施行される霊亀元年（715）以前のものということになるが、この点は出土層位や他の共伴遺物の時期とも矛盾しない。しかし、当地は御原郡内に位置しているので、この木簡だけでは御井郡賀駄郷（里）との関係を説明しがたいし、この木簡の具体的な性格なども明らかではないので、ここではかかる可能性も想定できることを指摘するにとどめておこう。

(4)　・百九十四　　上□養上五束

□石六斗

百十束七把　加義上五束

・見上出挙千百七束

□(赤カ)

□二石六斗七升

大溝のG14から出土した。065型式。板目材。現状は3片に分かれ、裏面には横方向に13本の刻線があるが、その間隔は一定しておらず、墨書とも関係ない。本来は曲物の側板で、それを転用したのであろう。記載内容から表裏関係を判定することは困難であるので、ここではその形状に従った。現存法量は、長さ11.1cm、幅4.3cm、厚さ0.3～4cmである。

文字はかなり拙劣で、判読も容易でないが、文意などを考慮して判断した。表面1行目の現

第6字は「禾」偏の文字であるが、旁が明瞭でないため判読できない。また同面下半部では、1行目に1文分、3行目に2字分のこの釈文に先行する墨痕がみられるが、重複している上にその墨が薄いので、具体的な文字は想定できない。ただ、1行目のそれと3行目の第2字はともに「上」字の位置に記され字形的にも近似しているようにみえる。これの意味は明らかでないし、単なる偶然かもしれないが、一応留意しておこう。

内容的には出挙に関係するものであり、裏面1行目は現在1107束が出挙中であることを意味しているのであろうが、「加義上」をいかに解するかをはじめ、各数値間の関係など、具体的なことは明らかでない。

(5) ・同服□□□大 ⊏

・夫□大大个□夫□□□人

第2セクションから出土した。081型式。板目材。現状は3片に折れ、下端も折られている。上端は切断され、その後がささくれだったもののようである。左右両辺は削られているが、その状況や墨書との位置関係などからみて、二次的なものと推定される。3片はほぼ持続し、現存法量は、長さ26.7cm、最大幅1.9cm、厚さ0.5cmである。

内容的には習書であり、表面の第3～5字はいずれも「つきへん」ないし「にくづき」の文字と推定されるが、旁が不明瞭であるので、判読しがたく、ここでは保留しておく。裏面の第5字は「介」字の俗字で、「個」などの意味もある。他はいずれも墨が薄く、字形も不明瞭であるので、判読できない。

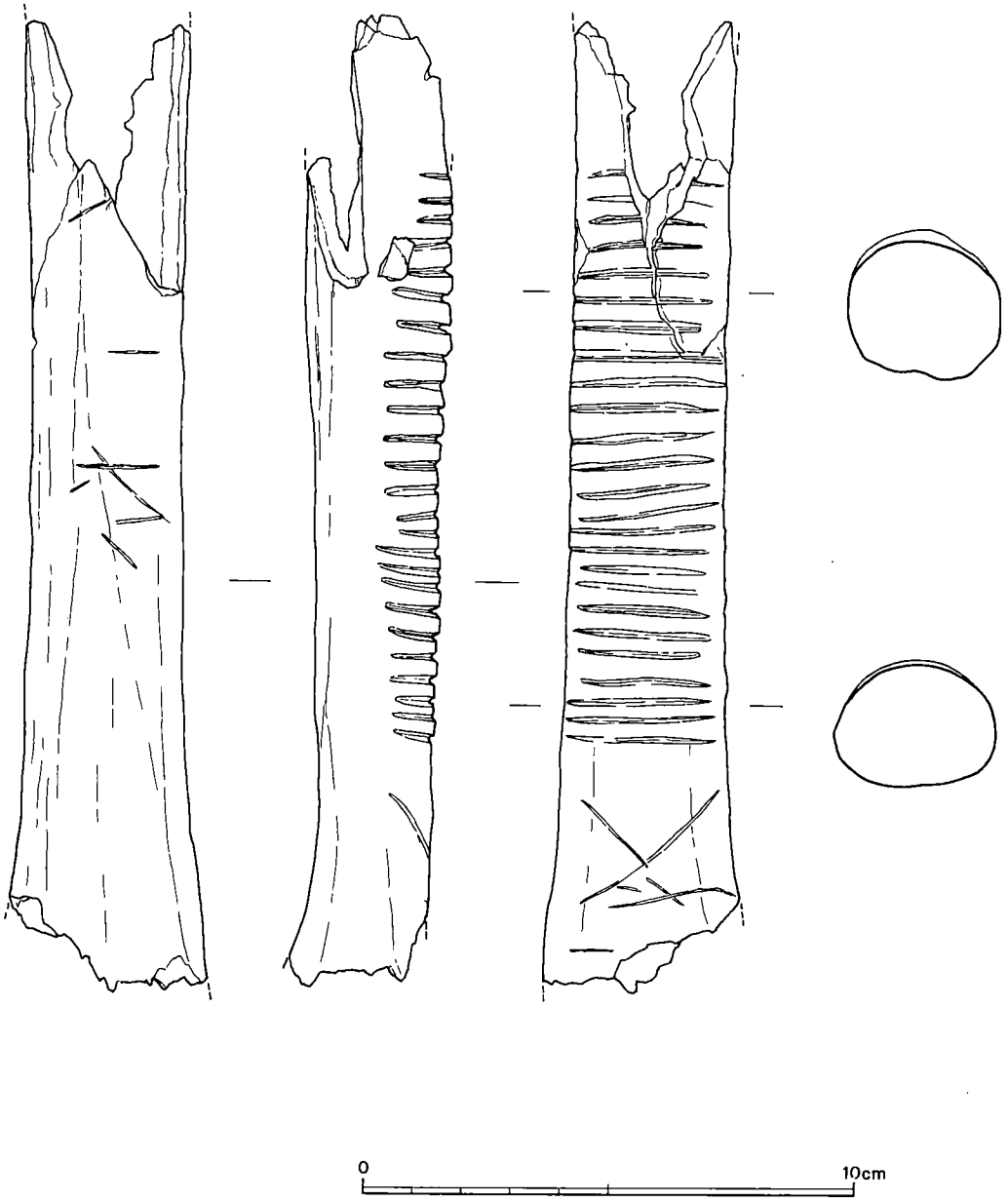
(6)

大溝のG14から出土した。032型式。板目材。右辺頂部を欠損し、裏面に若干の損傷はみられるが、ほぼ原形をとどめている。作り方も比較的に丁寧で、その法量は、長さ11.3cm、幅3.2cm、厚さ0.4（上端）～0.6（下端）cmである。この形状から木簡と判断したが、墨痕は全く認められない。もともと墨書されなかったのか、あるいは墨書が完全に削り取られたのかはにわかに判断できないが、表面がほぼ均質に削られていることからみれば、前者すなわち未使用の可能性が強いように考えられる。

f．刻骨（図版96、第56図）

出土状況

大溝中央Bトレンチ北壁8層より出土した。長軸はほぼ溝に沿っており、南へやや傾斜した状態で検出された。周囲の状況からすると流れのない溜池状の水溜りに投げ込まれたものと推定される。溝内より他にも馬骨が出土しているが、本遺構と特に関連する出土状況を示すものはない。



第 56 図　刻骨実測図（縮尺 2/3）

保存状態

永らく湿地粘土層内に包含されていたため、検出時には、ある程度原形を保っていたものの、骨端はきわめてもろく取り上げ不可能であった。近位端は発掘時に破損されていたが、遠位端は原形を保っていた。他の例からしても、おそらくは完形のまま投棄されたものと思われる。骨外表面は剝離し、擦過痕等の観察は不可能な状態にある。骨表面及び内部には、泥炭地に埋没していた骨特有のビビアナイトの結晶が認められる。

刻　骨

ウマ中足骨(ℓ)を利用したもので、その背面ほぼ中央部に長さ11.5cmの範囲に、ほぼ5㎜間隔で水平方向に25本の刻線を施している。刻目の深さは中央部で1～2㎜、両外側では骨のカーブに沿って消える。刻目は、鋭利な刃物でほぼ同様な巾・深さ・長さで刻まれ、溝の上面巾は1.5～2㎜、底面は巾1㎜でやや丸みをおびる。外表面剝離しており、擦過痕は観察できないが、側面よりみると刻目中央部にやや凹みが認められ、刻目もやや浅くなっていることから、刻目中央部付近を擦っていた可能性がある。以上の刻線の他に、浅い刻線が背面、掌面に認められるが不明瞭である。背面遠位部には、×印状刻目と水平刻目3本が認められるが、いずれも浅く刻目と判別しがたい線もある。単なるキズとは思われず、意図的なものと思われるが、意味するところは不明である。掌面は、骨体中央部に、水平3本、斜位3本を組合せるように刻んでいる。中央で×印状に交叉する2本は、他に比較してやや鋭い刻目を示している。背面同様意図的なものと思われるが、やはり意味不明である。両者とも×印状のものを意識していると思われるが、その刻目の意図は明らかでない。

年　代

大溝に包含されている土器よりすれば、8世紀代におかれる。他の出土例も8世紀代を示すものがあり、ほぼ8世紀代において大過ないものと思われる。

小　結

今回出土した、ウマ長管骨加工品は、従来から“彫骨”と称されてきたものの一種である。刻骨は、材質的に、本例のようにウマ長管骨を使用したものと、鹿角を加工したものがあり、表1のように分類される。ウマ長管骨例として中足骨（熱田貝塚)、橈骨（豊田本郷遺跡）があり、両者とも完形品で、何等事前の加工も加えず、刻線のみを刻んでいる。本例もおそらくは完形であったと思われる。刻骨は、表2、3のように日本、韓国両国にみられ、年代的にも類似する。刻骨の性格については別に考察しているので、それを参考にされたい。

（付記）

動物遺存体

谷部より、ウマ・ウシの遺存骨が出土しているが、そのうち取り上げ可能であった骨を表9に示した。いずれも骨体部片、遊離歯で判定不可能なものが多い。ウシ上顎歯一点以外は、す

べて馬歯で、一点直立状態にあるものが検出されている（ウマ上顎歯）。遺存骨は、いずれも骨体部破片で、骨外表面が剝離しており、加工の有無、刃物によるキズ等の有無は判別できない。遺存骨は、他の土器・木器などとともに、谷部に投棄されたものと思われ混在する。検出された遺存骨それぞれは、同一個体と判定できるものはなく、全身骨格を投棄したものではなく、部分骨が投棄されたものと思われる。おそらく、食用に供した牛・馬の骨を他の廃棄物とともに捨てたものと考えるのが自然であると思われるが、“刻骨”の出土よりすれば、水神信仰などの関連も無視できないことも事実である。大溝内より“刻骨”を出土した平塚市豊田本郷遺跡でも牛・馬の遺存骨が認められ、又多くの同年代の大溝状遺構より牛馬骨の出土例も多い。又頭蓋骨だけを井戸内に投入した例もあり、水との関連を思わせる点も多い。本遺跡の場合、特定の部分を切り離して投げ込んだ様子もなく、刻骨と関連を示す出土状態でもないという事実を報告するにとどめる。

表 9 出土動物遺存骨

項目番号	遺存骨		出土区	出土層	備考
1	ウマ	遊離歯	Bトレンチ北壁	第 32 層	
2	ウマ	遊離歯	Bトレンチ北壁	暗灰黒色粘質土	
3	ウマ	遊離歯 「$\overline{M}_3$	G 24	茶黒色粘質土	
4	ウマ	上顎歯（3～4本）	Bトレンチ北壁	暗灰黒色粘質土（灰色砂層直上）	
5	ウマ	遊離歯	第2セクション	第 1 層	
6	ウマ	遊離歯	不明	不明	
7	ウマ	脛骨（r.）	南区	西側壁面	
8	ウマ	橈骨（l.）	G 13	黒灰色粘質土	
9	ウマ	上腕骨（l.）	木製品集中区	下層	
10	ウマ	上腕骨	第2セクション	第2層 No.84	
11	ウマ	中手骨	第2セクション	第3層 No.82	
12	ウマ	中足骨（l.）	Bトレンチ北壁	第33層 No.49	骨体前面に刻線25本あり
13	ウシ	遊離歯（上顎）	第2セクション	第 1 層	
14	シカ	上腕骨（l.）	Bトレンチ北壁	第 35 層	
15	昆虫	甲	第2セクション	No.10 下	

表 10　刻骨形態分類表

項目 / 分類	素材		形態的特徴
Ⅰ類	鹿角	Ⅰa類	鹿角の形を比較的良く残し、枝角を残すか、枝角を利用する 凸湾側顆粒を除去して刻線を加える
		Ⅰb類	鹿角の角幹部を利用し、棒状に加工する。 凸湾側顆粒を除去して刻線を加える
		Ⅰc類	鹿角製刀製具 凸湾側顆粒を除去して刻線を加える
Ⅱ類	ウマ・ウシ長管骨		ウマ・ウシ長管骨をそのまま利用し、背面中央に刻線を加える。

表 11　刻骨出土遺跡年代表

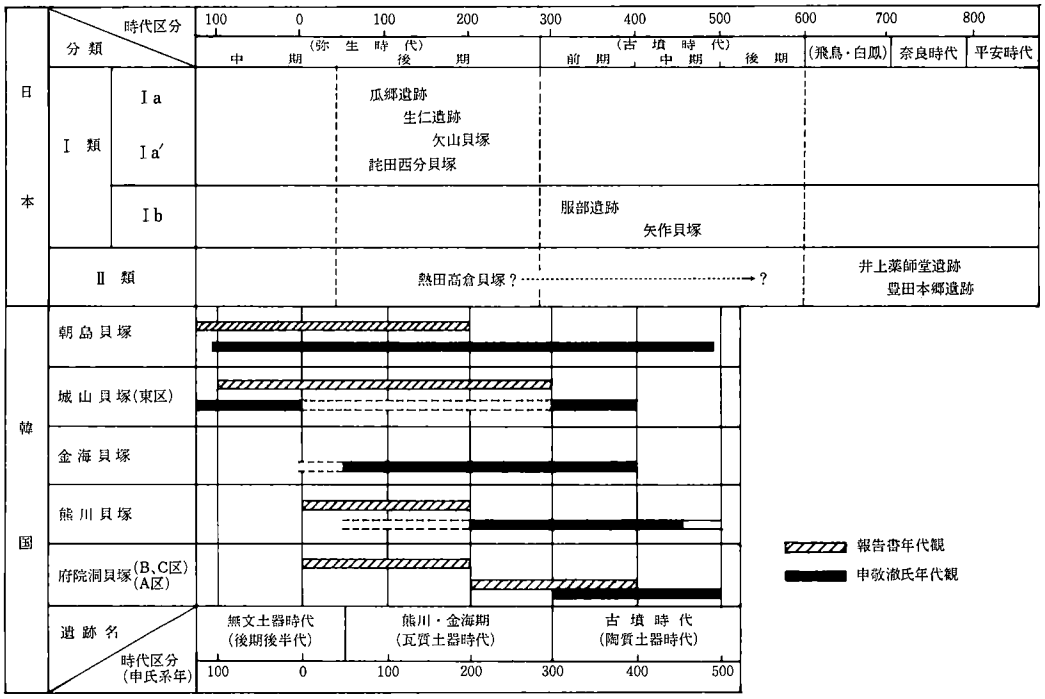


表 13　刻骨出土地名表

遺跡番号	遺物番号	遺跡名	分類	材質	全長	巾	刻線範囲	空白部長さ		刻線数	磨滅痕有無	年代（世紀）	備考
		（韓国）											
1	1	城山貝塚	Ⅰa	シカ・角	(7.9+α)	1.4	(4.7+α)	?	3.3	(15 +α)	?	BC1～AD3 (AD3～4)	北区貝塚
	2		Ⅰb	シカ・角	25.0	3.6(中央部)	6.5	9.0	9.5	21	?		
	3		Ⅰc	シカ・角	26.6	1.5	9.0	10.4	2.8	29	×		刀子柄 刻線を2度にわけて刻む
2	4	熊川貝塚	Ⅰb	シカ・角	23.2					18	○	AD1～2 (AD4～5)	角幹
	5		Ⅰb	シカ・角	17.0+α					18	×		角幹
	6		Ⅰ	シカ・角						31	○		
	7		Ⅰa	シカ・角						31	○		角枝
	8		Ⅰb	シカ・角	36.4					26	○		焼痕あり？ 角幹
3	9	府院洞貝塚	Ⅰb	シカ・角	(11.6 +α)	3.3	(2.4+α)	8.8	?	(5 +α)	?	AD1～2	C地区出土 ト骨（シカ・イノシシ）
4	10	金海貝塚	Ⅰb	シカ・角	(15.5 +α)	1.7～2.5	(7.5+α)	8.0	?	(37 +α)	○	(AD3～4)	一部板状加工
	11		Ⅰc	シカ・角	(16.5 +α)	(3.0+α)	(8.5+α)	8.7	?	(24 +α)	×		刀表具？
5	12	朝島貝塚	Ⅱ	ウシ・中手骨	(13.0 +α)	3.0(中央部)	6.7	?	?	30	○	～AD2 (BC2～AD5)	
		（日本）											
6	13	長野・生仁遺跡	Ⅰa	シカ・角	(27.1 +α)	1.7 (刻線面)	3.8	4.5	19	11	○	弥生（後）	Y7号住居址 ト骨（シカ）
7	14	大阪・国府遺跡	Ⅰa	シカ・角	25.5	?	2.0 1.9	14.7	8.1	8 9	?	?（弥・後）	2ヶ所に刻線あり
8	15	愛知・瓜郷遺跡	Ⅰa	シカ・角	14.75	1.6	6.5	4.5	4.0	21	○	弥生（後）	
	16		Ⅰa	シカ・角	(10.1 +α)	?	(6.5+α)	3.7	?	19+α	○		
9	17	愛知・欠山3号貝塚	Ⅰa'	シカ・角	9.0	2.5	5.2	1.7	1.9	14	○	弥生（後）	
10	18	佐賀・詫田西分貝塚	Ⅰa'	シカ・角	(4.9+α)	1.7	(1.5+α)	3.5	?	5 +α	○	弥生（後?）	表土層 金属刃物加工
11	19	千葉・服部遺跡	Ⅰb	シカ・角	16.0	2.3	8.8	4.5	3.0	29	○	古墳（五領・和泉）	溝内 金属刃物加工
12	20	千葉・矢作貝塚	Ⅰb	シカ・角	27.0	2.9	7.8	10.0	9.5	19	○	古墳（鬼高）	住居址内 金属刃物加工
13	21	愛知・熱田高倉貝塚	Ⅱ	ウマ・中手骨	22.9	3.0(中央部)	7.8	5.7	9.5	24～26	○	弥生 ?	金属刃物加工
14	22	福岡・井上薬師堂遺跡	Ⅱ	ウマ・中足骨	(19.5+α)	3.1(中央部)	11.6	68.5	?	25	○	AD 7～8	空白部に線刻 大溝内出土
15	23	神奈川・豊田本郷遺跡	Ⅱ	ウマ・橈骨	30.35	3.3(中央部)	8.0	11.0	11.5	16	○	AD 7～8	大溝内出土 鋸加工
(参)	(24)	島根・古浦遺跡	Ⅰc	シカ・角	?	?	?	?		(19 +α)	×	古墳	刀装具
(参)	(25)	奈良・唐古遺跡	—	シカ・下顎骨	9.0	2.7(中央部)	—	—	—	(類) 17 (舌) 6+4	○	弥生（前）	

※　以上の他に愛知県・佐賀県荒堅目遺跡よりⅠb類が出土している（未発表）

（単位 cm）

3．小結

以上みてきたように、井上薬師堂遺跡の調査では、北東から南西に走る大溝から、奈良時代を中心とする大量の土器・木製品、そして、ヘラ書・墨書土器、木簡等の文字資料、また奈良県山田寺系の重弁八弁蓮華文棰先瓦をはじめとする瓦類、日本で三例目で、朝鮮半島との祭祀形態の共通性をみる馬骨の刻骨などが出土し、筑後地方における歴史時代の貴重なる資料の集積が出来たと思われる。

本遺跡周辺には、7世紀後半までは下らないとされる井上廃寺、そして宝満川を渡ると7世紀後半から8世紀の小郡郡衙跡など、7世紀から8世紀にかけての律令制社会胎動期における地方のあり方を探る注目すべき遺跡が存在する。また、近年小郡市域では、三国丘陵の津古中剪遺跡、津古東宮原遺跡、宝満川西岸の沖積平野の吹上・北畠遺跡、宝満川東岸の扇状台地の干潟遺跡等が調査され、当時の社会構造の復元が少しずつ進められようときている。今後小郡郡衙跡を核とする各遺跡間の連関を遺構・遺物を通して考えていく必要がある。そのためには、まず井上薬師堂遺跡（谷部分）と東西台地（井上薬師堂遺跡台地部分、薬師堂東遺跡）との関係を究明すべきである。しかし、両台地の遺跡については、現在整理中であるため、今後の報告をまたなければならない。

そこで、本項では、とりあえず両台地との関係を考えていく上での注目点を谷部分の遺物を中心にすえて、何点か挙げていきたい。

1．遺構については、大溝の堆積開始年代と埋没年代が挙げられる。そして大溝は、出土土器から大略6世紀後半から8世紀後半にかけて機能を果たしていたと推定できる。しかし、台地で検出した弥生時代から古墳時代にかけての集落が存在した時期には、開析谷がどのような状況であったかは検討を要するであろう。（本調査では、大溝内から、弥生時代後期から古墳時代初期の土器等の投棄は認められなかった。）

2．遺物については、土器、木製品、ヘラ書・墨書土器、瓦、木簡それぞれに注意点を挙げてみる。

土器は、大溝西岸の弥生時代後期から古墳時代初期にかけての土器包含層のものを除いては、6世紀後半から8世紀後半のもので、その中心は7世紀後半から8世紀前半である。また、土器溜りでは、墨書土器が多数みられ、祭祀的様相を窮わせる。但し、土器溜りの土器は、6世紀末から8世紀後半までと幅広い時期にまたがるため、一時期の集積とは考えられず、ある期間を通しての「水辺のまつり」の場を推測することもでき、東側台地に、それに関わる施設が存在しないかが注目される。

木製品は、工具、農具、生活用具、祭祀具、建築部材等255点の製品が検出された。特にまとまって出土した田下駄・下駄は、他地域の出土品とも比較検討し、編年研究の材料となろう。

また、ナスビ形鍬は、着柄軸上に小さいながらも枘孔を有しており、その機能を考える上で重要な発見であった。さらに、255点という多量な製品に恵まれた本遺跡では、出土状況からして、木製品の集中する堆積層が、上・下二層に分層され、上層が14.342～14.890m、下層が13.803～14.290mにあたり、それぞれが、溝1、溝8内に所在することが明確になった。

これらの木製品は、大溝がほぼ滞水状態だったと考えられるため、両台地から投棄されたと思われるが、その時期の集落の木器保有率を考える絶好の資料となろう。このことについては、北部九州の木製品の出土が目立つ春日市辻田、福岡市板付、那珂深ヲサ、湯納、拾六町ツイジ遺跡等との比較検討が可能で、木器保有率の変遷を探ることから、各時期、各地域における機能の分化が看取できるようになるだろう。さらに、その遺跡の性格を考える材料ともなろう。

瓦は、山田寺系重弁八弁蓮華文棰先瓦が挙げられる。この瓦は、大・小二種の円形(直径15.5cm、11.5cm)、方形（一辺11.5cm）がある。棰先瓦は、屋根の裏板を支えるため、棟木から軒へわたす材の先端にうちつける装飾用の瓦である。このことから大・小の円形と方形の三種類の瓦を遣い分けた柱材の大きさの推定が可能になり、また建築部材の使用箇所の推測にも役立つだろう。

木簡については、出挙に関わる記載や「加太里」等の古地名を表わす記載があるにも関わらず、本遺跡の性格を特定する資料には恵まれなかった。しかし、これらの文字資料は、筑後地方では初めての検出例で、御原郡、御井郡の郡衙推定地から検出されていないことからも、大いに注目してよかろう。これら資料からは、隣接する井上廃寺と直結するものは見出せなかったが、本遺跡の資料が、流れてきたものでないことから、周辺に、文字を使用できる知識層であり出挙に関係した支配層が存在したことは濃厚に窺い知れる。

このように、井上薬師堂遺跡の遺構・遺物のもつ意義は、当時の社会復元に不可欠のものである。今後さらに、詳細な分析を両台地所在の集落との関わりから進めていき、再び検討を加えてみたい。

第３章　井上薬師堂遺跡の花粉分析

北九州大学生物学教室　畑中　健一
九州大学理学部地質学教室　野井　英明

「井上薬師堂遺跡」は、福岡県小郡市井上に所在し、国鉄甘木線（現甘木鉄道）筑後松崎駅から北西へ約500ｍの丘陵地に位置している。ここは城山（130.6ｍ）から延びる丘陵地の西北端にあたり、標高は17ｍ前後である。本遺跡は、弥生中期～中世の遺構・遺物を包含する複合遺跡で、周辺には、宝満川西岸の丘陵地帯を中心にして、太宰府に次ぐ官衙遺跡として著名な「小郡遺跡」や本遺跡北西の７世紀後半に建立されたと伝えられる「井上廃寺」が知られている。

本遺跡の発掘調査は、九州横断自動車道路の建設に先立って、1985年１～３月にかけて福岡県教育委員会によって行われたが、遺跡の東西の台地に挟まれた谷間の大溝（幅25ｍ、深さ2.5ｍ）を埋める腐植質堆積層から、６世紀後半から８世紀後半にかけての土器や木簡および鋤・田下駄・柄振・櫛・曲物・下駄・発火用具などの農耕具や生活用具が出土した。

この報告書は、大溝第２セクションのトレンチ北壁から採取した18点の試料について行った花粉分析の結果をまとめたものである。（第57図）

福岡県教育委員会文化課の方々には、発掘現場において試料の採取に色々と便宜をはかっていただいた。また、中村純高知大学名誉教授には、一部のプレパラートの検鏡をお願いし、有益なご助言・ご教示をいただいた。以上の方々に厚くお礼申し上げる。

分析方法

まず、以下に述べる方法によって、堆積物中の花粉化石を抽出した。この方法は、アセトリシス法（中村、1967）に$ZnCl_2$水溶液を用いた重液分離を加えたものである。

① 試料のおのおのから５～10ｇの堆積物を採る。

② 10％KOHにより腐植酸を除去する。

③ $ZnCl_2$水溶液（比重1.7～1.8）によって、花粉化石を砕屑物から分離する。

④ アセトリシス処理を行う。

⑤ グリセリンジェリーで封入する。

次に、光学顕微鏡を用いて、花粉化石を母植物名により同定した。この同定は、一試料について、高木花粉の合計が200個に達するまで行った。その後、同定結果をもとに、高木花粉総数を基数とした各分類群の百分率を算出し、主要なものについて、ダイアグラム（第58図）で示した。また、イネ科のうち、イネ属、ジュズダマ属などの同定は、位相差型顕微鏡を用いた中村（1974）の方法に従って行った。

分析結果

全層を通じて次の花粉・胞子を検出した。

樹木花粉（AP）：マツ属（*Pinus*）、トウヒ属（*Picea*）、モミ属（*Abies*）、ツガ属（*Tsuga*）、スギ属（*Cryptomeria*）、マキ属（*Podocarpus*）、シイノキ属（*Castanopsis*）、アカガシ亜属（*Cyclobalanopsis*）、コナラ亜属（*Lepidobalanus*）、カバノキ属（*Betula*）、ブナ属（*Fagus*）、クマシデ属（*Carpinus*）、ケヤキ属（*Zelkova*）、ハンノキ属（*Alnus*）、サワグルミ属（*Pterocarya*）、オニグルミ属（*Juglans*）、エノキ・ムクノキ属（*Celtis*／*Aphananthe*）、アカメガシワ属（*Mallotus*）、ヤマモモ属（*Myrica*）、ウルシ属（*Rhus*）、ミカン科（Rutaceae）。

低木・草本花粉（NAP）：ツツジ科（Ericaceae）、ハシバミ属（*Corylus*）、モチノキ属（*Ilex*）、ヤナギ属（*Salix*）、トネリコ属（*Fraxinus*）、ハイノキ属（*Symplocos*）、グミ属（*Elaeagnus*）、スイカズラ属（*Lonicera*）、ツゲ属（*Buxus*）、ブドウ属（*Vitis*）、ジャケツイバラ属（*Caesalpinia*）、イネ科〔野生型（Wild type）；ジュズダマ属（*Coix*）；イネ属型（*Oryza* type）〕、カヤツリグサ科（Cyperaceae）、ガマ属（*Typha*）、コウホネ属（*Nuphar*）、オモダカ属（*Sagittaria*）、アリノトウグサ属（*Haloragis*）、フサモ属（*Myriophyllum*）、キカシグサ属（*Rotala*）、ツリフネソウ属（*Impatiens*）、ヨモギ属（*Artemisia*）、キク科（Compositae）、オミナエシ属（*Patrinia*）、イノコヅチ属（*Achyranthes*）、タデ属（*Persicaria*）、ソバ属（*Fagopyrum*）、スイバ属（*Rumex*）、アカザ属（*Chenopodium*）、タネツケバナ属（*Cardamine*）、ハコベ属（*Stellaria*）、キンポウゲ属（*Ranunculus*）、セリ科（Umbelliferae）、フウロウソウ属（*Geranium*）、カラハナソウ属（*Humulus*）、ワレモコウ属（*Sanguisorba*）、シソ科（Labiatae）、キツネノマゴ属（*Justica*）、アカバナ属（*Epirobium*）、ゴキヅル属（*Actiostemma*）、イボクサ属（*Aneilema*）。

シダ類胞子（FS）：ウラジロ属（*Gleichenia*）、ヒトツバ属（*Pyrrosia*）、ゼンマイ属（*Osmunda*）、単条溝型（Monoletetype）、三条溝型（Trilete type）。

以上の花粉・胞子のうち、主要な種類の消長を第58図に示した。

まず木本類では、常緑広葉樹のアカガシ亜属とシイノキ属が優占し、全層を通じて出現率にいちじるしい変動は見られない。落葉広葉樹では、エノキ・ムクノキ属が中層部でかなり出現するが、上・下層での出現率は低い。ミカン科は下層で数%出現するにすぎない。コナラ亜属やブナ・クマシデ・ケヤキ・ハンノキ各属もほとんど全層にわたって検出されるが、出現率は6％以下である。針葉樹ではマツ・モミ・ツガ・スギ各属が検出されたが、広葉樹に比べいちじるしく劣勢である。

草本類ではイネ科をはじめ、ヨモギ属・イノコズチ属・タデ属・アカザ属・スイバ属・タネツケバナ属・カナムグラ属・ゴキヅル属・イボクサ属など雑草と思われる多くの種属が検出され、出現率も高い。これらのうち、ヨモギ・ゴキヅル・イボクサ各属は下層部に多く、とくに

ヨモギ属は下層部で117%も出現する。イネ科（野生型）は下層と上層で多く出現するが、中層部での出現率は15%前後である。栽培植物ではイネ属が全層にわたって出現し、また上層では低率（0.7～1.1%）ながらソバ属も検出される。

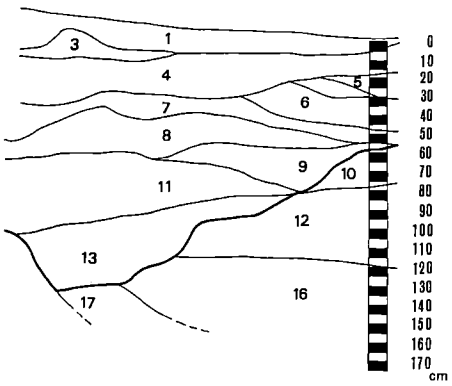
考察

前項で指摘したように、樹木類の花粉構成についてみると、アカガシ亜属とシイノキ属が優占するところから、本遺跡は8世紀後半までのある時期には、シイノキや常緑カシ類の優占する照葉樹林の中に立地していたと考えられる。しかしながら、中層部でエノキやアカメガシワの増加する傾向が認められるところから、既に遺跡の周辺では照葉樹林の人為的破壊により、エノキやアカメガシワなど先駆植物を主とした二次林がかなり拡大していたと推定される。マツ属の出現率が意外に低いのは、遺跡が内陸部に位置していることによるものであろう。次に草本類の花粉構成から推定すると、長者堀周辺の低湿地では、おそらくヨモギ・イノコズチ・タデ類・アカザ・ギシギシ・タネツケバナ・キツネノボタン・セリ・カナムグラ・ゴキヅル・イボクサなど各種の草本類が旺盛に繁茂していたことは疑う余地がない。この雑草地は、木器類の出土状況からみると、当時さまざまな廃棄物の投棄場所であったと考えられる。しかし、イネ属花粉の出土状況から推定すると、大溝低湿地の一部は水田としても利用され、イネの栽培が続けられていたと判断される。田下駄や鋤、柄振など水稲耕作に使われる木器類の出土はこのことを裏付けるものであろう。また、ソバ属花粉が最上層で低率ながら出現することから、8世紀後半には丘陵地でソバの栽培が始まったと推定される。

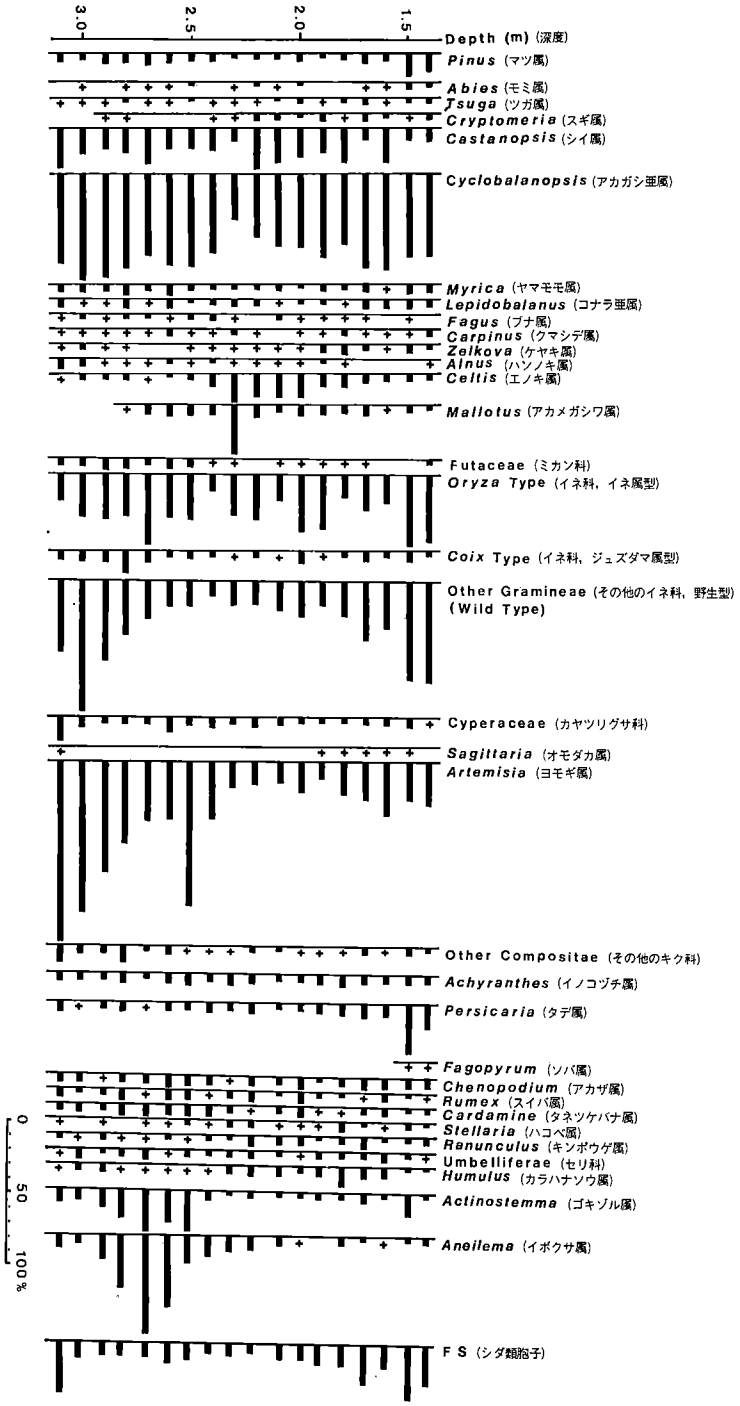
文献

中村純（1974）：イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として。第四紀研究、13：187—193。

中村純（1976）：花粉分析。古今書院、東京、p.232。



第 57 図　花粉分析　資料採取地点図



第 58 図　井上薬師堂遺跡第２セクション北壁の花粉分析ダイアグラム（図中の＋は、出現率が１％未満であることを示す。また、深度は、現地表面からの深さを示す。）

第4章　出土木製遺物の樹種

琉球大学農学部　　林　　弘　也

井上薬師堂遺跡　谷地区（福岡県甘木市大字井上字西薬師堂　所在）は奈良時代の8世紀前半を中心とする遺跡である。本遺跡は福岡県教育委員会が発掘調査を行ない、建築部材や用途不明の板材、櫛、田下駄などの木製遺物が出土した。木製遺物の中から46点について樹種を同定したので、結果を取りまとめた。出土した木製遺物の用途は建築部材が9点と最も多く、田下駄、大足等の農具類が6点、その他日常用品が含まれていた。しかし、中には用途の不明の遺物も数点あった。

樹種の同定は、木材の3断面のプレパラートを作製し、顕微鏡で観察した。観察された木材の特徴に基づいて樹種を同定し、更に樹種が明らかな木材のプレパラートと対照して、樹種を決定した。

プレパラートの作製は、先ず一辺が5～8㎜の立方体を資料から切り出し、切り出したブロックをポリエチレングリコール＃4000で包理した。スライディングミクロトームを使用して、厚さ14～20μmの切片を包理ブロックから採取し、水・グリセリン混合液で封入し、プレパラートを作製した。

同定した樹種は、針葉樹材が7樹種37点と広葉樹材が6樹種9点であった。各資料の同定結果は表13に示し、顕微鏡写真はFig. 1～45に示した。利用された樹木は高木になる樹種ばかりであり、広葉樹には比較的硬く直径の大きい樹木が含まれており、かなり優れた加工具が用いられていたものと推定される。使用された材には針葉樹材が多いが、なかでもスギ（Cryptomeria japonica）が多用され、特に建築部材ではスギ材が主要な材であったものと思われる。日常生活の道具類である下駄、槽、盤、椀にも使われており、槽は、弥生時代では、クスノキ、クリなどの広葉樹が主要な材料であったことと対照的である。生活道具の櫛は、御笠川南条坊遺跡（太宰府市、鎌倉時代中期）からも出土した例があり、使用されていた材は同じくイスノキであった。同じ樹種が使用されていることは興味深いことである。

表 12　樹種一覧表

資料（整理番号、用途）	和名	学名	顕微鏡写真
2　櫛	イスノキ	Distylium racemosum	Fig. 1
10 槌の子	シイノキ	Castanopsis sp.	Fig. 2
15 田下駄	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 3
35 大足	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa	Fig. 4
84 加工痕のある板	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 5
93 スコップ柄	モミ	Abies firma	Fig, 6
94 柄振	モミ	Abies firma	Fig. 7
111 用途不明品	クロバイノキ	Symplocos prunifolia	Fig. 8
127 剣柄	アスナロ	Thujopsis sp.	Fig. 9
129 部材（ほぞ穴）	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 10
130 部材	クロベ	Thuja standishi	Fig. 11
158 田下駄	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa	Fig. 12
165 槌の子（柄）	クロバイノキ	Symplocos prunifolia	Fig. 13
171 曲物（底板）	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa	Fig. 14
179 槌状	ナツツバキ	Stewartia pseudo-camellia	Fig. 15
181 下駄（歯部）	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 16
182　盤	モミ	Abies firma	Fig. 17
183　椀	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 18
184 下駄	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 19
185　剣	ヤブツバキ	Camellia japonica	Fig. 20
186　椀	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 21
187 曲物（底板）	アスナロ	Thujopsis sp.	Fig. 22
189 槌の子	モミ属	Abies sp.	Fig. 23

資料（整理番号、用途）	和名	学名	顕微鏡写真
190 槽	アスナロ	Thujopsis sp.	Fig. 24
195 台状	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 25
196 部材	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 26
197 部材	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 27
198 下駄	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 28
199 なすび型鋤	カシ	Quercus sp.	Fig. 29
200 部材（ほぞ穴）	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 30
208 棒状木製品	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 31
209 曲物	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 32
210 部材（ほぞ穴）	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 33
211 部材（板状）	アスナロ	Thujopsis sp.	Fig. 34
212 曲物（底板）	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa	Fig. 35
216 槽	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 36
217 部材	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 37
218 盤	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 38
219 砧又は杵	シイノキ	Castanopsis sp.	Fig. 39
220	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 40
222 槽	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 40
227 部材（溝付き）	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 41
229 曲物	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa	Fig. 42
232 用途不明品（角材）	カヤノキ	Trreya nucifera	Fig. 43
233 曲物（底板）	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa	Fig. 44
239 盤	スギ	Cryptomeria japonica	Fig. 45

第5章　おわりに

1．はじめに

井上薬師堂遺跡では、昭和60年1月初旬から3月中旬までを第1次調査、7月初旬から中旬までを第2次調査として、東西台地に挟まれた開析谷を東北から南西に走る大溝を調査した。

今後、同時に調査した台地部分の弥生時代から平安時代にかけての複合集落の報告が成される予定であるが、その時点で、改めて集落と大溝の関係を論ずることにし、本項では、遺構について、大溝北側の7ヵ所で実施したボーリング調査結果を踏まえての大溝の性格と機能に対する予察的検討、遺物について、大量の出土遺物から、木製品、瓦、木簡、ヘラ書・墨書土器の若干のまとめを記していきたい。

2．遺構について

a.　大溝の性格と機能

この問題については、台地部分の集落址も含めて、総合的に考えるべきことであるが、本項では、今回の調査で確認できたことを基に、今後の検討に向けての予察的見解を述べていきたい。

まず、今回の第1次調査終了後、5月1日から2日にかけて行なった、大溝から北側に延びる谷部分（井上の集落を独立台地状にさせる開析谷）のボーリング調査の結果を記してみる。

ボーリング調査（第3図）

計7ヵ所でボーリング調査を行ない、大溝の北側への延びを確認した。

No.1

現水田面の耕作土、床上の下、84cmで灰黒色粘質土、暗灰黒色粘質土にあたる。80cm程から湧水がある。132cmで礫層（地山層）に達する。

No.2

現水田面の耕作土、床上の下、104cmで青灰色粘質土にあたり、248cmで地山層に達する。

No.3

現水田面の耕作土、床土の下、120cmで灰黒色粘質土、暗灰黒色粘質土、暗灰黒色砂質土にあたる。さらに200cmで暗灰色砂質土、250cmからは灰青色砂質土、そして330cmで地山層に達する。

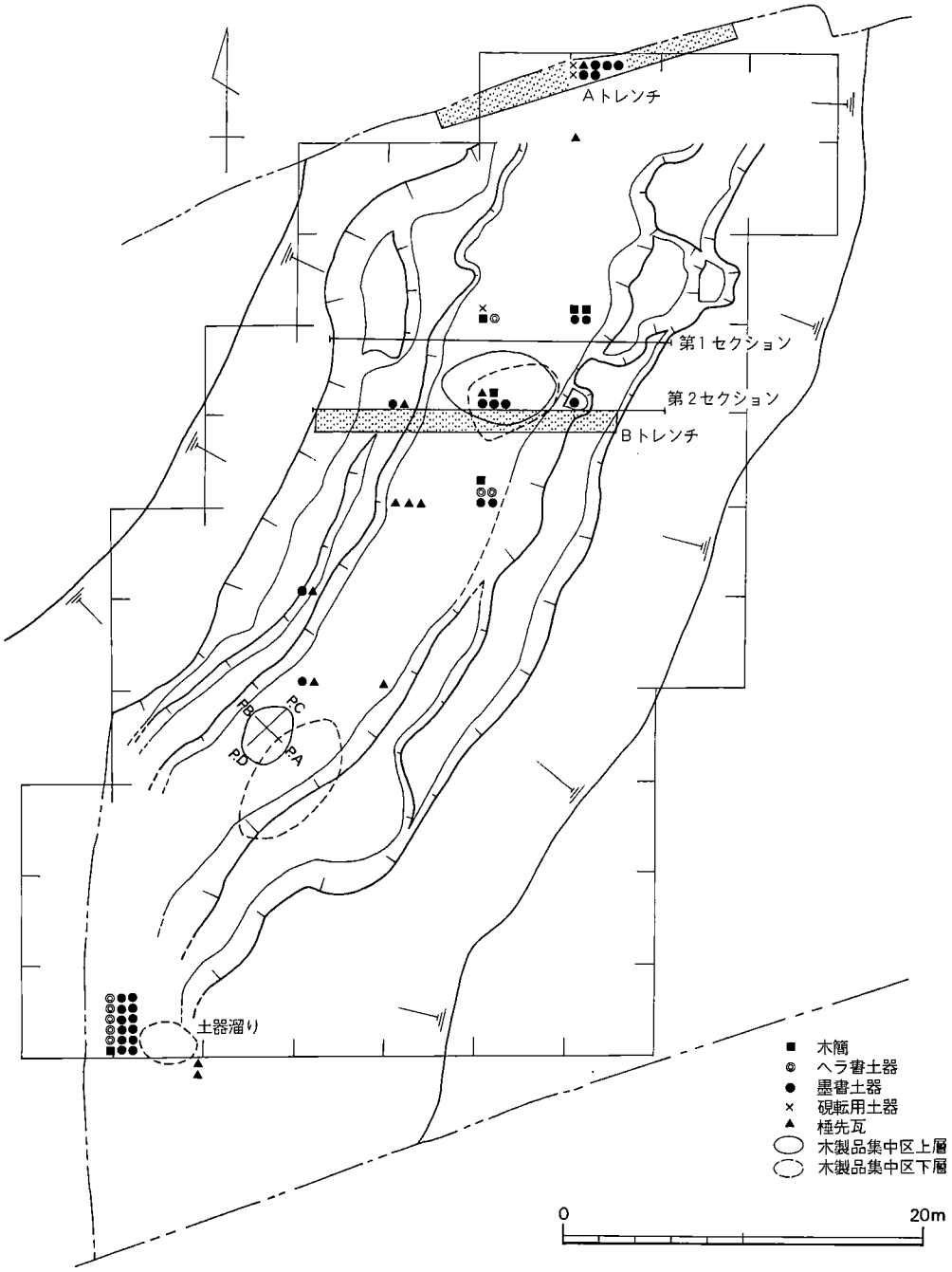
No.4

現水田面の耕作土、床土の下、105cmで灰黒色粘質土、141cmで灰黒色砂質土、180cmで暗灰色

粘質土にあたる。そして、230cmで地山層に達する。

No.5

東側の台地を削平して盛土している。現地表面から34cmで水田面にあたり、72cmで地山層に



第 59 図　木製品集中区及び出土遺物水平分布図（縮尺 1/400）

達する。

No.6

No.5と同じ状態にあり、盛土の下、40cmで水田面にあたり、52cmで地山層に達する。

No.7

地形図にのる小川が台地の削平で埋没している。盛土、水田の耕作土、床土の下、59cmで暗灰色砂質土にあたり、125cmで地山層に達する。

以上の結果から、No.1は、大溝とのつながりをもつ植物遺体を含む堆積層とすることができるが、No.2では、還元状態の青灰色粘質土がみられ、そのつながりが疑問だが、滞水状況にあったことを考慮すれば、一応大溝とすることもできる。No.3～4も、大溝との関連を示す植物遺体を含む堆積層である。ところが、No.5～7では、大溝との関連は見出されないが、大溝が現在の井上集落をほぼ一周していたことがわかった。これは、現在もNo.3～4にかけて一段低く空堀状態にあることからも首肯できる。こうして、大溝は、北側では、現在の井上集落をとりまき、南側は、南西に向け流れていることがわかった。しかし、南側はこのまま開口状態にあるのか、途中で切れるのかの確認はできていない。

発掘調査の観察から、この大溝は、ほとんど流水がなく、滞水状態を長く続けていたことが確認できたことからも、両台地の集落を画する大溝（特に西側台地に存在すると思われる井上廃寺を意識した施設）であった可能性が高いと思われる。

3．遺物について

a. 出土遺物の分布傾向について（第59図）

木製品、瓦、木簡、ヘラ書・墨書土器についての個別のまとめに入る前に、瓦、木簡、ヘラ書・墨書土器、硯転用土器の調査区内における水平分布をみて、いくつかの傾向を指摘しておきたい。

棰先瓦は、G18、19で各1点、G24で2点、G37、38で各1点、土器溜り周辺で2点の計8点が出土しており、G18、とG24出土のものは接合可能である。

木簡は、G13で1点、G14で2点、Bトレンチで1点、第2セクションで1点、土器溜り周辺で1点の計6点が出土している。

ヘラ書土器は、G13で1点、Bトレンチで2点、土器溜りで6点の計9点が出土している。

墨書土器は、Aトレンチで5点、Bトレンチで2点、G14で2点、G17、18、19、37で1点、G14・20、G13・19、G19・20で1点、土器溜りで10点、土器溜り周辺2点、木製品集中区下層で1点の計29点が出土している。

こうしてみると、土器溜りでのヘラ書・墨書土器の出土比率が極めて高いことが注目できよう。

b. 木製品について

井上薬師堂遺跡谷部分の調査では、計255点の木製品が確認できたが、これらを用途別に百分率（木器保有率）であらわしてみると、農具7.8%、工具5.5%、容器42.2%、装身具10.6%、祭祀具6.4%となる。ここで注目できるのは、農具と装身具の割合である。北部九州の木製品出土例の検討は今後の課題するが、畿内の木製品出土例と比較すると、弥生、古墳時代では、農具の占める割合が高く24.8%～50.5%となる。井上薬師堂遺跡では、7.8%と極端に低く、農業生産を第一義とする集落ではなかったのではないかという推論を引き出す。また、装身具類も畿内では、0.8%～5.0となり、井上薬師堂遺跡の10.6%とはかなりの差がある。このことは、弥生・古墳時代との生活様式の変化を物語っているのであろう。(尚、北部九州の福岡市西区拾六町ツイジ遺跡では、弥生時代～平安・鎌倉時代にかけて、多量の木製品を出土している。特に、本遺跡と関連する奈良時代以降の木器保有率は、農具49%、工具１%、容器11%、祭祀具４%、建築材30%となる。拾六町ツイジ遺跡では、農具が49%と高い比率を占め、農業生産を主にする集落が隣接していたと考えられ、井上薬師堂遺跡とは異なった集落形態を示すものである。)

さて、以下、本遺跡において、比較的出土数が多く、型態分類が可能な下駄・櫛を取り上げ、若干のまとめをしてみたい。

下駄（図版66～70、第37図～第39図）

下駄は台と歯が一木からなる連歯下駄と台と歯が別材の差歯下駄がある。

本遺跡出土の下駄計18点はすべて連歯下駄である。

「木器集成図録」によると、下駄は鼻緒孔の位置、歯のつくり方、平面形から分類することができる。それぞれ記してみると、

〈鼻緒孔の位置〉

A）前壺を左右いずれかの一方によせてあけ、前・後壺とも歯の外側にあけたもの

B）前壺を左右いずれかにかたよせ、後壺を後歯の前にあけたもの

C）前壺を台の中央にあけ、後壺を歯の内側にあけたもの。

〈歯のつくり方〉

Ⅰ）台の両側から少し内寄りから歯をつくり、前・後歯ともに側面からみて外開きにつくりだすもの

Ⅱ）台と同じ幅で、縦断面が台形ないしは方形の歯をつくもの

Ⅲ）歯の下辺幅を台の幅よりも広くするもの

Ⅳ）歯の下辺幅を広くするとともに、歯の四隅の角をおとして平面形を隅丸方形にするもので、この場合には台裏の周縁に面取りをほどこす

Ⅴ）前後の歯を台の両端によせたもので、この場合には前壺が前歯の後にあくことになる。歯は鑿でほりだしたり鋸で挽いてつくる。

〈平面形〉

a）長方形ないしは隅丸長方形

b）長さに対して幅がせまく前端と後端が半円形を呈するもの

c）小判形

d）前後の端を弧形にするが、前幅よりも後幅を狭くする

e）前後の端を直線にするが、前後の歯から両端にかけて次第に幅を狭めるもの

になるという。

平面形は時代の前後を示さないが、鼻緒孔の位置や歯のつくり方は、ある程度時代の変遷が追えるようである。大きく、A→B→C、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ・Ⅳの流れが看取できる。

さて、本遺跡では、以下のように分類できる。

63はa型式、66はⅡa型式、67はⅢa型式、68はBⅡc型式、69はBⅡc型式、70はBⅡd型式、71はd型式、72はBⅢd型式、73はBⅡa型式、75はBⅡa型式、76はa型式、77はBⅡa型式、79は不明、80は不明、81はBⅡa型式、135はBⅢa型式、136はBⅢa型式となる。

櫛（図版71、第40図）

「木器集成図録」によれば、7世紀から10世紀の横櫛は、A型式の長方形のものと、B型式の半円形のもの二型式に分類され、A型式はさらに、AⅠ型式（肩部が角張る）、AⅡ型式（肩部に丸味をもたす）の二種に細分できるという。そして、7世紀までには、AⅡ型式は出現していないらしい。また歯は荒く、3cmあたり21～24枚で、8世紀以降では歯は細かくなり、平均3cmあたり32枚、多いものでは、38枚になるという。その他、歯の挽きだし位置をきめる切通し線は、背の上縁に平行して曲線を描くもの、上縁に関係なく直線にひくものの二種があるらしい。

さて、本遺跡出土の横櫛は、計4点ある。全体の形のわかる86、87、90についてみると、すべてA型式で、86と90はAⅠ型式になり、87はAⅡ型式に近い。但し、歯は比較的荒くひき出されている。（緒方）

c. 瓦類について（図版90～94、第52～55図、60～64図）

今回の調査で出土あるいは調査中に表採した瓦類は棰先瓦７点（大型円形５、小型円形１、方形１）、軒丸瓦１点（表採）、軒平瓦１点、平瓦片５点の計14点である。以前から知られていた資料と比して新発見のものはなく、資料の追加にとどまった。出土状況は本来の使用場所から遠く離れて遊離し、廃棄されたものであるが、発掘調査を経て出土したという点に若干の資料価値がある。以下、既応の出土資料のうち代表的なものの紹介を行ない、今回の調査で出土した瓦類との対比を行なってまとめにかえる。

棰先瓦（第60図）　棰先瓦は井上廃寺跡において九州では初めての発見となったが、小郡干潟遺跡（註1）でも同種の方形棰先瓦が出土しついる。瓦当の文様は奈良県山田寺系の重弁蓮華文で、弁には鋭く高い鎬を通し、彫りも深い逸品である。円形棰先瓦は大、小の２種、方形は１種の計３種類のタイプが知られており、今回も同じく３種類のものが出土した。

円形棰先瓦の大型品は径16cm前後で同笵品が多い。同笵品は蓮弁の同一箇所に小さな傷跡がある（図版90・91の○印を付した部分）。表採資料の中には同笵品ではないものもあり、いくつかの笵で大量に生産されたようである。小型品は径12.5～13cm程である。現在小型品の同笵関係を判断できる資料はない。

方形棰先瓦は一辺が12cmを少しこえる。これについても、同笵関係を判断できない。

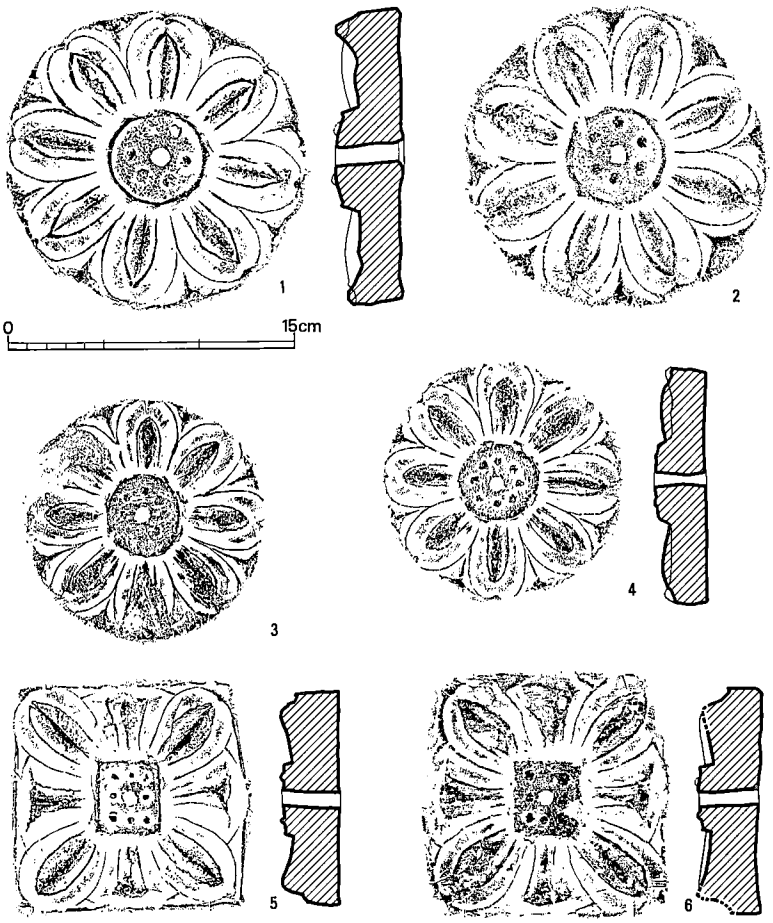
本遺跡の棰先瓦は山田寺出土のものと比較して蓮弁のつくりが異なって文様がやや繊細となり、外形は山田寺出土例が蓮弁と楔形小弁の形をそのまま残して完全な円形とならずに出入りがあるのに対して井上廃寺出土列は外形の出入りをなくし完全な円形につくられている。また井上廃寺のものは瓦当面を除いた部分がすべて粗くダイナミックなヘラケズリを施している。主に文様のつくりの若干の相違から、井上廃寺出土の棰先瓦は山田寺出土のものより後出するものは当然だが、さほど時間的なへだたりはなかろうと考える。山田寺は舒明13年（641）に整地工事を始めて皇極２年（643）に金堂が完成し、大化４年（648）に寺院活動がはじまったとされ、創建期の瓦は640年代の半ば頃に製作されたとすれば、井上廃寺の出土棰先瓦は、少なくとも７世紀後半の中に製作時期を求められよう。

軒丸瓦（第61図）　既応の表採資料には、重弁の六弁蓮華文・同八弁蓮華文と、単弁の七弁蓮華文・同八弁蓮華文を配する４種の瓦当がある。これらについては小田富士雄氏（註2）の研究があるが、氏の形式設定を若干変えて分類を行なうことができそうである。

八弁蓮華文軒丸瓦をのぞく古式の軒丸瓦は次の２種類にわかれる。

① 直径3.7cm、高さ0.8cmの小さく高い中房に７個（１＋６）の蓮子を入れ、その周囲に縁取りがなく鎬の通らない六弁の重弁蓮華文を配する。左右に撥形の弁をひかえた紡錘形の間弁は中央に鎬が通り、長さも長く大振りである。また、

周縁には一重圏を巡らす。瓦当面の直径は16.5cmである。製作技法は瓦当に丸瓦を直角にセットしたもので、瓦当面と直角にしっかりとした顎が存する。古い型式でいわゆる一本作りと云われているものである。製作技法は古式で文様も素朴である。小田富士雄氏の井上Ⅱ式である。11および調査中に表採した資料(第54図－8）がこれに相当する。



第 60 図　椎木先瓦実測図－関連資料①－（縮尺 1/4）

② 直径5.5cm、高さ0.5cm程の中房（1より大きく、高さが低い）に6個（1＋5）の蓮子を入れ、その周囲に弁中央に鎬が通り弁周が一段高くなり七弁の蓮華文を配する。間弁は1と同じく撥形の弁を左右に配する紡錘形を呈するが鎬がなく、小型である。周縁には二重に圏線を巡らす。瓦当文様は極めて整美で、その直径は18.7cmである。製作技法は1とは異なり丸瓦を瓦当裏面に接着する角度は直角ではなくやや斜交し、補強の粘土を1より多く使用するなど製作面で1より新しい傾向が認められる。小田富士雄氏の井上Ⅰ式である。この系統の瓦に属するものは7～10で、10は久留米市筑後国分寺跡からの表採品(註3)で、他と比べて文様に退化傾向が見られる。

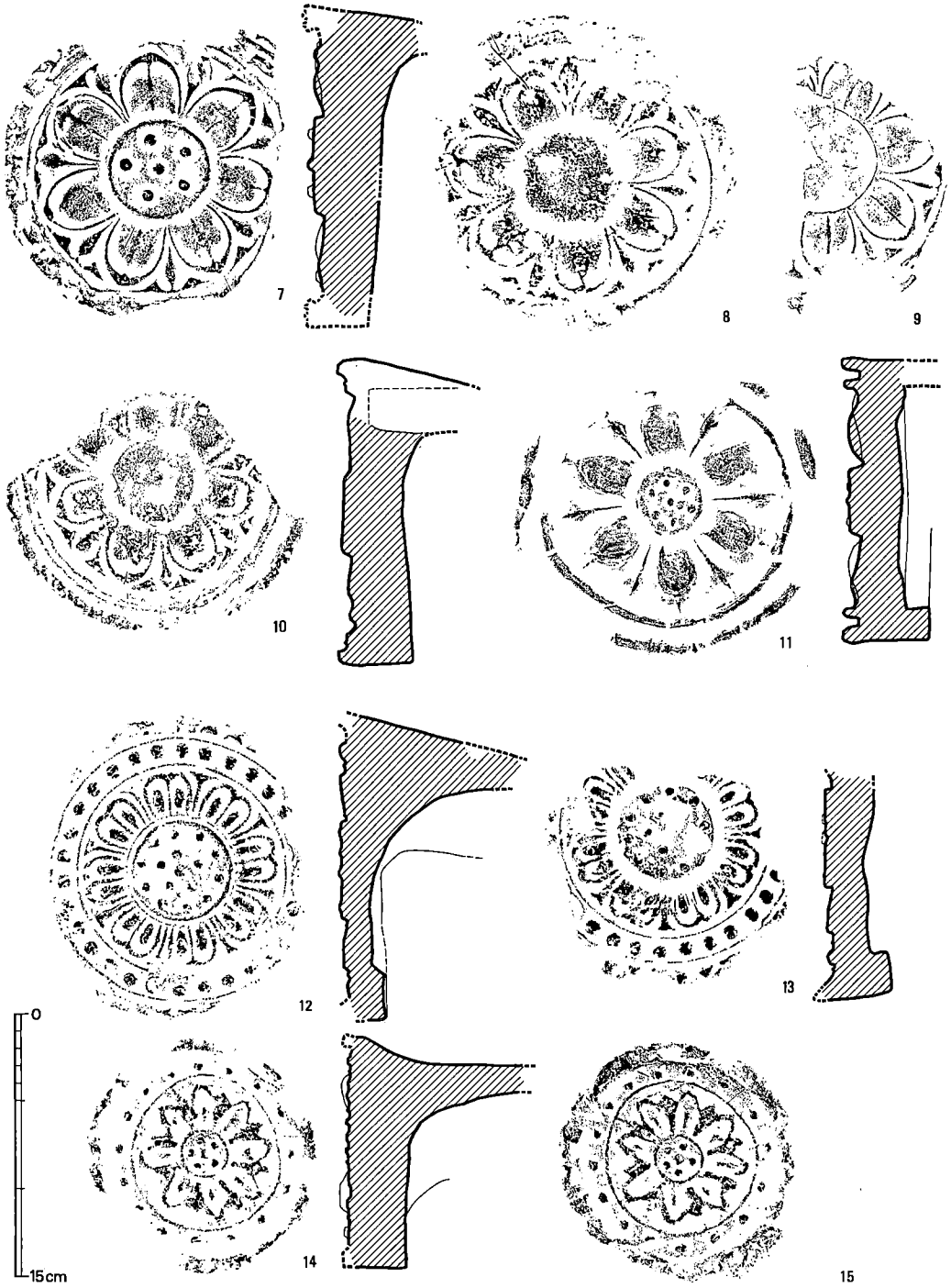
これら百済系単弁七弁蓮華文軒丸瓦は現状では井上廃寺跡と久留米市筑後国分寺跡から表採されているだけである。また重弁六弁蓮華文軒丸瓦は井上廃寺跡からのみ出土する。上記のことからこの種瓦を以下のように形式分類することができよう。

井上A式　①で説明したように11および第61図－１の資料が含まれる。製作技法は奈良県飛鳥寺出土軒丸瓦のように、丸瓦を瓦当面裏面に対して直角に接着する。これは、井上廃寺跡出土の他の形式の軒丸瓦には見られない技法で本遺跡資料では最も古いものと考えられる。小田富士雄氏の井上Ⅱ式に相当する。

井上B式　７～９が含まれる。やや退化傾向を示す筑後国分寺例10も７～９の系譜の瓦であり、井上廃寺跡例の古式のものを井上ＢⅠ式、筑後国分寺例を井上ＢⅡ式とする。素朴な文様のA式と比べてB式は加飾化傾向にあり、中房も大型化する。また、瓦当裏面への丸瓦の接着も差し込みの手法を用い、両者の角度も直角ではなく斜行し、老司系軒丸瓦と同様の製作技法をとる。

次にこれらの瓦の製作時期について考えてみるが、A式とB式の新旧関係については、製作技法の点からA式が古く、B式が新しい様相を示すということは了解されよう。が、それは技術上の問題点であり、畿内地方の瓦製作技術上の新、旧差がそのまま井上廃寺の使用瓦の製作技術上の新、旧差をストレートに反映するかについては、なお、検討の余地はあるものの、現状では両者に時期差を認めることは不当ではあるまい。A式は井上廃寺の創建期のものと私考し、ＢⅠ式は創建期に使用された可能性を否定できないが、寺の盛時期か、第１期の大幅な改修時のものであろうと推定する。よって、先述の棰先瓦の年代観と整合させるならば、A式は７世紀後半のものと考えられ、ＢⅠ式はそれよりやや下降するものの老司系軒丸瓦の存在からは降らないと考える。またＢⅡ式は筑後国分寺跡での表採品であり、創建期の瓦は複弁六弁のものであろうと考えられ、上記単弁七弁のＢⅡ式が、国分寺創建期の主要な瓦とは考えにくく、この瓦を８世紀半ば頃の製作と考えるよりも、更に古く位置づけた方がよいと思われる。

次に、井上廃寺跡でも老司系丸瓦(12・13)が表採されている。直径5.5cm程の中房に16個（１＋５＋10）の蓮子を入れその周囲に複弁八弁の蓮華文を配する。その外側には圏線をはさんで30個の珠文をめぐらし、更にその外側は鋸歯文を配する。いわゆる老司Ⅰ式の範疇にはいる。瓦当裏面への丸瓦の接着は差し込み技法を用い、その際補強粘土を入念に用いる。また、しっかりとした顎の段が認められる。老司式軒丸瓦の初期の製作時期が、太宰府市観世音寺との関係で考察される場合が多く、観世音寺創建時の瓦が老司式の初期のものであるならば、井上廃寺出土例は、先述の井上ＢⅠ式とさほど変わらない時期の所産であろう。その場合、大宰府史跡でも明らかなように、建物による瓦の使い分けがあった可能性がある。井上C式とする。



第 61 図　軒丸瓦実測図ー関連資料②ー（10は筑後国分寺跡出土，縮尺 1/4）

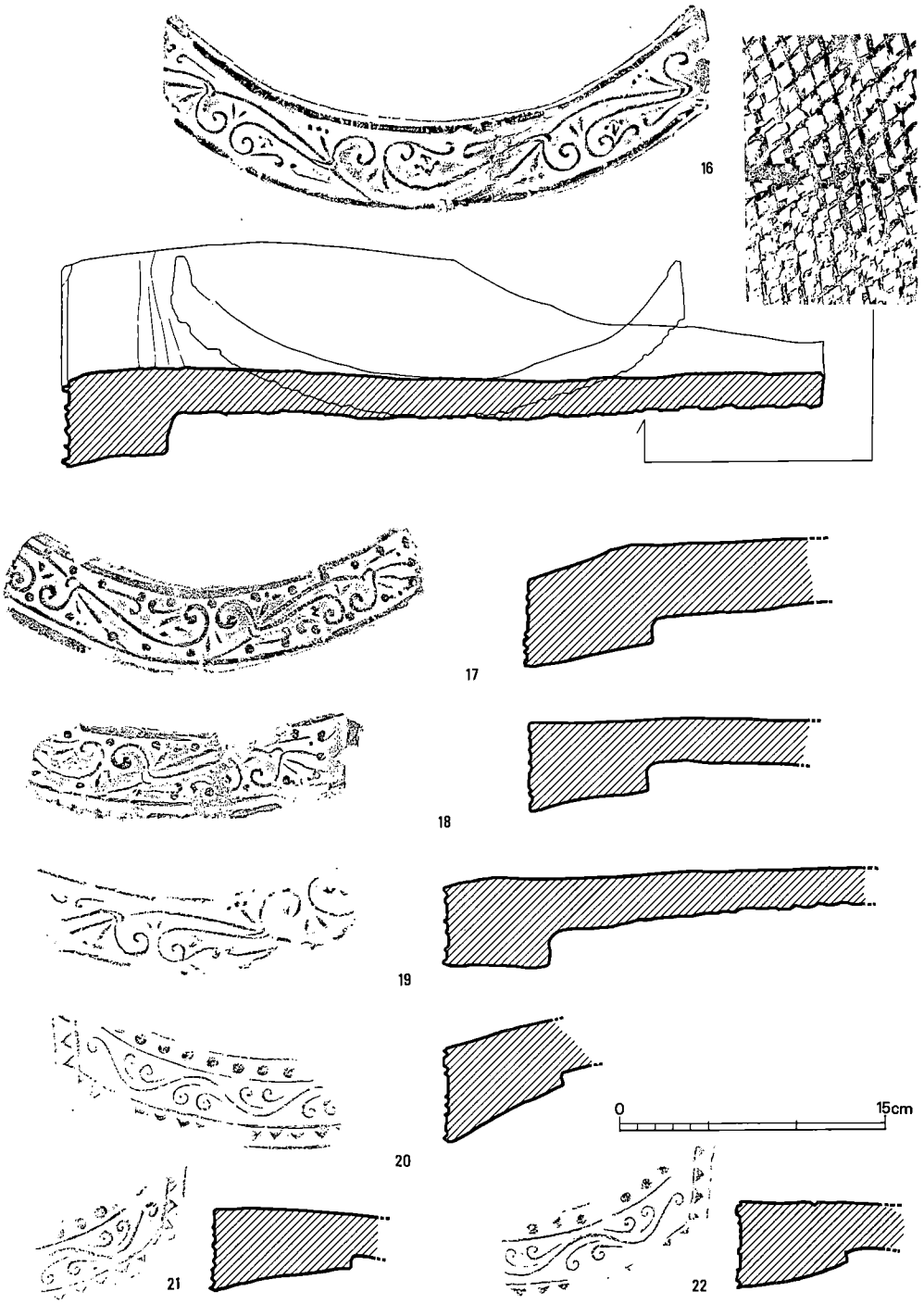
最後に、単弁八弁の軒丸瓦がある（14・15）。直径2.5cmの中房に6個（1＋5）の蓮子を入れ、その周囲に不揃いの11個の蓮弁を配する。その外側は圏線をはさんで16個の珠文をめぐらし、周縁にいたる。瓦当面の直径は13cm程である。瓦当裏面への丸瓦の装着は差し込み技法による。井上D式とする。この瓦の出現の契機は定かではないが、その製作時期は奈良時代末期を前後する頃と考える。

上述のように井上廃寺跡の軒丸瓦は、7世紀後半から8世紀末頃の間に製作されたものであろうと考える。

軒平瓦（第62図）　表採資料では左行する忍冬唐草文を表現したもの（16～19、18は筑後国分寺跡出土）と、同じく扁行唐草文を表現したもの（20～22）の2種類がある。後者は老司系軒平瓦として知られているものである。両者をA・Bの2型式に分類する。

井上A式　扁行する忍冬唐草文を表現したもので、力強い作風である。唐草文の周囲の珠文の有・無で二者にわかれ、珠文のないものを井上AⅠ式、珠文のあるものをAⅡ式とする。AⅠ式には16・19が含まれ、瓦当面の彫りはAⅡ式より深く、左行する唐草文も簡素である。瓦当裏面と平瓦の接着角度はほぼ直角で、差し込み技法によると思われる。平瓦裏面は格子目のタタキが見える。顎のつくりはしっかりとしている。AⅡ式は17・18と大溝での調査出土資料が含まれる。彫りはAⅠ式より浅く、唐草文は右行しAⅠ式のそれを180°反転したもののようである。唐草文の表現ではAⅠ式より退化し、AⅠ式にみられた細部の文様は省略される。かわりに、唐草文の四周に珠文が配され、下段の縁と珠文の間には一本の凸帯がはいり、瓦当文様は井上AⅠ式に比べて忍冬唐草文自体は退化傾向を示すが、その周囲は加飾化される、瓦当裏面と平瓦の接着はAⅠ式と同様である。平瓦裏面に格子目タタキはなく（資料が少ないので確言できないが）、縄目のタタキかヘラケズリである。顎の段は低くなり、顎の深さはAⅠ式が6cmと前後であるのにAⅡ式は7cmと若干深くなる。

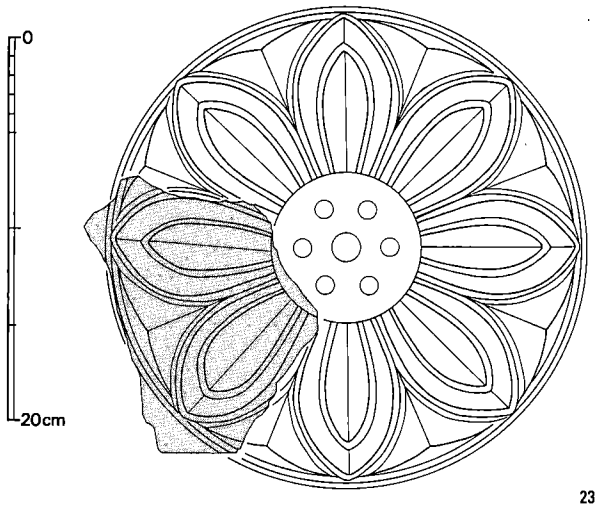
井上B式　左行する扁行唐草文で上外区に珠文を、下外区および左右の脇区に外向する凸鋸歯文を配するもので、老司系の瓦である(20～22)。顎は段顎で、その深さは6～8cmの間でまちまちである。平瓦裏面の最終調整は遺存部で判断する限り、ヘラケズリを行い、タタキ目は認められない。唐草の巻きはしっかりとし、いわゆる老司I式に相当する。

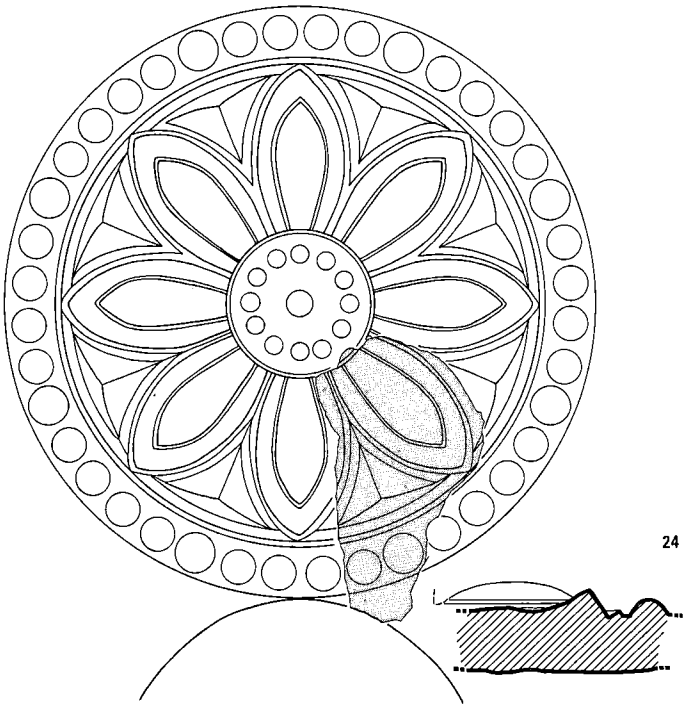


第 62 図　軒平瓦実測図ー関連資料③ー（縮尺 1/4）

以上ように井上廃寺跡周辺出土の軒平瓦を大きくA（AⅠ・AⅡ）・Bの二型式に分類したが、A式が老司系のB式に先行することは了解されよう。A式を小分類してAⅠ、AⅡ式としたが、軒平瓦も軒丸瓦の場合と同様に瓦当面の文様が簡素で力強いAⅠ式が、主文様が退化し全体に加飾傾向にあるAⅡ式に先行するものと考えられる。これらの事と先に検討した軒丸瓦の製作時期とを勘案して、軒丸瓦と軒平瓦との組み合わせを考えてみよう。

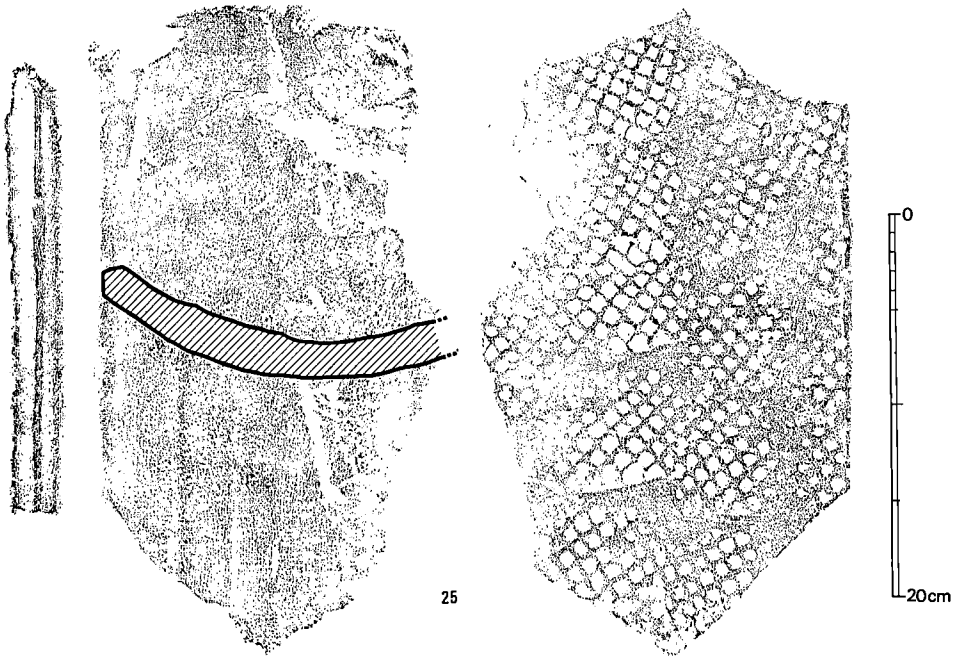
まず、老司系の軒丸瓦（井上C式）と同軒平瓦（井上B式）の組み合わせを考えて大過なかろうと思われるので、軒丸瓦のA・B式と軒平瓦のA式について組み合わせの関係を検討してみよう。ただし、井上廃寺の主要部分の実体が不明な現在、なお検討の余地があることは承知の上であえて大胆に提起してみたい。

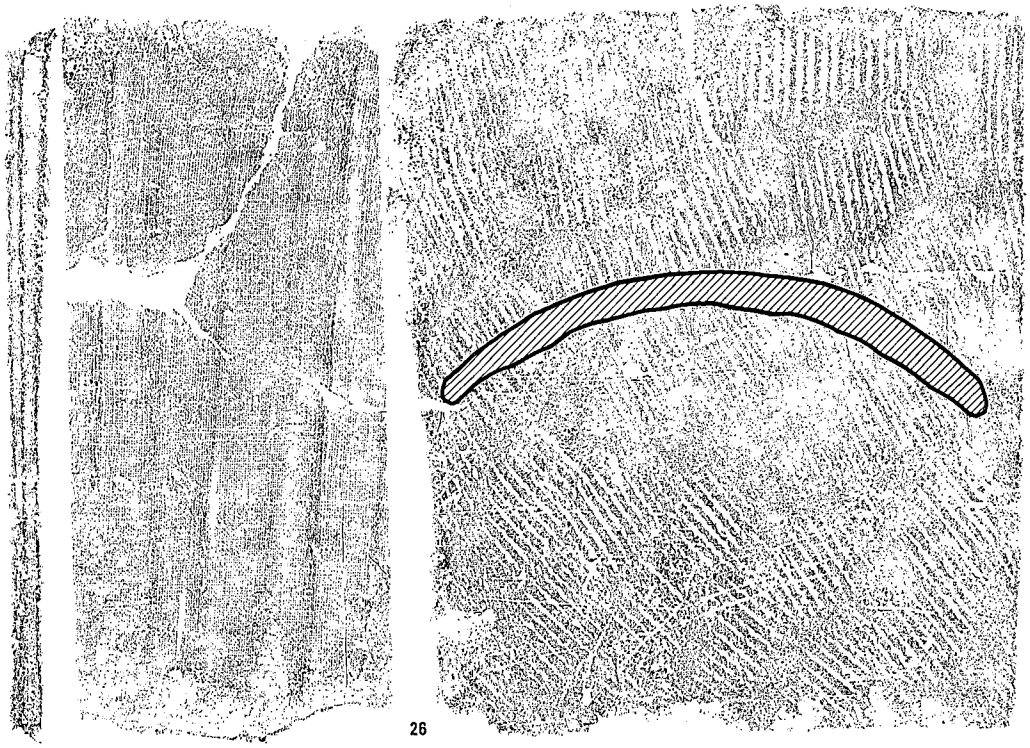




第 63 図　鬼板瓦実測図ー関連資料④ー（縮尺 1/4）

結論的に記せば、現在の資料をもとに考えた場合、軒丸瓦A式と軒平瓦AⅠ式が、軒丸瓦B式と軒平瓦AⅡ式が組み合わさると私考する。その理由は瓦当面文様の簡素かつ雄健の風から加飾化への変化の状況が一致することによる。ただし、問題は軒丸瓦A式（11）の瓦製作上の技法が、飛鳥寺出土の軒丸瓦の製作技法と比較すると極めて古い要素が認められ、これと組み





第 64 図　平瓦実測図—関連資料⑤—

合うと考える軒平瓦のＡＩ式（16・19）と瓦製作技法上での整合性を得られるか否かにかかっていると思われる。瓦製作技法は重要なものである。現在、井上廃寺跡表採資料の中に重弧文軒平瓦はないが、棰先瓦や後述する鬼板瓦および軒丸瓦Ａ式（11）の存在から、将来、重弧文軒平瓦の出土を予測することはあながち不当ではあるまい。そのような状況が出来した場合、重弧文軒平瓦と組み合わさる可能性の最も高い瓦は井上Ａ式とした11の瓦であろう。資料が限られている現状では、重弧文軒平瓦が出土した場合の組み合わせは、軒丸瓦ＢＩ式（ＢⅡ式として設定した資料は井上廃寺後の瓦ではなく筑後国分寺跡表採資料なので、ＢⅡ式を省く）と軒平瓦ＡＩ式が組み合わさる可能性もある。このように井上廃寺跡の軒先瓦の組合わせについては不確定要素を残すということを了解して頂き、重弧文軒平瓦の存在が軒先瓦の組み合わせを考える上での重要なポイントだと了解頂ければ幸いである。

鬼板瓦（第63図）　表採資料ですでに周知のものがあるが（註4）、ここに紹介する資料は古くから個人所有のもので谷部の調査中に貸り受けたものである。図は小片からの推定復原図である。おそらく大型の円形棰先瓦を約1.6倍に拡大したものを主要な文様とし、その周囲に断面三角形の圏線を巡らす。外区に珠文帯が存在し、撥形の間弁頂部に対応する部分に直径２cmの大型珠文を、大型珠文の間には径1.7cm程の小型珠文を４個配し、都合40個（大型８、小型32）の珠文を巡らす。小片のため全形は不明だが、あえて大胆に復原した。靏久嗣郎氏紹介の鬼板瓦片も、この復原図のようになるだろう。創建時のものと考えられる。

平　瓦（第64図）　平瓦片は井上廃寺跡とされる遺跡地内に無数に存在し、その図化および資料紹介は今後の機会を得ることとし、ここでは完形品か、それに近い資料を紹介する。25は破片資料としては大型のもので、表面は桶作りの跡を残す布目と桶材の凹凸が遺り、裏面には格子目のタタキ跡が遺る。タタキの方向は平瓦の長軸に対してほぼ平行に５回以上なされ、短軸に対しては３～４単位で終了したかと思われる。側面はヘラ削りを行ない、端正に仕上げている。26は接合して完形品となる平瓦で、25と同様に表面には桶作りの痕跡として布目と桶の板材の凹凸がのこる。桶板材の幅は25と同様に３cm前後である。裏面には方向の定まらない縄目のタタキ目が遺る。図の上方は垂直方向に、下方に到るに従ってその傾斜を増し、左上から右へのタタキ目の方向が水平に向かう。大溝出土の平瓦片はすべて格子目のタタキが見られた。平瓦のタタキ目の差がどの程度時期差を示すのか、また、各々どの軒先瓦と組み合わさるかについては、現在の時点では判断に苦しむが、大宰府観世音寺出土例から、25の格子目はやや古い様相がうかがわれ、あるいは軒平瓦の井上ＡＩ式と伴う可能性もある。

井上廃寺跡表採資料を中心とした瓦類についての検討は以上のようである。筆者自身、紹介した瓦のすべてを実見したわけではない。また、人知れず、個人所有として埋もれた資料も多々あろうと思われる。次の機会を得て、充実したいと考えている。

最後に、瓦類について種々指導、助言を頂いた森貞次郎氏、石松好雄氏、高橋章氏に感謝申

し上げるが、その意図した御助言が生かされてないならば、その責は筆者に依るものである。また、関連資料に使用させて頂いた図面、拓本類のうち、鬼板瓦・平瓦を除いたものは、九州歴史資料館石松好雄氏、小郡市教育委員会片岡宏二氏の原図である。今回新たに実測した鬼板瓦・平瓦については小郡市井上の古賀友子氏の御厚意により拝借し、図化した。上記の方々に、厚く御礼申し上げます。（児玉）

d. 木簡について

さて、当遺跡からは合計6点の木簡が出土した。これらの概要などについてはすでに述べたとおりであるが、そこでは触れていない点もあるので、それらについてまとめておこう。

近年は全国各地の各種の遺跡から木簡が出土し、その総点数はすでに4万点にもおよぶといわれているので、単にその出土という点では必ずしも珍しいことではない。しかし、これはあくまでも一般的な傾向という意味であり、この木簡やそれが当遺跡から出土したことなどの意義を矮小化するものではない。わずか6点にすぎないとはいえ、旧筑後国内においては最初の出土であることをはじめ、その意義は大きく、むしろこれは特筆してもよいだろう。

ところで、筑後国関係の木簡といえば、平城宮跡から出土した煮塩年魚に関するものなどが有名であり、大宰府史跡においても不丁地区のＳＤ2340から「三井郡庸米六斗」あるいは「為班給筑前筑後肥等國遣基肄城稲穀随大監正六上田中朝□」などが出土している。これらは筑後地方の古代史を考える上でおおいに注目されるが、それは内容が筑後国に関係していることによるのであり、木簡そのものの性格は別問題というべきであろう。たとえば、平城宮跡出土の木簡は大宰府で作製された可能性が大きいと指摘されているが、このことは大宰府史跡出土のものについても想定でき、それらは必ずしも筑後国で作られたものとはいいがたいのである。

これに対して、建物跡など木簡に結びつくような遺構は検出されていないので、断定はできないが、これらの木簡は少なくとも当遺跡の近辺で作製された可能性が考えられる。溝状遺構が滞水化した状況であったことは包含遺物がさほど動いていないことを想定させ、相対的な出土点数としては多くないにしても、6点もの木簡がまとまって出土したことを偶然とはみなしがたい。前述のように、これらに記された文字は拙劣といってもよいほどであるが、このことは地方性をうかがわせるし、なかでも習書木簡はそれほど広範囲に移動する性格のものではないので、その出土はこれらが近くで作製された可能性の大きいことを示唆している。

とすれば、これらが作製された施設ないし場所の性格さらにはその主体などが問題になる。一般的には都城跡・官衙跡・寺院跡などが考えられ、当遺跡の場合は井上廃寺跡が近在している点が注目される。しかし、墨書土器に「寺」と記されたものがみられることを除けば、それとの関連性を想定させるような遺構は検出されていないし、前述のような出土木簡の内容ある

いは他の墨書土器などからも、仏教色ないし宗教色をうかがわせるようなものは看取できない。むしろ、(2)〜(4)のように、3点が出挙などの経済活動にかかわるものであったことからすれば、寺院がかかる活動をしないわけではないので、可能性を完全に否定することはできないが、井上廃寺との直接的な関係はなかったといってもよいように思われる。また郡あるいは郷などの地方官衙と断定しうるだけの要素もみいだせないし、結局のところその性格を特定することはできない。かりに民間人としても、一般庶民ではないだろうし、少なくとも、出挙を行ないうるほどの財力を有した在地土豪層ではなかっただろうか。

次に、木簡の時期についてみておこう。その内容から時期を特定することはできず、(3)からは8世紀初頭ごろを想定したが、これはあくまでも「加太里」を上述のように解することを前提にしており、必ずしも絶対的ではない。しかし、他の共伴遺物はおおむね8世紀代に属するとみられているので、ここでもそのころを考えておこう。

以上のように、いまだ完全に釈読できていないことをはじめ、この木簡についてはなお検討を要する点が少なくない。しかし、多くの問題を将来にもちこしたとはいえ、これが出土したことの意義は大きく、史料的制約の大きい筑後古代史の研究はもちろん、古代の地方文化を考える上でも、これは参考になるものであろう。（倉住）

e. 墨書・ヘラ書土器について（第20〜25図）

本遺跡大溝では先述したように文字の書かれた土器が多量に出土している。書かれた文字は毛筆によるものがほとんどであるが、「ヘラ」状器具によるものとがあり、刻印のものは現在では検出していない。

これらの土器は第25図－23のようにⅣ型式に属すると考えられる須恵器やほぼ同時期頃のものと思われる24の土師器等のように古い時期のものを含むが、奈良時代に属するものが大半を占める。

土器に記された文字は行書体が多く、楷書体は古い土器に限られるようで須恵器坏23に「文」と書かれた例以外は、行書かそれの更にくずれた書体である。土師器蓋9の「夢」は行書体がくずれ、草書体に近いものになる。平安時代に草書体かな平仮名が生まれることを考えれば、土器の所属時期と書体との関係に不都合はない。

書かれた文字については、現状では「西古」等のように意味が不明なものが多々あるが、郡名を期した「三原」例や地名かと思われる「竺原」例、人名を記した「長麻呂」例や「黒豆女」のように女性に対して何らかの意図を含んだ呼称例も存在する。また「佐原神」や土師器埦21のようにおまじない的な墨書例は、当時の精神生活の一端を示していようが、その実体は明らかではない。「寺」の存在は井上廃寺そのものを示すものかなお検討の余地はあろうが、「井上廃

寺跡」が果たして寺院跡なのか、寺とは異なる性格の建物であるのかについて「井上廃寺跡」そのものの実体が不明な現在ではあるものの、あるいは寺院跡を示す可能性を示唆する資料になり得るかも知れない。他に「田」・「夢」・「人」・「七」等の一文字で、文字自体の意味を理解しうる例や「殿刀」の如く、役所との関連を示唆する資料等がある。

このように多量の墨書・ヘラ書土器の存在と「寺」・「殿刀」の如き文字の存在から、大溝周辺に存在する村落の性格を示している。それは当然ながら「井上廃寺」とは密接不可分のもので、また小郡官衙や遠くは大宰府との関係も考慮しておかねばならないだろう。　（児玉）

註　1　橋口達也・副島邦弘編　『干潟遺跡』Ⅰ　福岡県文化財調査報告第59集　1980

2　小田富士雄　『九州考古学研究』　歴史時代編　1977　学生社

同　　「井上廃寺」（『九州古瓦図録』所収　1981　柏書房）

3　松村一良　「筑後国分寺跡」（『九州古瓦図録』所収　1981　柏書房）

4　靏久嗣郎　「筑後井上廃寺の蓮華文鬼瓦」　九州考古学11・12　1961

4．まとめ

井上薬師堂遺跡が所在する小郡市井上は、朝倉扇状台地群という砂・礫・泥からなる洪積世の低位段丘層上に立地する。この地域は、現在耕地化が進行し平坦にみえる。しかし、元来、扇状地の高みや複雑に入りくむ開析谷により起伏の多い地形であったと思われる。

今回、調査対象とした九州横断自動車道建設予定地は、この井上集落の南側扇状台地及び開析谷を東西に横切るものであり、調査の結果、弥生時代から奈良時代にわたる複合集落が展開されていたことが確認できた。そして、それらの遺構群は調査区各所にわたって検出された。遺跡の東西限については、明確に把握できたが、調査範囲の南北幅が、道路予定幅の60mに限定されていたため、南北限を確かめることが出来なかった。

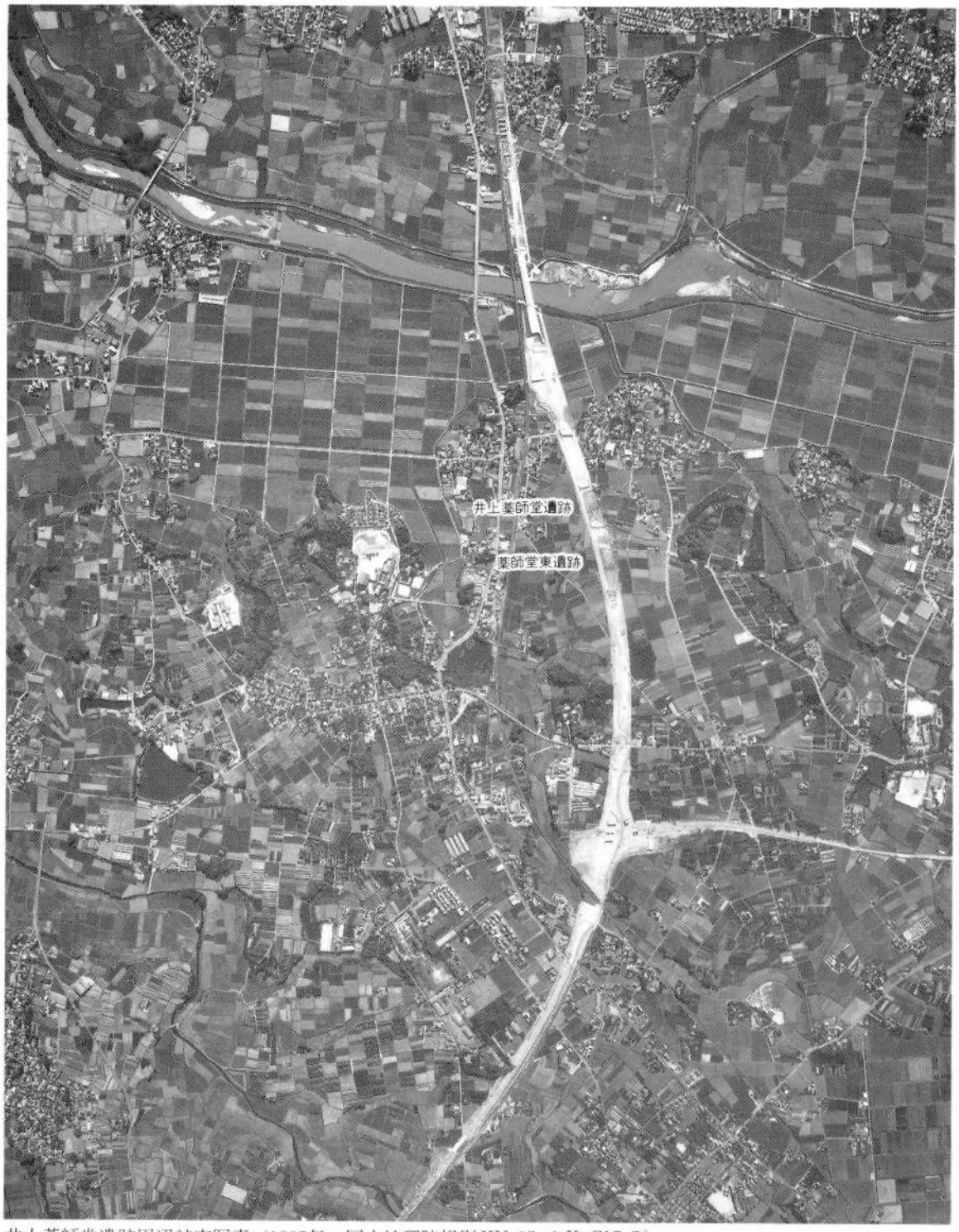
したがって、今後の開発などに伴なう調査では、遺跡の南北側への拡がりについては、十分な注意が必要となってこよう。

さて、本報告書で公表した開析谷は、当初、発掘調査予定地に挙がっていなかった。しかし、台地部分調査の過程で、試掘調査をした結果、大量の土器、木器が検出された。出土土器から奈良時代前半を中心とする遺跡であることが推定でき、隣接する井上廃寺との関連からも、調査が急務となった。そこで、道路公団に、調査予定地の拡大を要請し、工事工程の一部変更を認めていただいた。また、開析谷が、もともと水田面であったため、南北に水路がはしっており、水利関係の調整から、地元の区長をはじめとして、関係各位には多大な御協力を得た。

こうして、調査は無事終了するはこびとなった。ここに、関係各位の方々の御苦労に対して、感謝の意を表して、本報告書の結びとしたい。

図　　版

井上薬師堂遺跡周辺航空写真（1945年，国土地理院撮影 M 665-38）



井上薬師堂遺跡周辺航空写真（1985年，国土地理院撮影KU-85-1 X-C17-7）

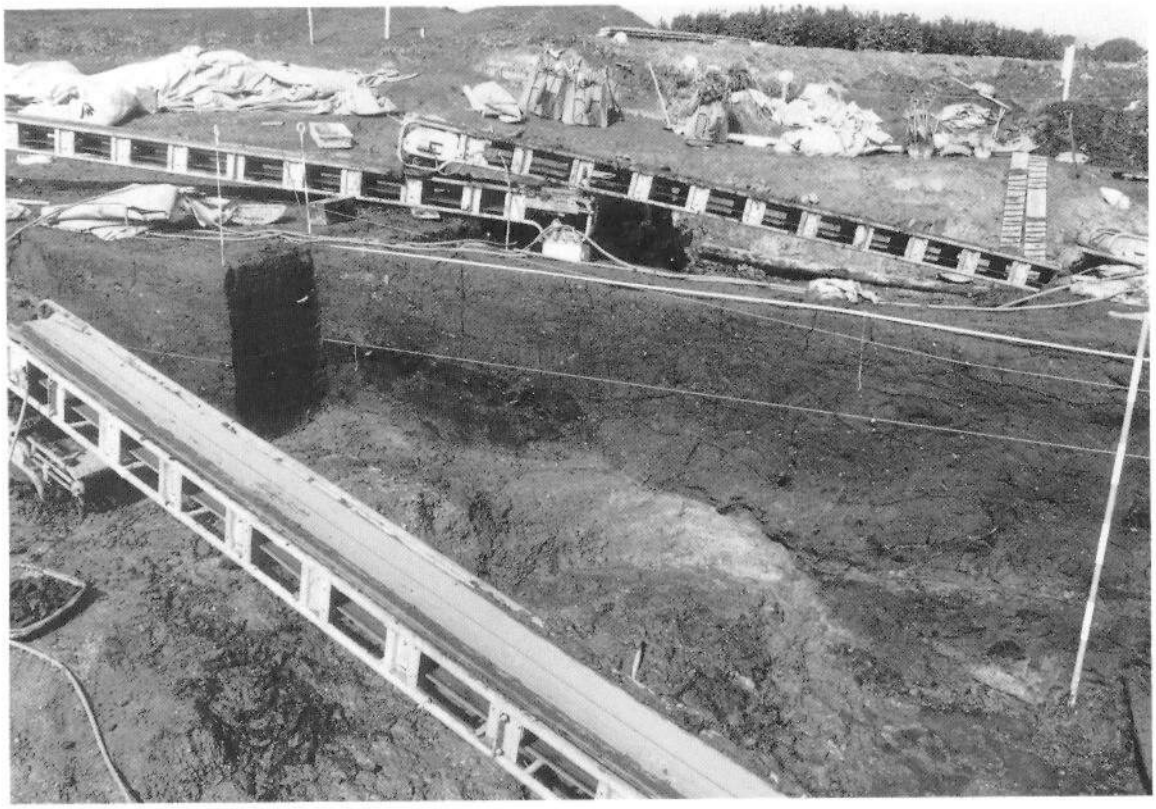
(1) 井上薬師堂遺跡気球写真（西から調査前試掘時）

(2) 井上薬師堂遺跡発掘作業状況（東から）

(1) 各グリッド発掘調査状況（東から）

(2) 第２セクション発掘調査状況（手前Ｂトレンチ北壁，南西から）

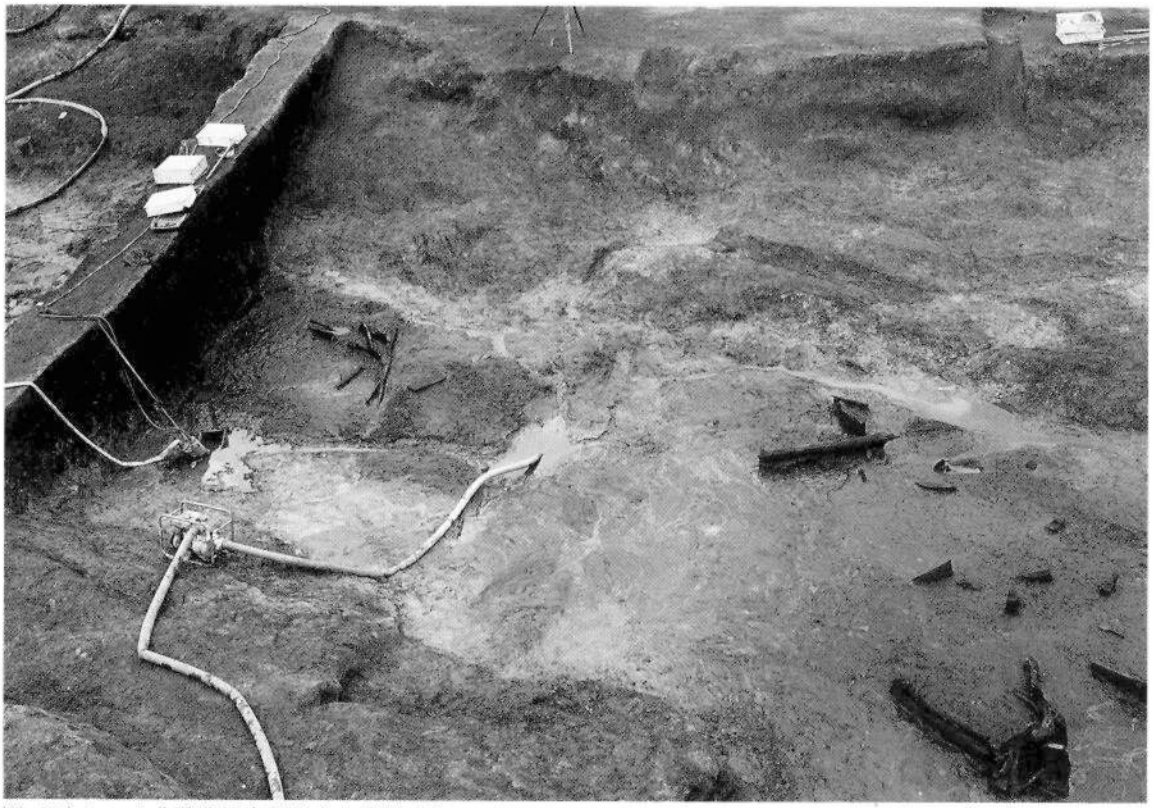
(1) 大溝北側発掘作業状況（南東から）



(2) Bトレンチ北壁大溝堆積状況（南から）

図版 6

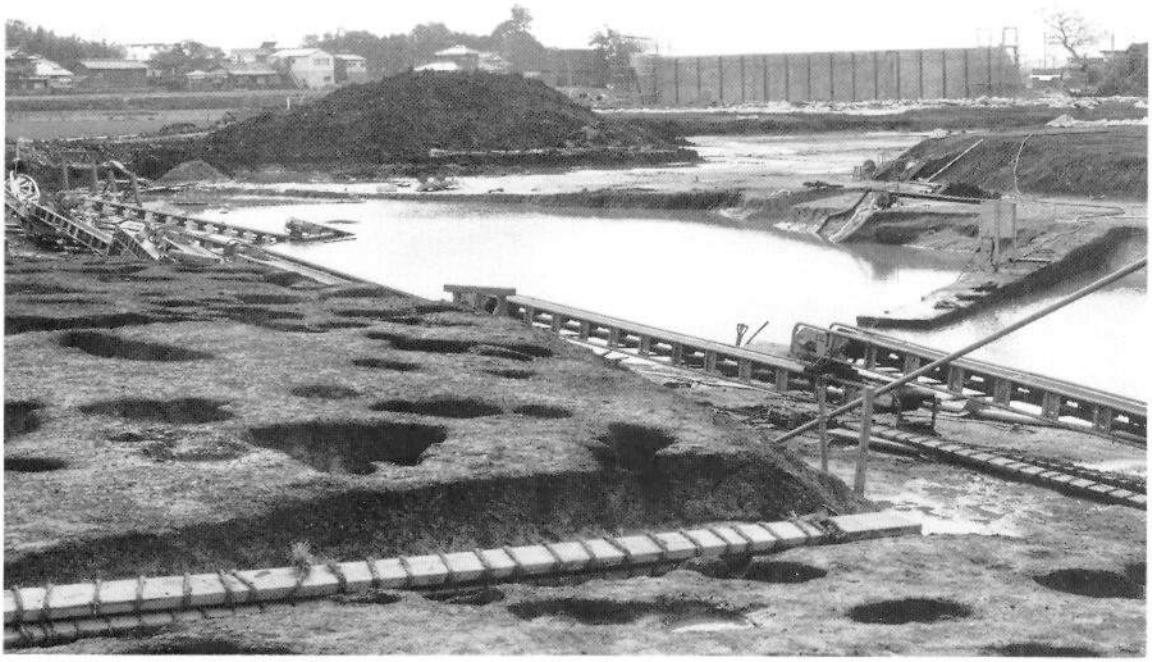
(1) Bトレンチ北壁大溝堆積状況（南から）



(2) Bトレンチ北壁北側木製品出土状況（東から）

(1) 大溝全景（右：薬師堂東遺跡 左：井上薬師堂遺跡台地部分，南から）

(2) 大溝全景（右：井上薬師堂遺跡台地部分，左：薬師堂東遺跡，北から）



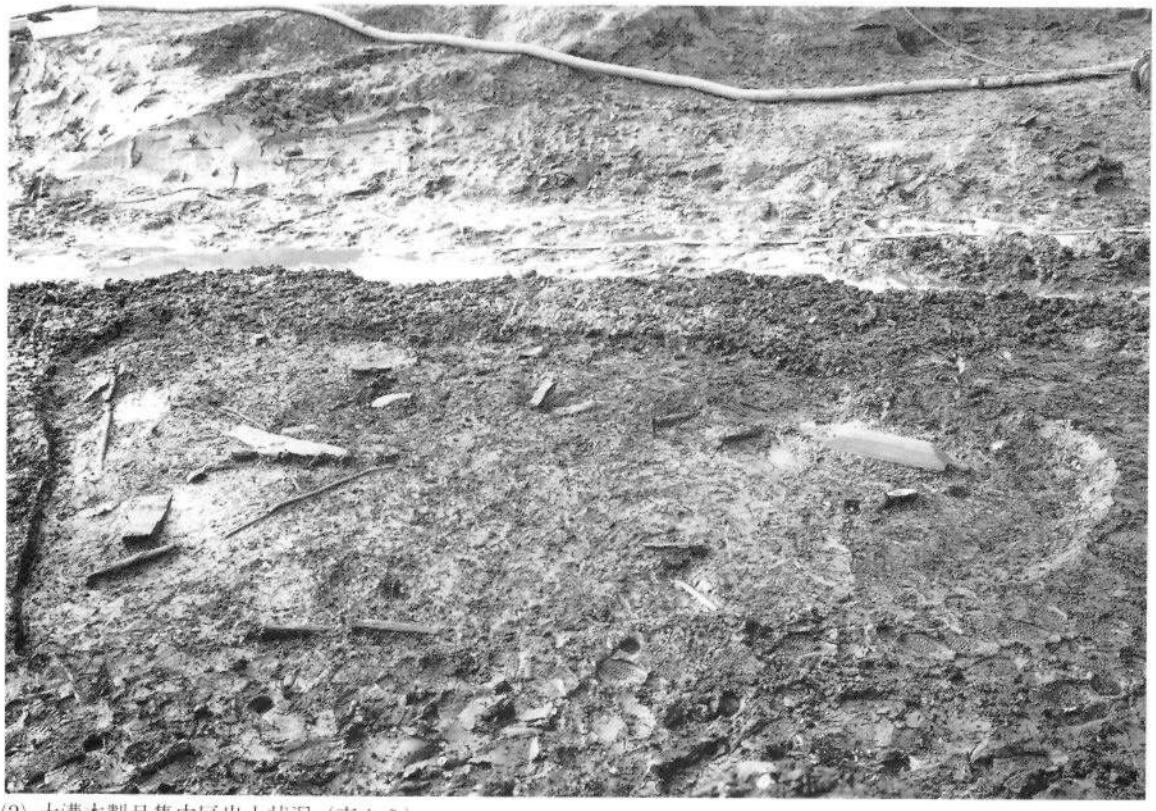
(1) 大溝滞水状況（北東から）

(2) 大溝発掘終了後の状況（北東から）

(1) 大溝南側土器溜り出土状況（西から）

(2) 大溝南側土器溜り出土状況（東から）

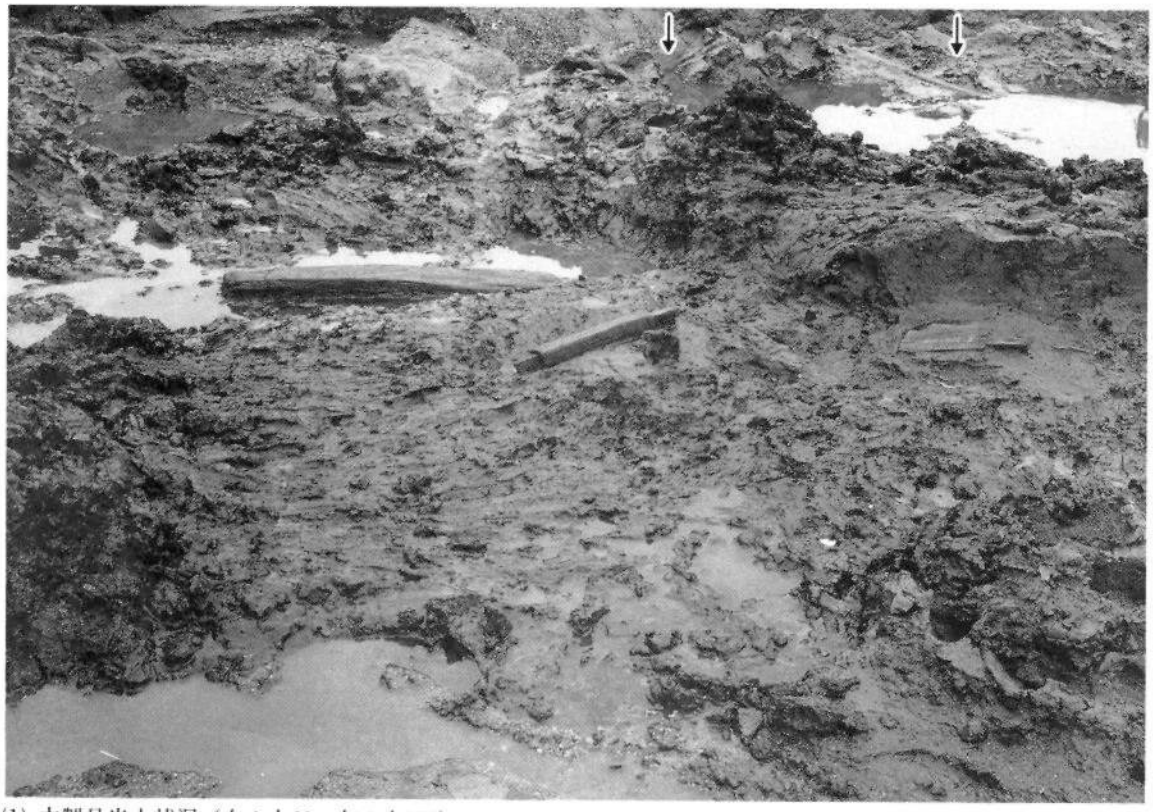
(1) 大溝木製品集中区出土状況（西から）



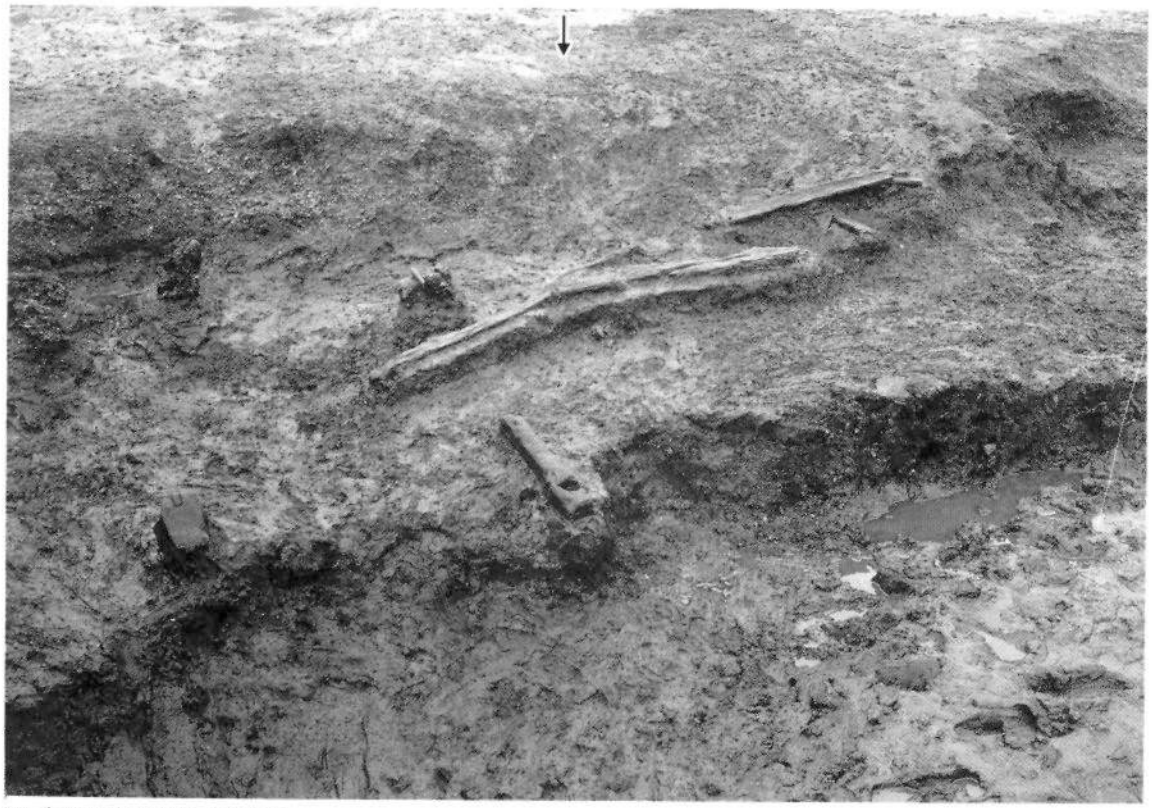
(2) 大溝木製品集中区出土状況（東から）

(1) 木製品出土状況（右：木139，左：木144）

(2) 木製品出土状況（木182）



(1) 木製品出土状況（右：木60，左：木156）

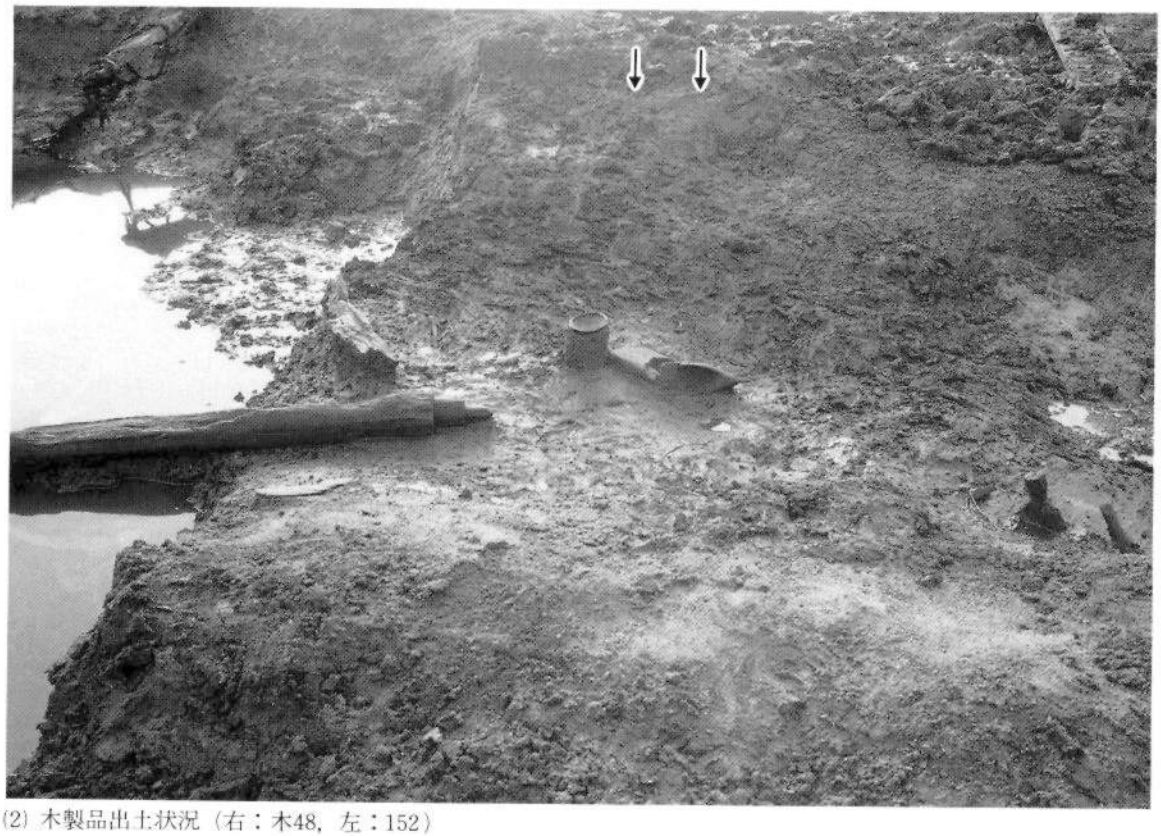


(2) 木製品出土状況（木153）

(1) 木製品出土状況（南から）

(2) ねずみ返し出土状況

(1) 木製品出土状況（右：木152，左：木48）

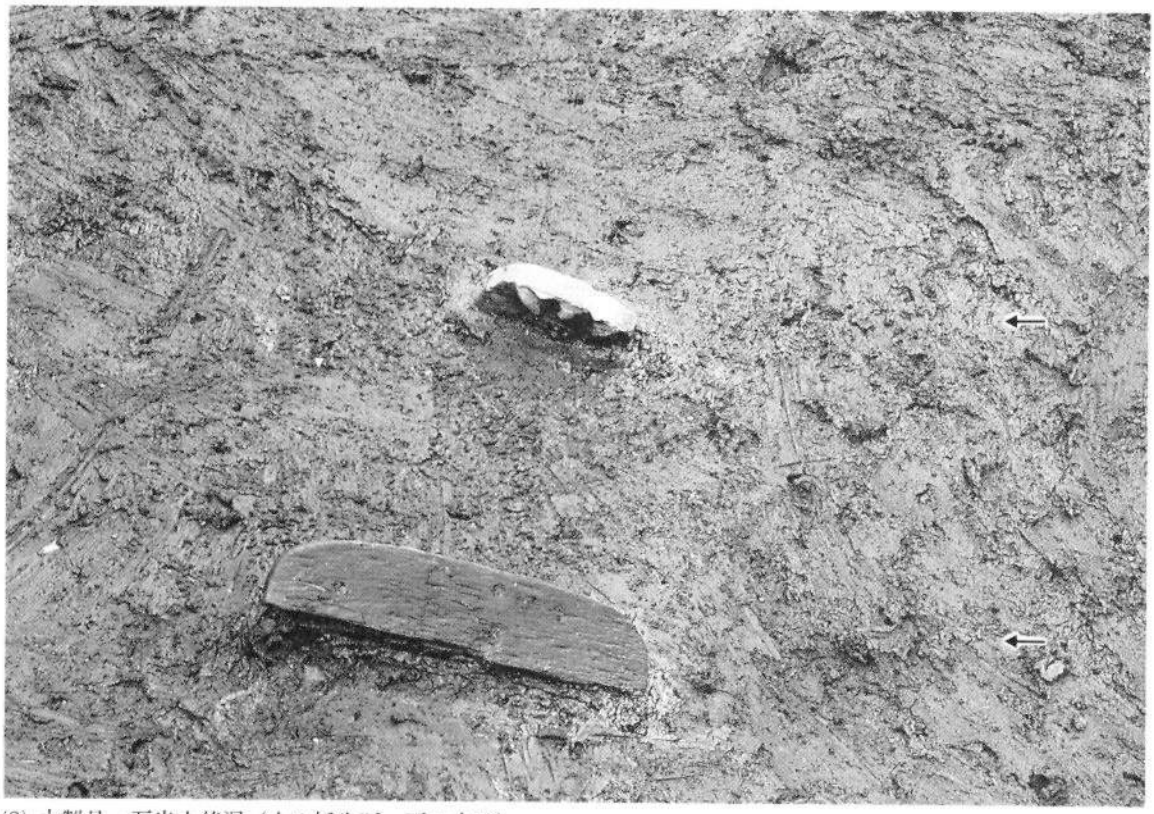


(2) 木製品出土状況（右：木48，左：152）

(1) 木製品出土状況

(2) 木製品出土状況（木143）

(1) 木製品・瓦出土状況（右：棰先瓦，左：木67）



(2) 木製品・瓦出土状況（上：棰先瓦，下：木76）

(1) 木製品出土状況

(2) 木製品出土状況（右：木35，左：木11）

(1) 木製品出土状況（木14）

(2) 木製品出土状況（上：木66，下：木24）

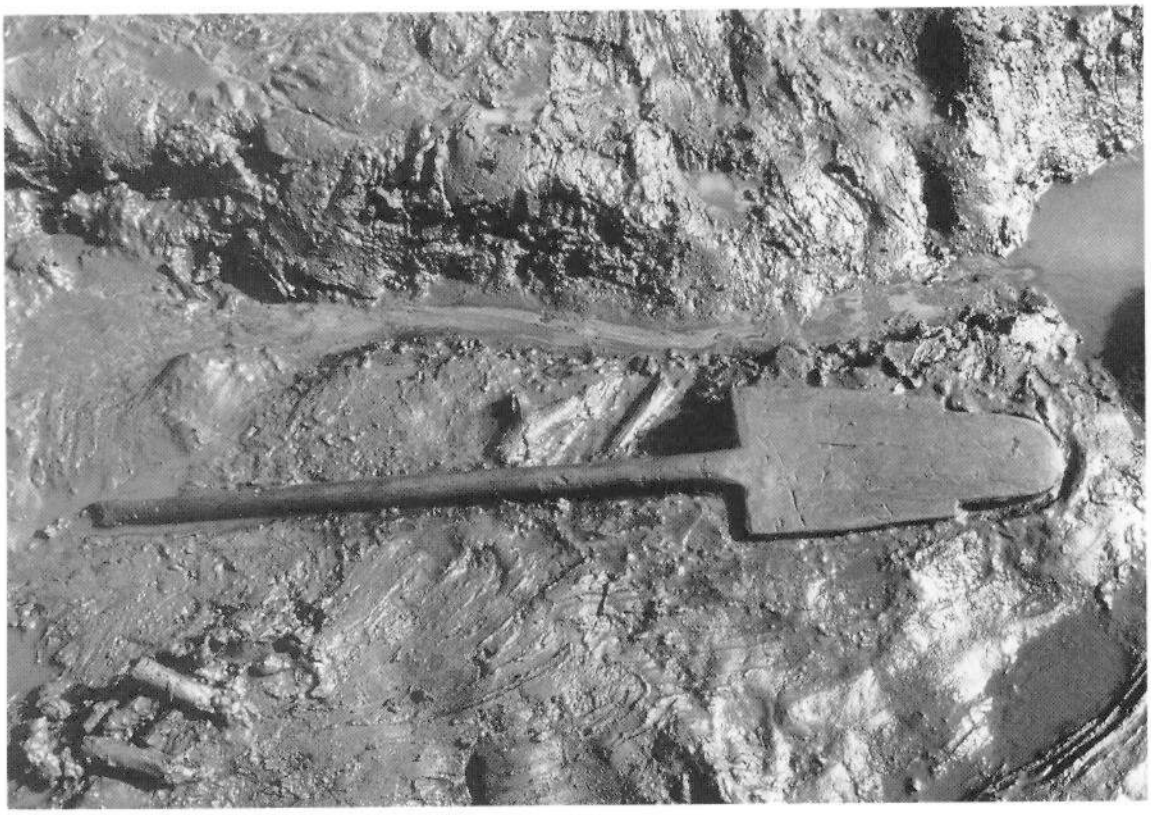
(1) 木製品出土状況（木２）

(2) 木製品出土状況（右：木162，左：木108）

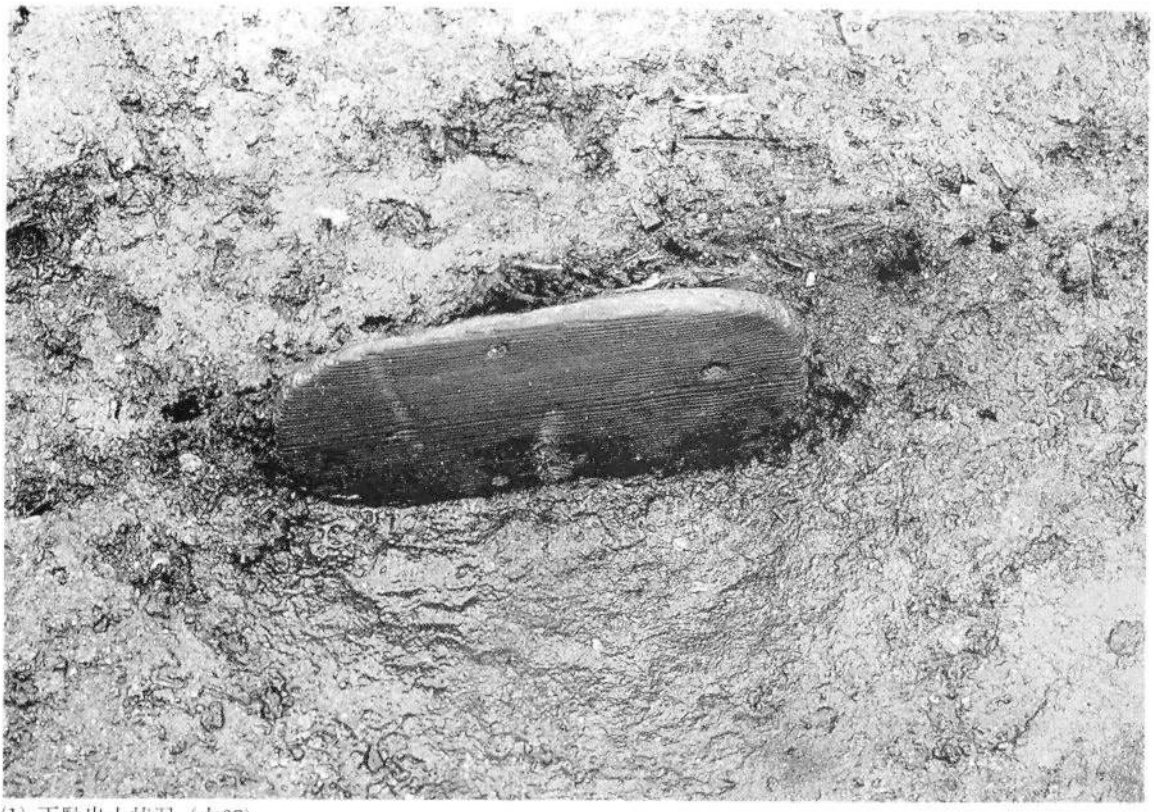
(1) 木製品出土状況（木69）

(2) 木製品出土状況（木56）

(1) 長柄鋤出土状況（東から）



(2) 長柄鋤出土状況（上から）

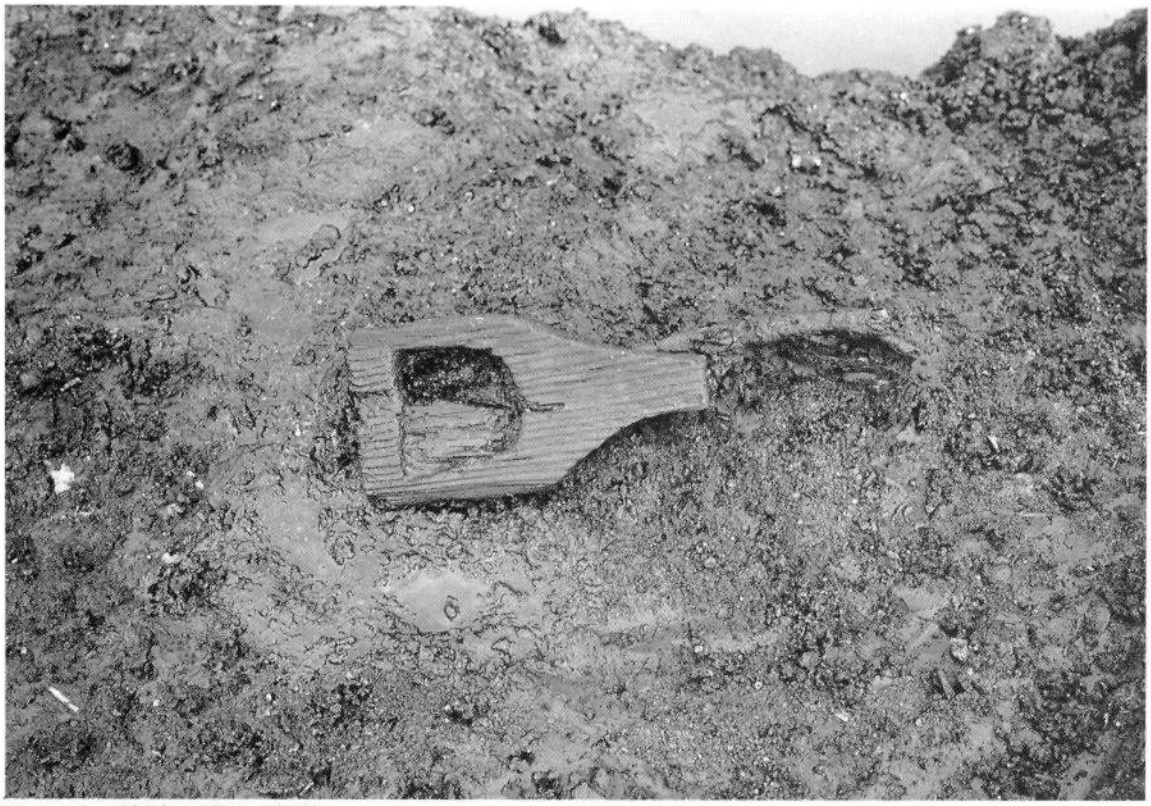


(1) 下駄出土状況（木67）

(2) 田下駄出土状況（木32）

(1) スコップ形木製品出土状況

(2) えぶり出土状況（木25）



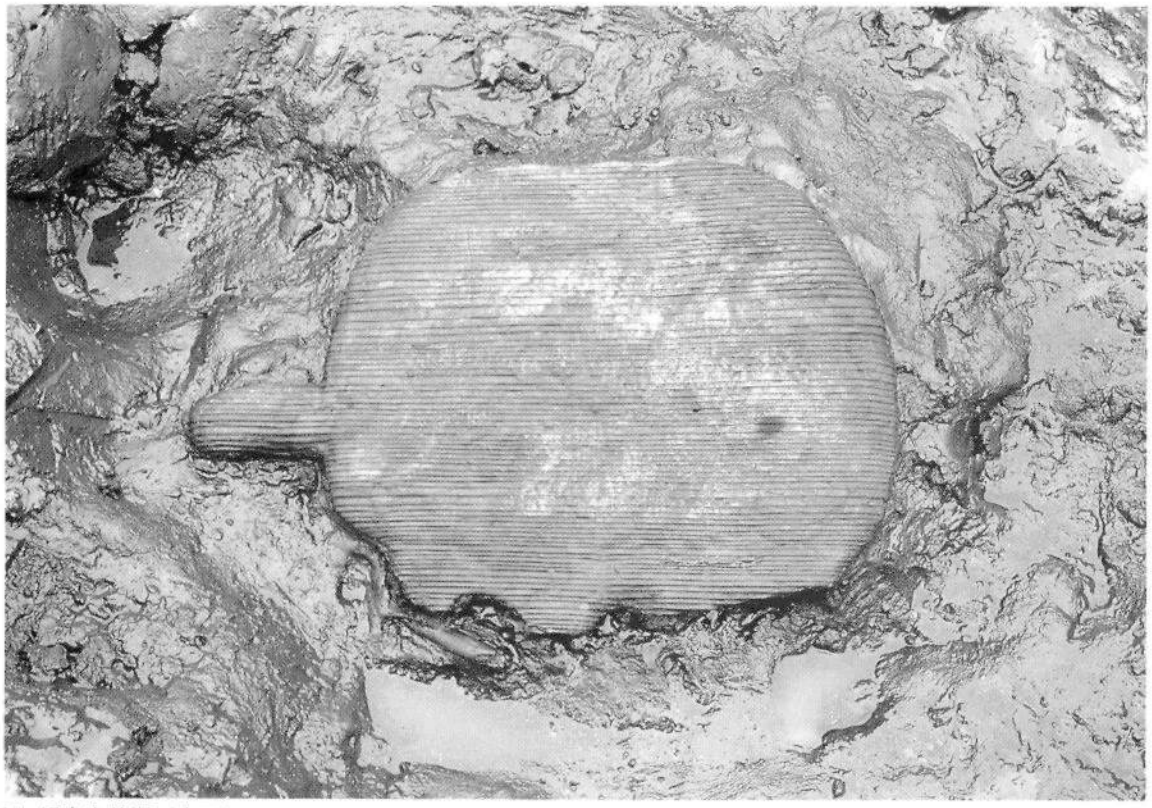
(1) スコップ柄出土状況（木33）

(2) さじ形木製出土状況

(1) 台座出土状況（木187）

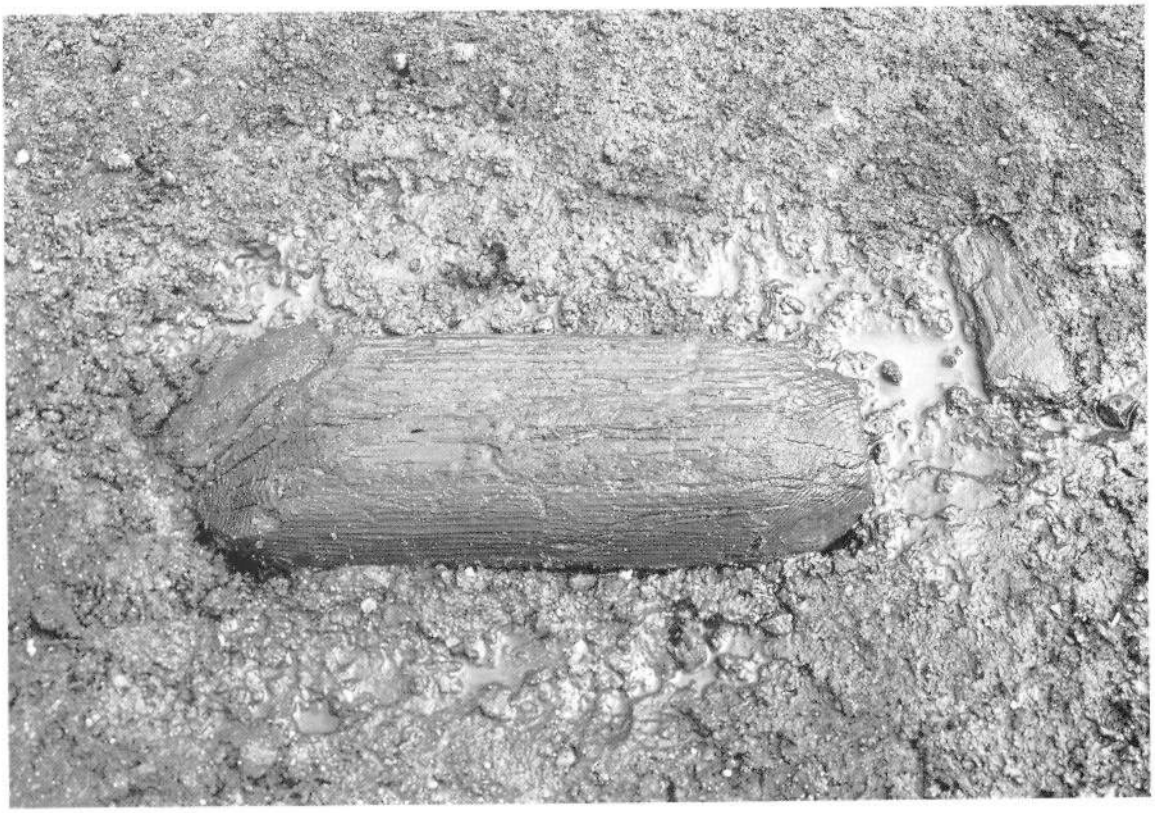
(2) 柤出土状況（木60）

(1) 部材出土状況（木181）



(2) 俎出土状況（木55）

(1) 槽出土状況（木36）

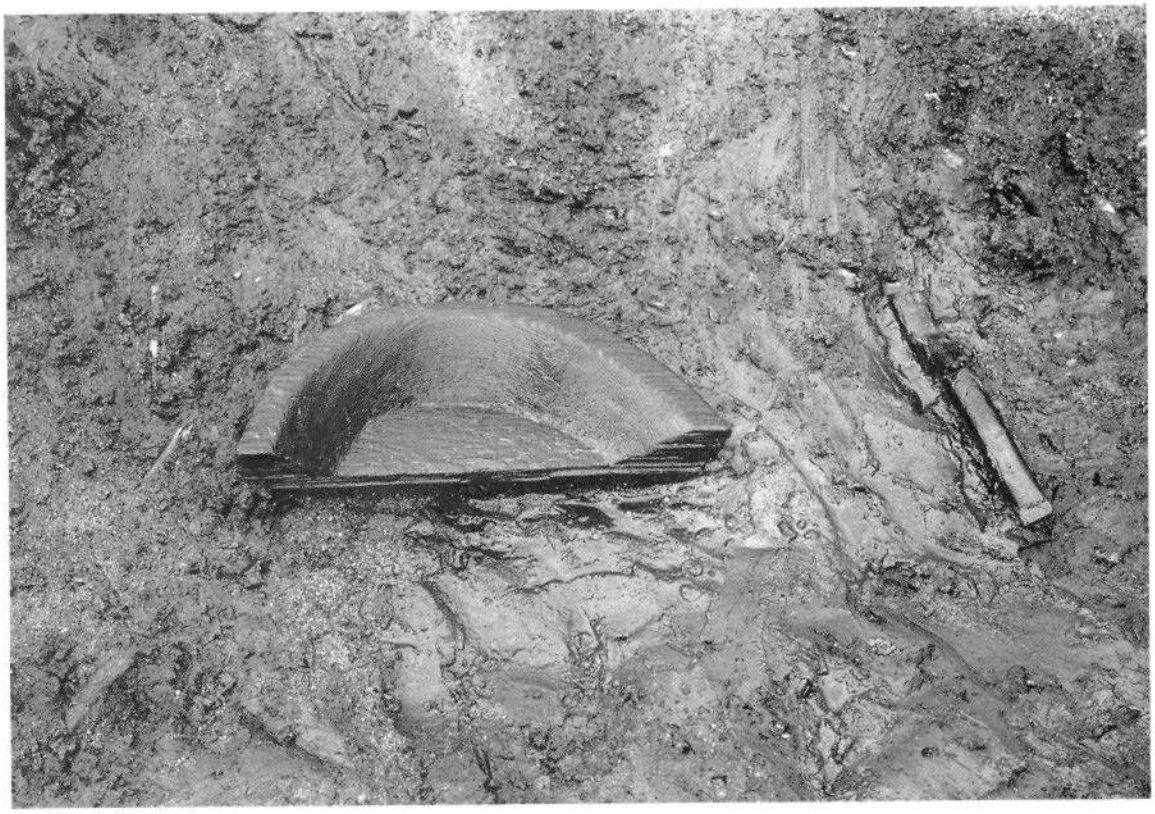


(2) 槽出土状況（木40）

(1) 槽出土状況（木35）

(2) 槽出土状況

(1) 刳物容器出土状況（木48）

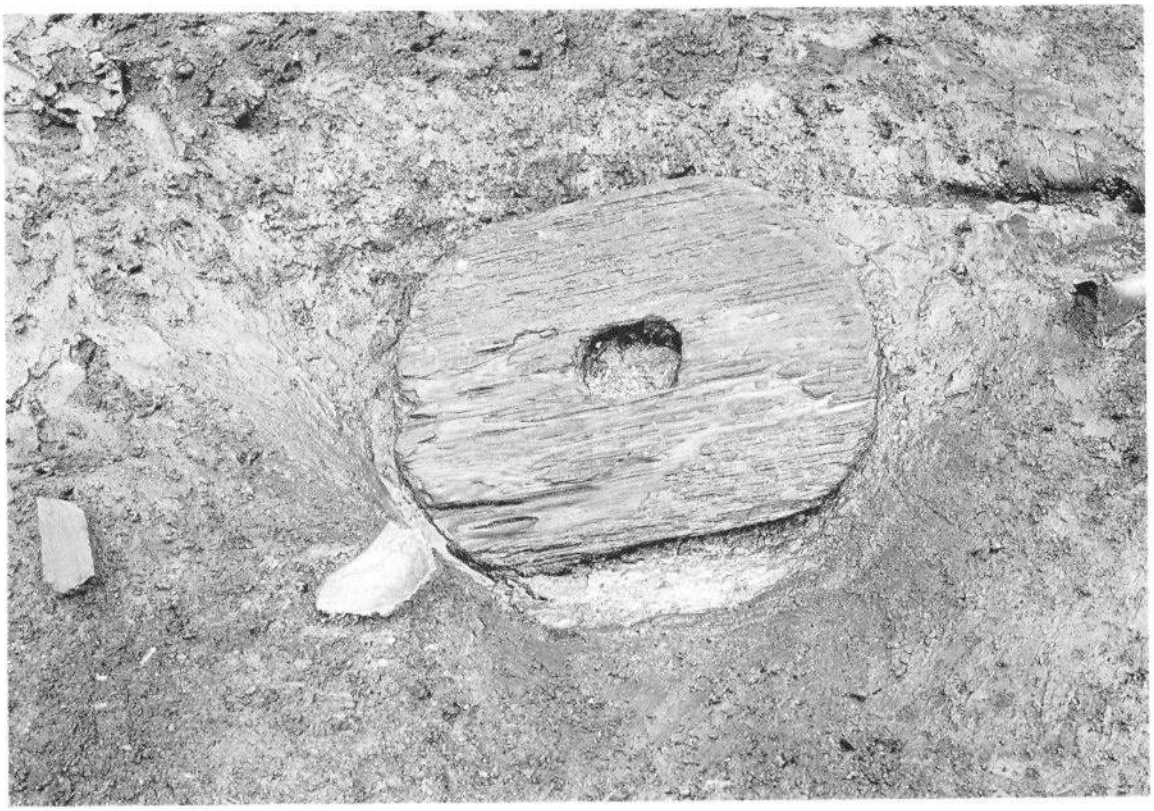


(2) 槽出土状況（木41）

(1) 曲物出土状況

(2) 曲物出土状況

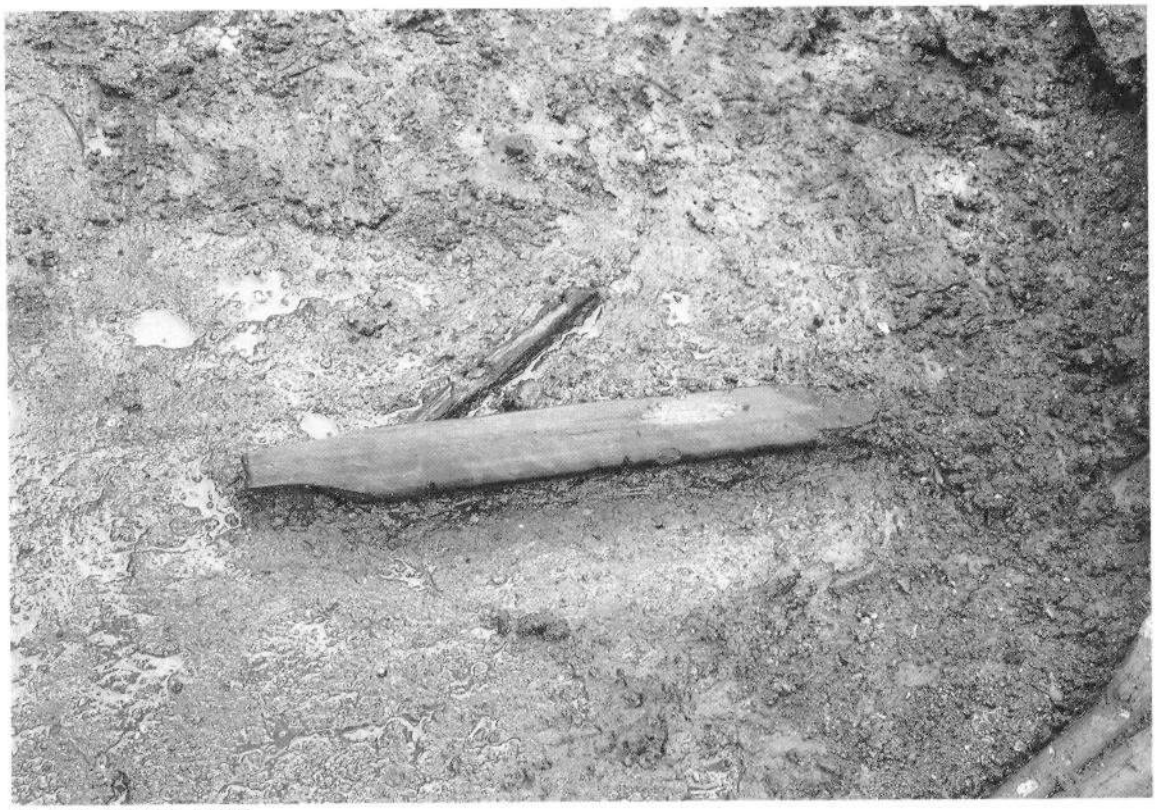
(1) 建築部材出土状況



(2) ねずみ返し出土状況

(1) 下駄，部材出土状況 （上：木156，下：木73）

(2) 用途不明品出土状況



(1) 用途不明品出土状況

(2) 用途不明品出土状況

(1) 火鑽板出土状況

(2) 木簡出土状況

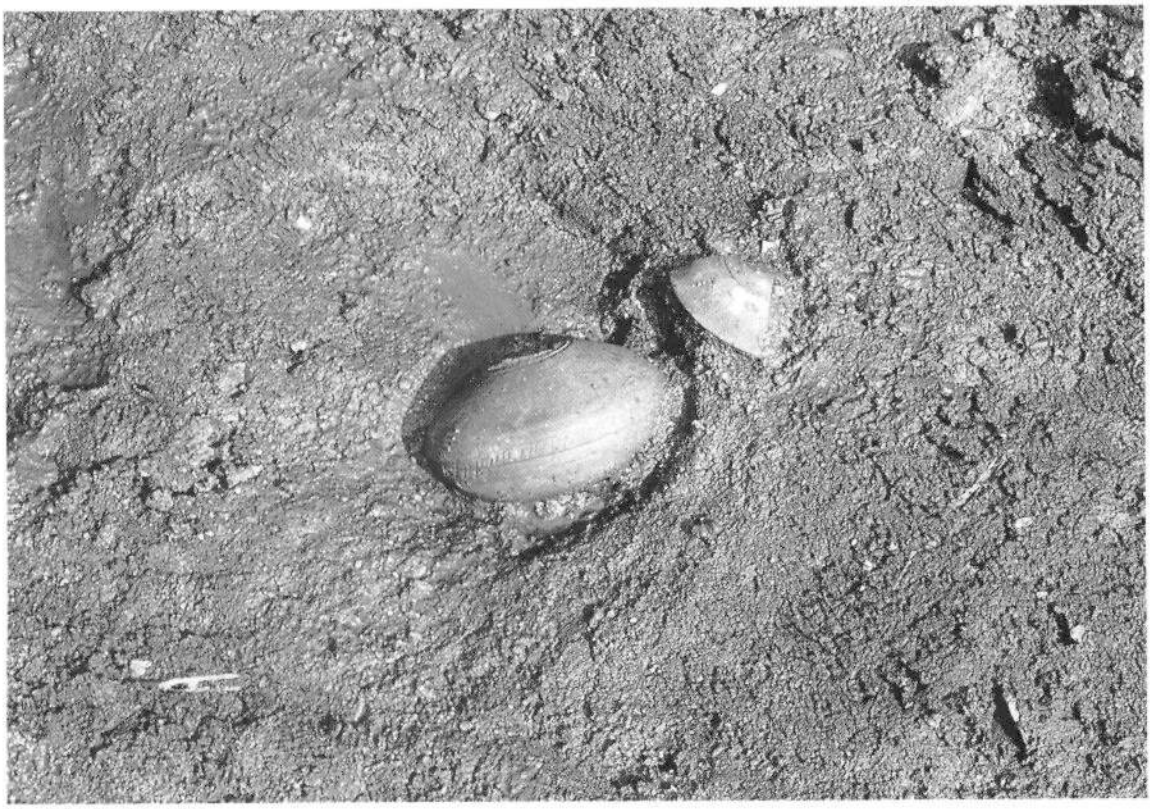
(1) 刀形木製品出土状況（木144）

(2) 円形棰先瓦出土状況

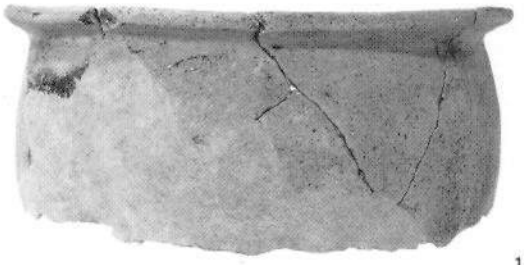
(1) 刻骨出土状況

(2) 櫛出土状況（木86）

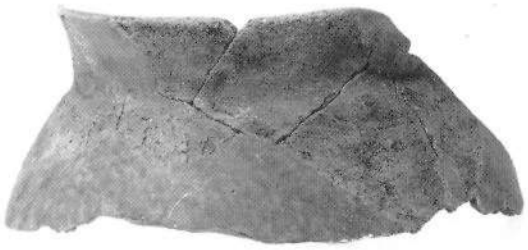
(1) 大溝西岸付近出土土器



(2) 大溝内出土土器

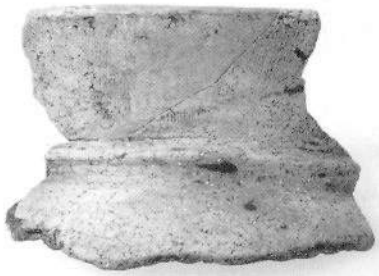


1

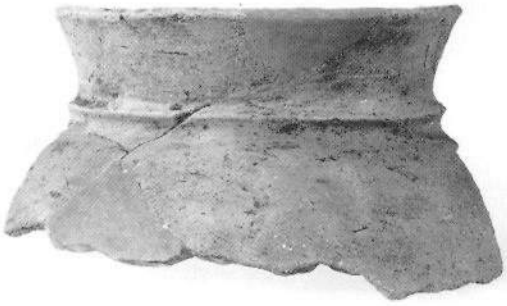


2

3

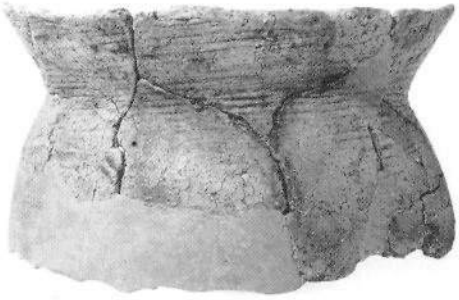


4



5

7



6

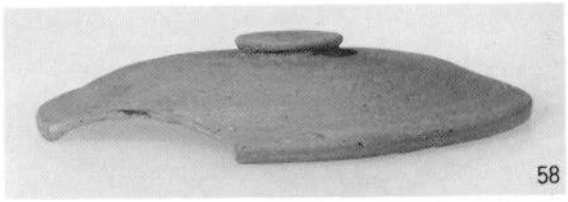
8

大溝西岸付近出土土器

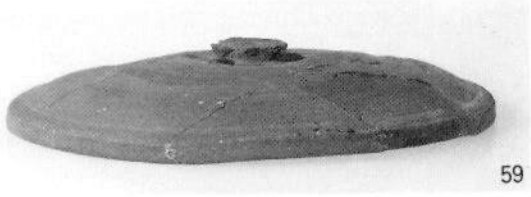
12

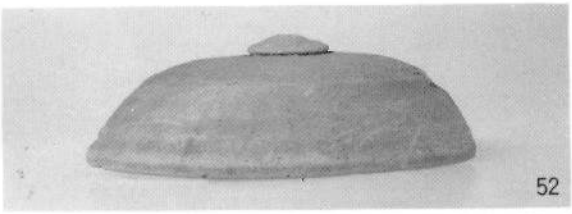
13

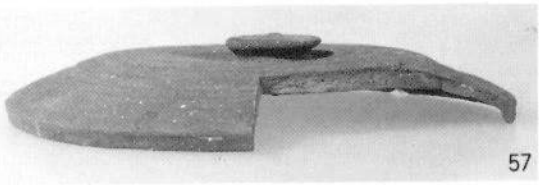
14

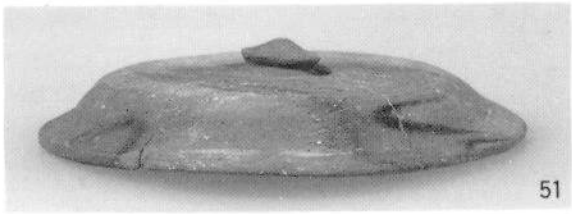

58

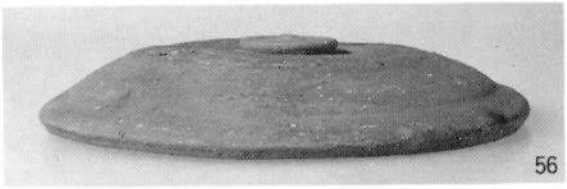
50

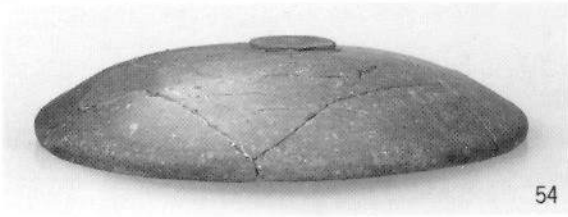

59

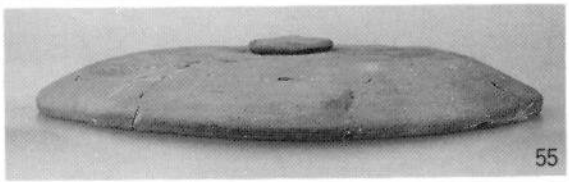

52

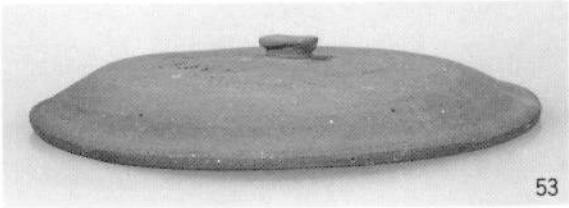

57

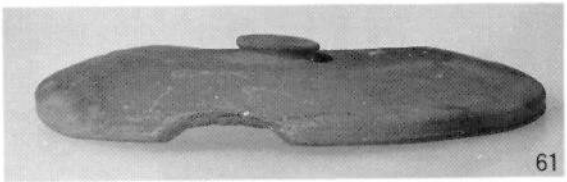

51

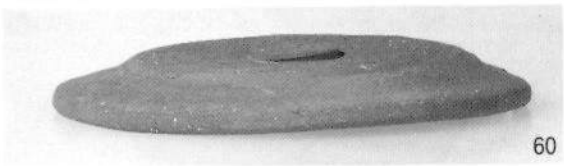

56

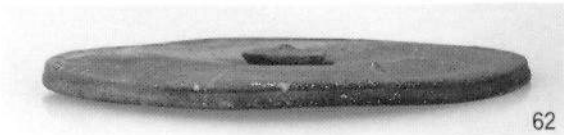

54

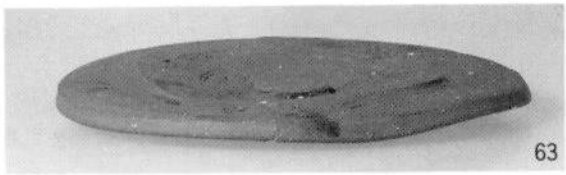

55


53


61


60

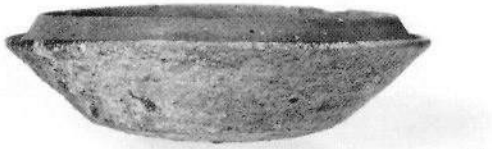

62


63

大溝堆積層及び土器溜り出土土器（12～14以外土器溜り）

68

27


16

21

64

70

65

69

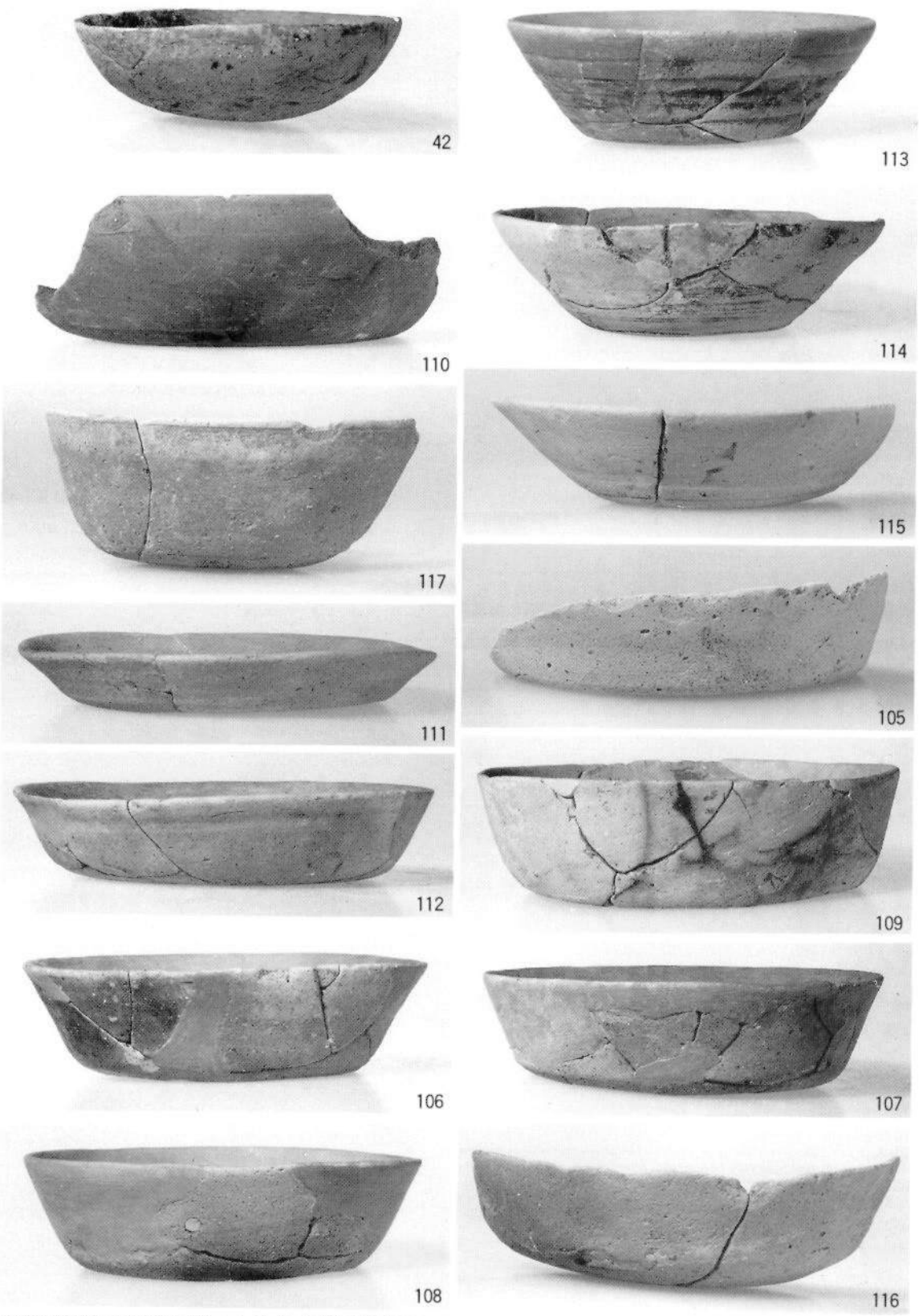
71

67

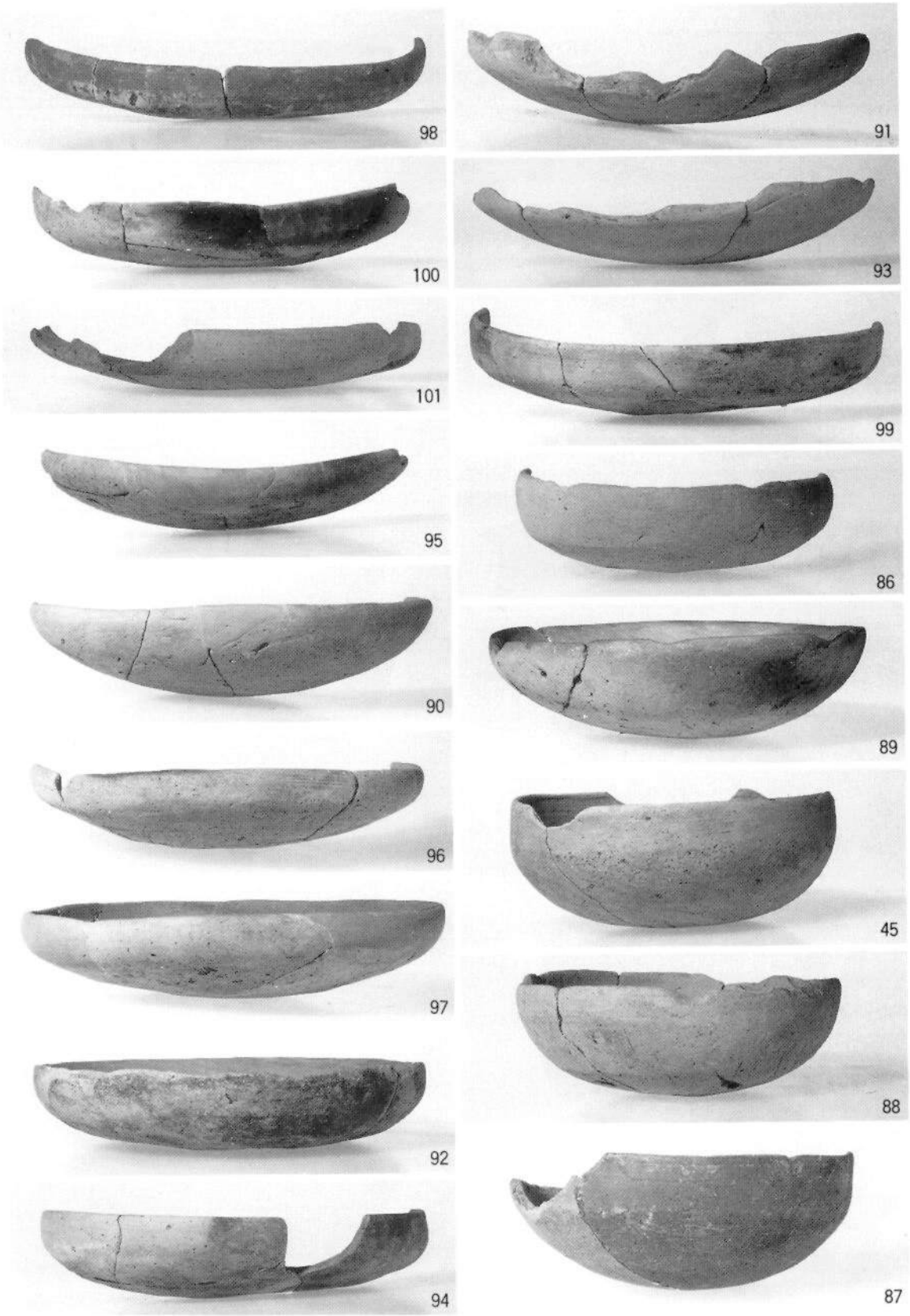
66

大溝堆積層及び土器溜り出土土器（16．21．27以外土器溜り）

大溝堆積層及び土器溜り出土土器（28以外土器溜り）



大溝堆積層及び土器溜り出土土器（42以外土器溜り）



大溝堆積層及び土器溜り出土土器（45以外土器溜り）

104

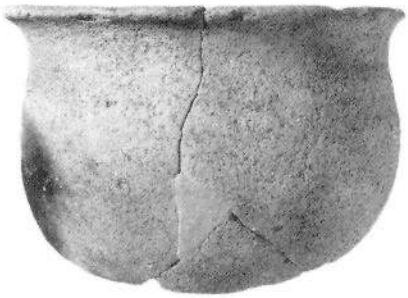
35

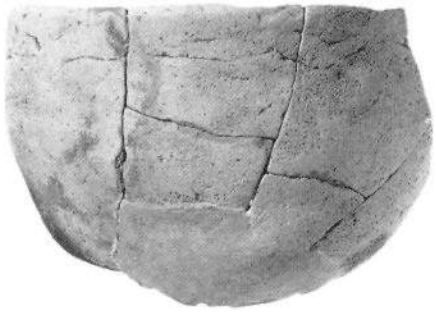
103

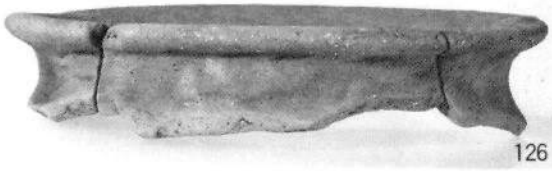
102

130

131

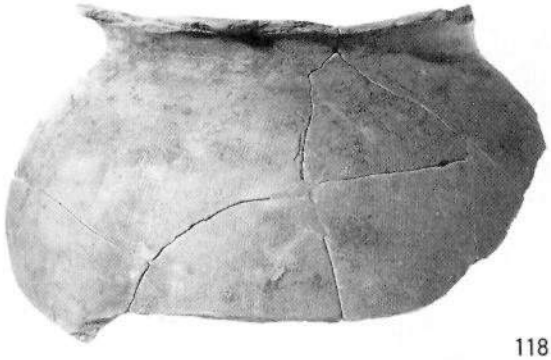

128


129

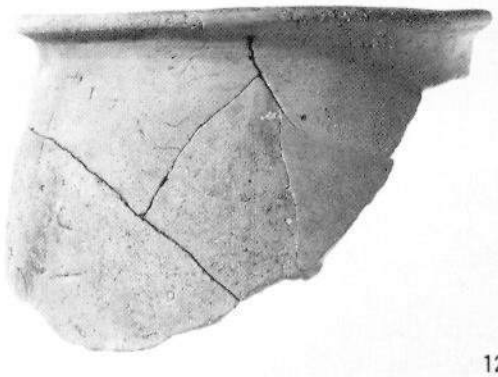

126

大溝堆積層及び土器溜り出土土器（35以外土器溜り）

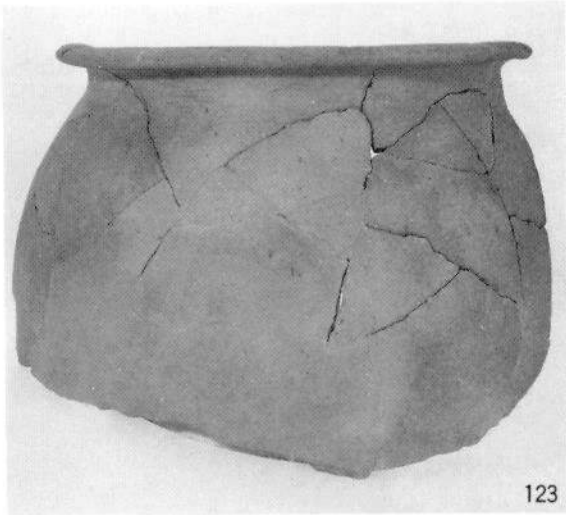
119


118

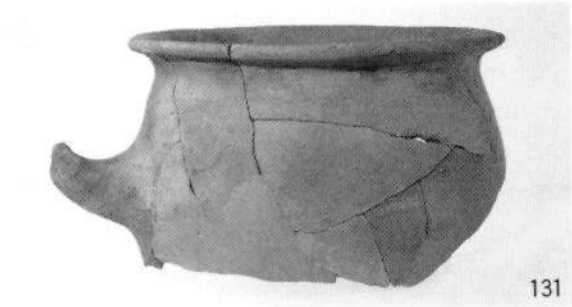
121


122

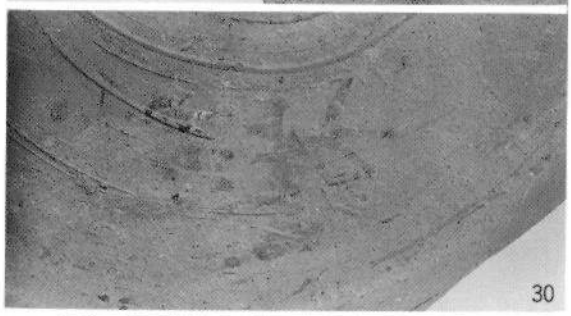
120

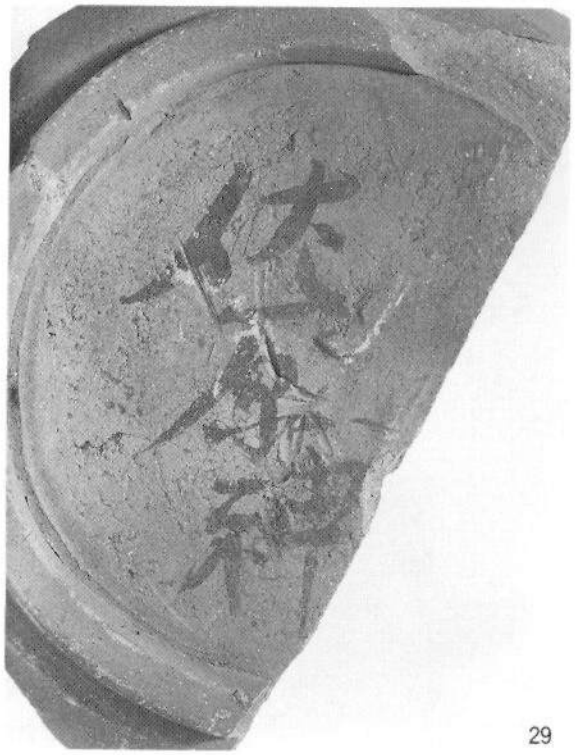

123

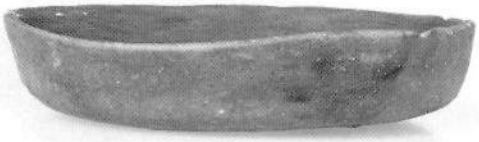
124


131

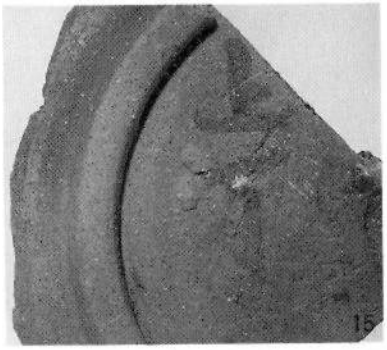
土器溜り出土土器

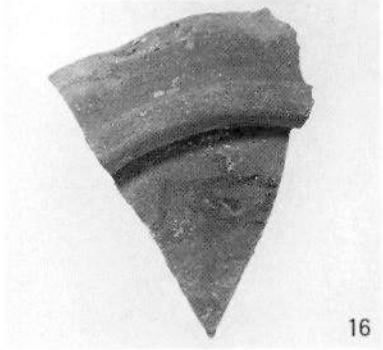




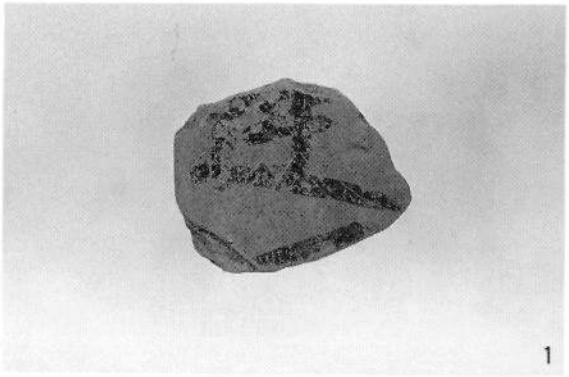


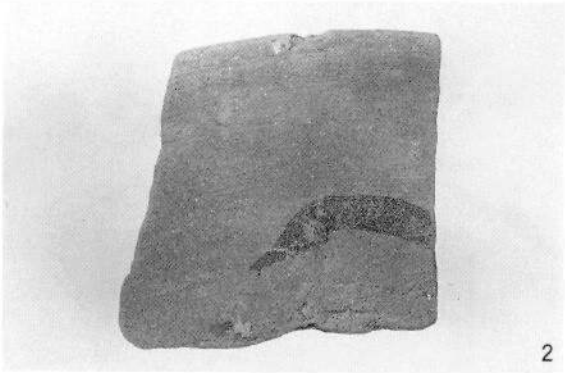
大溝出土ヘラ描土器

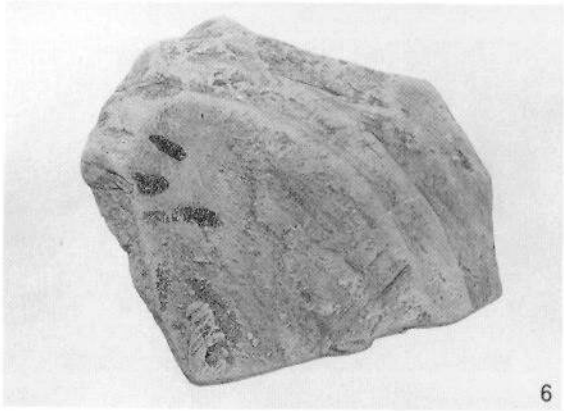


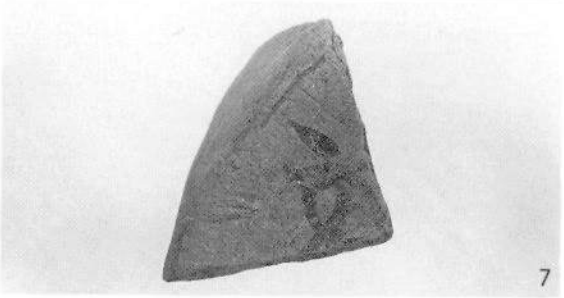


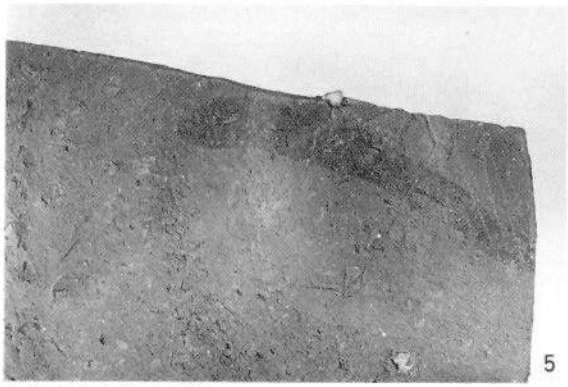
大溝出土墨書土器



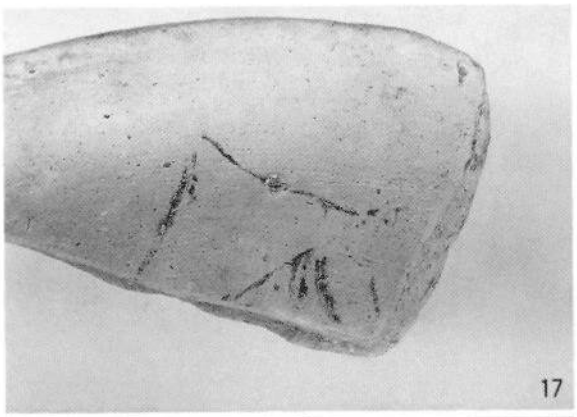




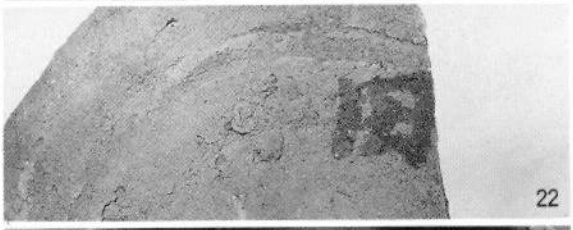


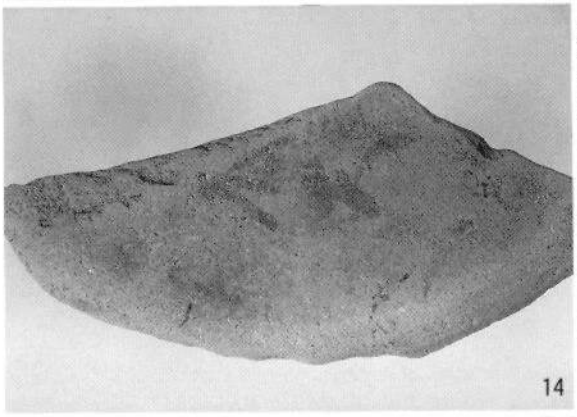


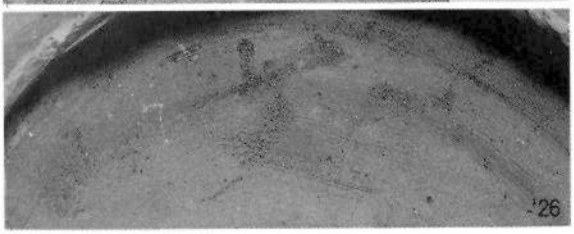
大溝内出土墨書土器

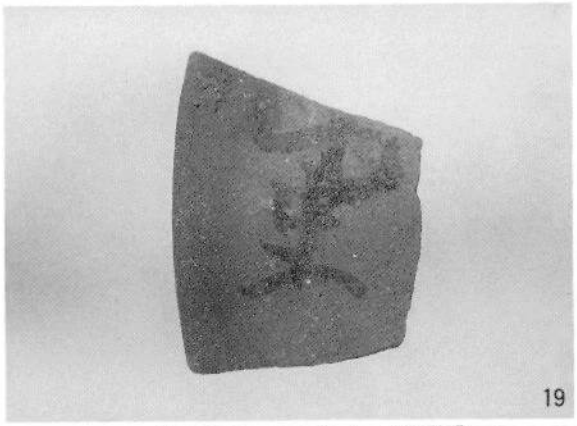

17

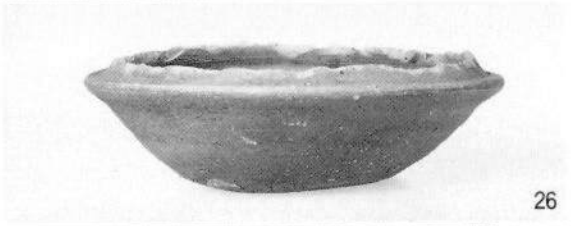
21

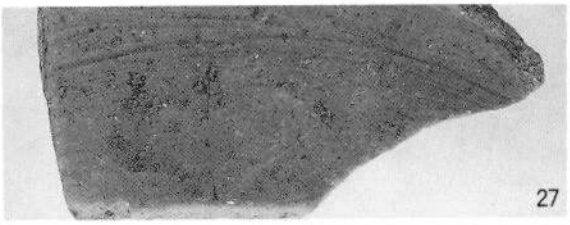

22


14


26


19


26

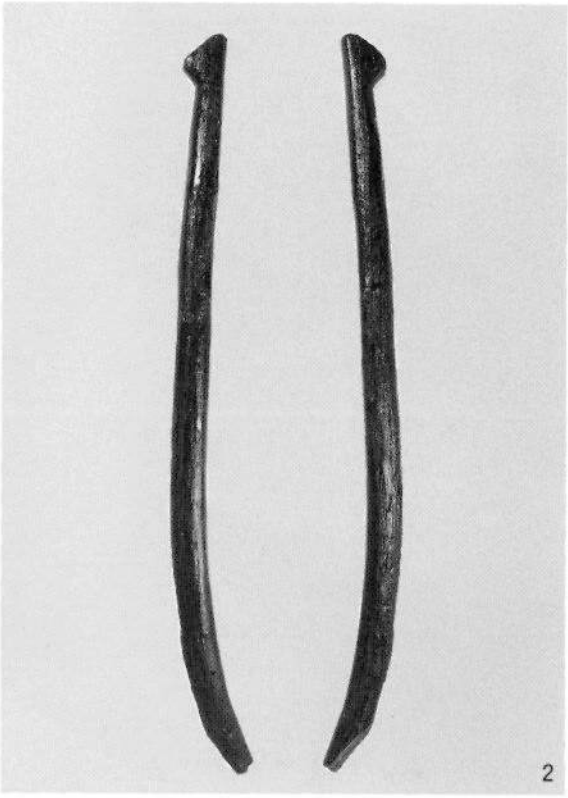

27

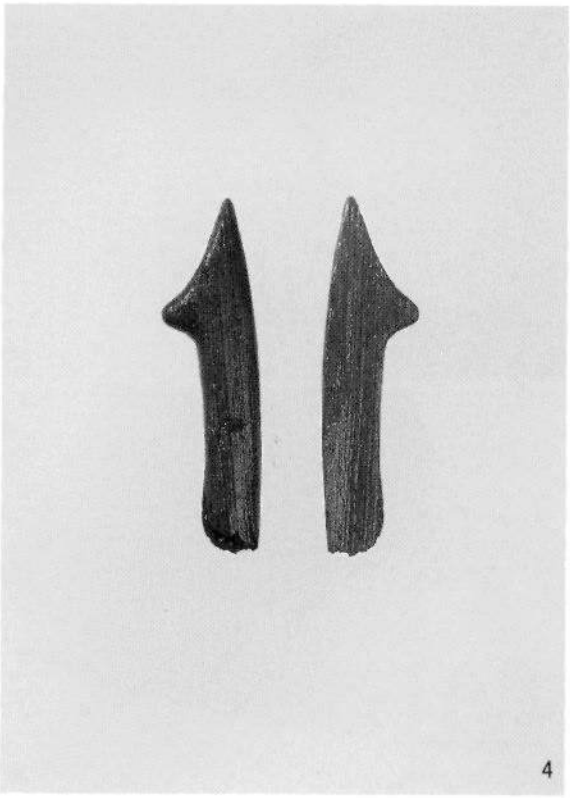
20

28

24

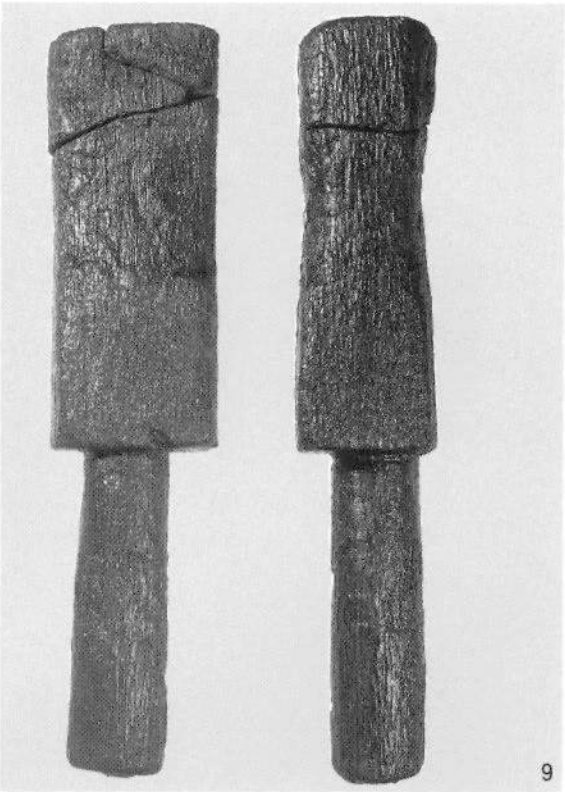
大溝出土墨書土器

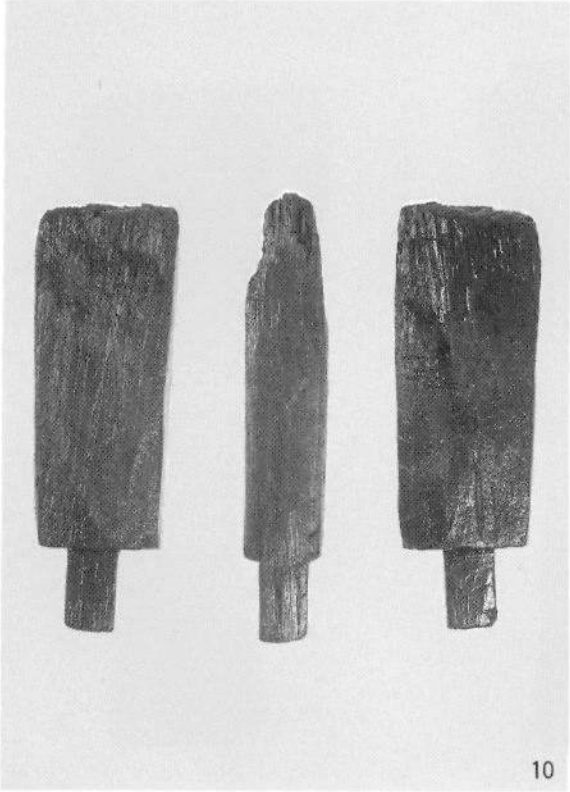




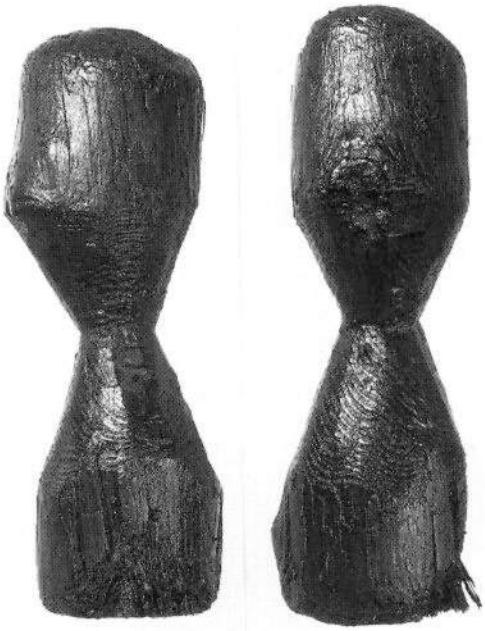
大溝内出土木製品（鎌柄）

大溝内出土木製品（横槌，5を除く）





大溝内出土木製品（横槌）

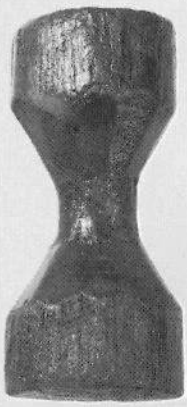


14

15

16

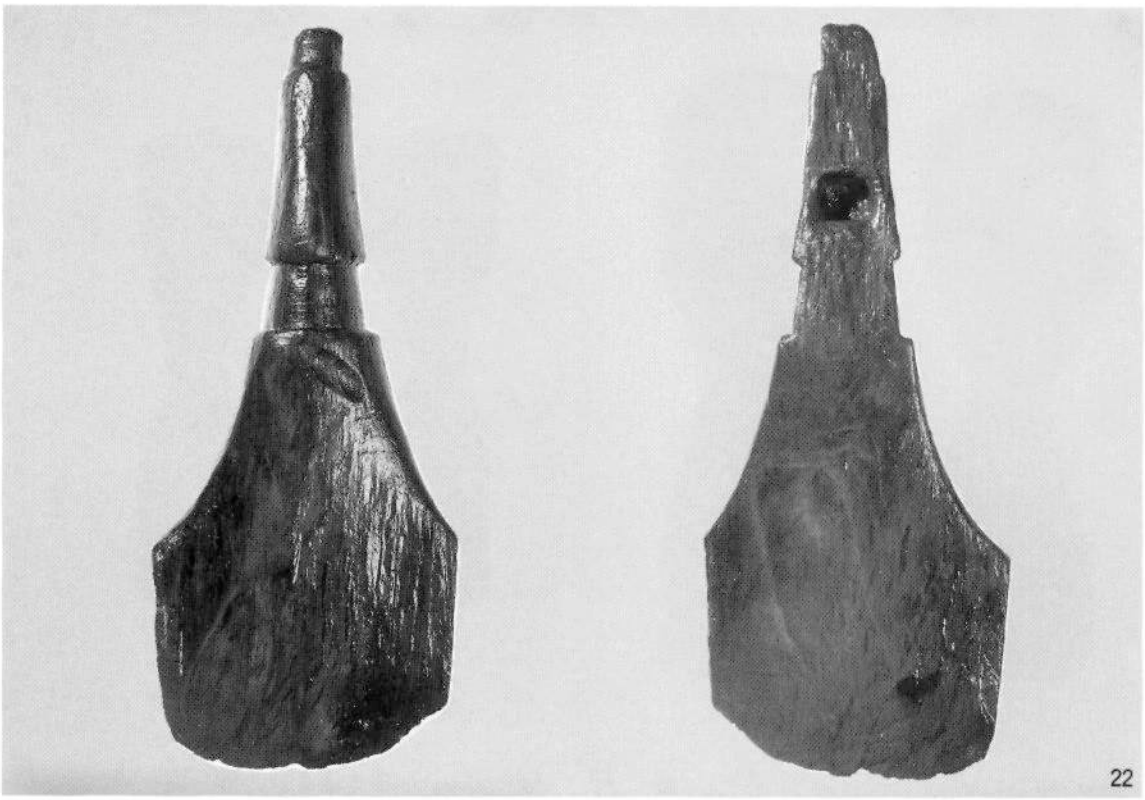
17



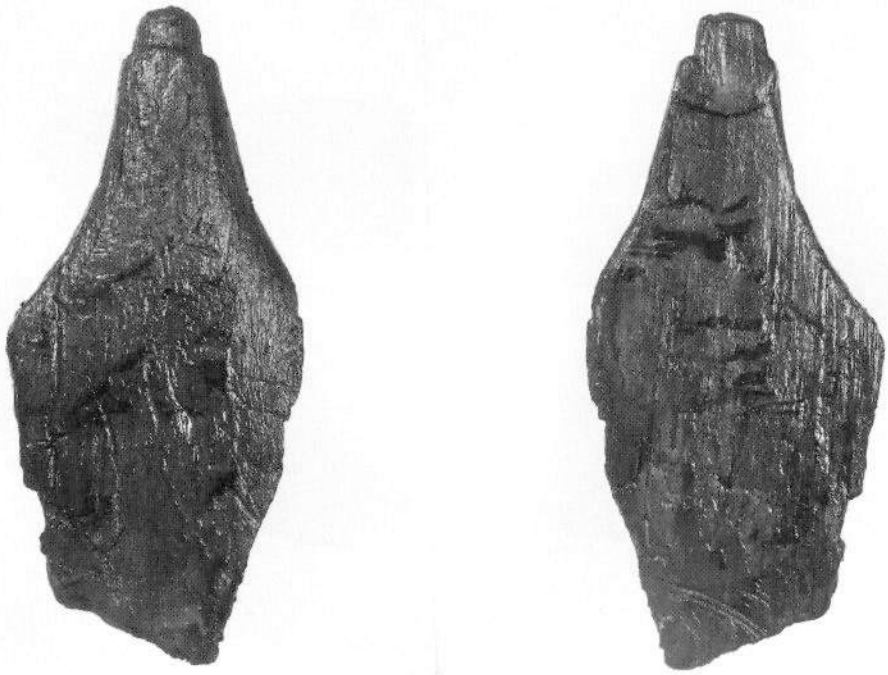
18

19

大溝内出土木製品（木錘）

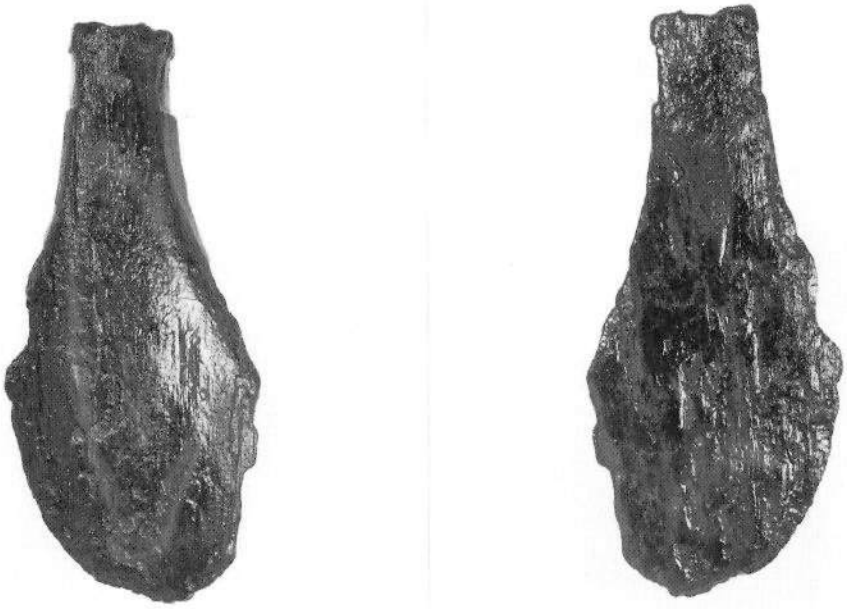


22

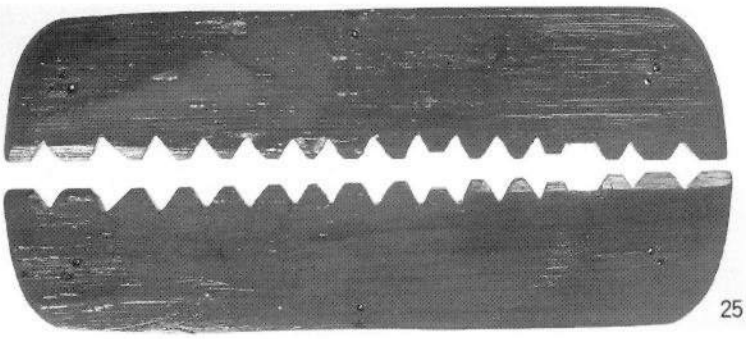


23

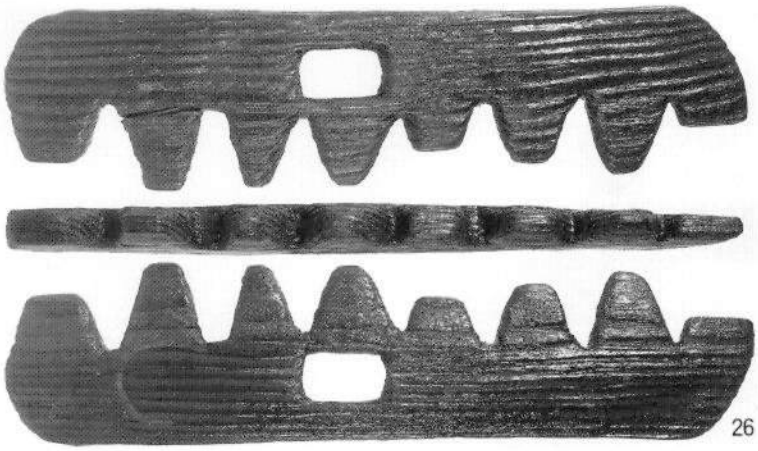
大溝内出土木製品（ナスビ形鍬）



24

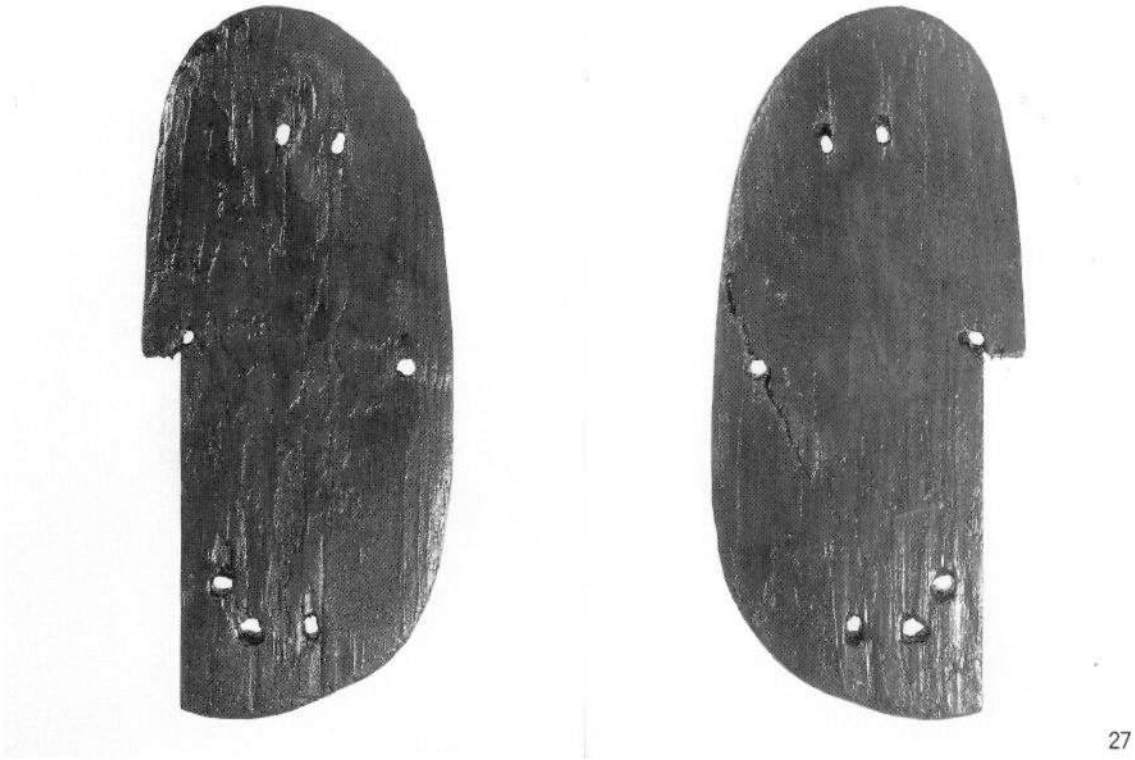


25

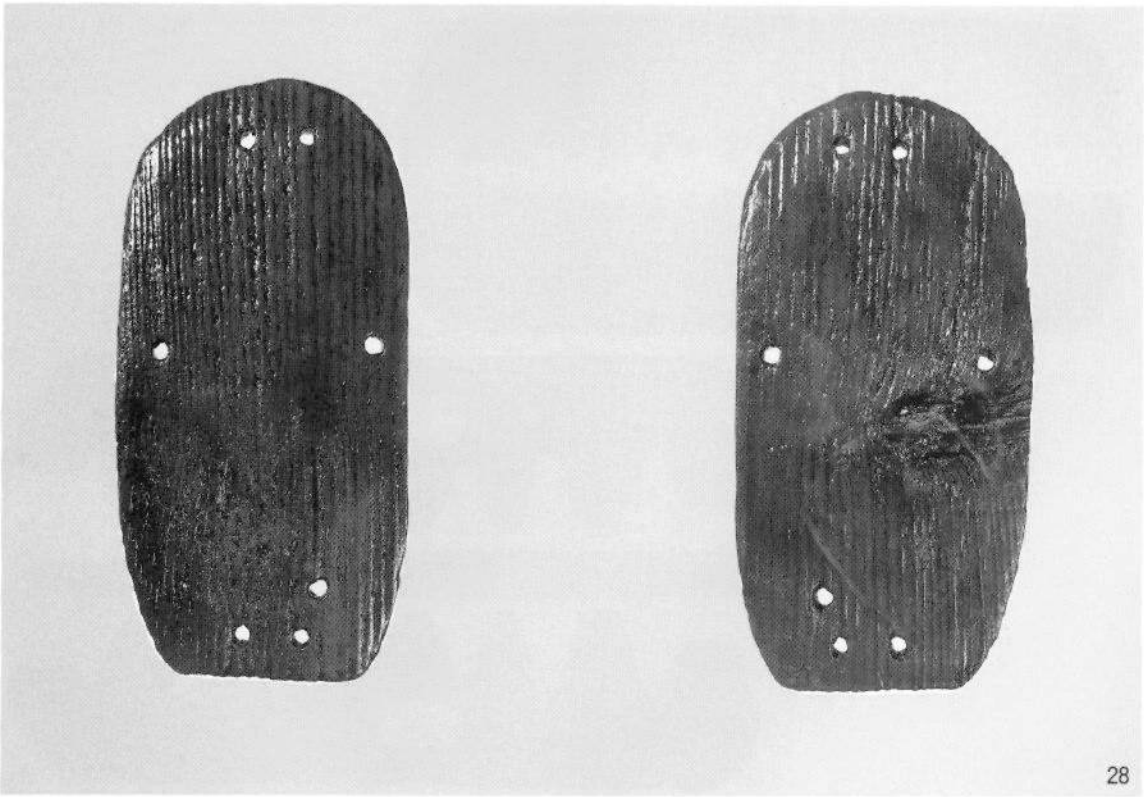


26

大溝内出土木製品（ナスビ形鍬，えぶり）

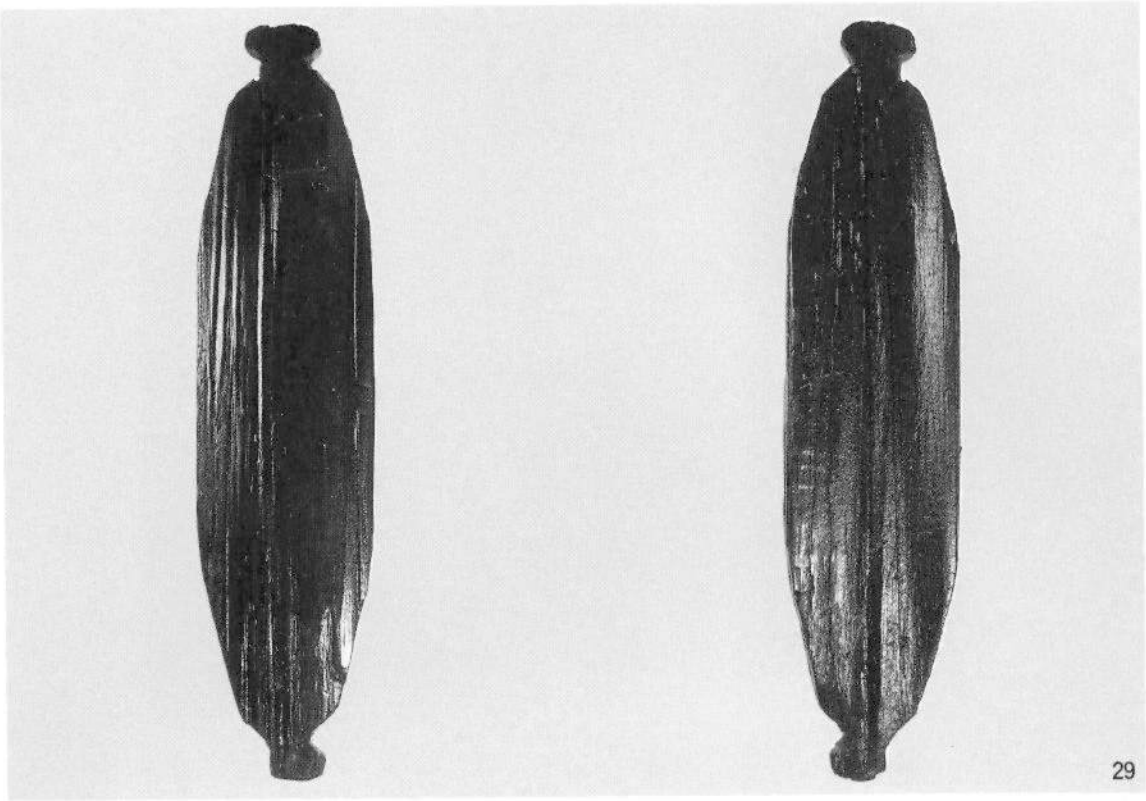


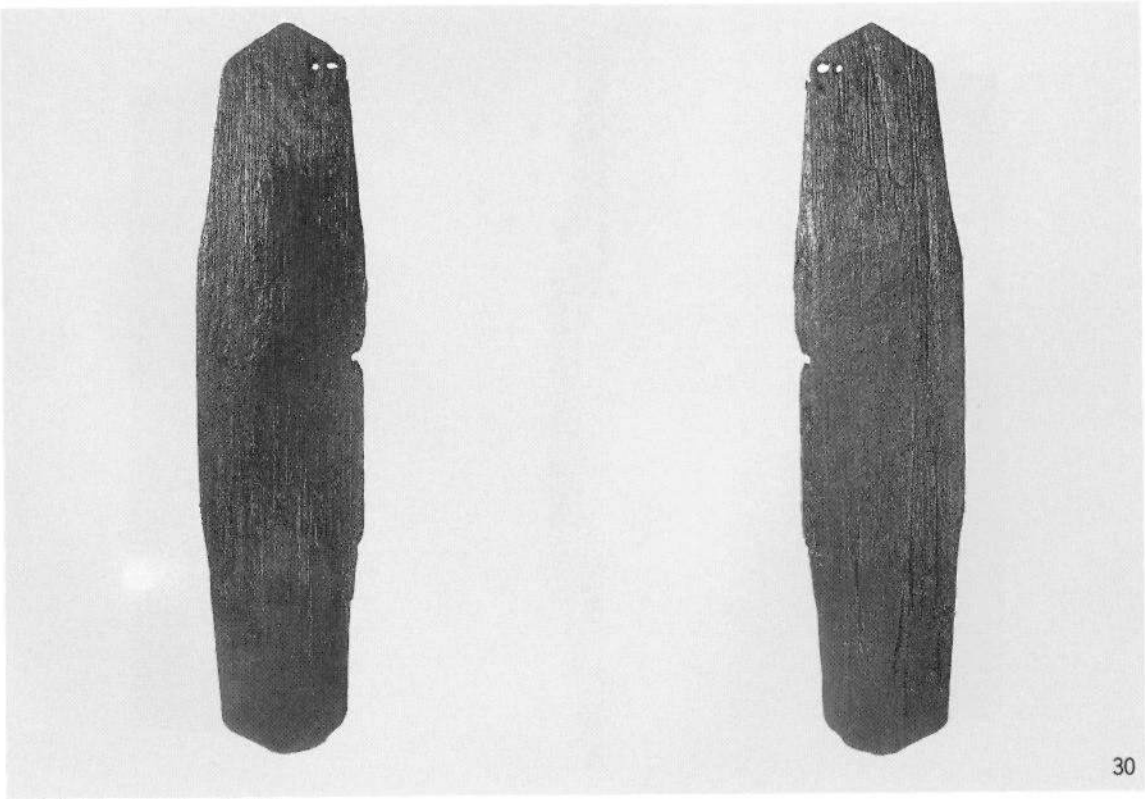
27



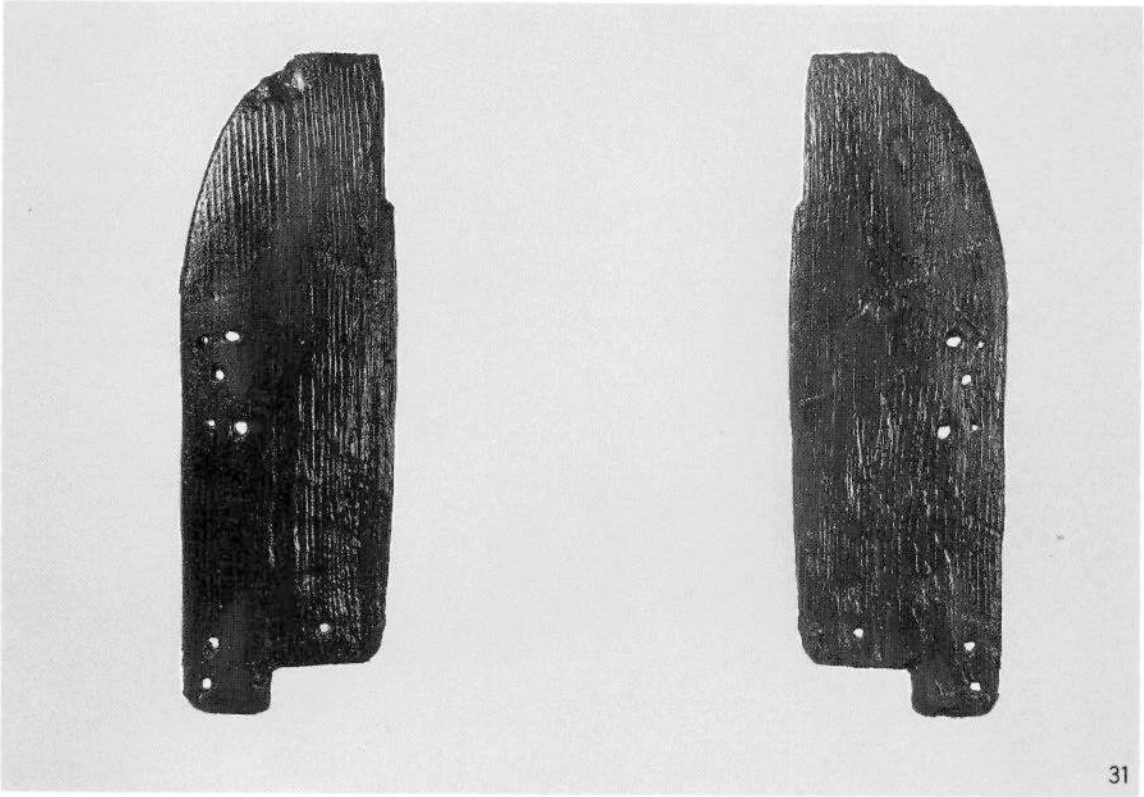
28

大溝内出土木製品（田下駄）

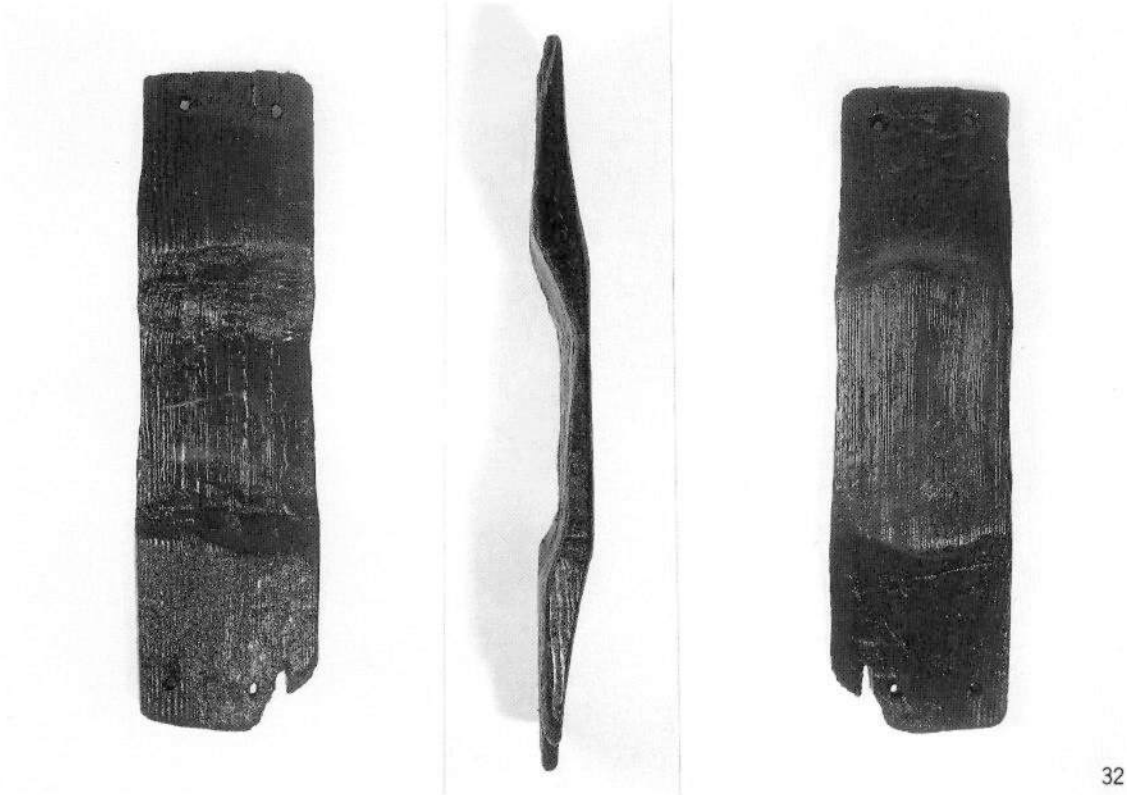




大溝内出土木製品（田下駄）

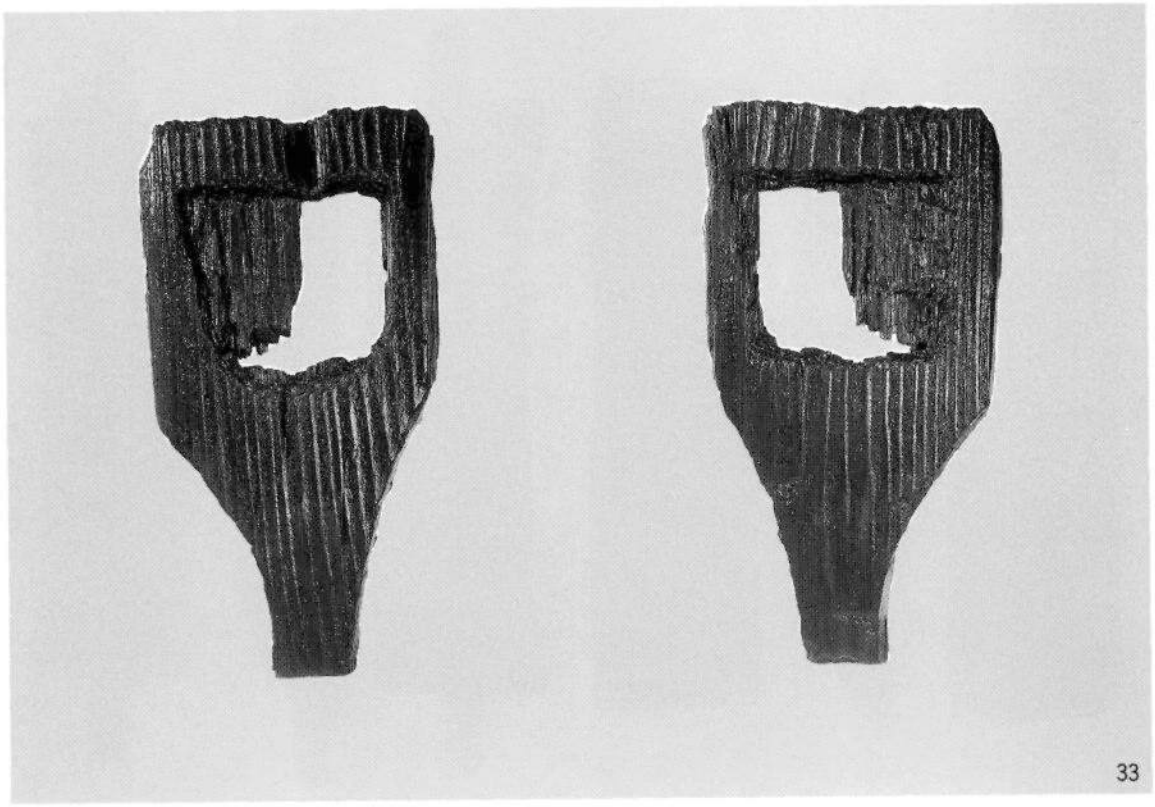


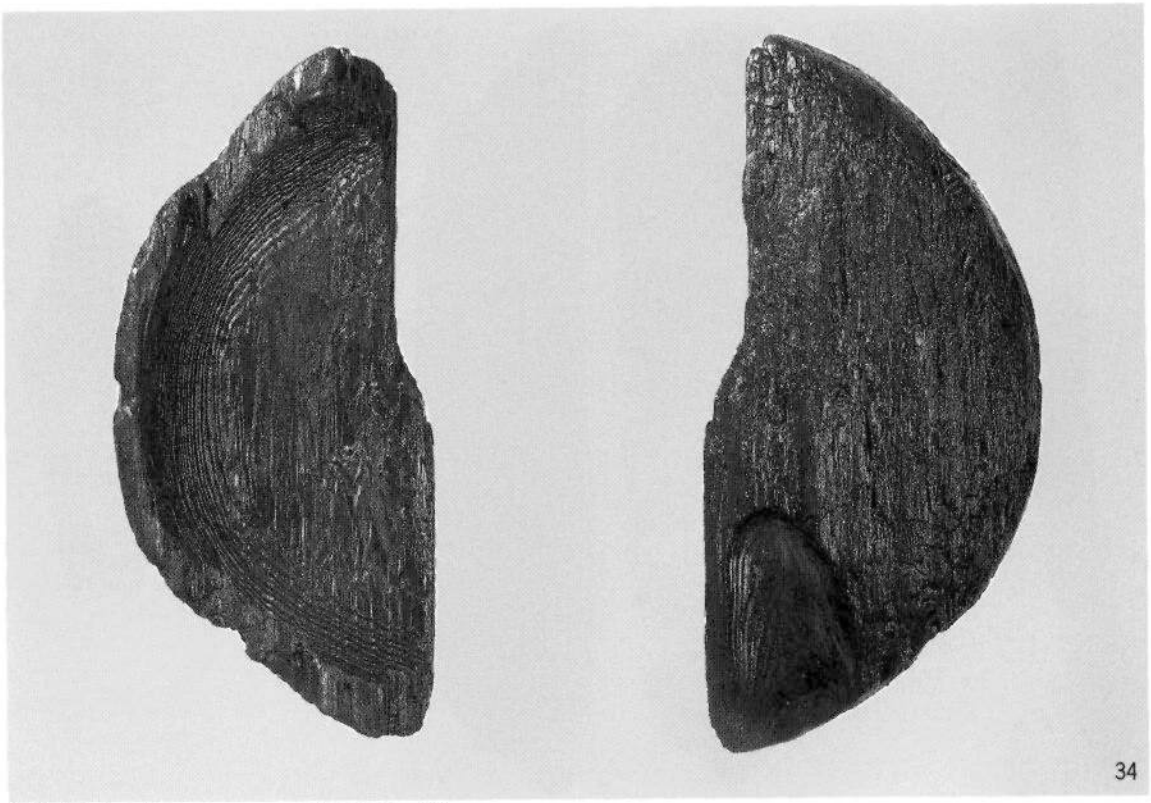
31



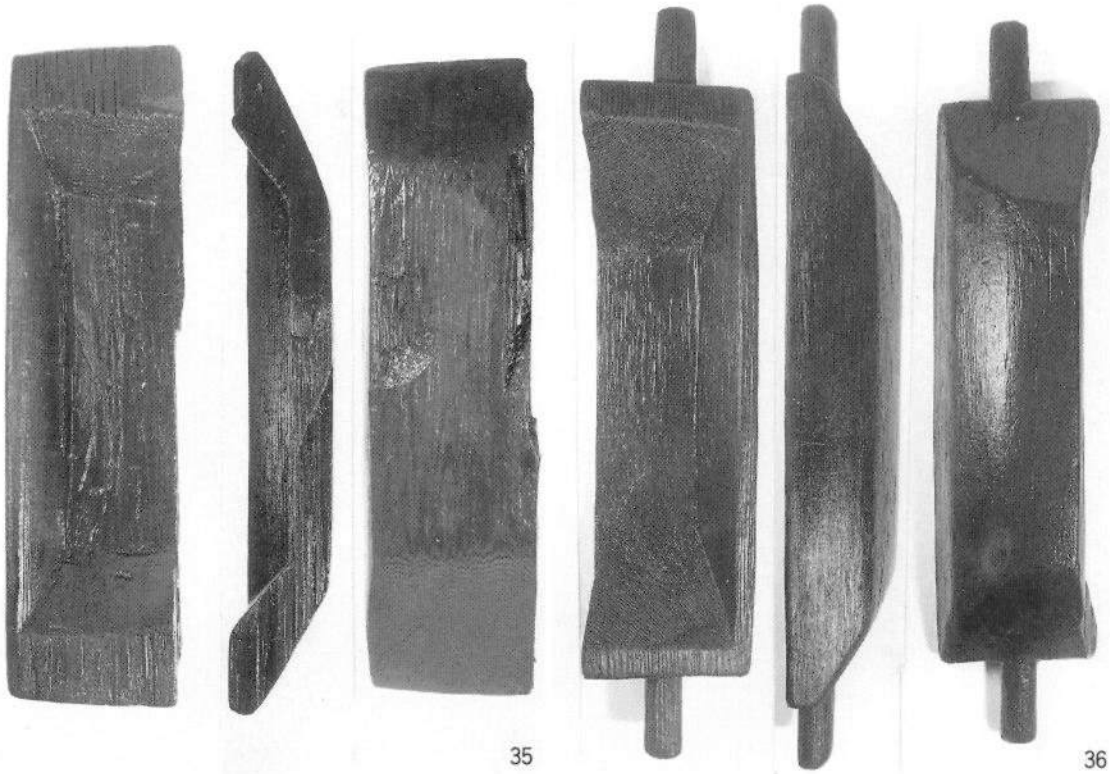
32

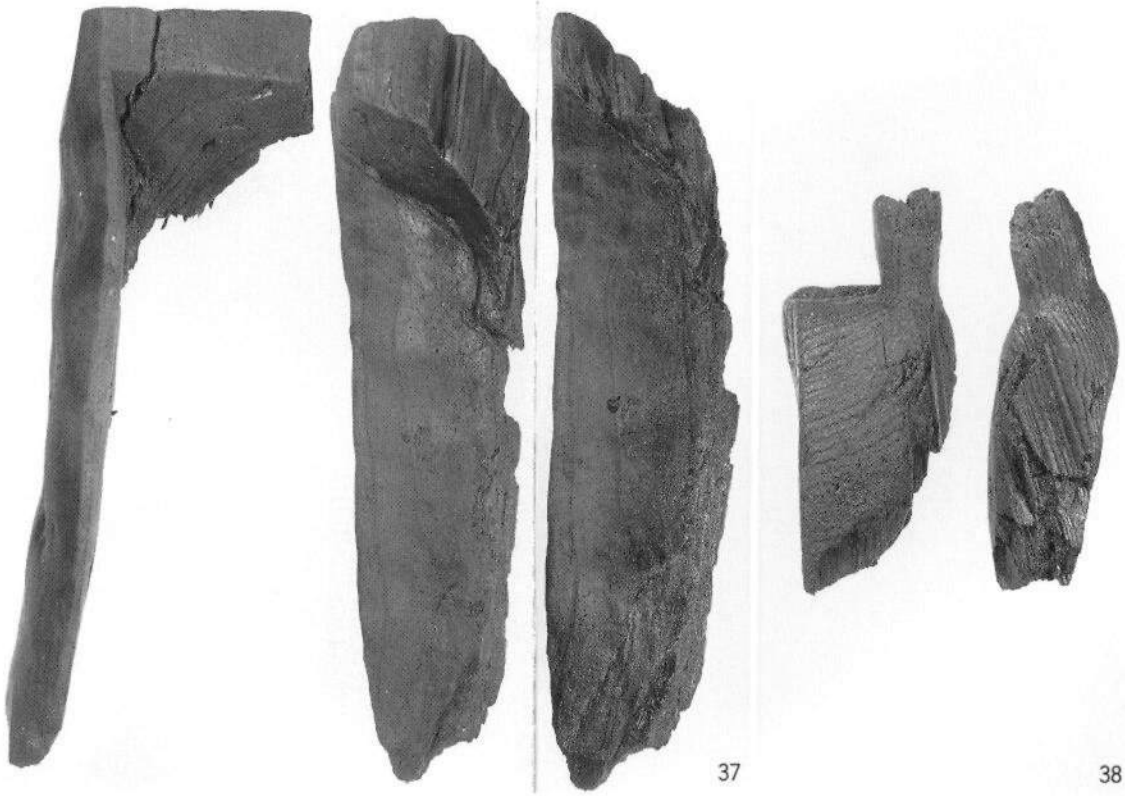
大溝内出土木製品（田下駄）



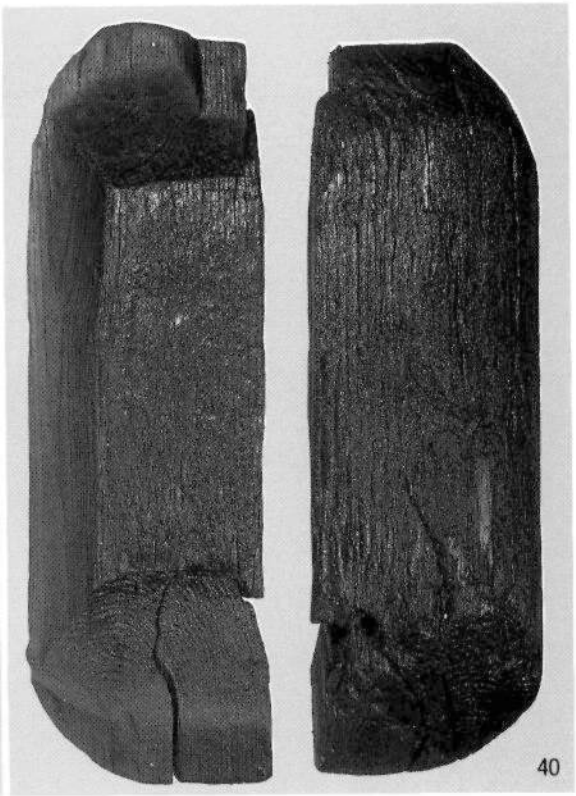


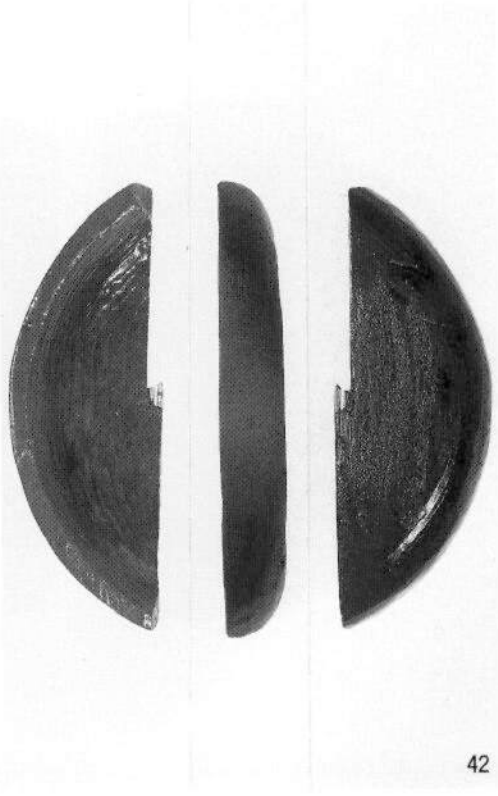
大溝内出土木製品（スコップ形木製品，槽）



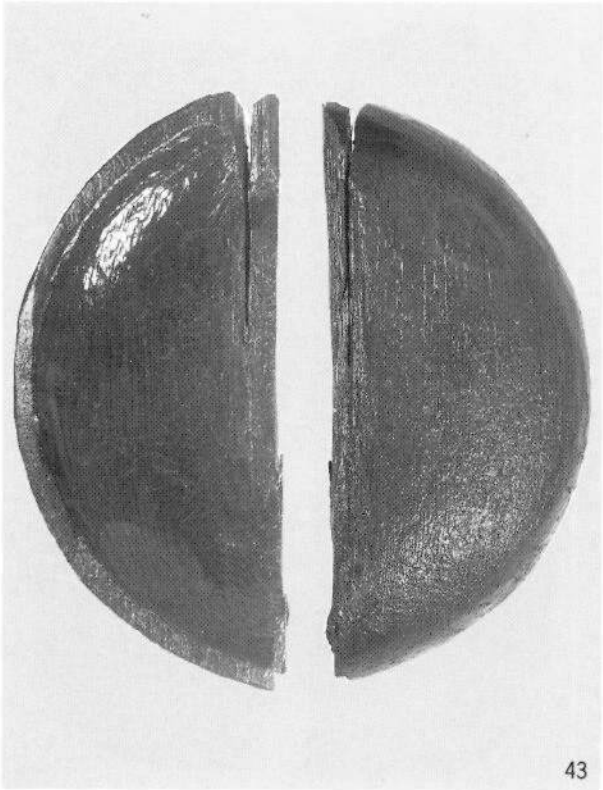


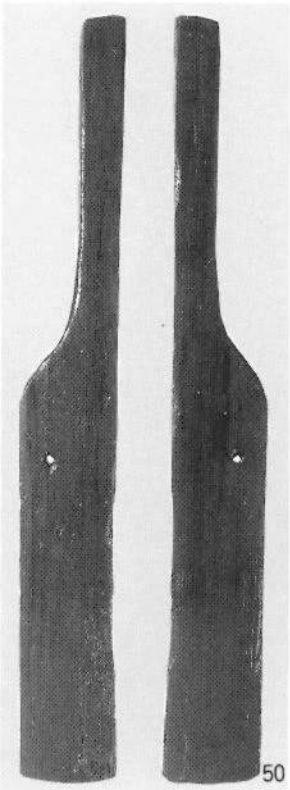
大溝内出土木製品（槽）

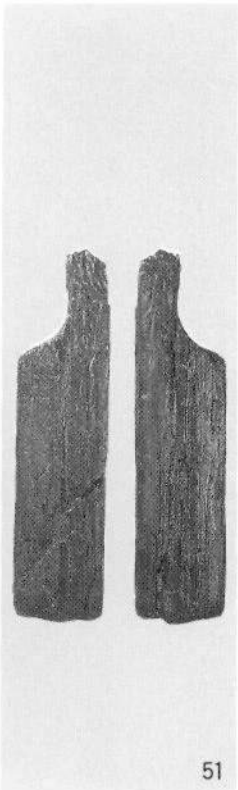


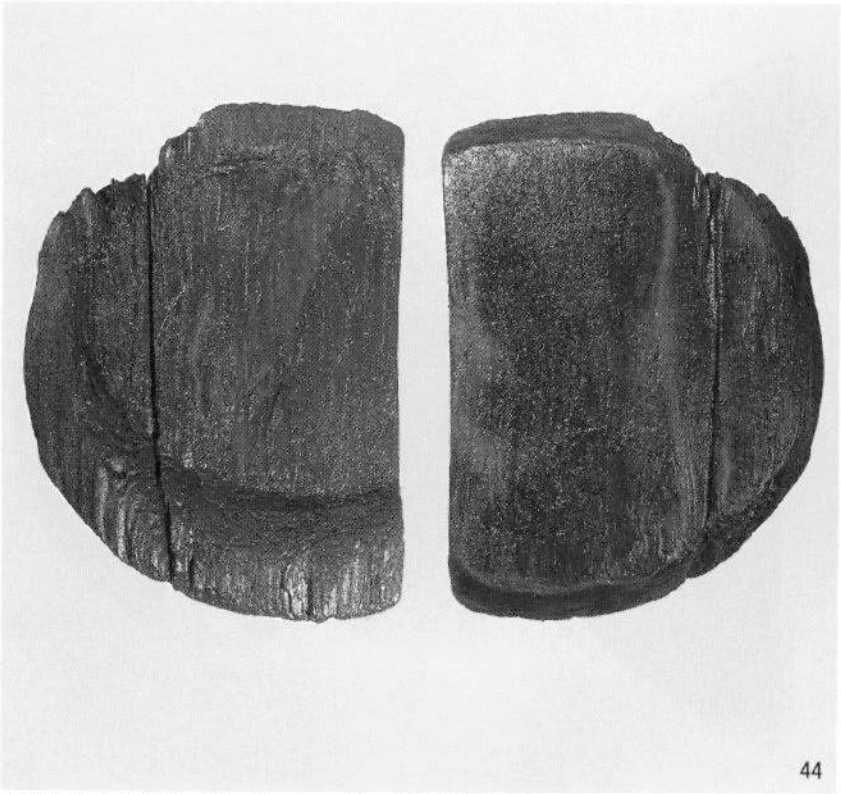


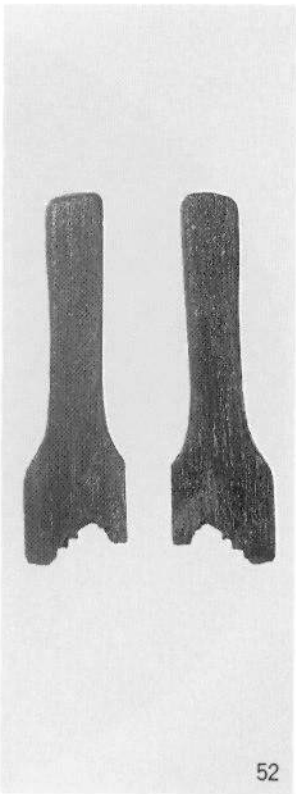
大溝内出土木製品（樽）



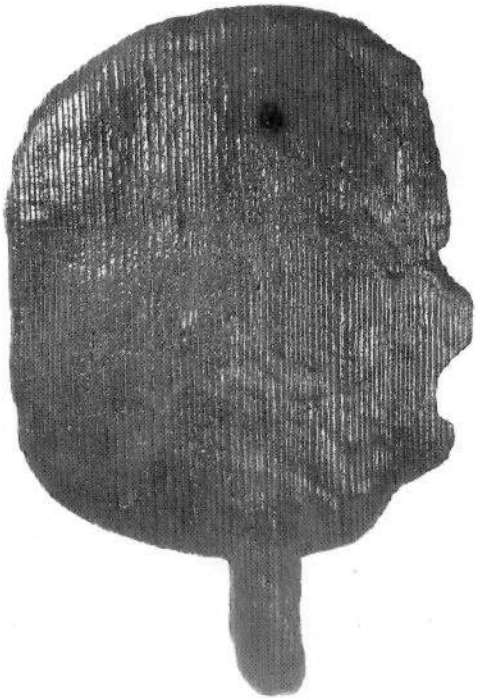


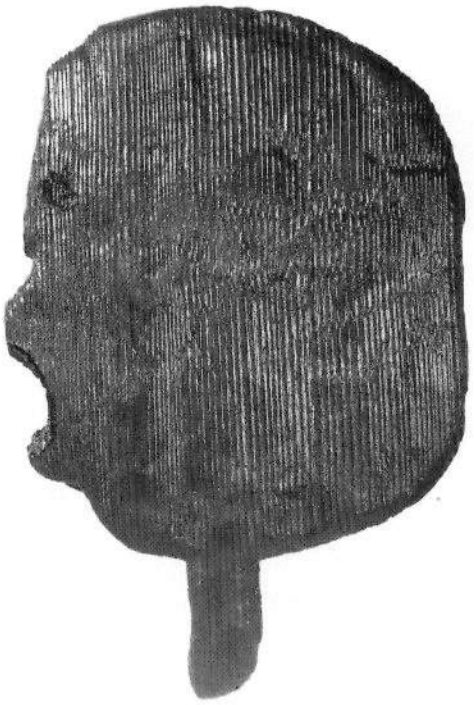




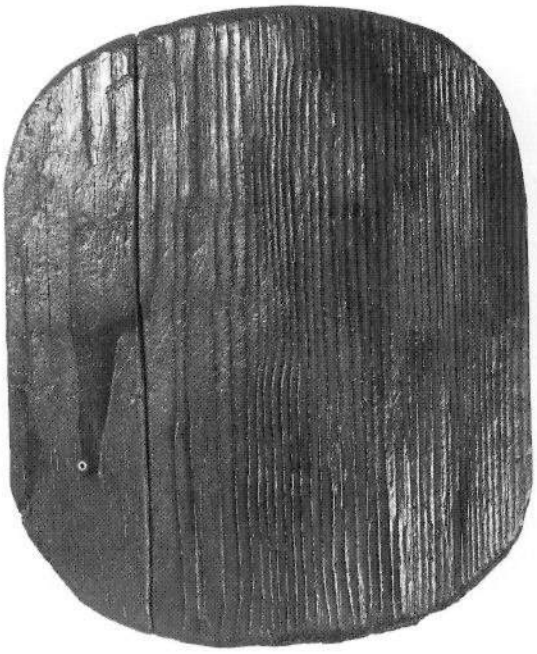


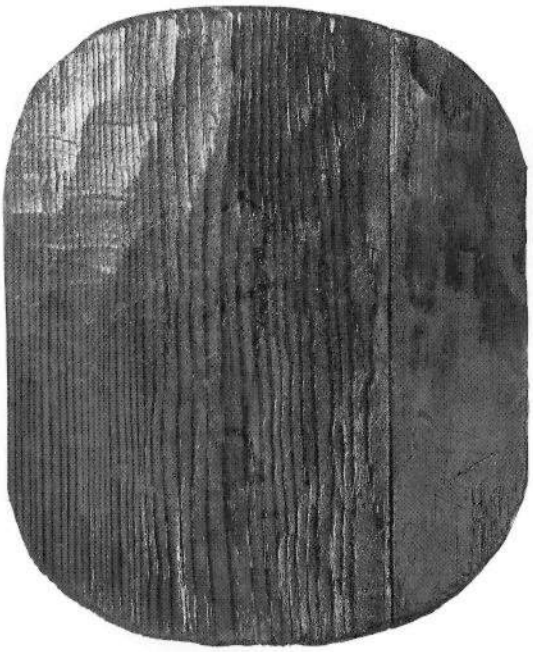
大溝内出土木製品（槽，皿，さじ形・杓子形木製品）





55

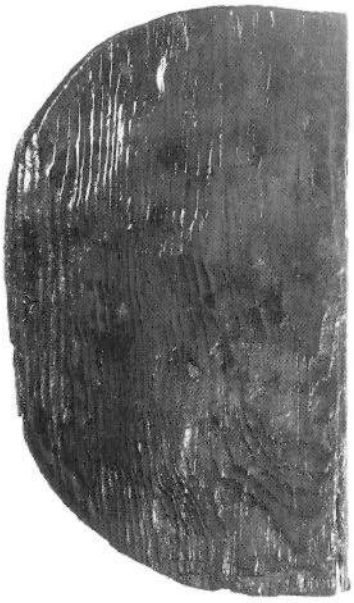




56

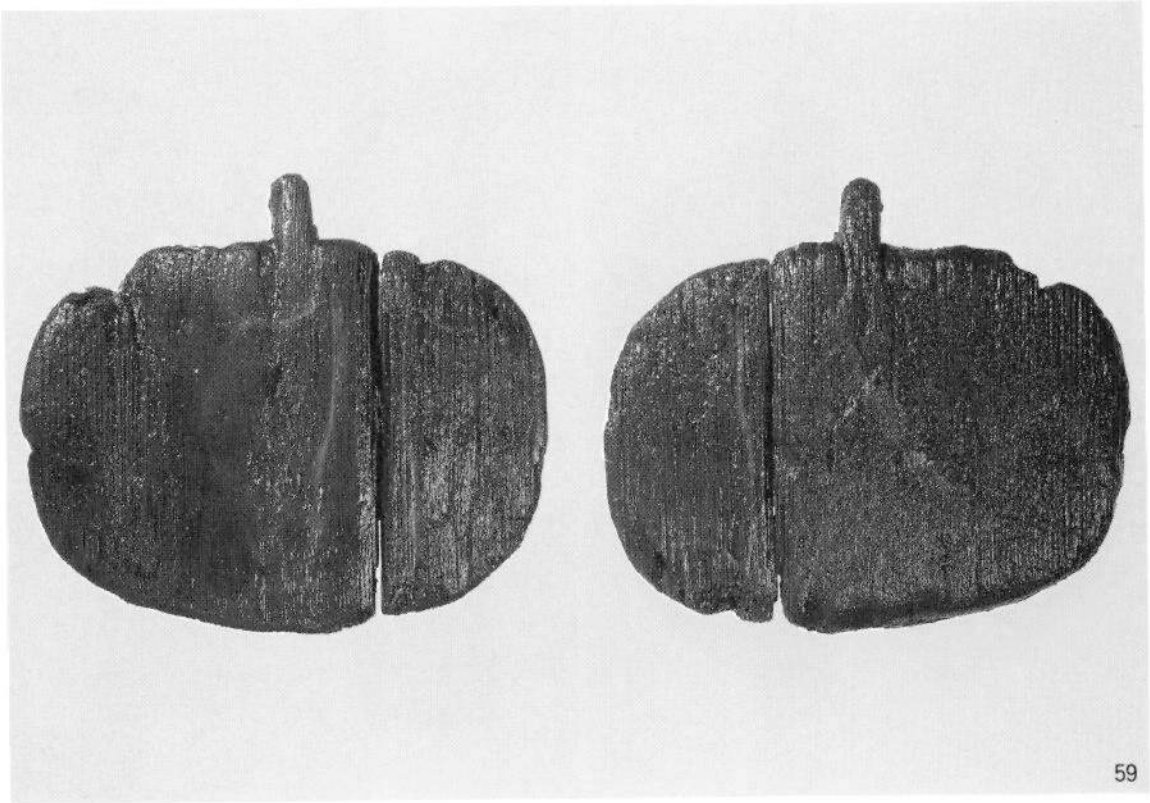
大溝内出土木製品（俎）

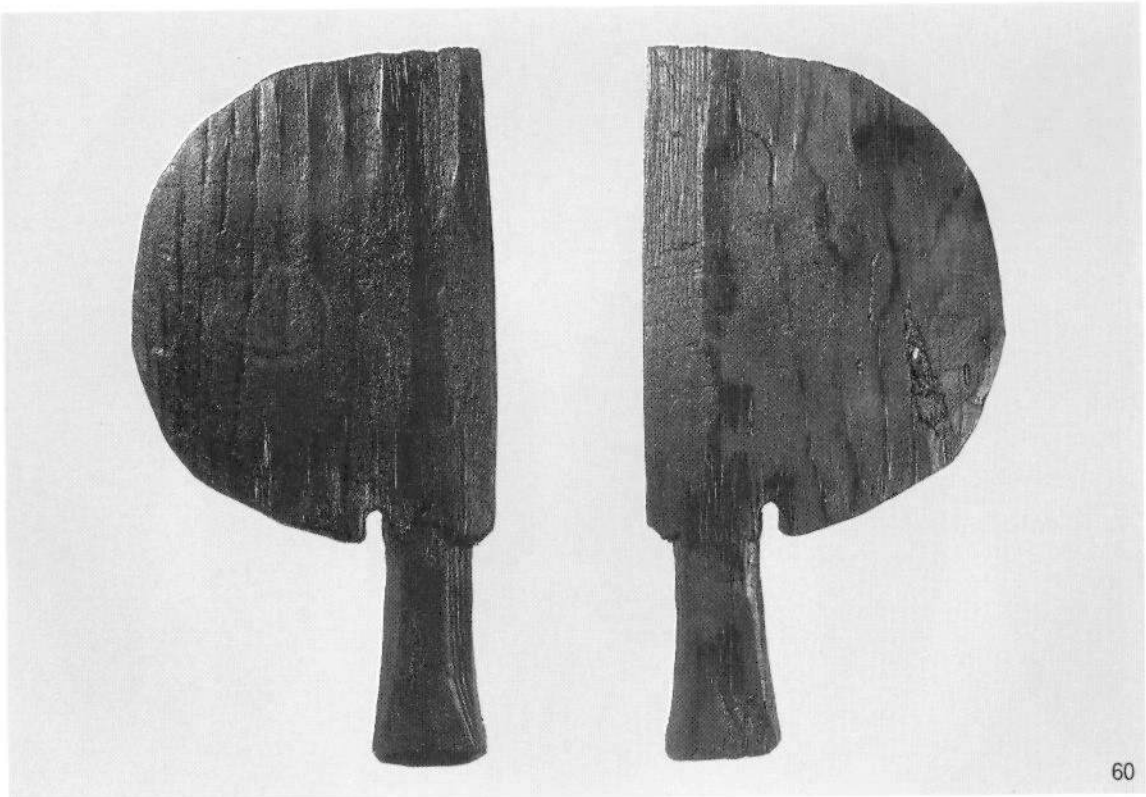
57



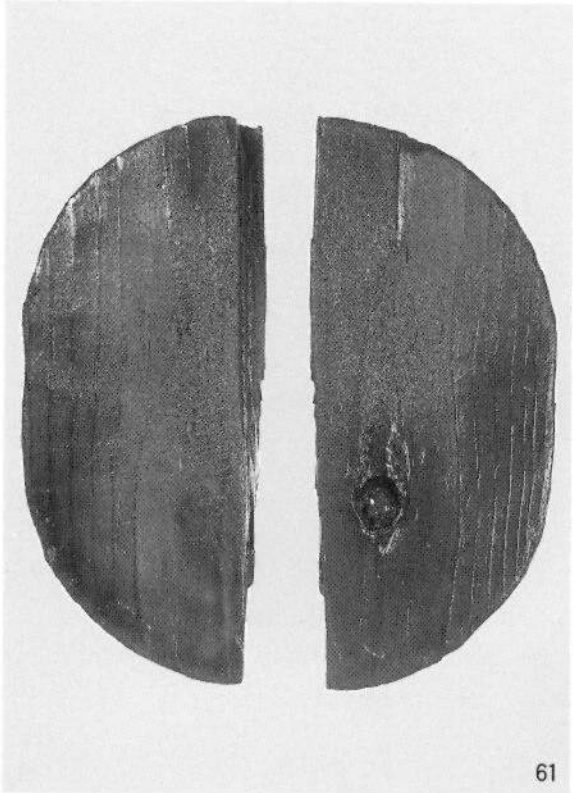
58

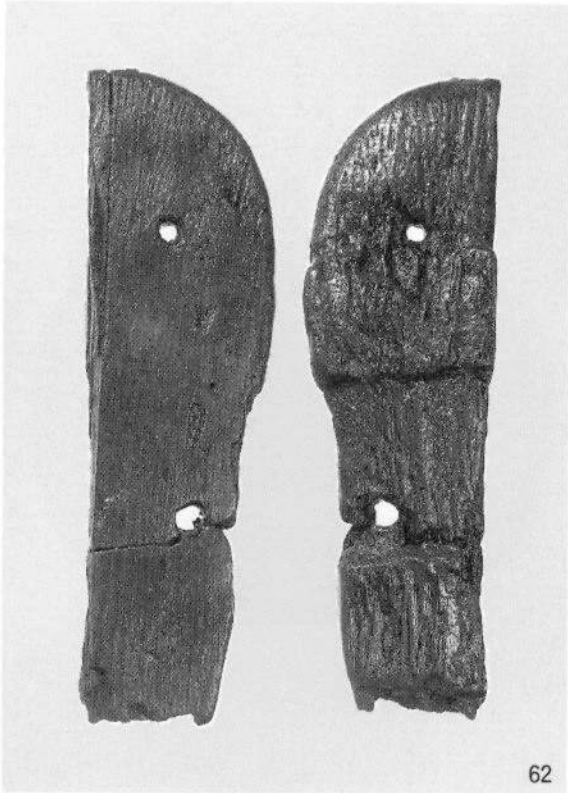
大溝内出土木製品（杭）

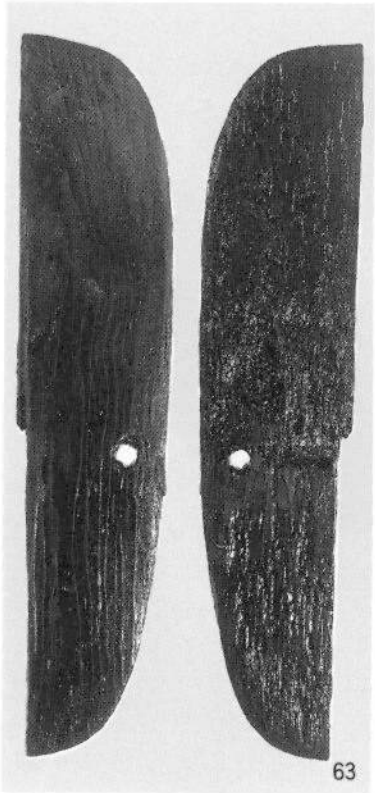


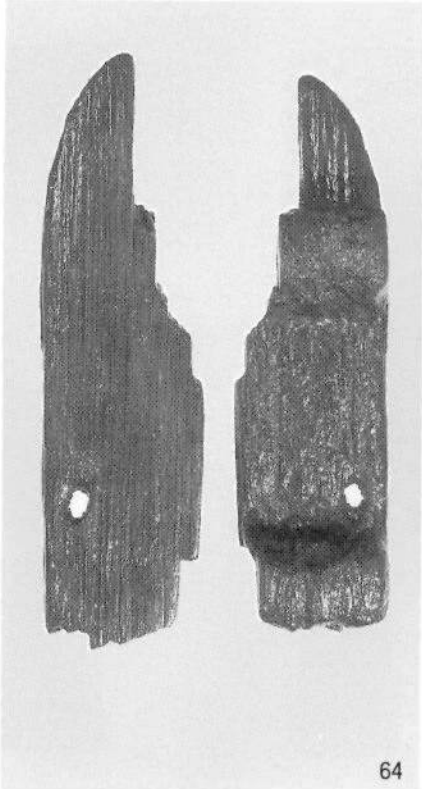


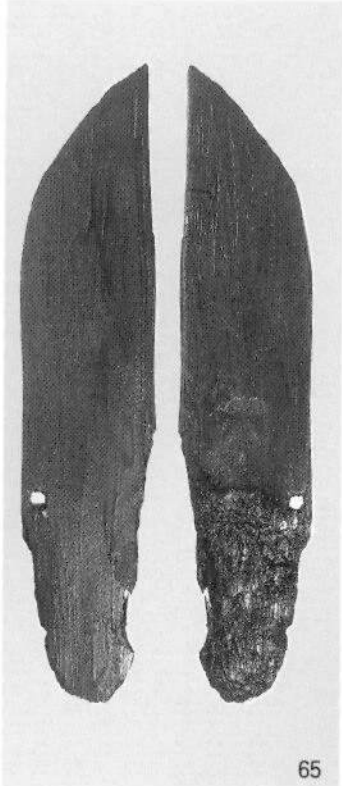
大溝内出土木製品（俎）



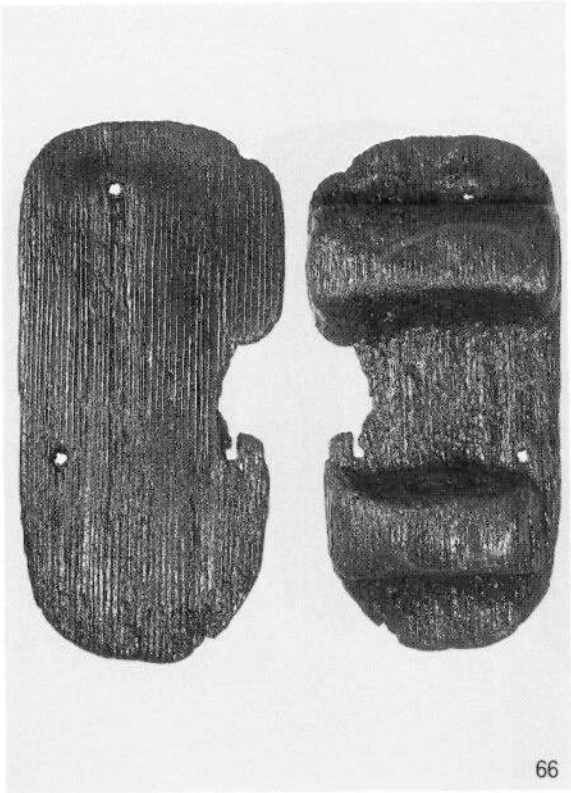




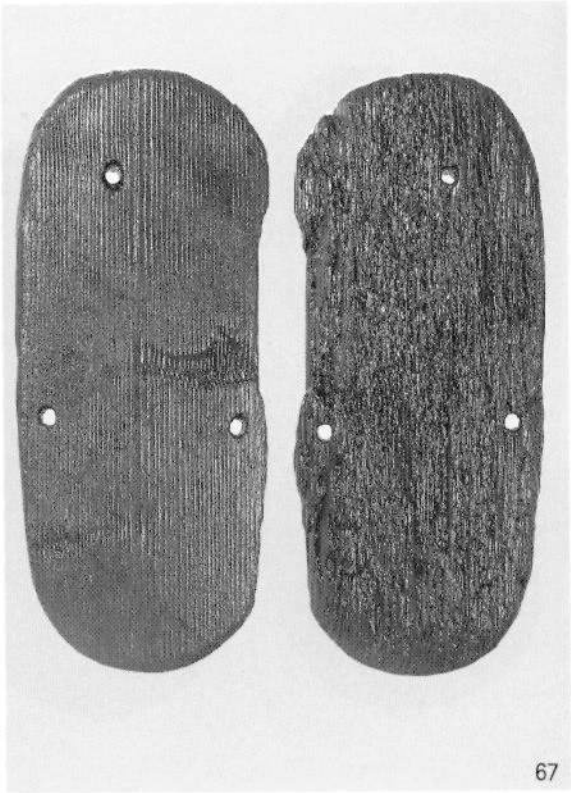




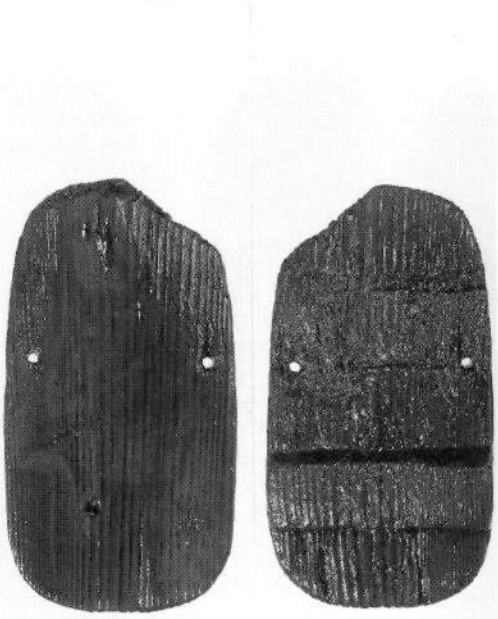
大溝内出土木製品（組，下駄）



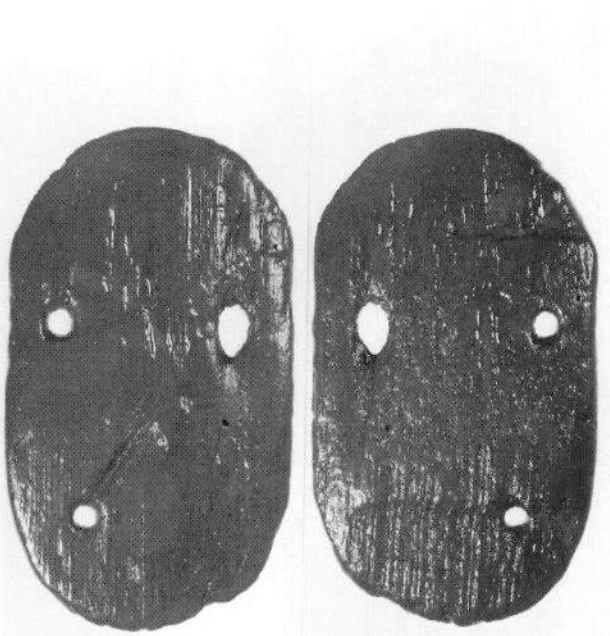
66



67

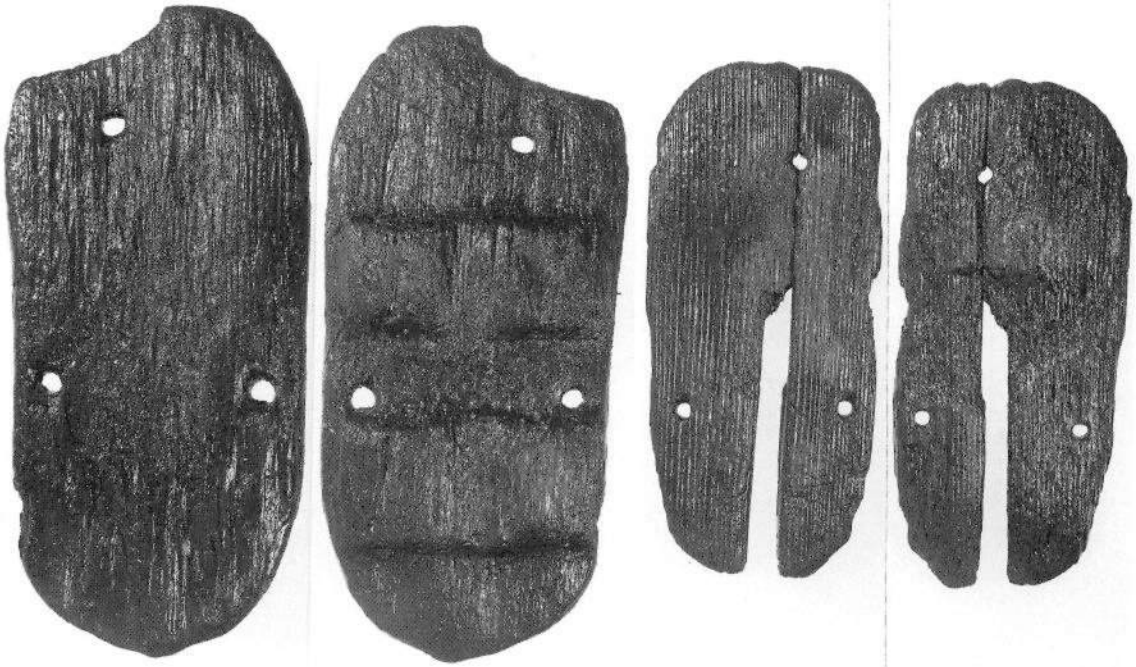


68



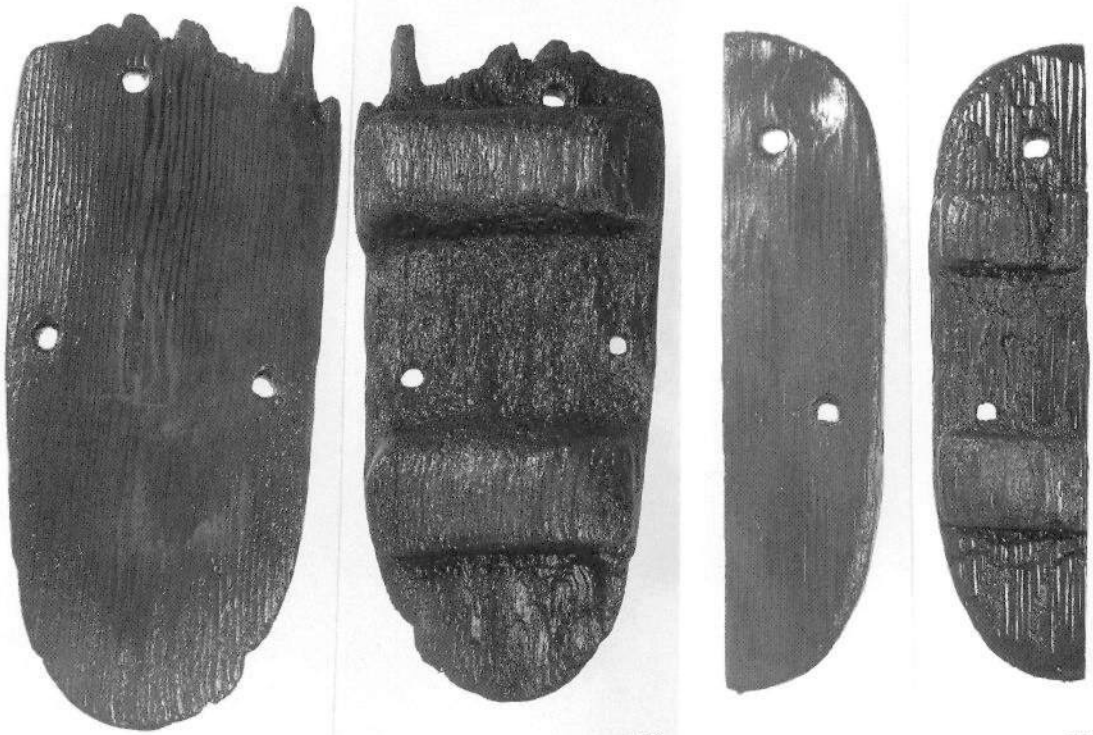
69

大溝内出土木製品（下駄）



70

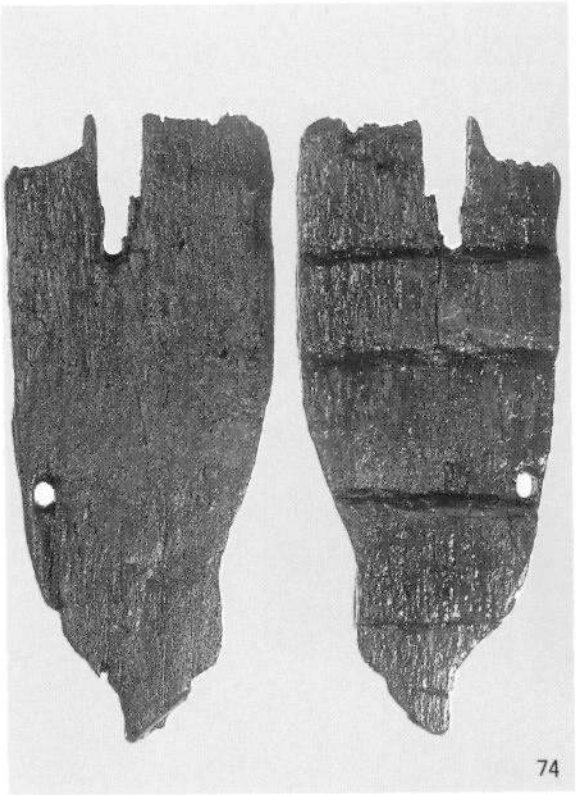
71

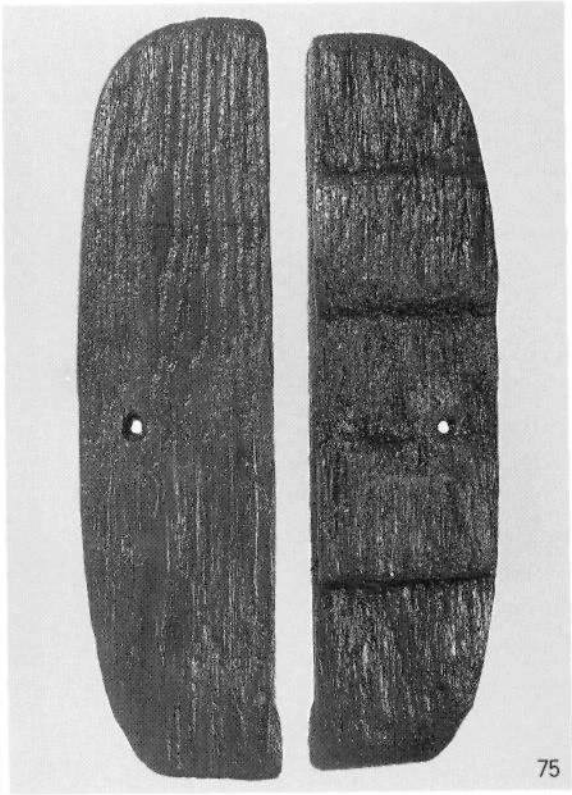


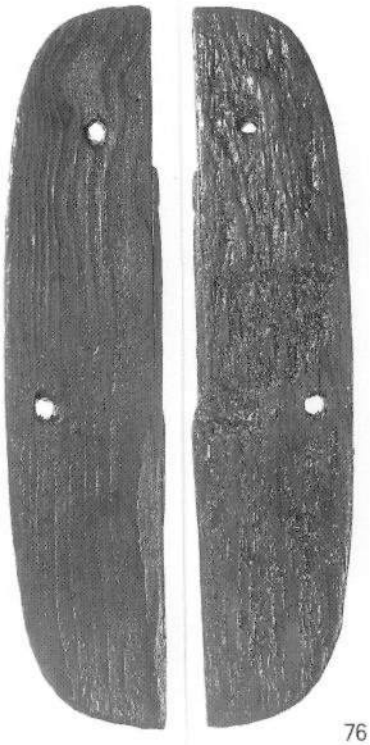
72

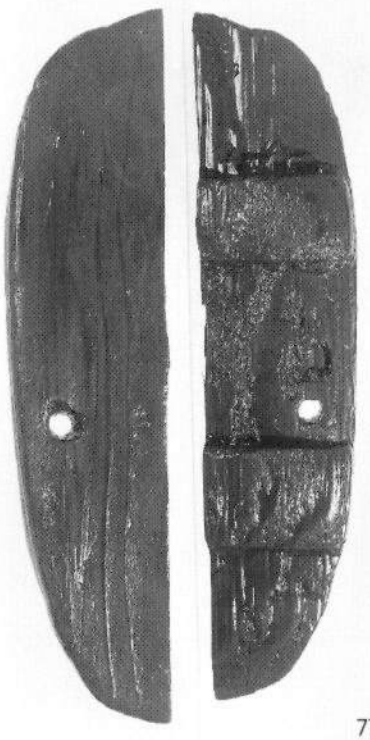
73

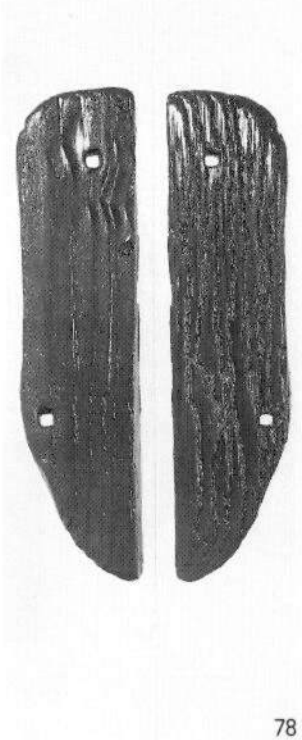
大溝内出土木製品（下駄）


74

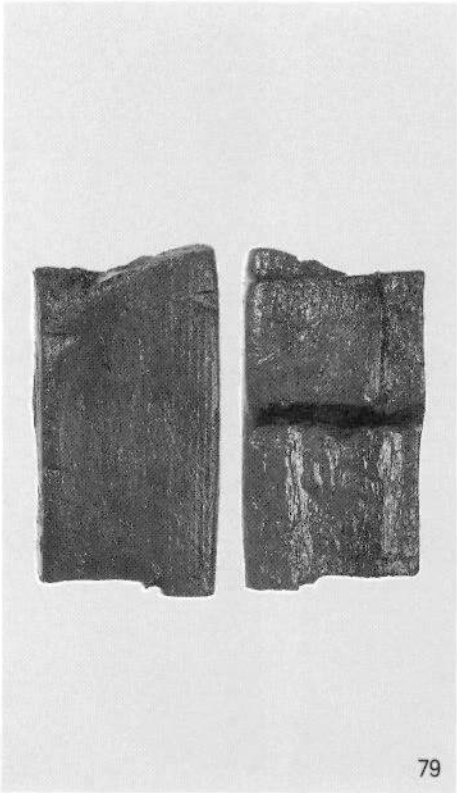

75

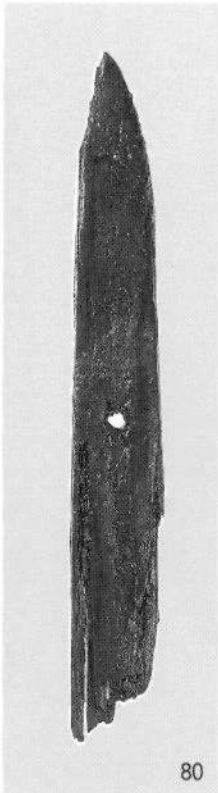

76

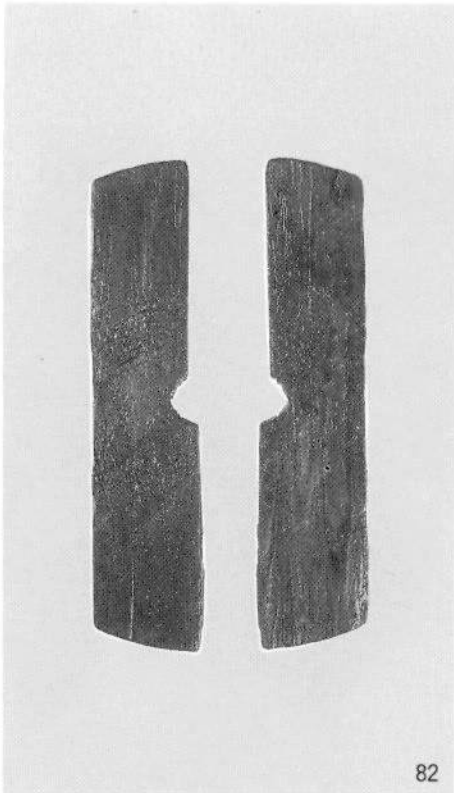

77

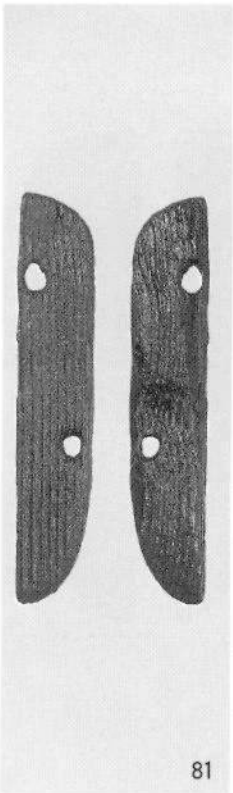

78

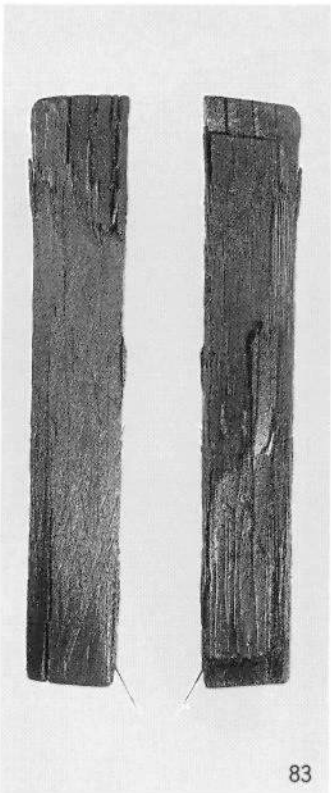
大溝内出土木製品（下駄）

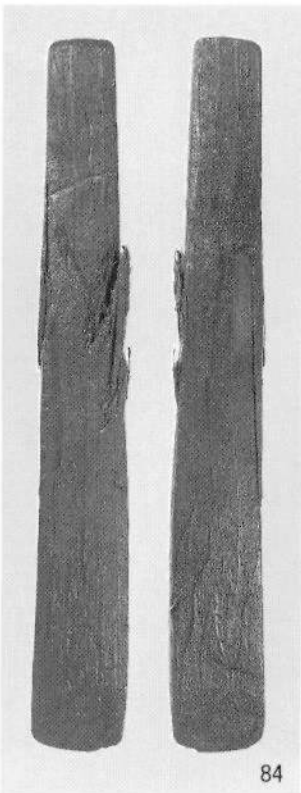


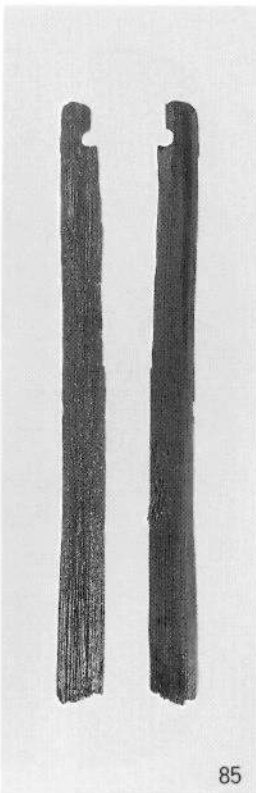




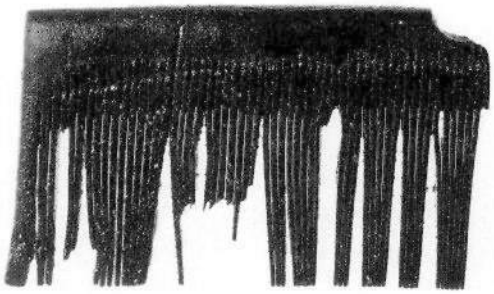






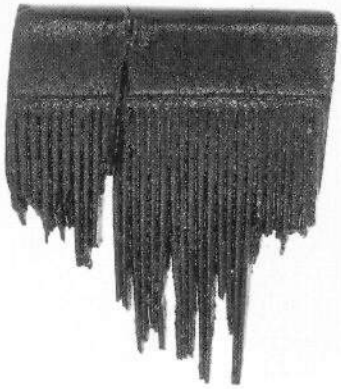


大溝内出土木製品（下駄，曲物等）

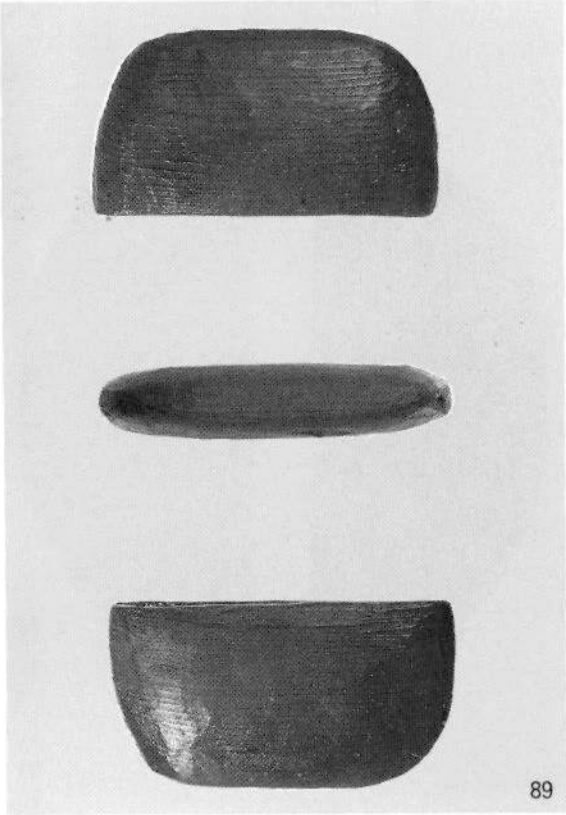


86

87

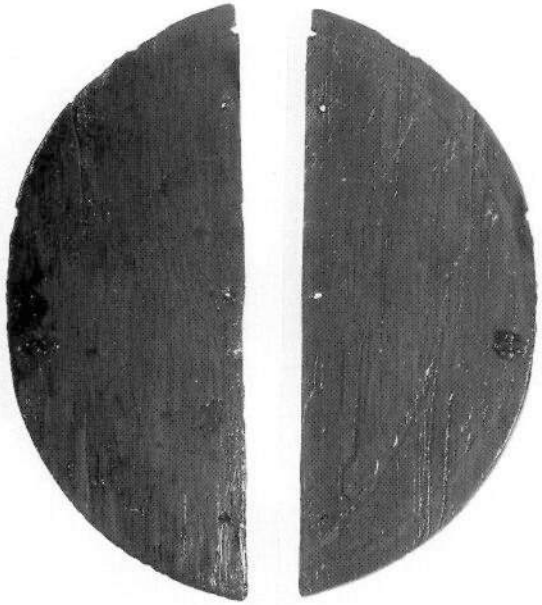


88

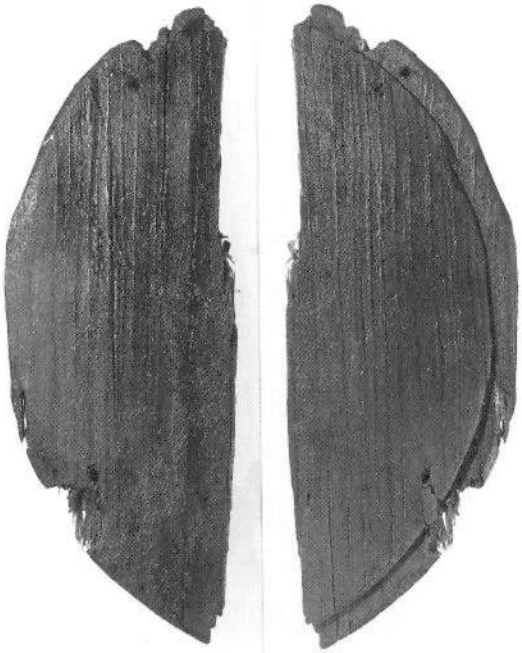


89

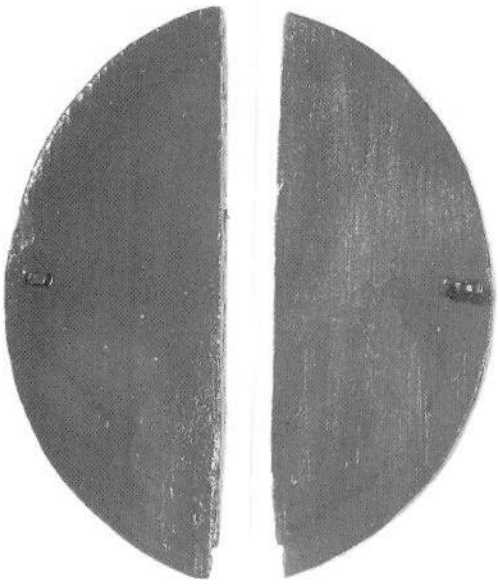
大溝内出土木製品（櫛，櫛ケース）



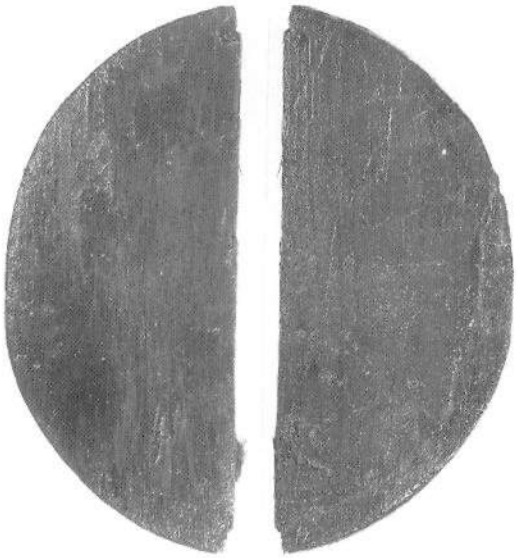
91



92

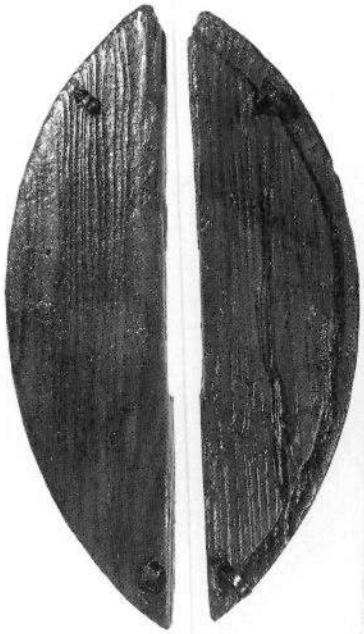


93

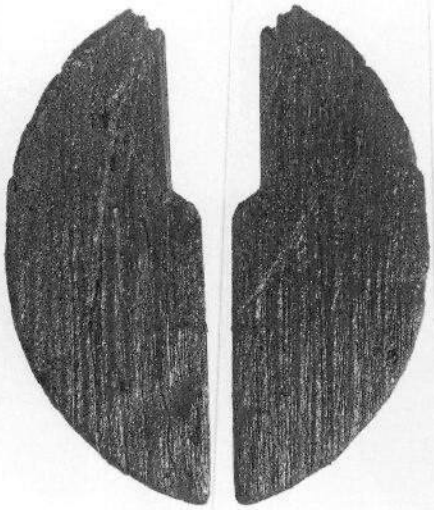


94

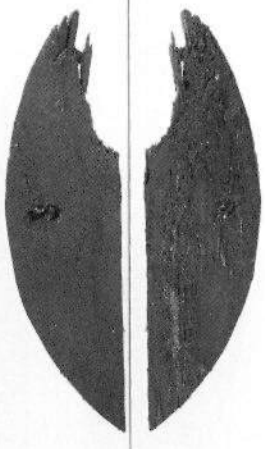
大溝内出土木製品（曲物）



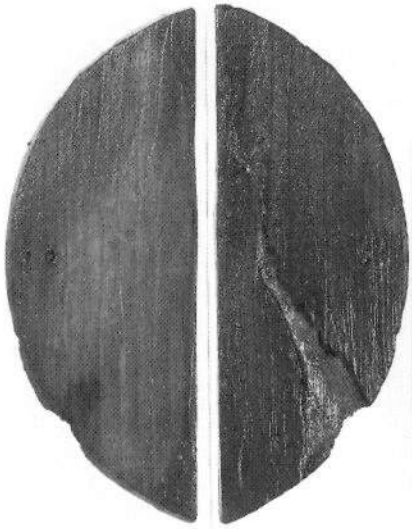
95



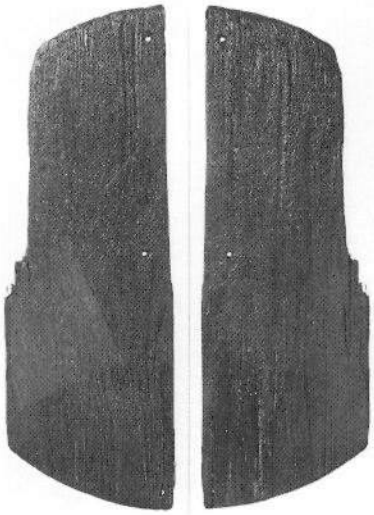
96



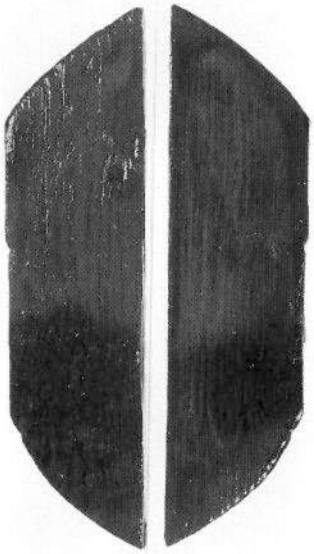
97



98

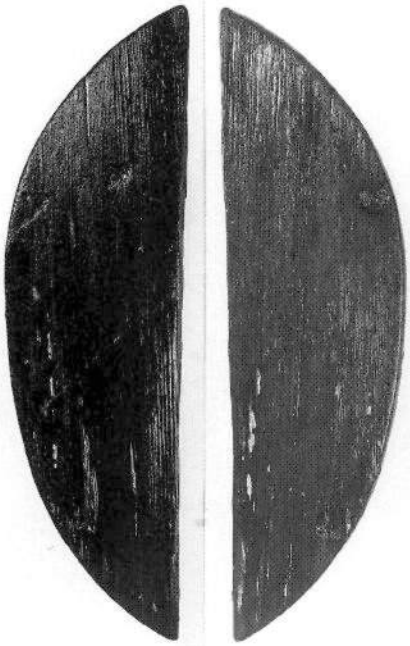


99

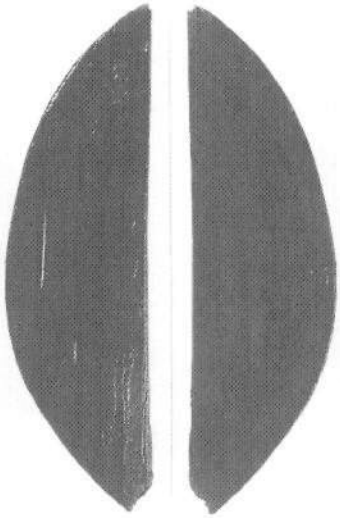


100

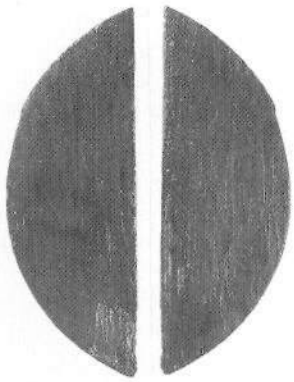
大溝内出土木製品（曲物）



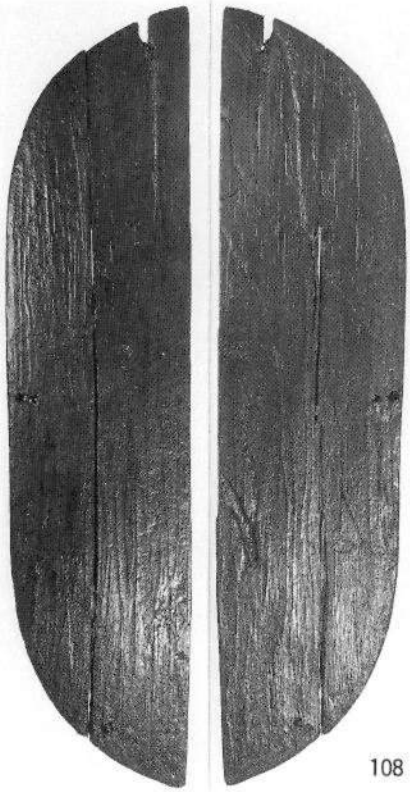
105



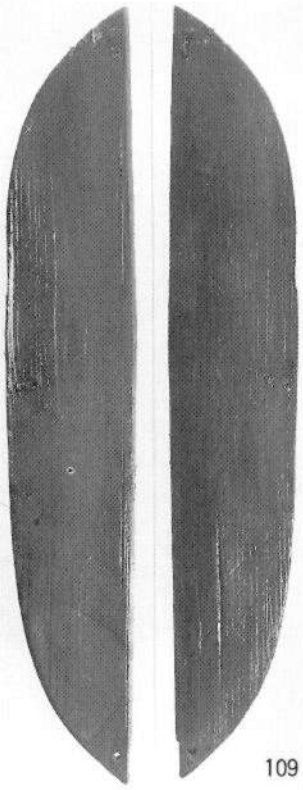
106



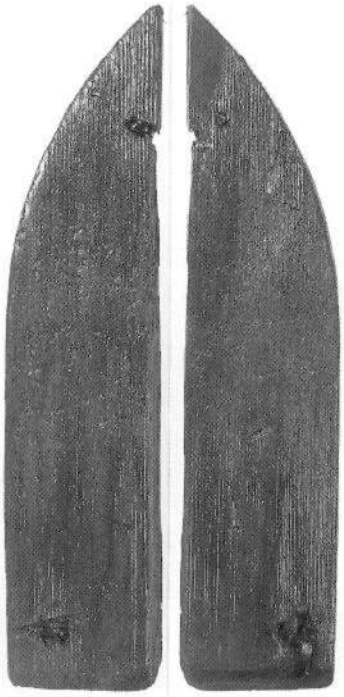
107



108

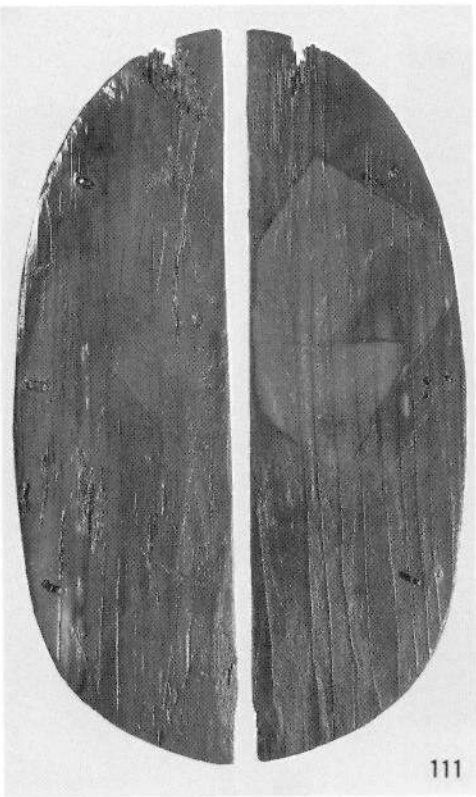


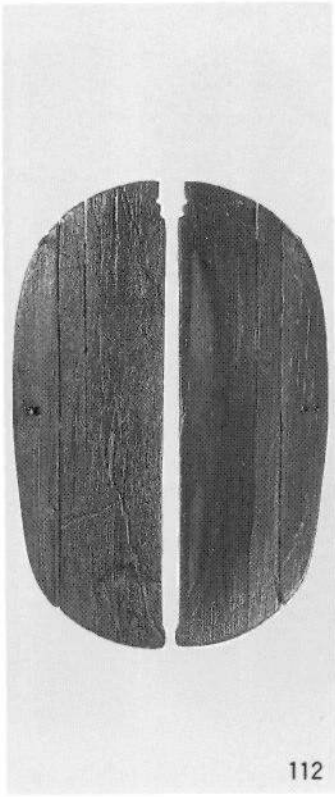
109

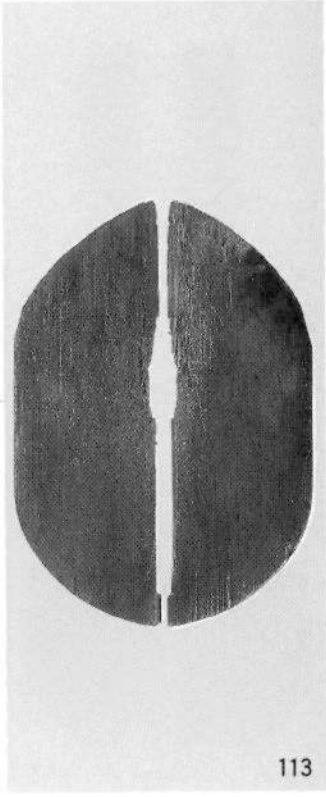


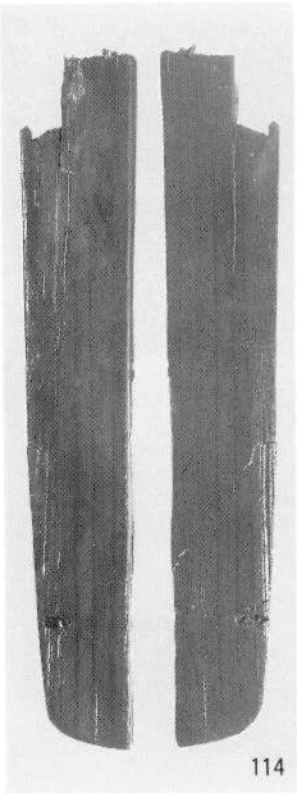
110

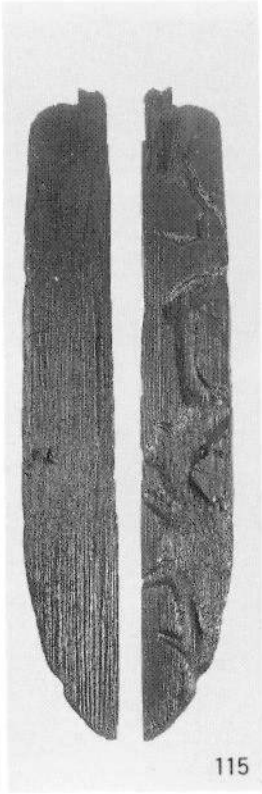
大溝内出土木製品（曲物）

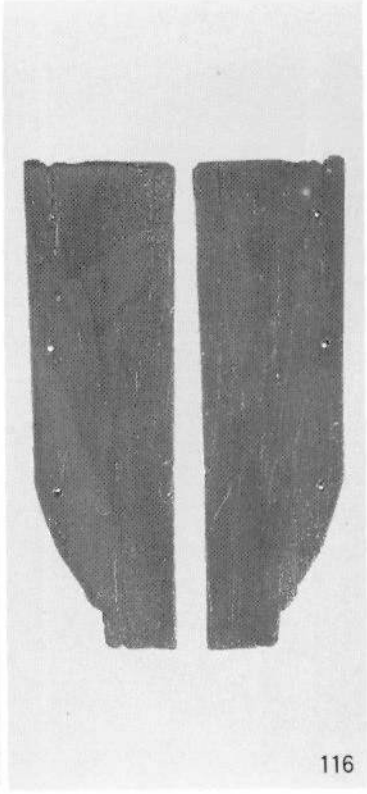

111

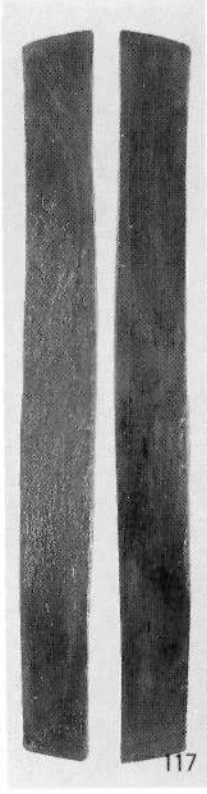

112


113

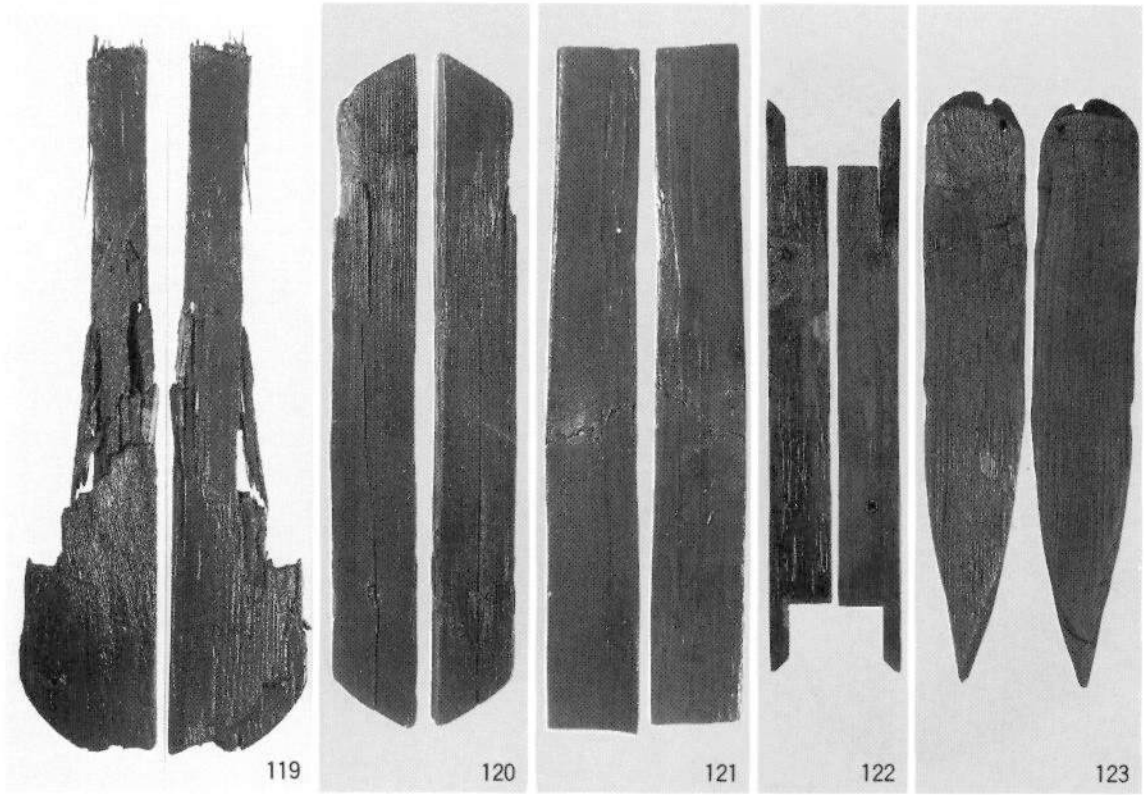

114

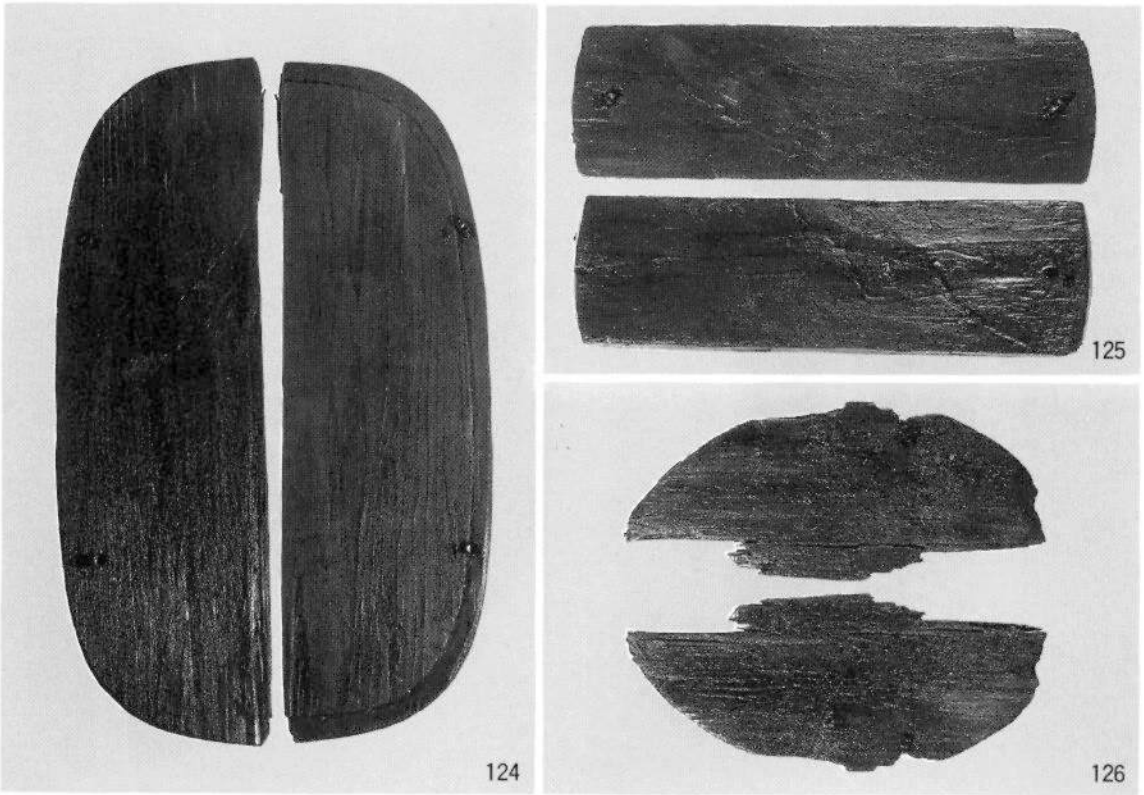

115


116


117

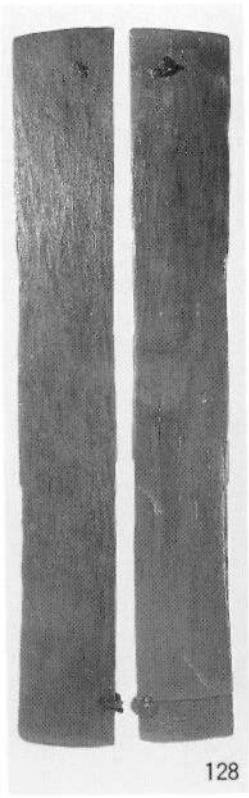
大溝内出土木製品（曲物）

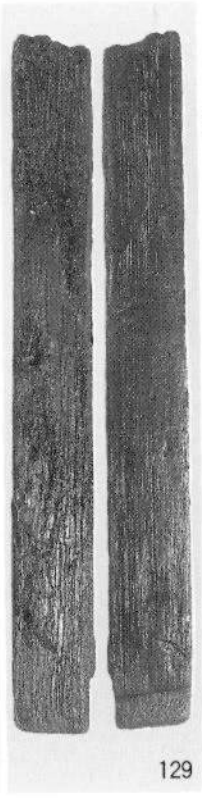


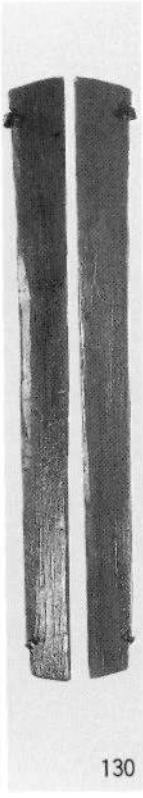


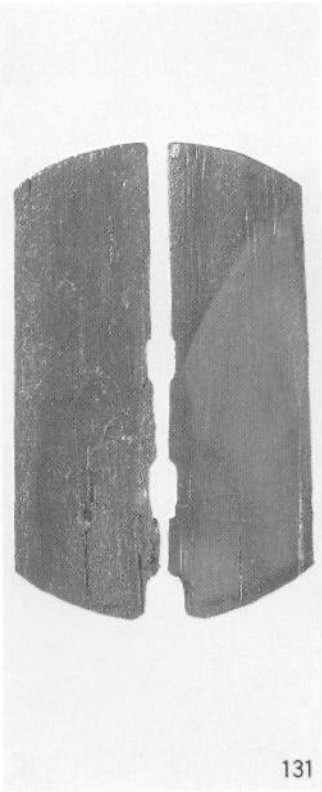
大溝内出土木製品（曲物）

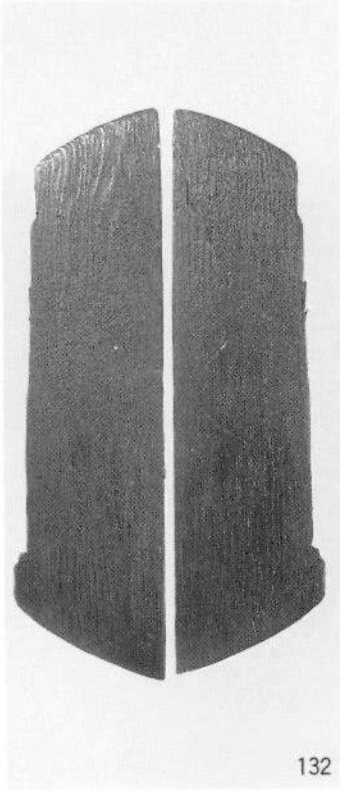
127

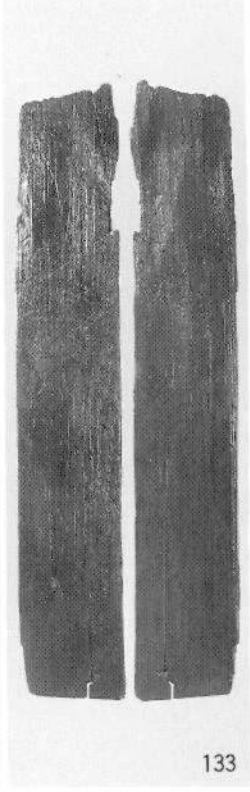

128

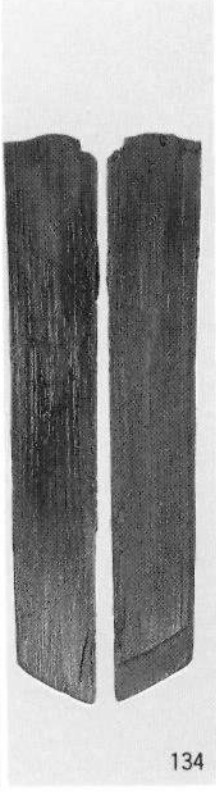

129


130

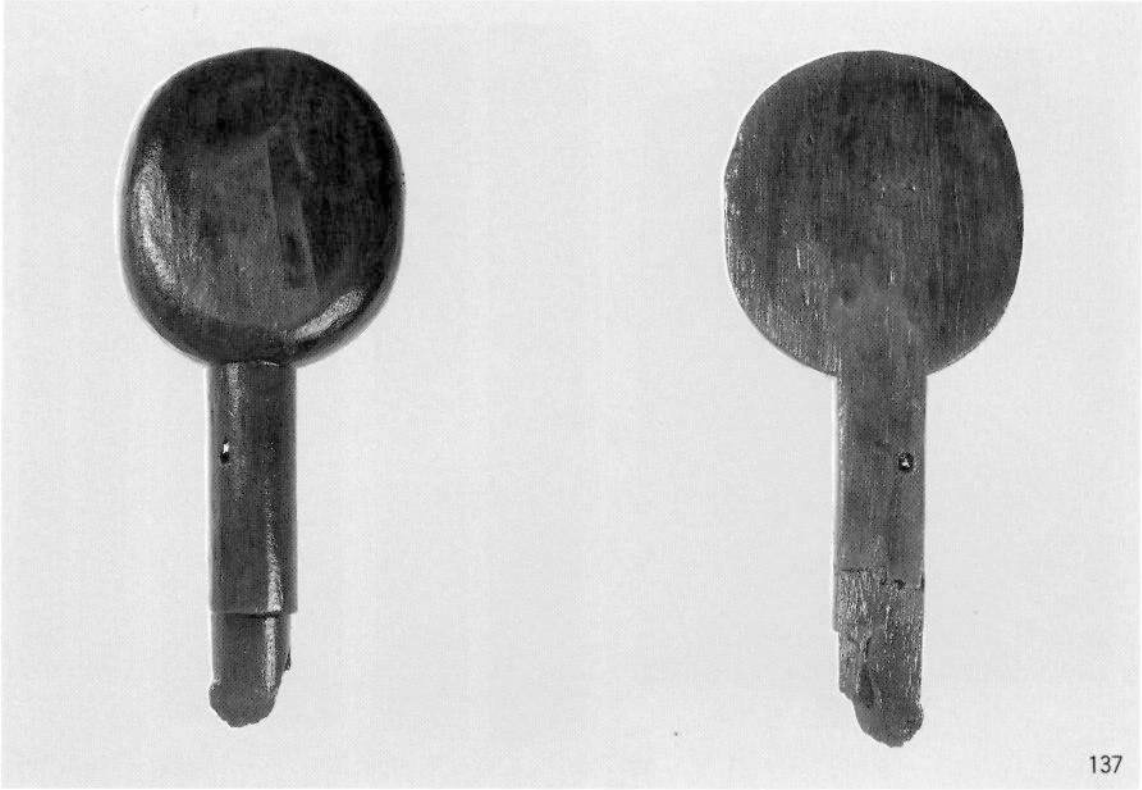

131

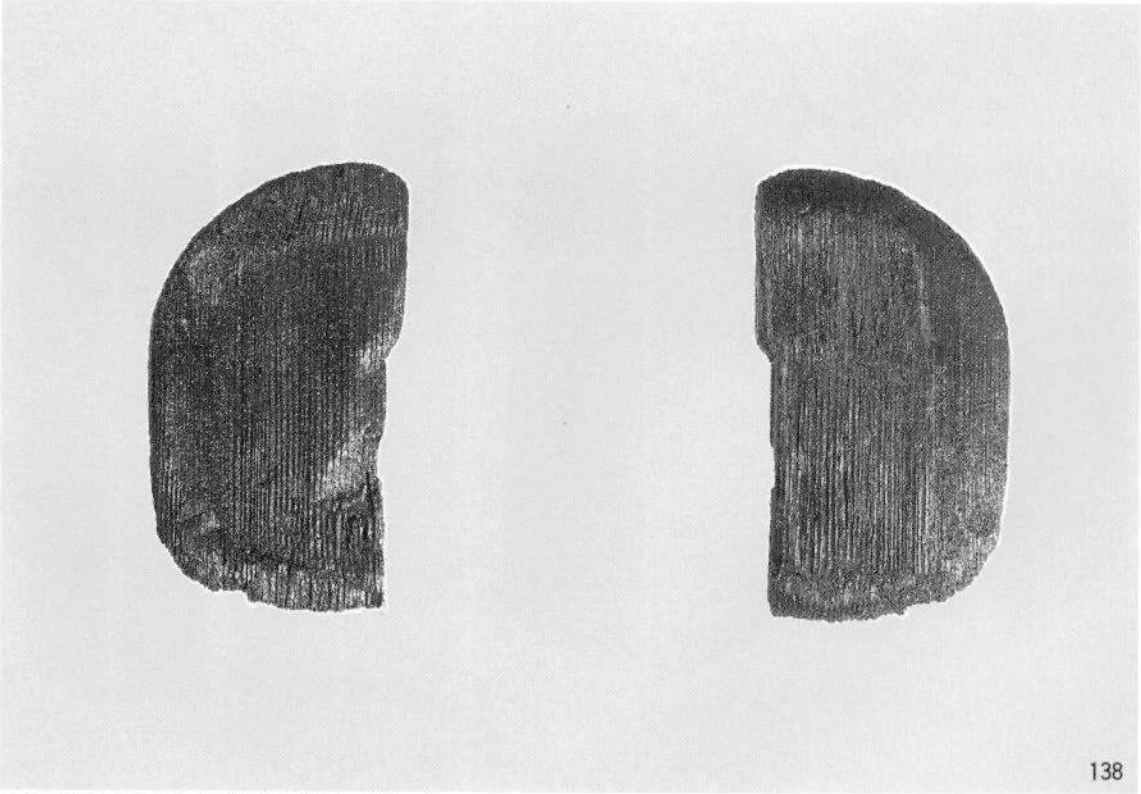

132


133


134

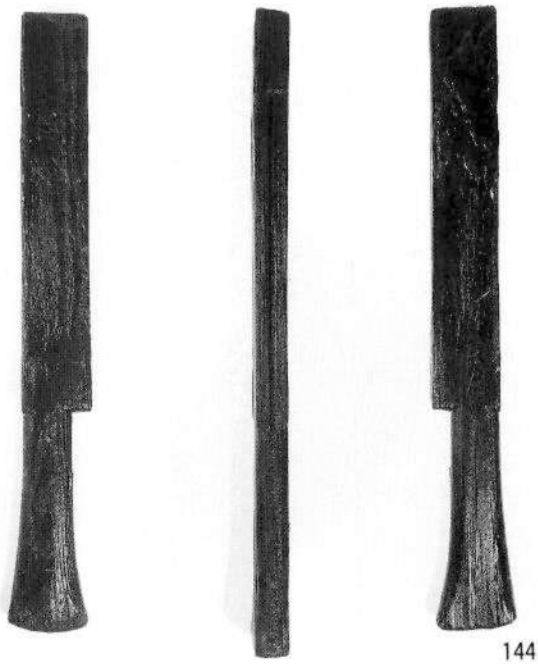
大溝内出土木製品（曲物）





大溝内出土木製品（手鏡状木製品，皿）

143

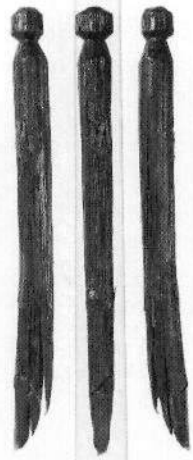


144

145

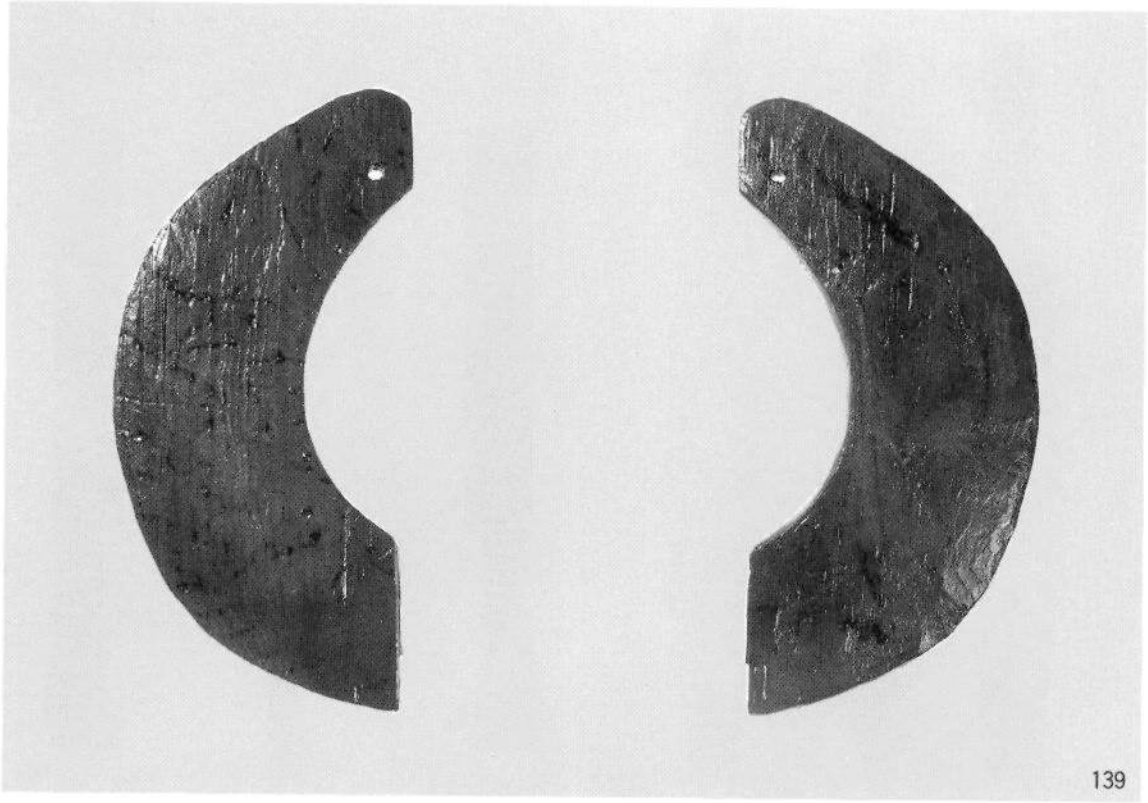
146

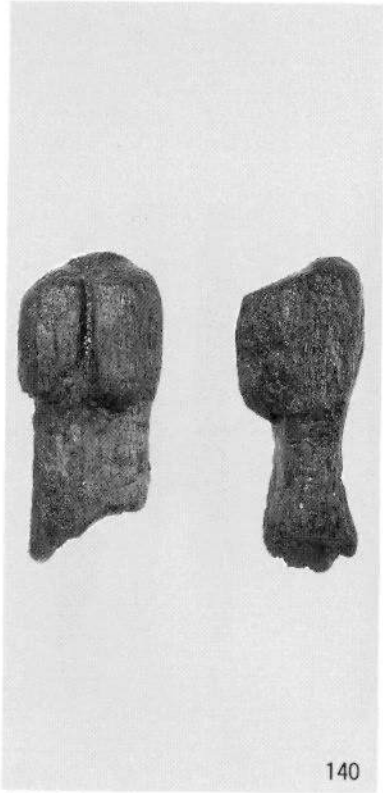
147

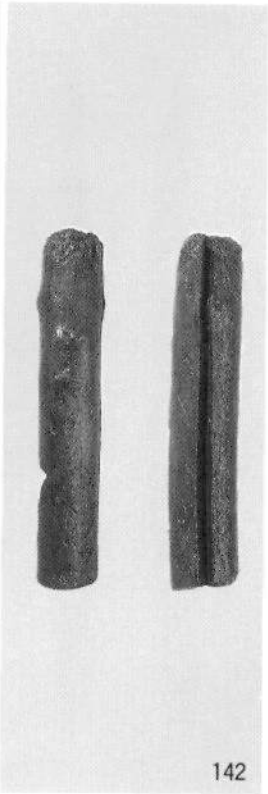


148

大溝内出土木製品（祭祀具各種）

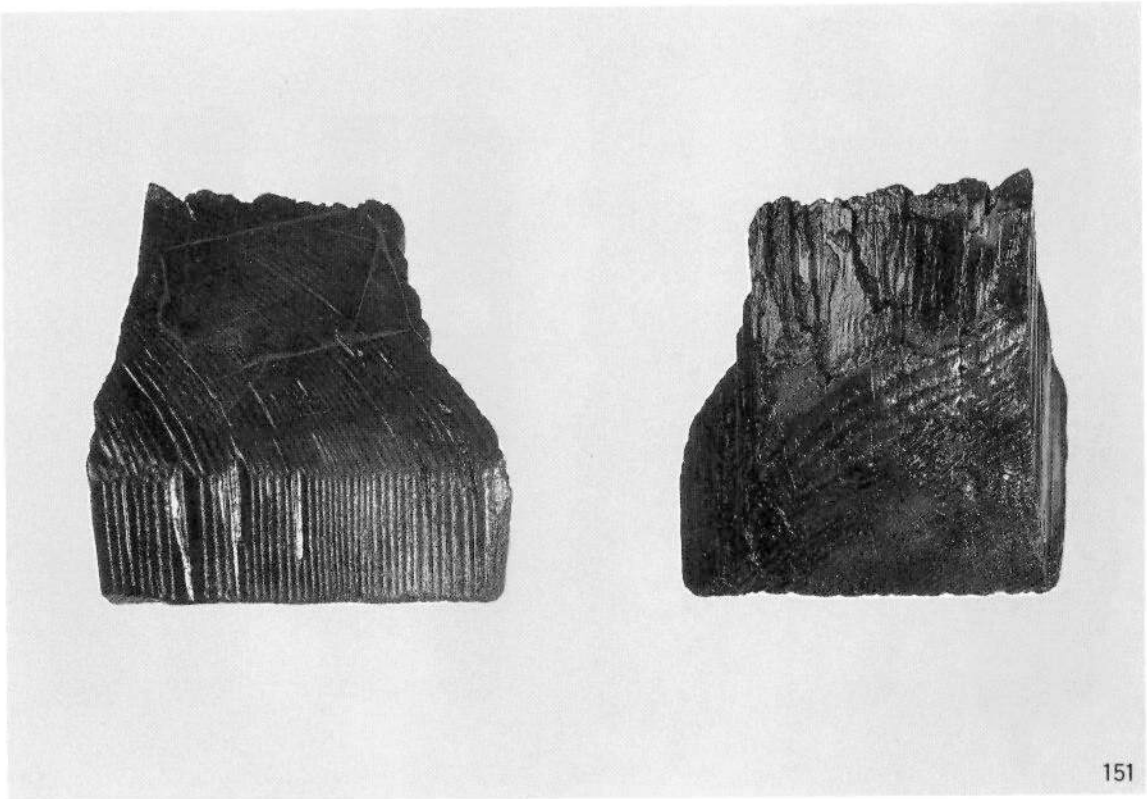






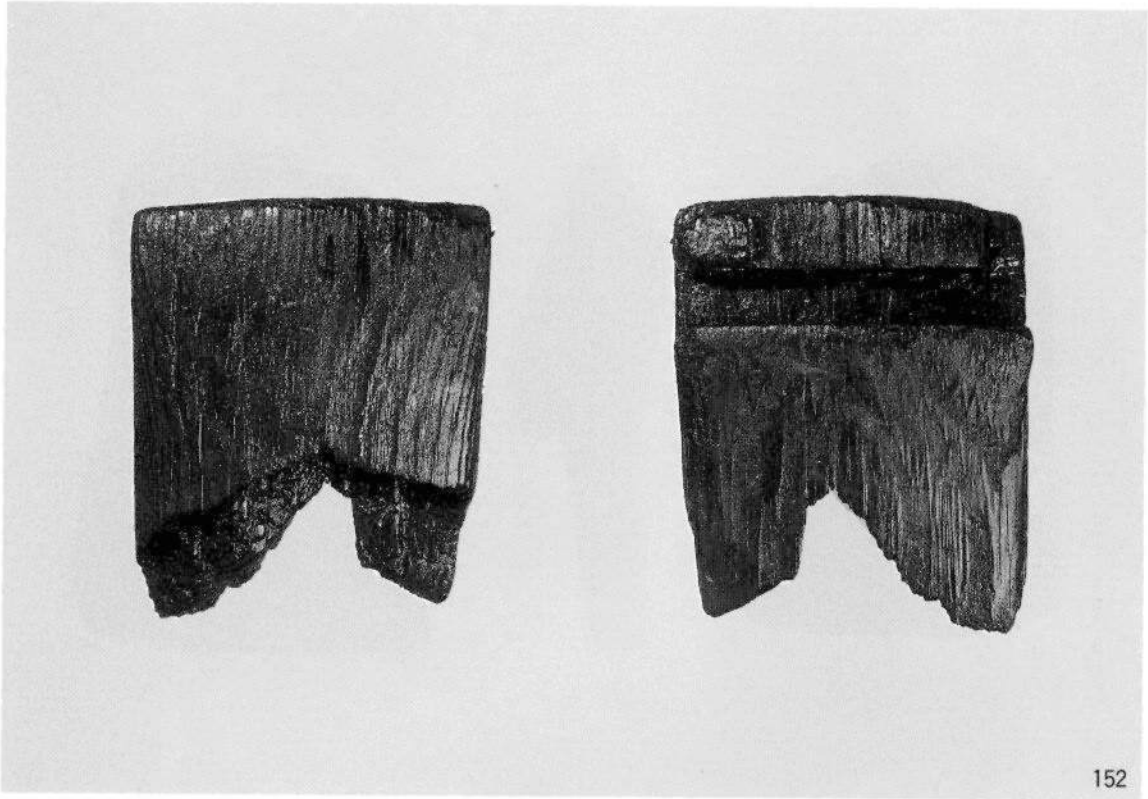
大溝内出土木製品（祭祀具各種）

150

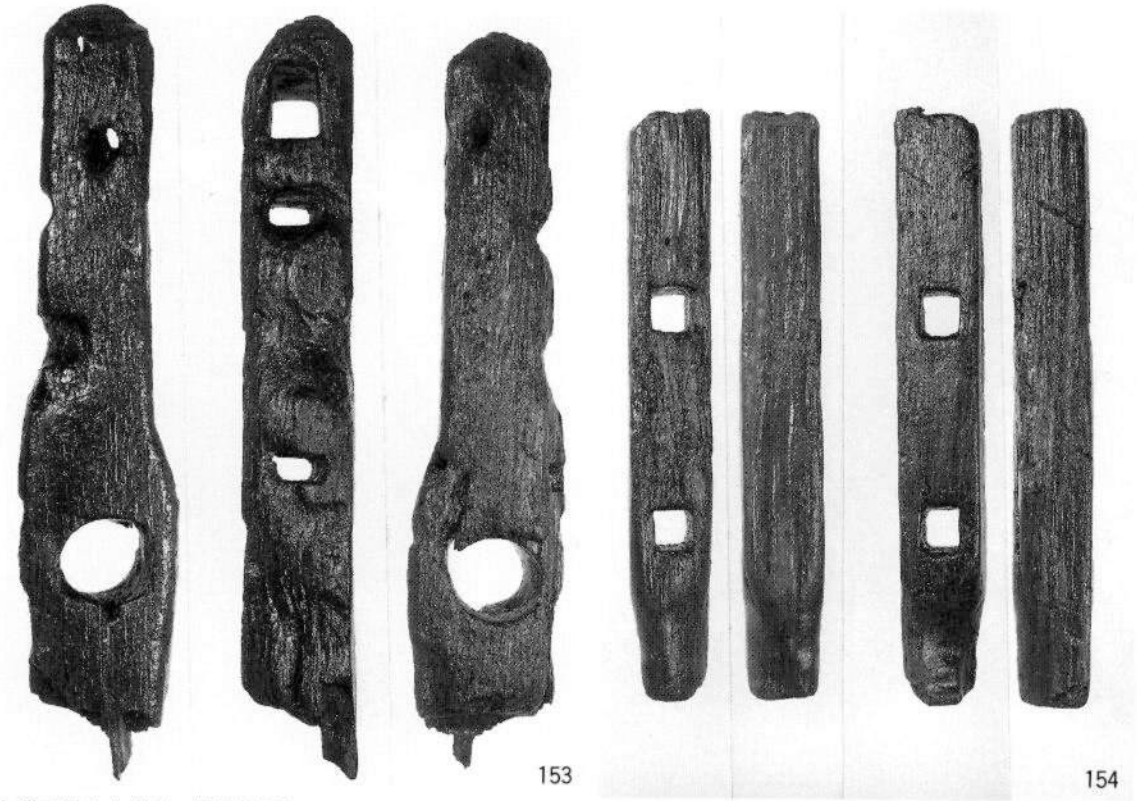


151

大溝内出土木製品（はしご等）



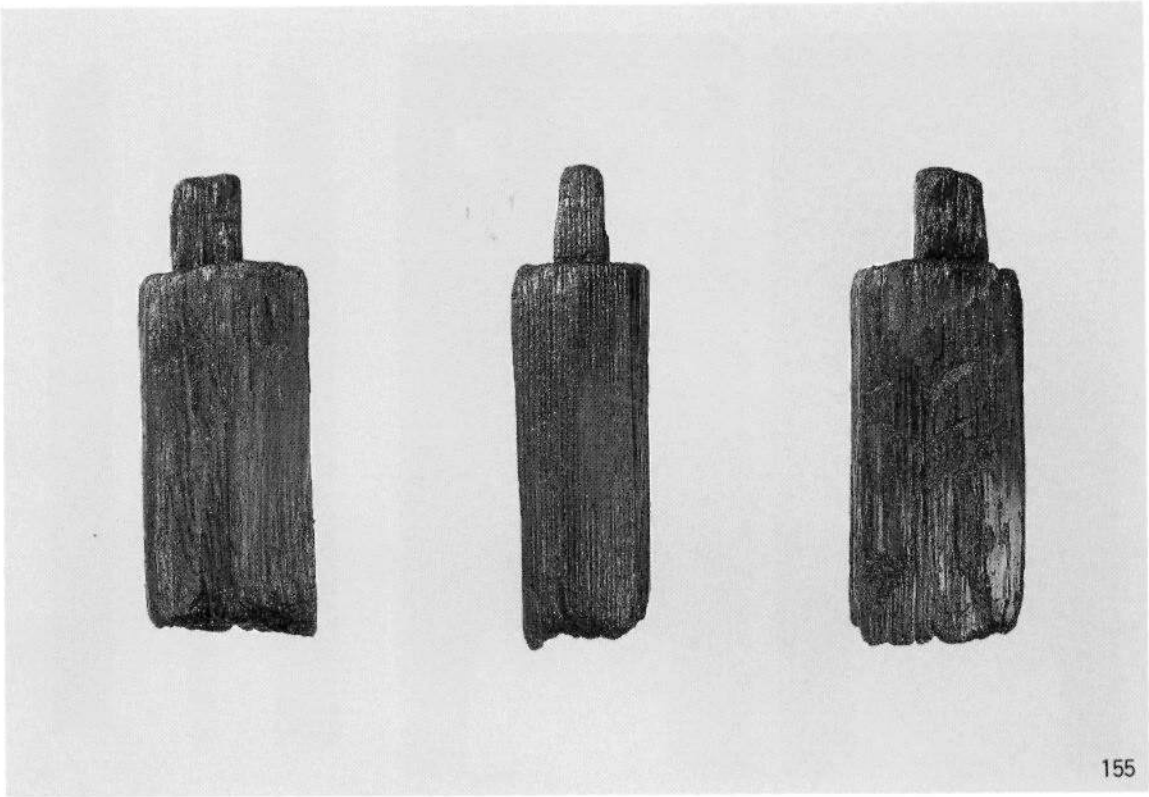
152



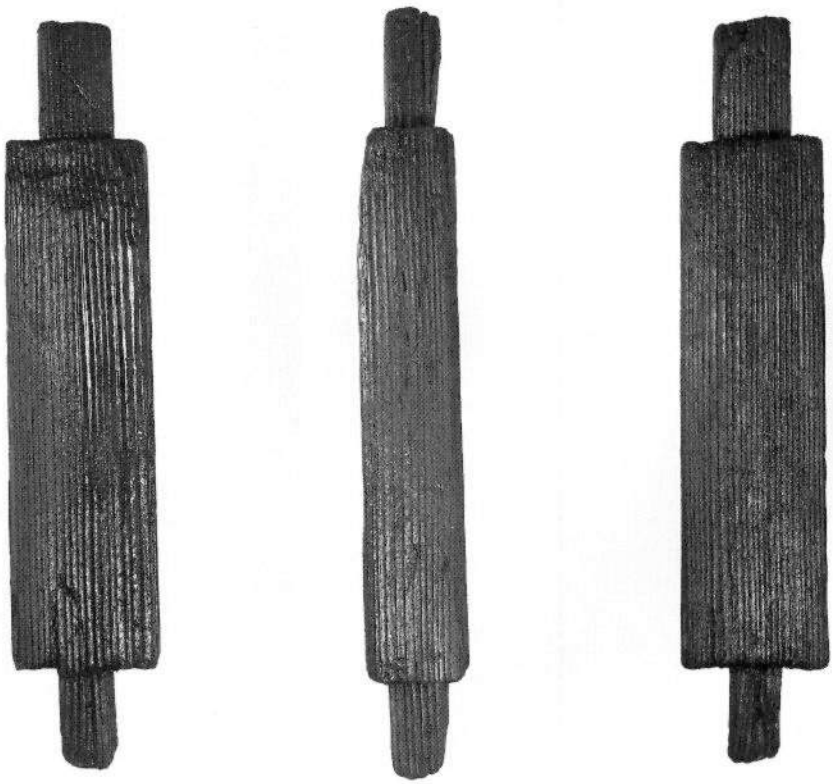
153

154

大溝内出土木製品（部材各種）

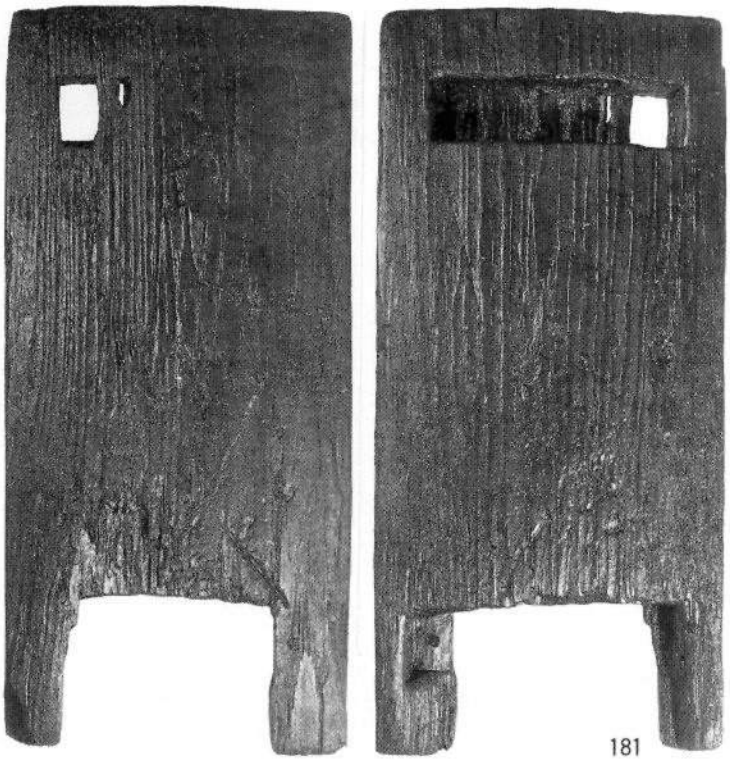


155

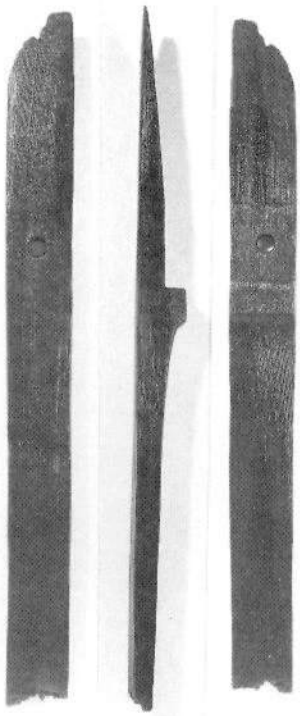


156

大溝内出土木製品（部材各種）

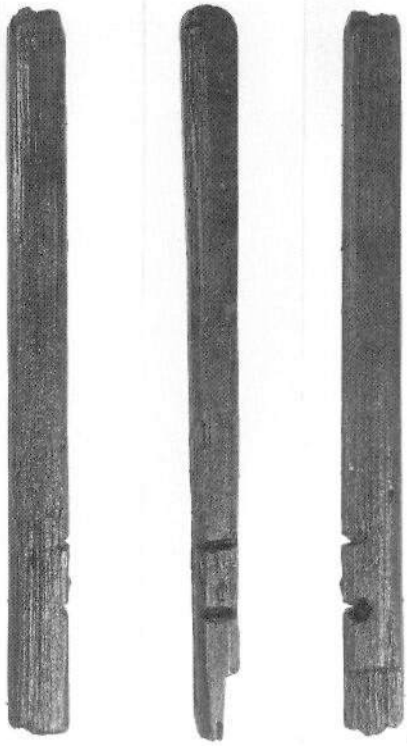


181



182

183

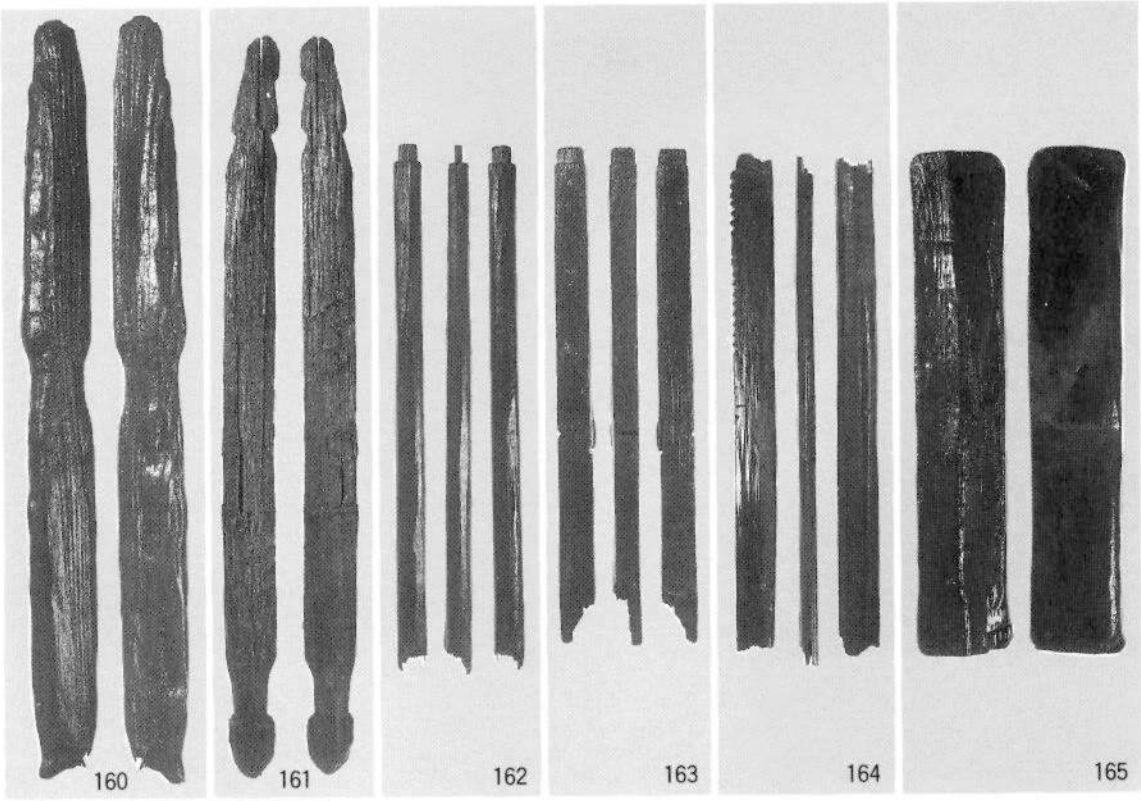


184

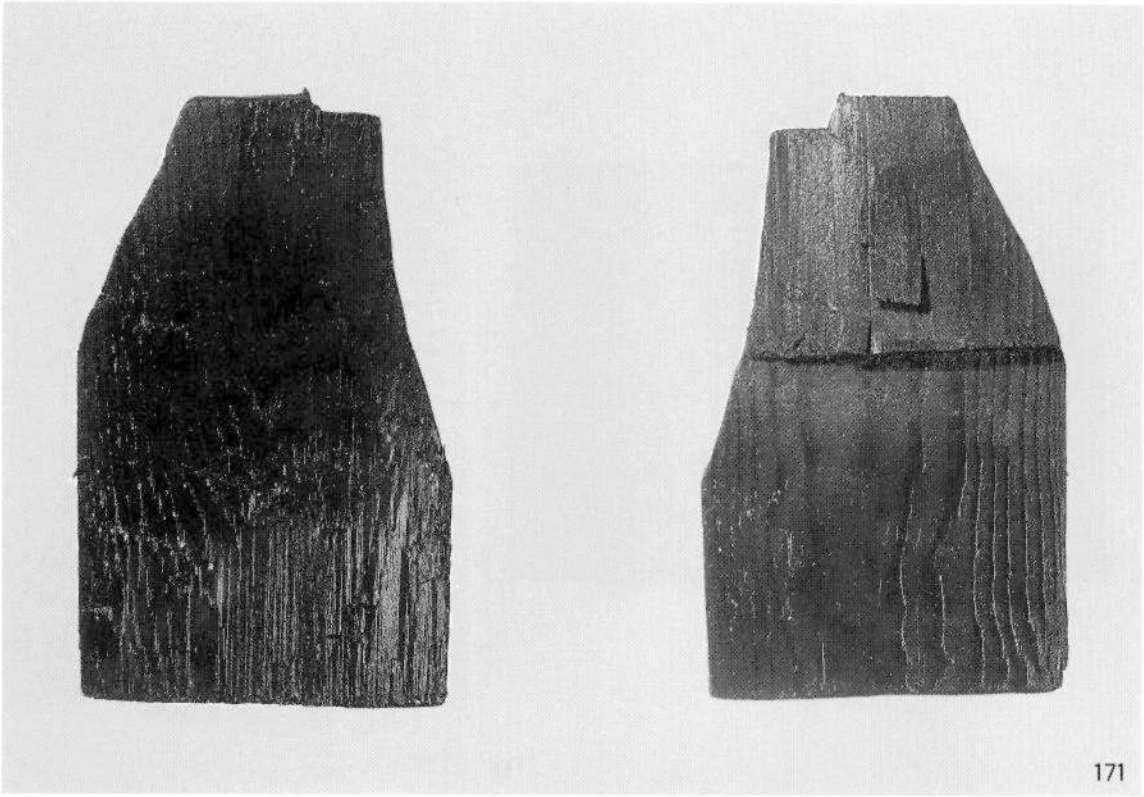
大溝内出土木製品（台座，紡錘車，火鑽板等）

158

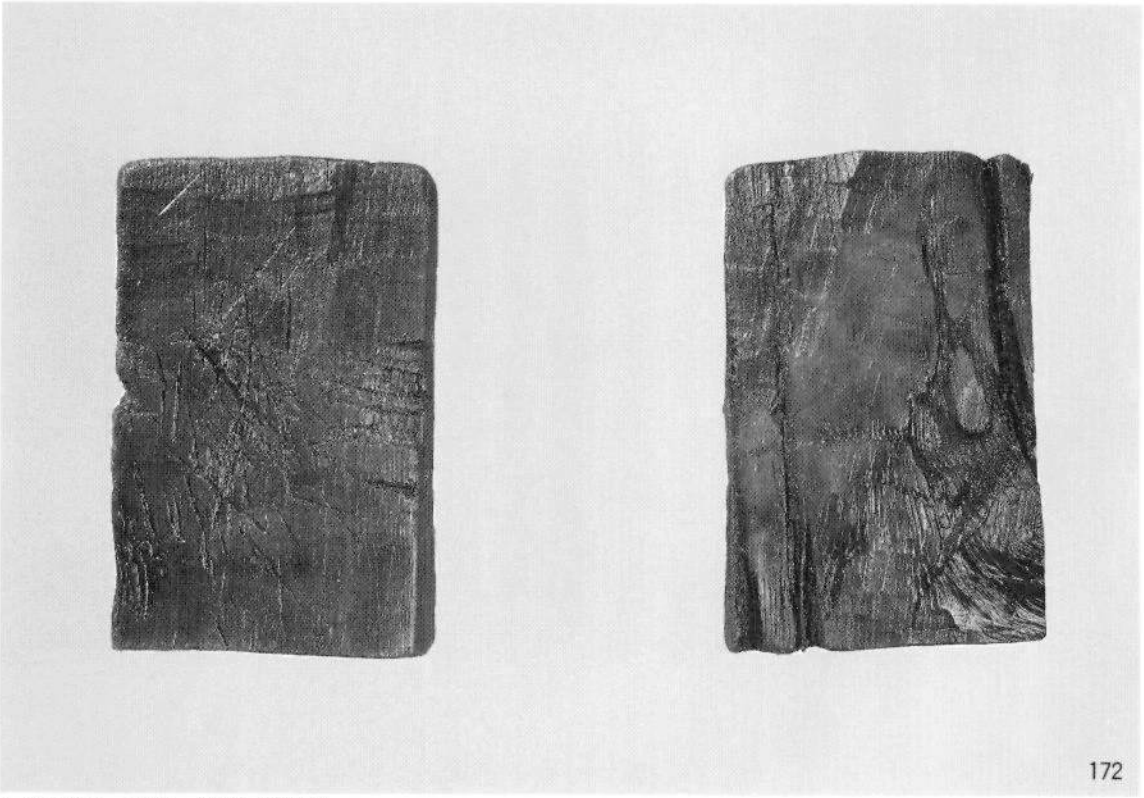
159



大溝内出土木製品（用途不明品）



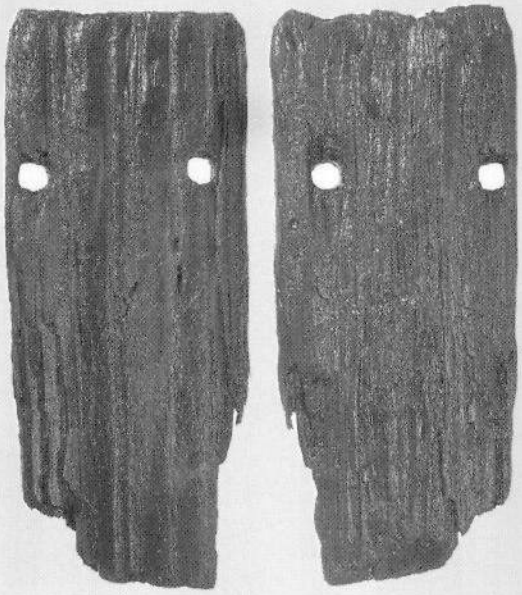
171



172

大溝内出土木製品（用途不明品）

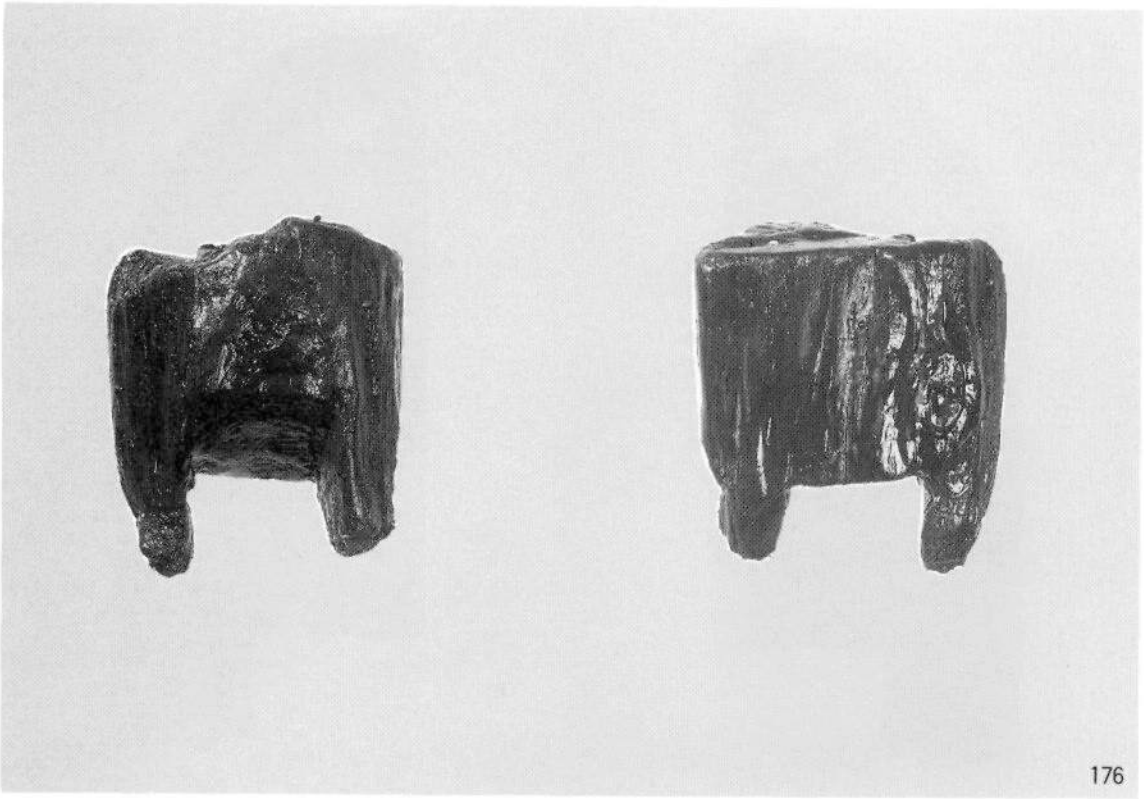
173

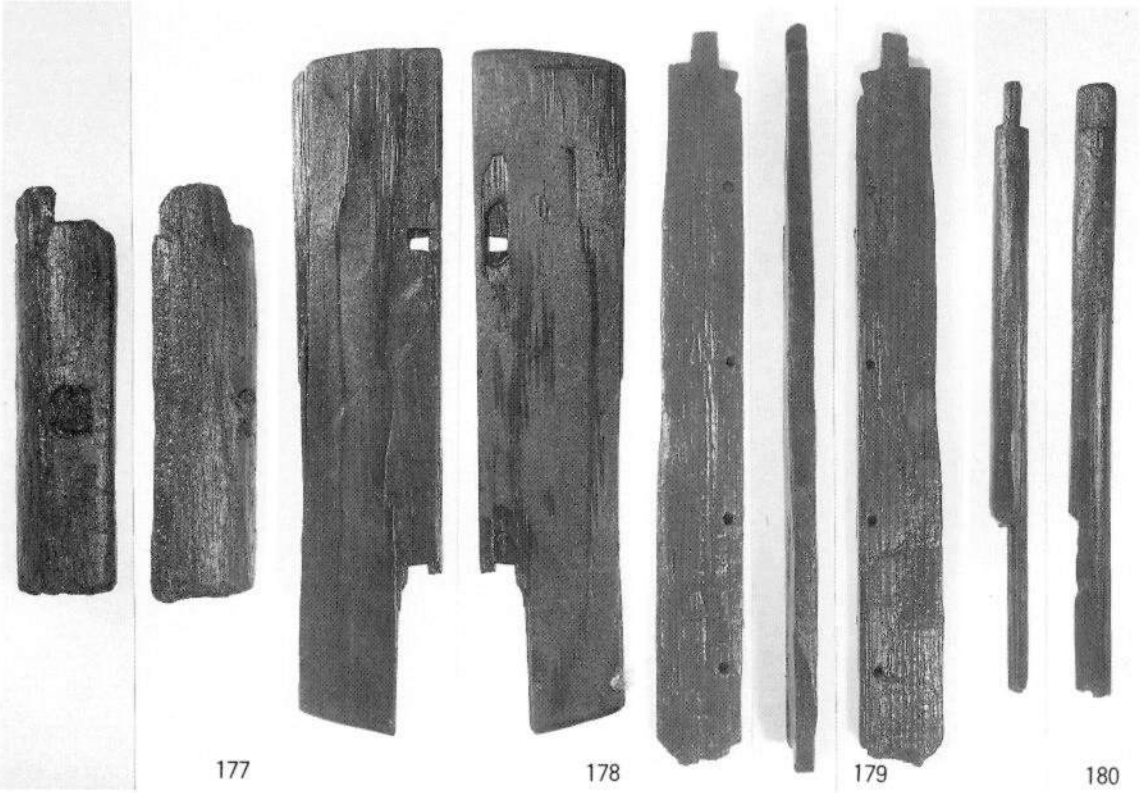


174

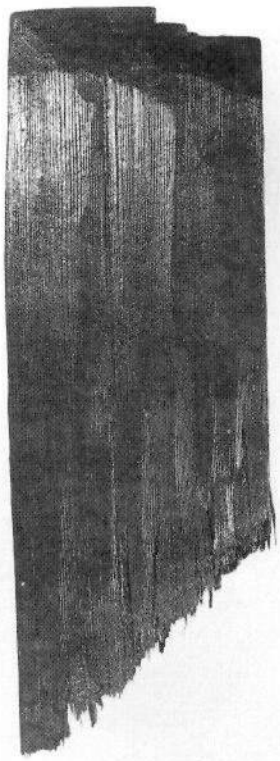
175

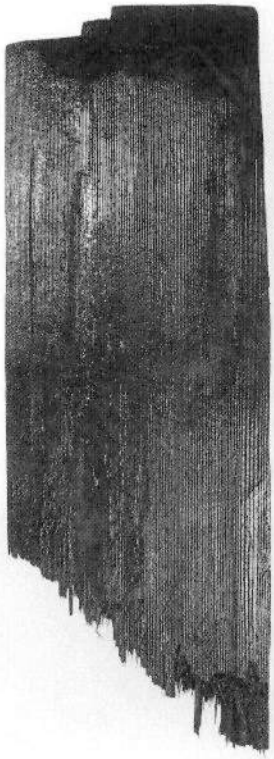
大溝内出土木製品（用途不明品）



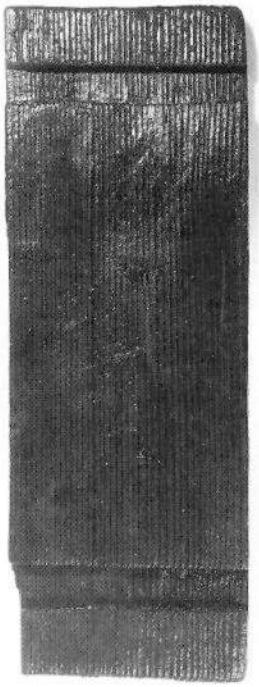


大溝内出土木製品（用途不明品）



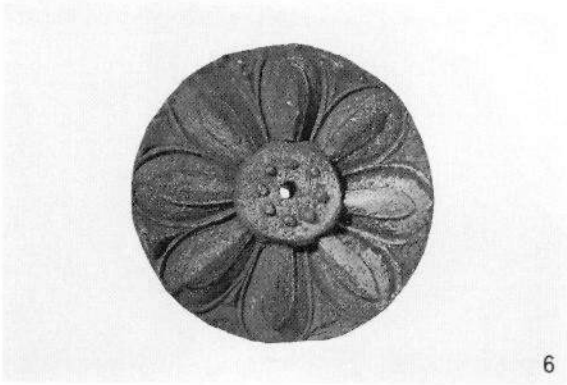


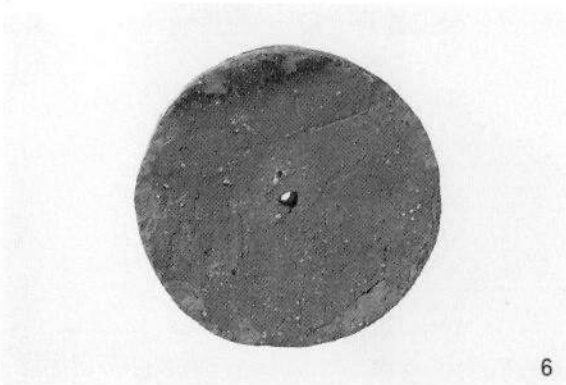
186

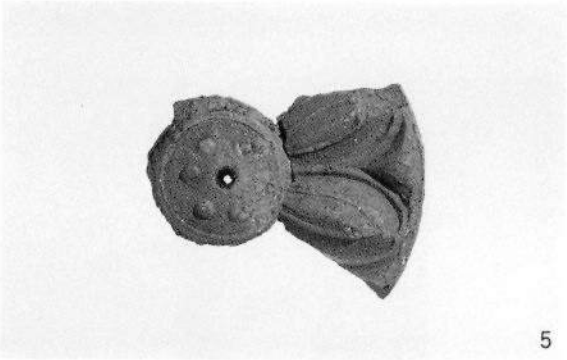


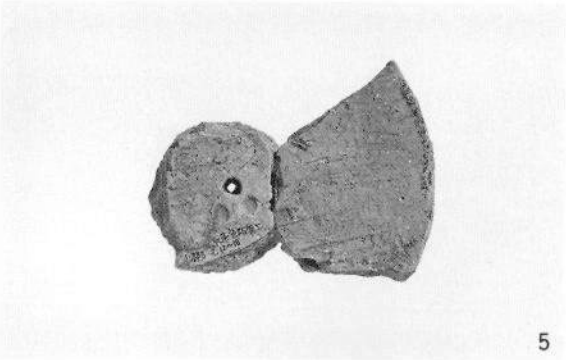
187

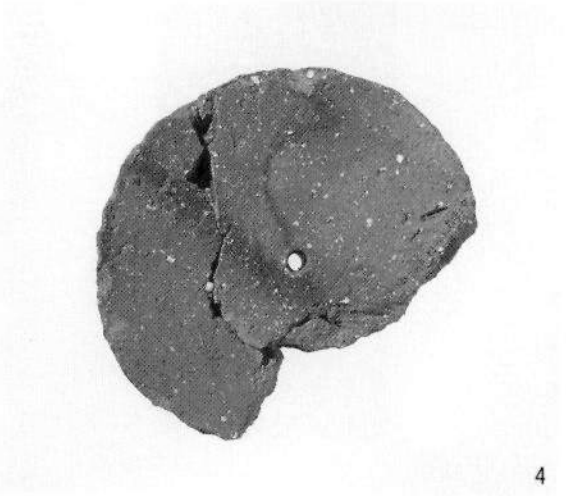
大溝内出土木製品（用途不明品）





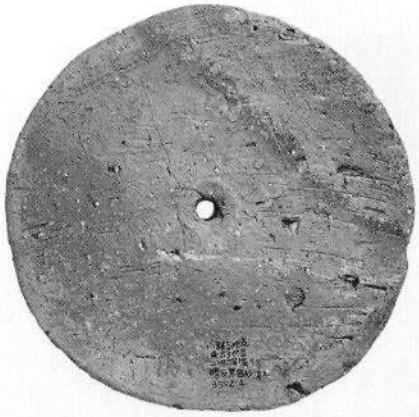






大溝内出土瓦（○印は同笵品を示す傷跡）

3

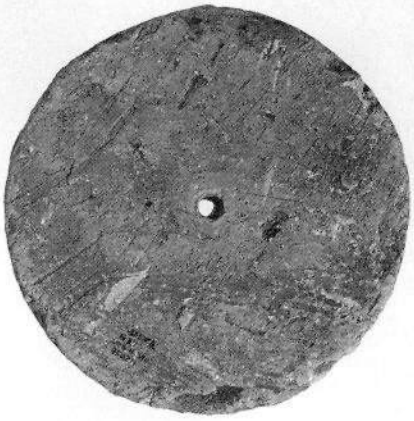


3

2

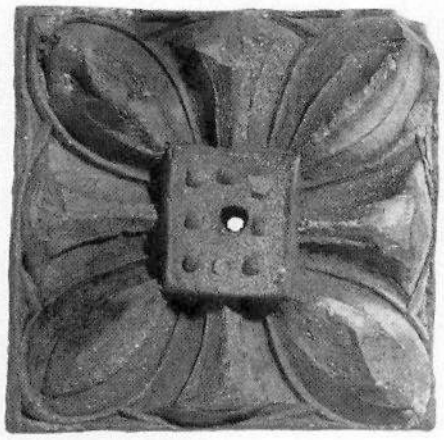
2

1



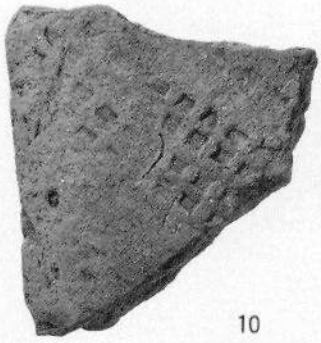
1

大溝内出土瓦（○印は同笵品を示す傷跡）



7

7

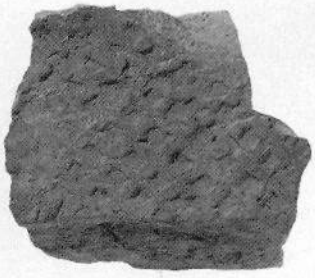


10

11

14

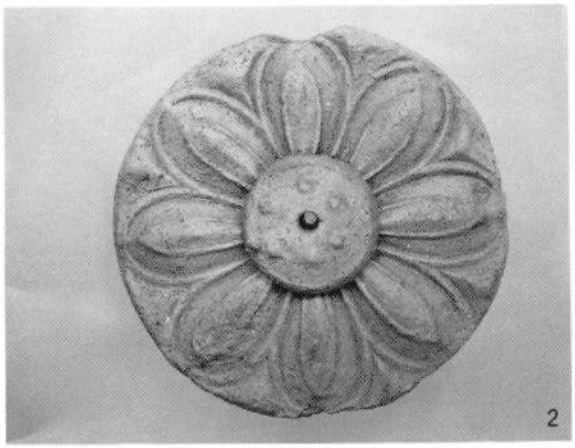
12



13

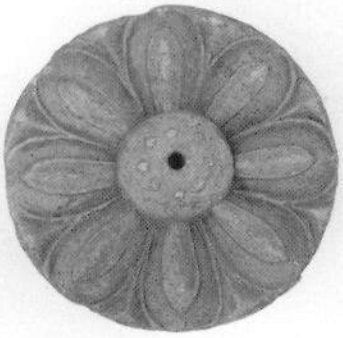
大溝内出土瓦

1

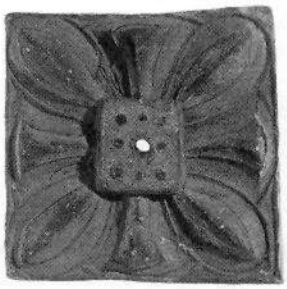


2

3



4



5

6

7

9

10

12

11

15

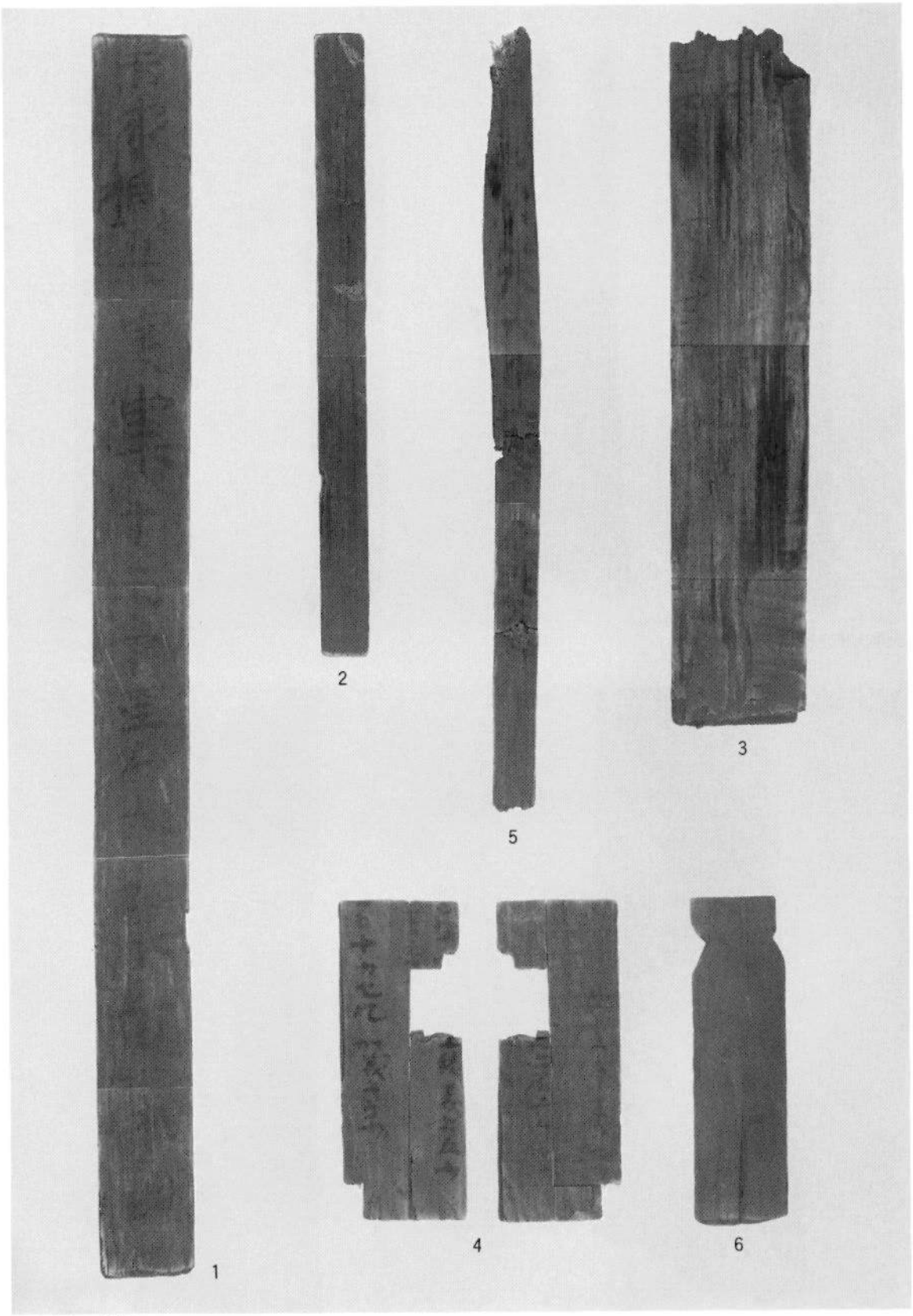
16

23

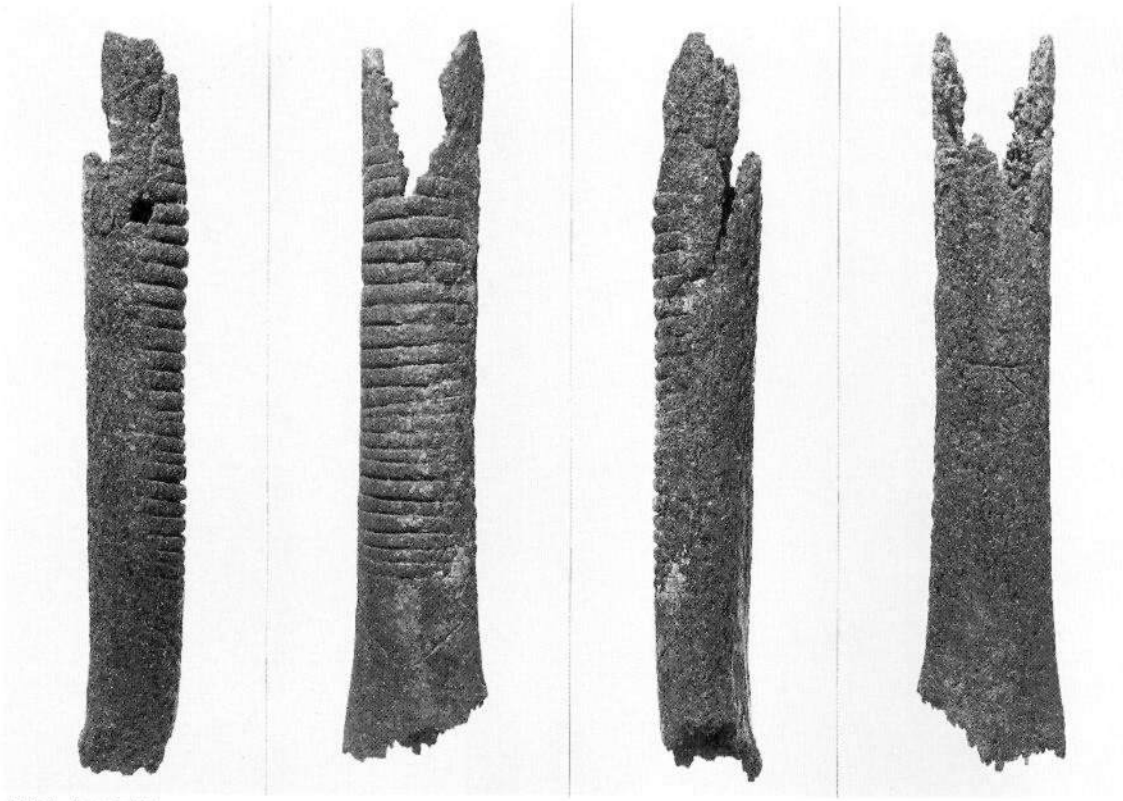
17

18

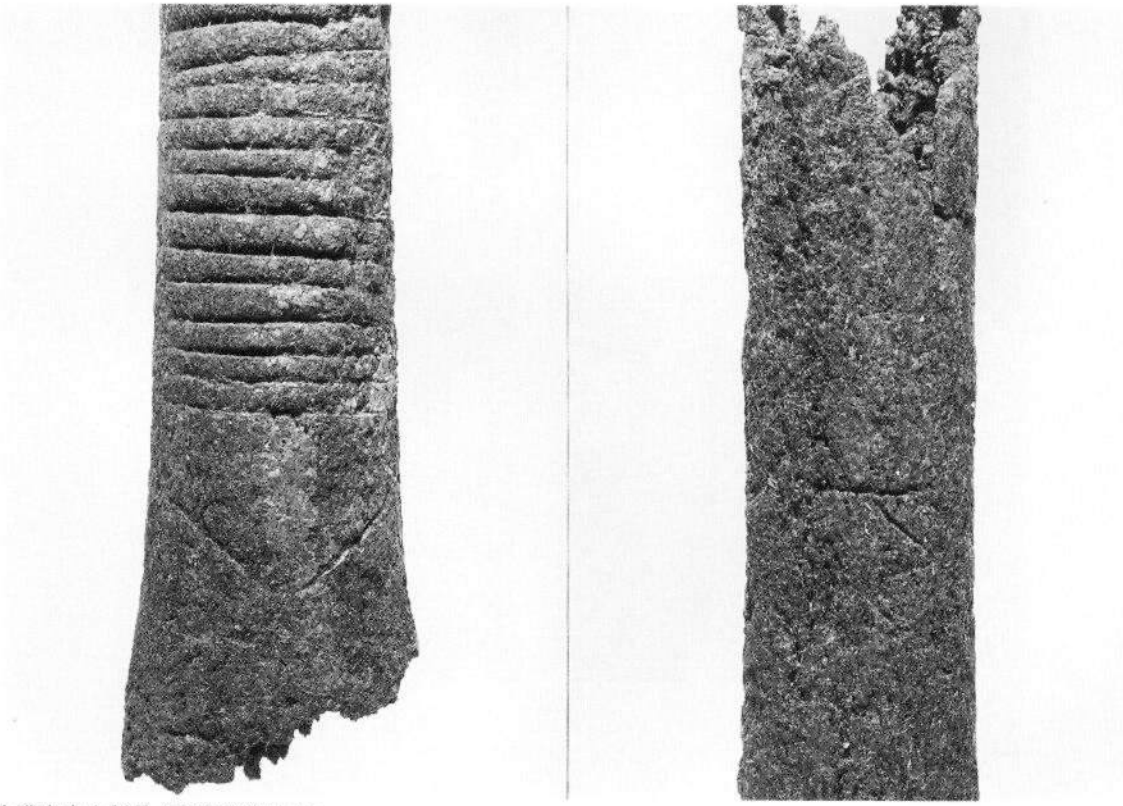
24



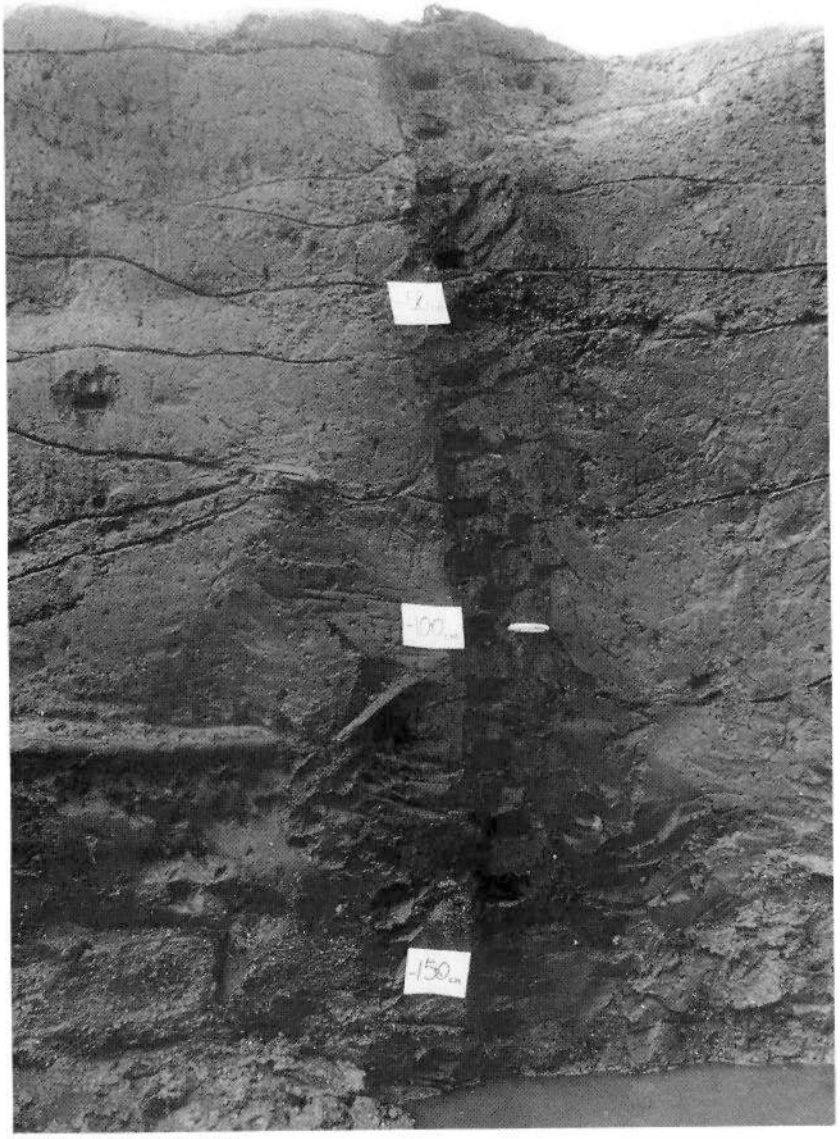
大溝内出土木簡



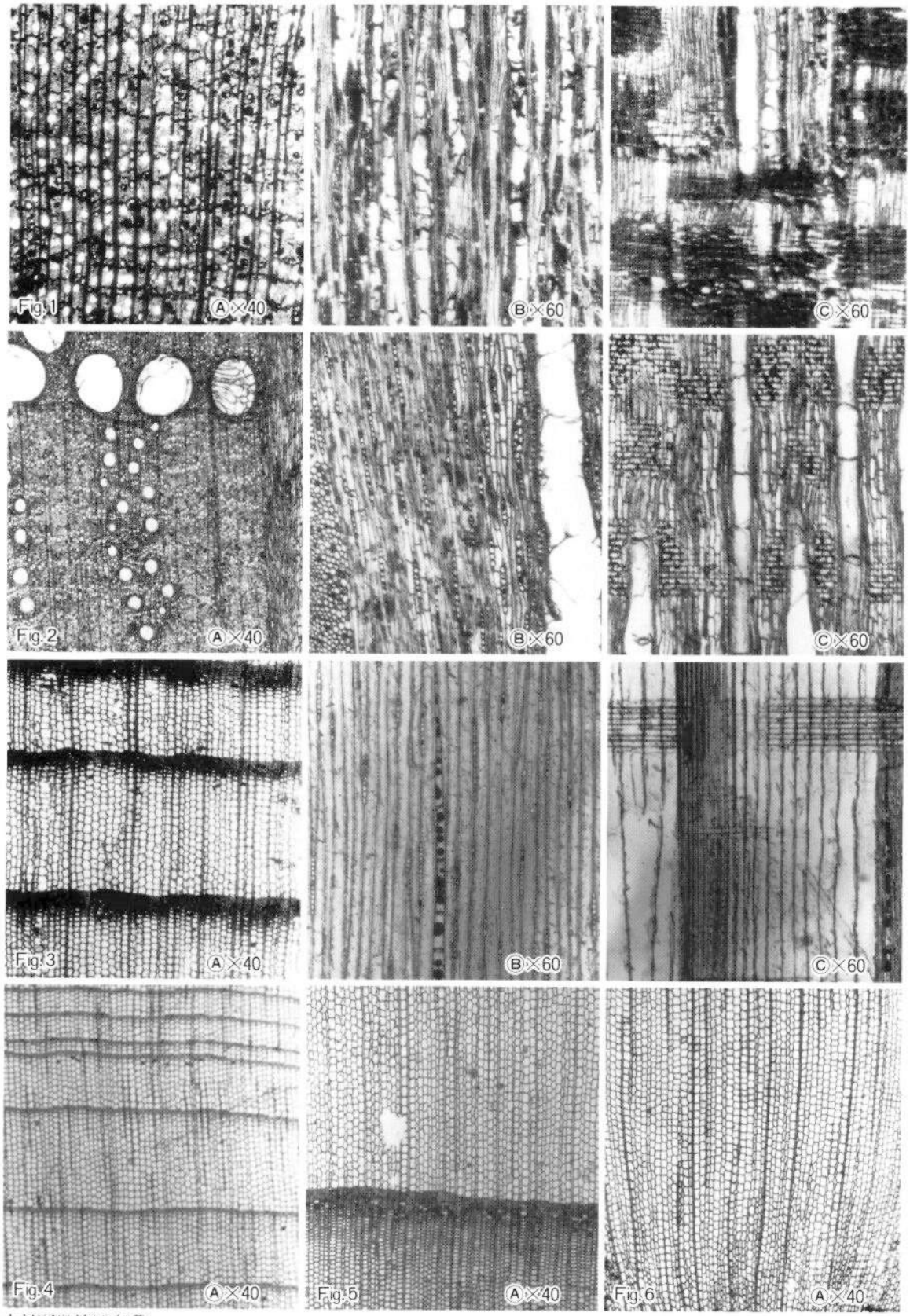
大溝内出土刻骨



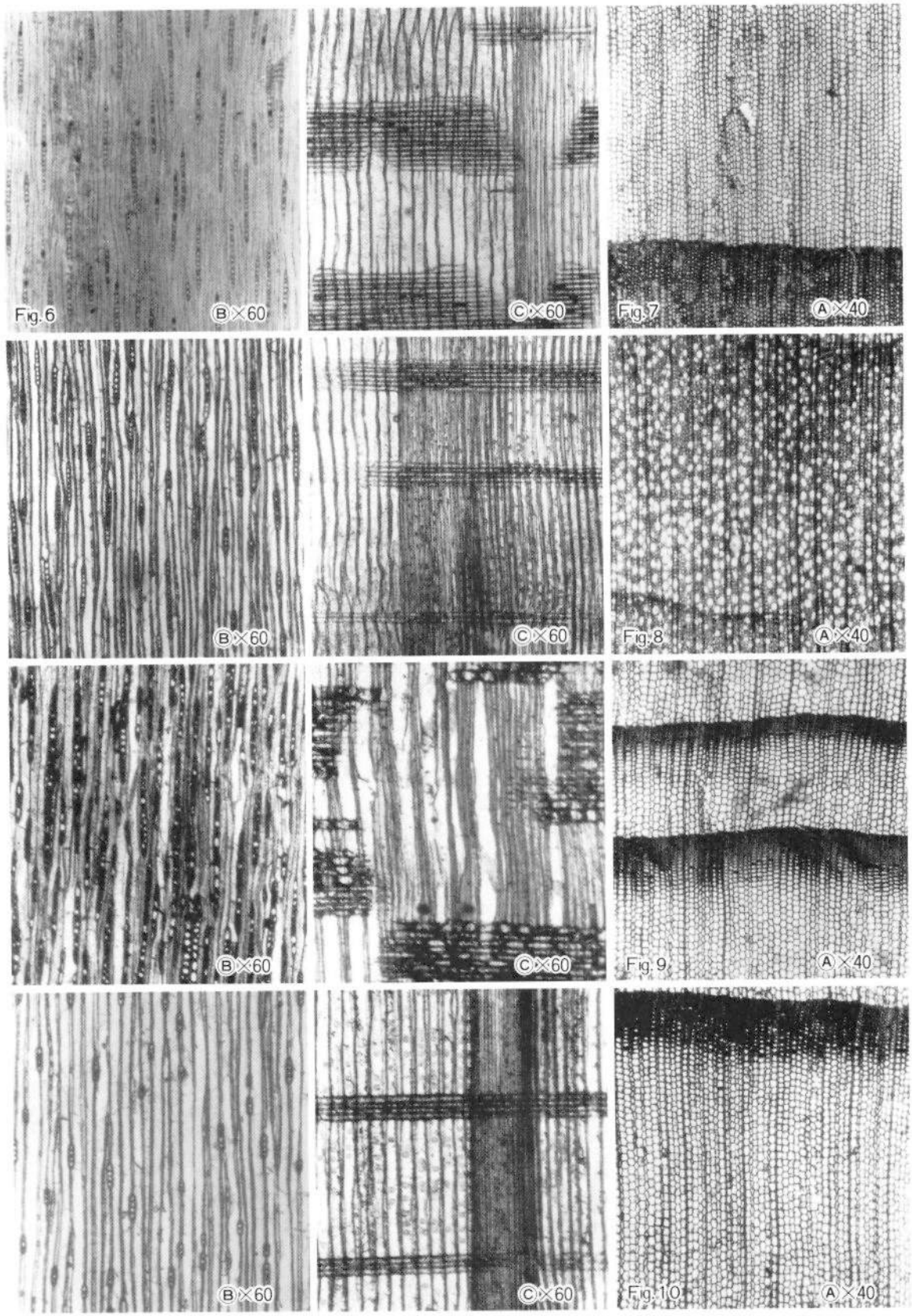
大溝内出土刻骨（刻線部分拡大）



花粉分析資料採取状況



木材顕微鏡写真①



木材顕微鏡写真②

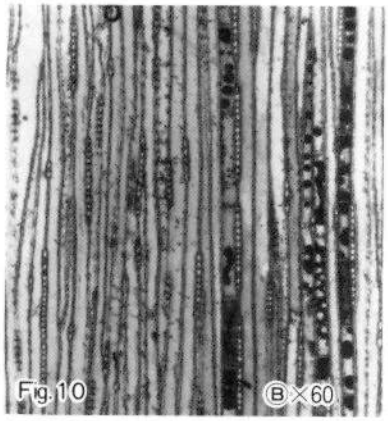
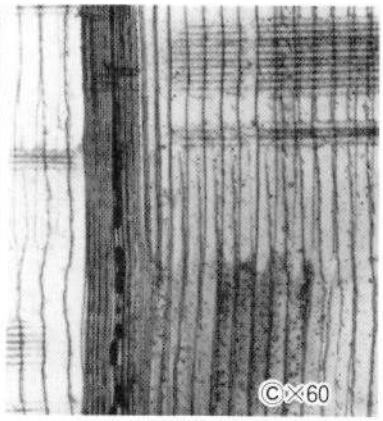


Fig.10
Ⓑ×60


Ⓒ×60

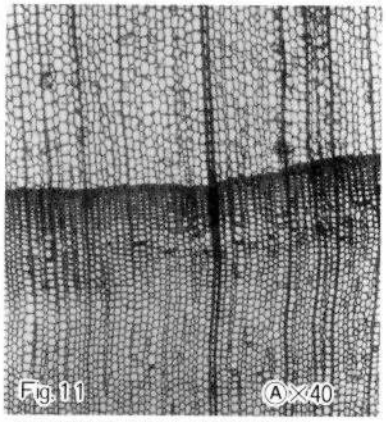
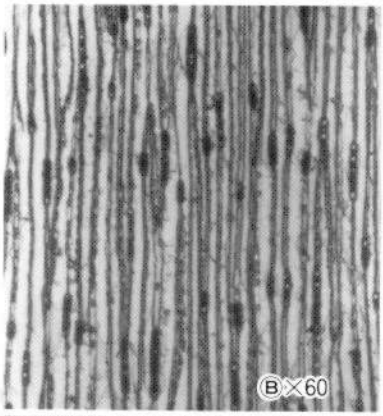
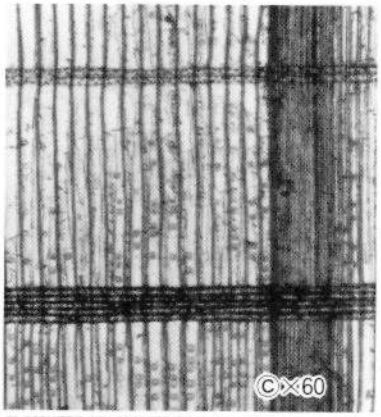


Fig.11
Ⓐ×40


Ⓑ×60


Ⓒ×60

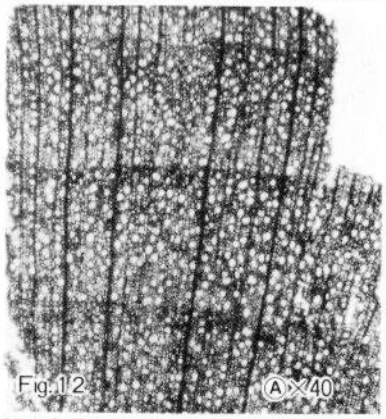
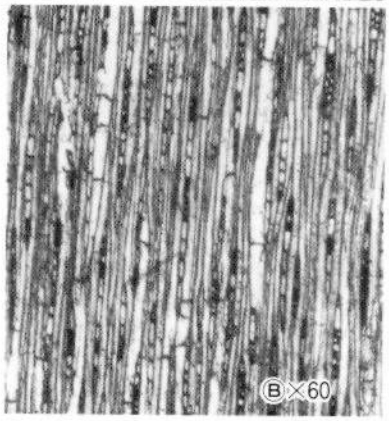
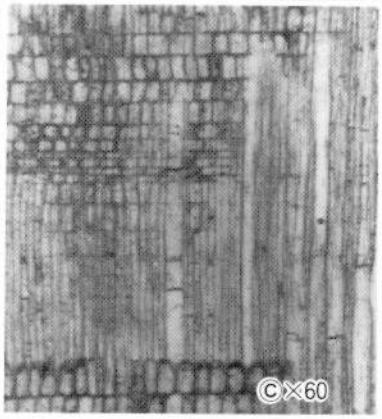


Fig.12
Ⓐ×40


Ⓑ×60


Ⓒ×60

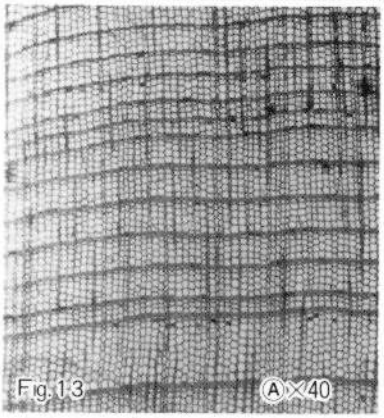


Fig.13
Ⓐ×40

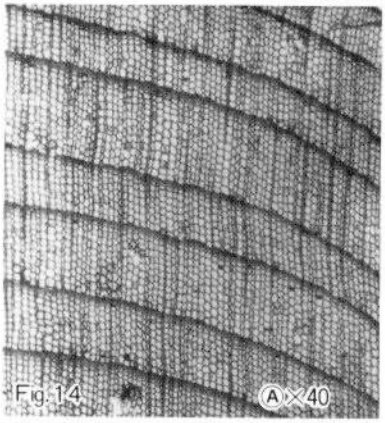


Fig.14
Ⓐ×40

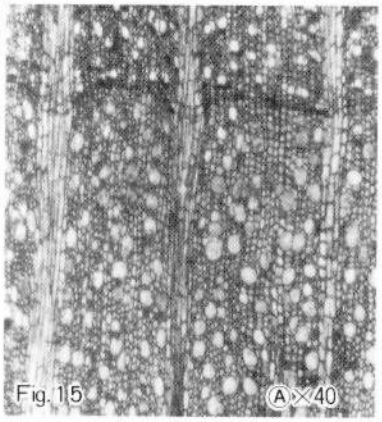


Fig.15
Ⓐ×40

Ⓑ×60

木材顕微鏡写真③

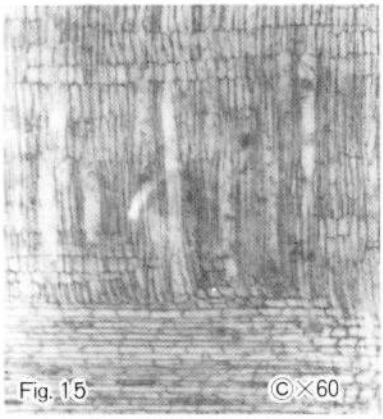


Fig.15
Ⓒ×60

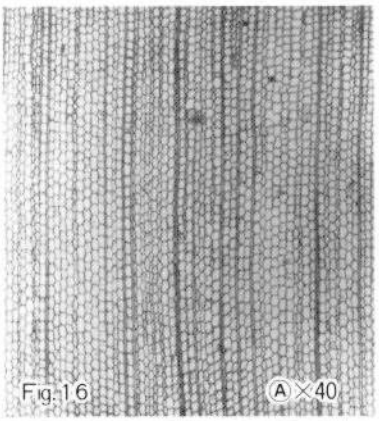


Fig.16
Ⓐ×40

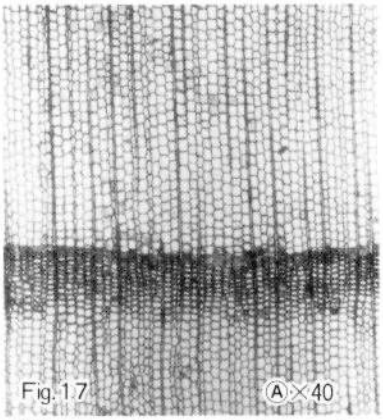


Fig.17
Ⓐ×40

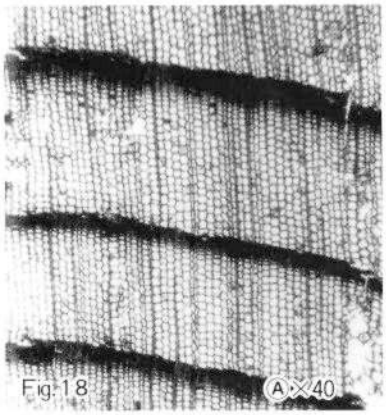
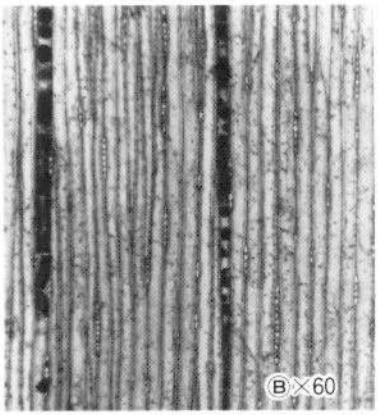
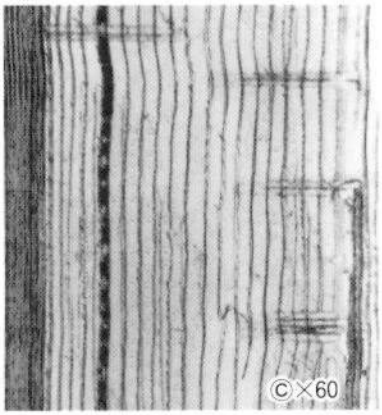


Fig.18
Ⓐ×40


Ⓑ×60


Ⓒ×60

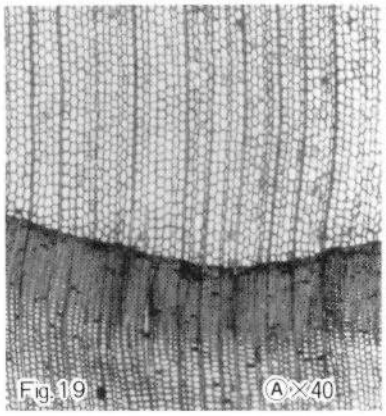


Fig.19
Ⓐ×40

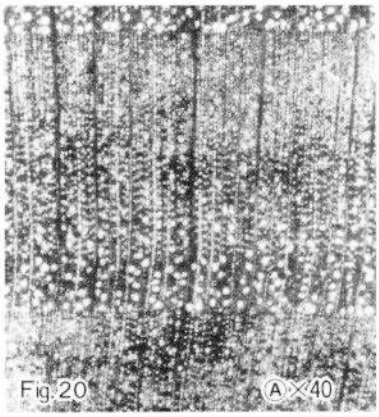
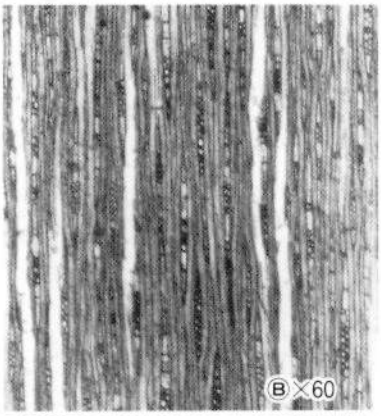
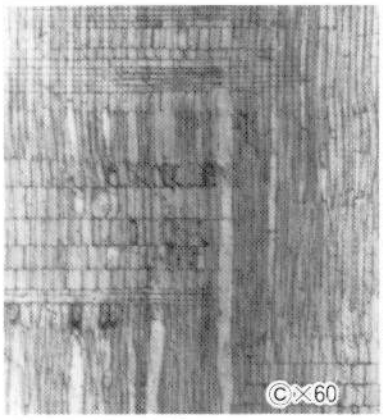


Fig.20
Ⓐ×40


Ⓑ×60


Ⓒ×60

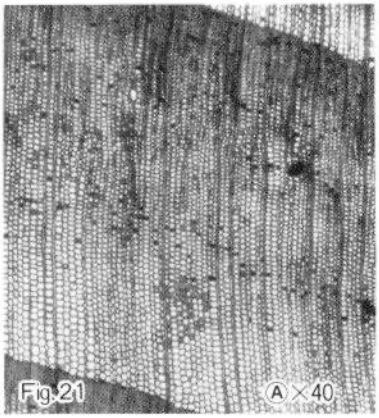


Fig.21
Ⓐ×40

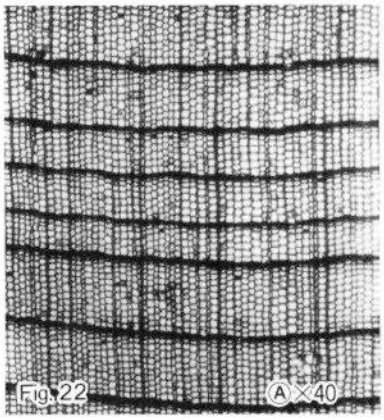


Fig.22
Ⓐ×40

木材顕微鏡写真④

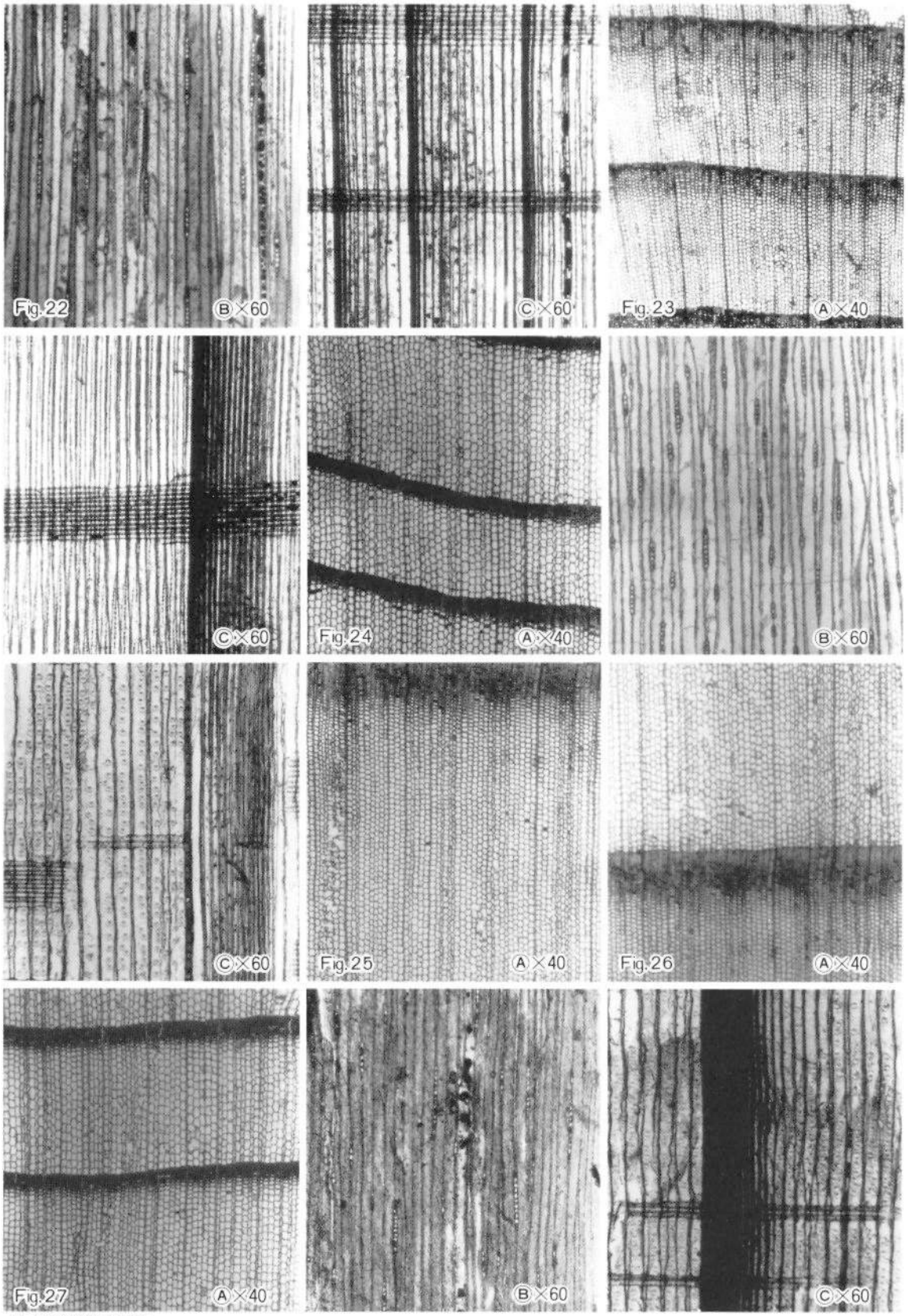
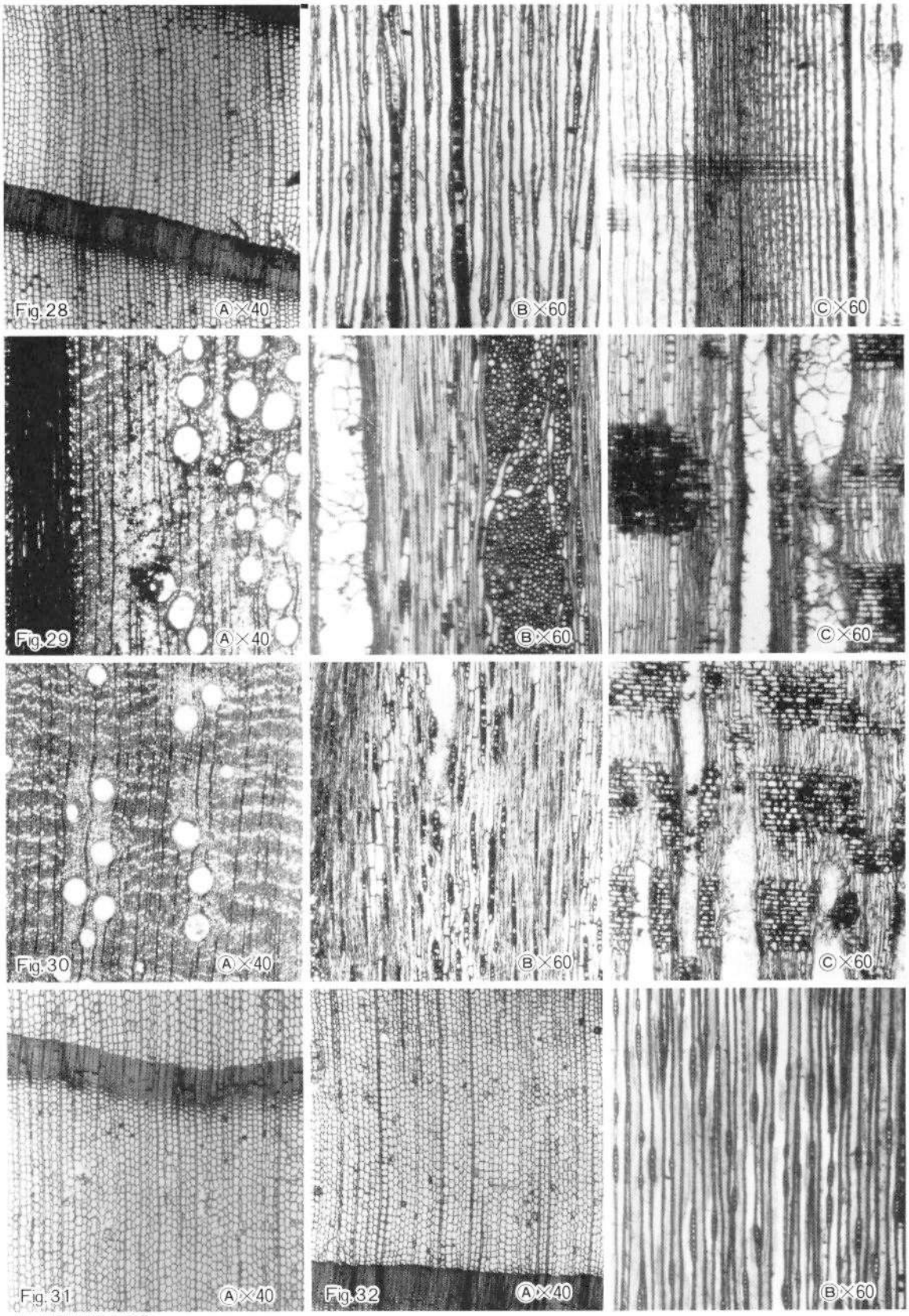


Fig.22
Ⓑ×60
Ⓒ×60
Fig.23
Ⓐ×40
Ⓒ×60
Fig.24
Ⓐ×40
Ⓑ×60
Ⓒ×60
Fig.25
Ⓐ×40
Fig.26
Ⓐ×40
Fig.27
Ⓐ×40
Ⓑ×60
Ⓒ×60

木材顕微鏡写真⑤



木材顕微鏡写真⑥

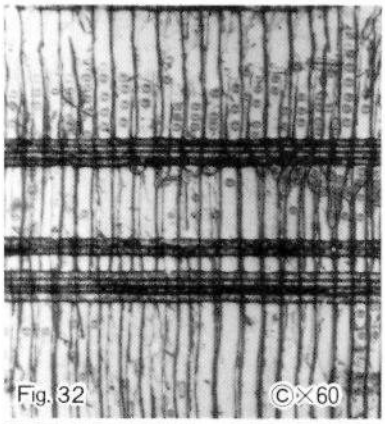


Fig. 32
Ⓒ×60

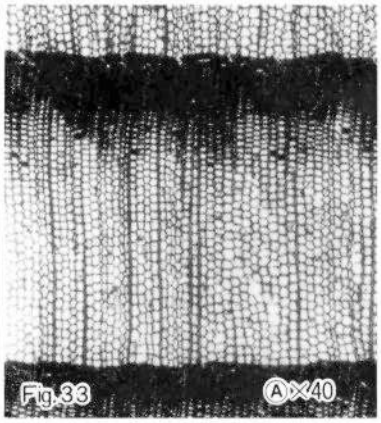


Fig. 33
Ⓐ×40

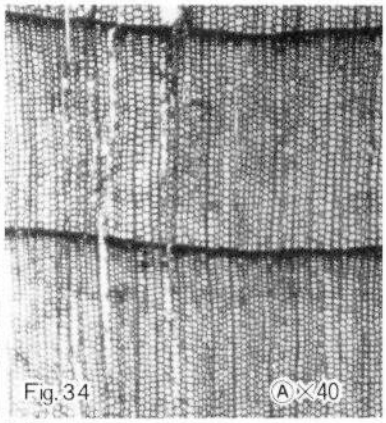
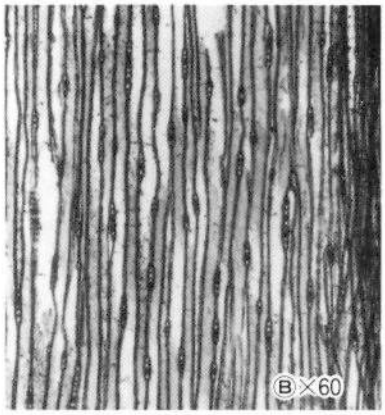
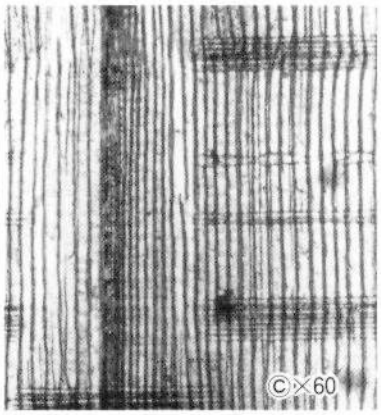


Fig. 34
Ⓐ×40


Ⓑ×60


Ⓒ×60

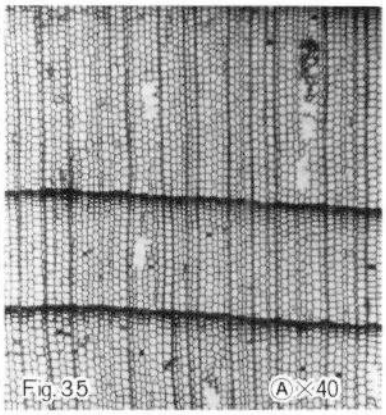
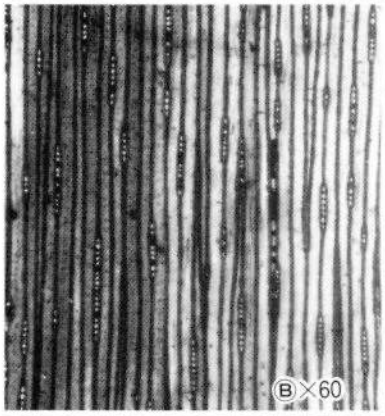
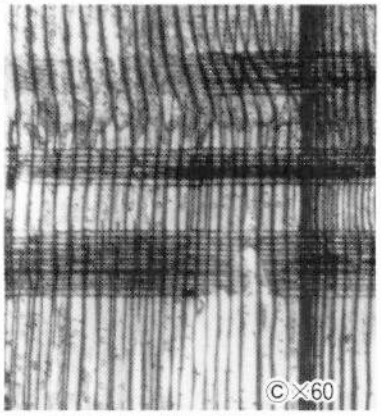


Fig. 35
Ⓐ×40


Ⓑ×60


Ⓒ×60

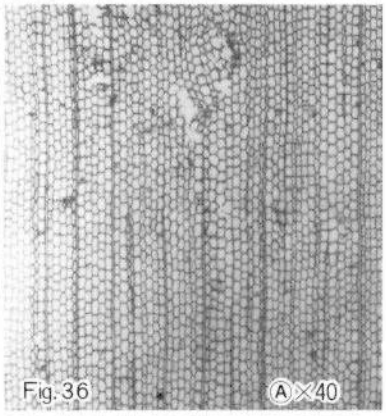


Fig. 36
Ⓐ×40

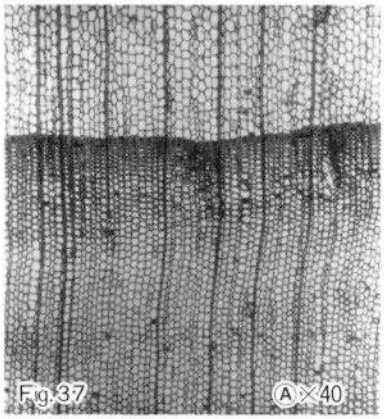


Fig. 37
Ⓐ×40

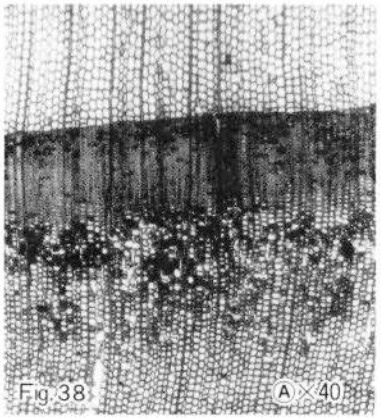
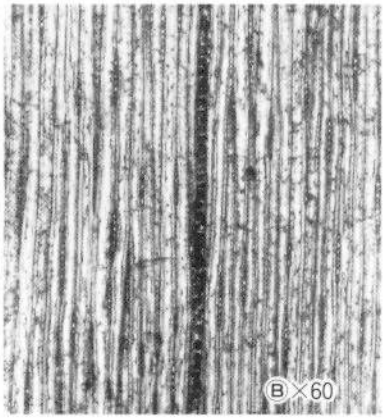


Fig. 38
Ⓐ×40


Ⓑ×60

木材顕微鏡写真⑦

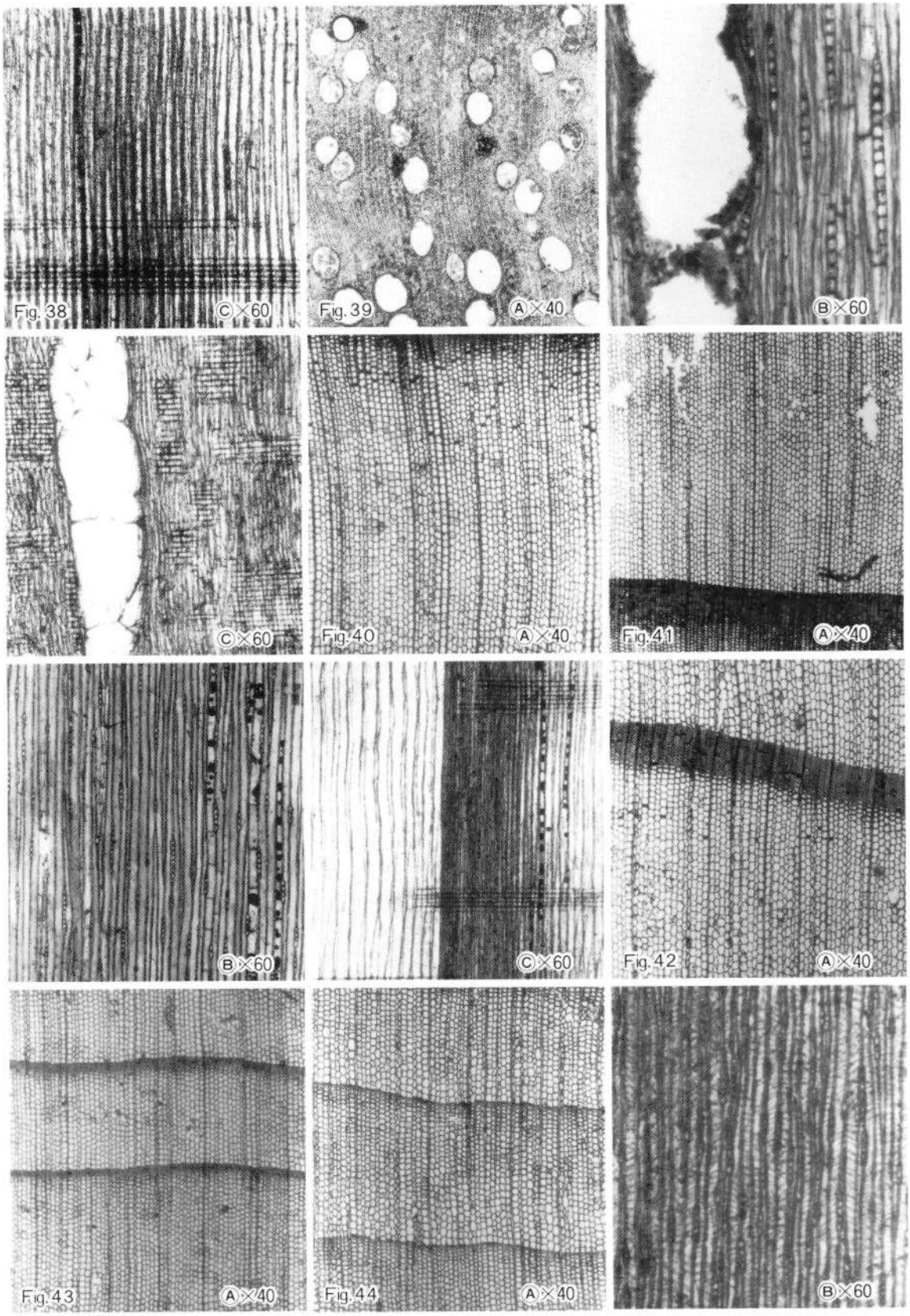
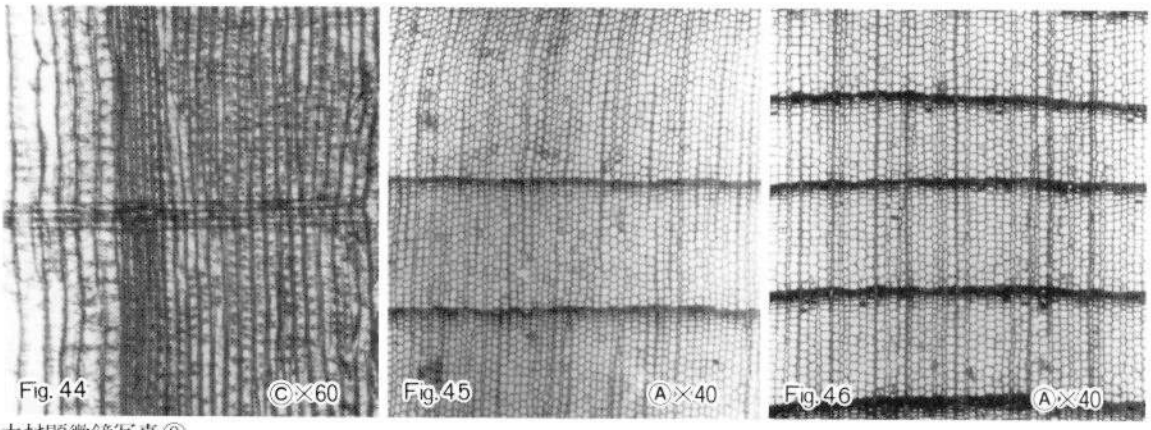


Fig. 38
Ⓒ×60
Fig. 39
Ⓐ×40
Ⓑ×60
Ⓒ×60
Fig. 40
Ⓐ×40
Fig. 41
Ⓐ×40
Ⓑ×60
Ⓒ×60
Fig. 42
Ⓐ×40
Fig. 43
Ⓐ×40
Fig. 44
Ⓐ×40
Ⓑ×60

木材顕微鏡写真⑧



木材顕微鏡写真⑨

顕微鏡写真について

1、　顕微鏡写真は、各図とも左からⒶ横断面、Ⓑ接線断面、Ⓒ放射断面の順に配列した。

2、　写真の拡大率は、各図とも

　　Ⓐ横断面　　40倍

　　Ⓑ接線断面、Ⓒ放射断面　60倍　とした。

3、　同一樹種の場合には、少なくとも一資料は3断面の写真を示したが、他の資料は横断面のみを示した。

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —10—

昭和62年3月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷　㈱天地堂印刷製本所

北九州市小倉北区大手町10番18号

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 61	登録番号 16